

立馬Ⅲ遺跡

だつめ
立馬Ⅲ遺跡

八ッ場ダム建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第26集

八ッ場ダム建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第26集

二〇〇九

国土交通省
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

2009

国土交通省
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



だつめ
立馬Ⅲ遺跡

八ッ場ダム建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第26集

2009

国 土 交 通 省
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



遺跡1面全景（北から）



遺跡2面全景（北から）



序

八ッ場ダムは、首都圏の利水および治水を目的に計画され、現在は吾妻郡長野原町ならびに同郡東吾妻町を中心に工事が進められています。八ッ場ダムの建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査は、平成6年度から開始され、本年度で15年目を迎えました。

発掘調査の増加により、徐々にこれまで不明だった時代の西吾妻地域の様子がわかり始めています。立馬遺跡に関しては、平成17年度に縄文時代草創期から早期、および中期初頭から前半の時期の良好な資料が検出された立馬Ⅱ遺跡の報告書を刊行いたしました。次に、平成18年度に縄文時代草創期と晩期及び弥生時代の資料が出土した立馬Ⅰ遺跡の報告書を刊行しました。

今回報告する立馬Ⅲ遺跡は、立馬Ⅱ遺跡から谷を隔てた南西に位置しています。以前の報告でも指摘いたしましたように、現在の集落から離れた山中にありましたが、豊富な湧水量を持つ湧き水を背景にして、古くから居住地として適地だったことがわかってきました。成果として、縄文時代早期から晩期、弥生時代と平安時代までの遺物が検出されました。特に、本県では検出例の少ない、縄文時代早期の住居跡が発掘調査されたことは注目されるでしょう。この点に関しては、立馬Ⅱ遺跡に類似した様相を示していると考えられましょう。

今回の報告書に至るまでには、国土交通省八ッ場ダム工事事務所、群馬県教育委員会、長野原町教育委員会、ならびに地元関係者の皆様に多大なるご尽力を賜りました。ここに心から感謝申し上げるとともに、本書が基本的な歴史資料として広く活用されることを願い、序といたします。

平成20年11月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 高橋 勇夫


例 言

1. 本書は、ハツ場ダム建設工事に関連する付替国道145号立馬地区改良工事に伴う事前発掘調査報告書である。
 2. 遺跡所在地 吾妻郡長野原町大字林
 3. 事業主体 国土交通省
 4. 調査主体 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
 5. 調査期間及び担当者
 - (1)発掘調査 調査期間 平成19年10月1日から12月21日
調査担当者 飯塚 卓二 須田 正久
 - (2)整理 整理期間 平成20年1月9日から4月30日
整理担当 飯塚 卓二 須田 正久
整理補助員 清水晴美 竹淵勝子 野口幸子 萩原喜代美 山本富美枝
(平成19年度・歴史の杜)
井草峯子 小林里子 新保純子 深井美紀 丸山里美
(平成20年度・歴史の杜)
 - (3)事務 理事長 高橋勇夫
常務理事 木村裕紀(平成19・20年度) 津金澤吉茂(平成20年度)
事業局長 津金澤吉茂(平成19・20年度) 総務部長 萩原 勉(平成19年度)
- 八ツ場ダム調査事務所
- 所 長 中 隆之(平成19年度) 中東耕志(平成20年度)
調査研究部長 中東耕志(平成19年度) 中沢 悟(平成20年度)
現場GL 飯田陽一 整理GL 藤巻幸男 庶務GL 吉田有光 若林正人
6. 報告書作成関係者
 - 編集 須田 正久
 - 本文執筆 飯塚卓二(第2章) 橋本 淳(第4章第2節) 篠原正洋(第7章第1節)
中東耕志(第7章第2節) 桜井美枝(第7章第3節) 上記以外 須田正久
 - 遺物写真撮影 佐藤元彦
 7. 遺物観察 縄文時代草創期・早期土器 橋本 淳
縄文土坑出土土器・石器及び遺跡外出土石器 中東耕志
 8. 石材鑑定 渡辺弘幸(甘楽町立新屋小学校)
 9. 鑑定分析・委託放射性炭素年代測定株式会社パレオ・ラボ
石器実測・トレース業務 株式会社測研 シン技術コンサル株式会社
遺構測量・デジタル編集業務 株式会社測研
 10. 発掘調査及び本書作成にあたり、下記の諸機関、諸氏にご教示、ご協力いただいた。記して感謝の意を表します。(敬省略、順不同)

国土交通省関東地方整備局八ッ場ダム工事事務所、群馬県教育委員会文化財保護課、長野原町教育委員会、八ッ場ダム調査事務所職員

10. 調査資料は一括して、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管されている。
11. 発掘調査にあつては、地元長野原町をはじめとし、嬭恋村、六合村、草津町、東吾妻町、中之条町などから多くの方々が作業に従事していただいた。ここにあらためて感謝の意を表します。

凡 例

1. 挿図中に使用した方位は、座標北を表している。
2. 遺構図については、各挿図中にスケールを添付したが、原則下記の縮尺で掲載した。
住居跡 1 : 60 炉 1 : 20 堅穴状遺構 1 : 40 集石 1 : 20
土坑 1 : 40 土坑(陥し穴) 1 : 60 溝 1 : 200
3. 遺構図のスクリーントーンは、下記の通りである。
集石被熱部分  胎土に繊維を含む土器断面 ●
4. テフラについては、略称を使用している。As-YPk 浅間草津黄色軽石
5. 遺構図の縮尺は下記のとおりであり、それ以外の場合のみ、各挿図番号に○書きを付した。
石鏃 1 : 1
縄文時代早期土器、ドリル・石匙・スクレイパー・鉄製品 1 : 2
縄文早期以外の土器・陶磁器 1 : 3
スタンプ状石器・敲石・打製石斧・磨製石斧・石核・磨石・凹石 1 : 3
石皿 1 : 4
6. 遺物写真は、遺物図とほぼ同じ縮尺で掲載してある。
7. 遺物の計測値は、欠損品の数値には()を付して完形品と区別した。また、口径を口、底径を底、器高を高と略した。
8. 遺物観察表(土器)の色調は、農林水産省農林水産技術会議監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』を参考に色名を使用した。
9. 遺構番号の呼称は、中グリッド別に付番してある。本遺跡の調査区では7区と97区の2つの区にまたがっている。基本的に時代時期ごとに7区の遺構を掲載し、次に97区の遺構掲載をしてある。
10. 調査は2面調査を行ったが、西側斜面部は当初現代建物基礎があり遺構は残存しないと想定されたが、調査を進める段階で西側斜面部下にも遺構が残存する可能性が高まった。そのため文化財保護課によるトレンチ確認調査後、縄文面で掘削を行い拡張部として2面目のみの調査をおこなった。

目 次

口絵

序

例言

凡例

本文目次・挿図目次・写真図版目次・報告書抄録・表目次

第1章 調査の経過と方法

- 第1節 調査に至る経過 1
- 第2節 調査の方法 2
- 第3節 基本土層 4

第2章 地理的環境と歴史的環境

- 第1節 地理的環境 6
- 第2節 歴史的環境 7

第3章 検出された遺構と遺物

- 第1節 遺跡の概要 11
- 第2節 縄文時代の遺構と遺物 13
 - 第1項 竪穴住居跡 13
 - 第2項 竪穴住居跡出土・石器 25
 - 第3項 竪穴状遺構 26
 - 第4項 集石 28
 - 第5項 土坑（縄文時代） 30
 - 第6項 竪穴状遺構と土坑出土の土器・石器 4
- 第3節 平安時代以降の遺構と遺物 43
 - 第1項 土坑（平安時代） 43
 - 第2項 陥穴 45
 - 第3項 土坑（中近世） 54
 - 第4項 溝状遺構（近世） 56

第4章 遺構外出土遺物

- 第1節 遺構外出土遺物の概要 59
- 第2節 遺構外出土土器（縄文草創期・早期） 60
- 第3節 遺構外出土土器（縄文前期から弥生中期） 71
- 第4節 遺構外出土石器 75

第5章 調査の成果とまとめ

- 第1節 立馬Ⅲ遺跡の遺構と遺物 88
- 第2節 立馬Ⅲ遺跡の陥穴について 90

第6章 自然化学分析

- 第1節 陥穴の放射性炭素年代測定 92

第7章 考察

- 第1節 立馬Ⅲ遺跡出土の縄文時代晩期終末から弥生時代中期中葉にかけての土器 96
- 第2節 立馬Ⅲ遺跡出土石器 97
- 第3節 立馬遺跡出土の石皿 99

挿 図 目 次

第1図 調査区設定図	3	97区 14, 19, 72, 74, 76, 77号土坑	44
第2図 基本土層図	5	第31図 7区 12, 13, 30, 31, 32, 33, 36号土坑	46
第3図 遺跡位置図	6	第32図 7区 34, 38, 39, 41, 44, 52号土坑	
第4図 周辺遺跡の位置図	8	97区 8, 11, 12号土坑	48
第5図 遺跡全体図	10	第33図 97区 15, 17, 18, 20号土坑	50
第6図 2面遺跡全体図	12	第34図 97区 26, 27, 29, 30号土坑	52
第7図 97区 1号住居跡・出土遺物	13	第35図 97区 31, 32, 34, 35, 36号土坑	53
第8図 97区 1号住居跡・出土遺物	14	第36図 7区 2号土坑、97区 50, 73, 1, 2, 3, 7, 10,	
第9図 97区 2号住居跡出土遺物	15	13, 16号土坑	55
第10図 97区 2号住居跡出土遺物	16	第37図 97区 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 9, 10, 11, 12,	
第11図 97区 2号住居跡出土遺物	17	13, 14, 15号溝状遺構	57
第12図 97区 2号住居跡出土遺物 3号住居跡・出土遺物	18	第38図 97区溝状遺構出土遺物	58
第13図 97区 3号住居跡出土遺物	19	第39図 縄文草創期・早期遺構外出土土器 (1)	64
第14図 97区 4号住居跡・出土遺物	20	第40図 縄文草創期・早期遺構外出土土器 (2)	65
第15図 97区 4号住居跡出土遺物	21	第41図 縄文草創期・早期遺構外出土土器 (3)	66
第16図 97区 4号住居跡・出土遺物	22	第42図 縄文草創期・早期遺構外出土土器 (4)	67
第17図 7区 1号住居跡・出土遺物	23	第43図 縄文草創期・早期遺構外出土土器 (5)	68
第18図 7区 1号住居跡・出土遺物	24	第44図 縄文草創期・早期遺構外出土土器 (6)	69
第19図 97区 1号竪穴状遺構・出土遺物	26	第45図 縄文草創期・早期遺構外出土土器 (7)	70
第20図 97区 1号竪穴状遺構・出土遺物		第46図 縄文前期から弥生遺構外出土土器 (1)	71
7区 1号竪穴状遺構	27	第47図 縄文前期から弥生遺構外出土土器 (2)	72
第21図 7区 1号竪穴状遺構・出土遺物 7区 1号集石	28	第48図 縄文前期から弥生遺構外出土土器 (3)	73
第22図 97区 1号集石	29	第49図 縄文前期から弥生遺構外出土土器 (4)	74
第23図 7区 5, 6, 7, 14, 15, 20, 22, 23, 24号土坑	31	第50図 遺構外出土土器 (1)	75
第24図 7区 29, 43, 45, 51号土坑 97区 22, 23, 24,		第51図 遺構外出土土器 (2)	76
25, 37, 38, 39, 40, 41, 42号土坑	33	第52図 遺構外出土土器 (3)	77
第25図 97区 43, 44, 45, 46, 47, 48, 49, 51, 52,		第53図 遺構外出土土器 (4)	78
53, 58, 61号土坑	35	第54図 遺構外出土土器 (5)	79
第26図 97区 62, 63, 65, 66, 67, 68, 69, 78,		第55図 遺構外出土土器 (6)	80
80号土坑	37	第56図 遺構外出土土器 (7)	81
第27図 7・97区土坑出土遺物 (1)	39	第57図 遺物分布図	89
第28図 7・97区土坑出土遺物 (2)	40	第58図 1面陥穴分布図	90
第29図 1面遺構全体図	42	第59図 立馬 I 遺跡出土石皿	100
第30図 7区 1, 3, 8, 42, 53号土坑	44		

表 目 次

第1表 周辺遺跡一覧	9	第7表 遺構外出土土器観察表	86
第2表 住居跡出土土器観察表	25	第8表 遺跡別陥穴形状表	91
第3表 竪穴状遺構・土坑出土土器観察表	41		
第4表 溝状遺構	58		
第5表 9・11号溝状遺構出土遺物観察表	58		
第6表 縄文早期以降グリッド出土遺物観察表	82		

写真図版目次

遺構写真		24号土坑セクション
口絵1	立馬遺跡 1・2面全景	29号土坑全景
口絵2	住居跡出土土器	29号土坑セクション
PL1	1・2面遺跡全景	43号土坑全景
PL2	7区拡張部全景・97区拡張部全景	43号土坑セクション
PL3	97区1号住居跡全景	45号土坑全景
	1号住居跡セクション	45号土坑セクション
	1号住居跡遺物出土状況	PL13 7区51号土坑全景
	1号住居跡遺物出土状況	51号土坑セクション
	1号住居跡遺物出土状況	97区22号土坑全景
PL4	97区2号住居跡全景	22号土坑セクション
	2号住居跡セクション	23号土坑全景
	2号住居跡遺物出土状況	23号土坑セクション
	2号住居跡遺物出土状況 近接	24号土坑全景
	2号住居跡全景	24号土坑セクション
PL5	97区3号住居跡全景	PL14 97区25号土坑全景
	3号住居跡セクション	25号土坑セクション
	3号住居跡セクション	37号土坑全景
	3号住居跡全景	37号土坑セクション
	3号住居跡掘り方全景	38号土坑全景
PL6	97区4号住居跡遺物出土状況	38号土坑セクション
	4号住居跡セクション	39号土坑全景
	4号住居跡遺物出土状況 近接	39号土坑セクション
	4号住居跡遺物出土状況 近接	PL15 97区40号土坑全景
	4号住居跡1号ピット全景	40号土坑セクション
PL7	7区1号住居跡全景	41号土坑全景
	1号住居跡1号炉全景	41号土坑セクション
	1号住居跡1号炉内炭化物出土状況	42号土坑全景
	1号住居跡石囲炉 炉体土器出土状況	42号土坑セクション
	1号住居跡2号炉全景	43号土坑全景
PL8	7区1号竪穴状遺跡全景	43号土坑セクション
	1号竪穴状遺物掘り方全景	PL16 97区44号土坑全景
	97区1号竪穴状遺構全景	44号土坑セクション
	1号竪穴状遺構遺物出土状況	45号土坑全景
	1号竪穴状遺構セクション	45号土坑セクション
	1号竪穴状遺構セクション	46号土坑全景
	1号竪穴状遺構遺物出土状況 近接	46号土坑セクション
	1号竪穴状遺構全景	47号土坑全景
PL9	7区1号集石全景	47号土坑セクション
	1号集石全景	PL17 97区48号土坑全景
	1号集石セクション	48号土坑セクション
	1号集石 石除去後全景	49号土坑全景
	97区1号集石全景	49号土坑セクション
	1号集石セクション	51号土坑全景
	1号集石セクション	51号土坑セクション
	1号集石全景 石除去後全景	52号土坑全景
PL10	7区5号土坑全景	52号土坑セクション
	5号土坑セクション	PL18 97区53号土坑全景
	6号土坑全景	53号土坑セクション
	6号土坑セクション	58号土坑全景
	7号土坑遺物出土状況	58号土坑セクション
	7号土坑セクション	61号土坑全景
	14号土坑全景	61号土坑セクション
	14号土坑セクション	62号土坑全景
PL11	7区15号土坑全景	62号土坑セクション
	15号土坑セクション	PL19 97区63号土坑全景
	20号土坑全景	63号土坑セクション
	20号土坑セクション	65号土坑全景
	22号土坑全景	65号土坑セクション
	22号土坑セクション	66号土坑全景
	23号土坑全景	66号土坑セクション
	23号土坑セクション	67号土坑全景
PL12	7区24号土坑全景	67号土坑セクション

PL 20	97区68号土坑全景 68号土坑セクション 69号土坑全景 69号土坑セクション 78号土坑全景 78号土坑セクション 80号土坑全景 80号土坑セクション	20号土坑セクション 26号土坑全景 26号土坑セクション 27号土坑全景 27号土坑セクション
PL 21	7区42号土坑全景 42号土坑セクション 53号土坑全景 53号土坑セクション 97区14号土坑全景 14号土坑セクション 19号土坑全景 19号セクション	PL 29 97区29号土坑全景 29号土坑セクション 30号土坑全景 30号土坑セクション 31号土坑全景 31号土坑セクション 32号土坑全景 32号土坑セクション
PL 22	97区72号土坑全景 72号土坑セクション 74号土坑全景 74号土坑セクション 76号土坑全景 76号土坑セクション 77号土坑全景 77号土坑セクション	PL 30 97区34号土坑全景 34号土坑セクション 35号土坑全景 35号土坑セクション 36号土坑全景 36号土坑セクション 50号土坑全景 50号土坑セクション
PL 23	7区1号土坑全景 1号土坑セクション 3号土坑全景 8号土坑全景 8号土坑セクション 12号土坑全景 13号土坑全景	PL 31 97区73号土坑全景 73号土坑セクション 7区2号土坑全景 2号土坑セクション 97区1号土坑全景 1号土坑セクション 2号土坑全景 2号土坑セクション
PL 24	7区30号土坑全景 30号土坑セクション 31号土坑全景 31号土坑セクション 32号土坑全景 32号土坑セクション 33号土坑全景 33号土坑セクション	PL 32 97区3号土坑全景 3号土坑セクション 7号土坑全景 7号土坑セクション 10号土坑全景 10号土坑セクション 13号土坑全景 13号土坑セクション
PL 25	7区34号土坑全景 34号土坑セクション 36号土坑全景 36号土坑セクション 38号土坑全景 38号土坑セクション 39号土坑全景 39号土坑セクション	PL 33 97区16号土坑全景 16号土坑セクション 8号溝全景 9号溝全景 8号溝セクション 9号溝セクション
PL 26	7区41号土坑全景 41号土坑セクション 44号土坑全景 44号土坑セクション 52号土坑全景 52号土坑セクション 97区8号土坑全景 8号土坑セクション	PL 34 7・97区遺物包含層全景 遺物包含層セクション近接 遺物包含層全景 遺物包含層断面セクション 縄文下面トレンチ全景 縄文下面トレンチセクション 作業風景 作業風景
PL 27	97区11号土坑全景 11号土坑セクション 12号土坑全景 12号土坑セクション 15号土坑全景 15号土坑セクション 17号土坑全景 17号土坑セクション	出土遺物写真 PL 35 97区1号住居・2号住居跡出土土器・石器 PL 36 97区2号住居・3号住居跡出土土器・石器 PL 37 97区4号住居跡出土土器・石器 PL 38 7区1号住居・7区・97区竪穴出土土器・石器 PL 39 7区6・7・15・22・33号土坑 97区58・61 66・67・68・78・80号土坑 溝出土土器・石 器・鉄器・陶器
PL 28	97区18号土坑全景 18号土坑セクション 20号土坑全景	PL 40～PL 45 縄文草創期・早期遺構外出土土器 PL 46～PL 48 縄文前期から弥生遺構外出土土器 PL 49～PL 51 遺構外出土土器・立馬 I 遺跡出土石皿

報 告 書 抄 録

書名ふりがな	だつめさんいせき
書名	立馬Ⅲ遺跡
副書名	ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	26
シリーズ名	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	457
編著者名	須田正久
編集機関	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20090227
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橘町下箱田 784 番地 2
遺跡名ふりがな	だつめさんいせき
遺跡名	立馬Ⅲ遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんあがつまぐんながのはらまちおおあざはやし
遺跡所在地	群馬県吾妻郡長野原町大字林
市町村コード	10424
遺跡番号	0213
北緯(日本測地系)	363239
東経(日本測地系)	1384113
北緯(世界測地系)	363250
東経(世界測地系)	1384102
調査期間	20071009-20071220
調査面積	2,719㎡
調査原因	ハッ場ダム建設
種別	集落/散布地
主な時代	縄文/平安/中近世
遺跡概要	集落-縄文-住居 5 + 堅穴状遺構 2 + 集石 2 + 土坑 43 - 土器 + 石器 / 平安 - 土坑 8 + 陥穴 34 / 中近世 - 土坑 8 + 溝 15 - 陶磁器 + 鉄製品
特記事項	縄文時代早期の集落跡
要約	本書はハッ場ダム建設工事に伴い平成 19 年度に発掘調査が行われた立馬Ⅲ遺跡の報告である。縄文時代の遺構は早期から中期後期の堅穴住居跡 5 軒や堅穴状遺構 2 基の他、集石、土坑などが検出されている。堅穴住居跡 4 軒からは子母口式や稲荷台式、沈線紋土器などの早期に帰属する土器が数多く出土している。平安時代以降からは大型な陥穴が 34 基検出されている。

第1章 調査の経過と方法

第1節 調査に至る経過

八ッ場ダム建設工事に伴い群馬県教育委員会、長野原町教育委員会、吾妻町教育委員会は対象地域の埋蔵文化財分布調査を実施し、48遺跡575,160㎡を確認した。これを受けて、建設省関東地方整備局と群馬県教育委員会、長野原町教育委員会、吾妻町教育委員会が埋蔵文化財発掘調査の取り扱いについて協議を重ね、平成6年3月18日付け建設省関東地方整備局長と群馬県教育委員会教育長が「八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定書」を締結した。同年4月1日付け建設省関東地方整備局長と群馬県教育委員会教育長により発掘調査受託契約が、同日付け群馬県教育委員会教育長と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長と発掘調査受委託契約を締結し、発掘調査が開始された。

これまでに、上記協定書は3回の変更がなされた。平成11年4月1日付け(第1回変更)で、群馬県の行政事務簡素化に伴う措置により、発掘調査受託者が群馬県教育委員会教育長から財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長に変更され、協定書は甲建設省関東地方建設局長、乙群馬県教育委員会教育長、丙財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団となった。次に平成17年4月1日付け(第2回変更)で、調査の期間の変更により、平成18年3月31日までを平成23年3月31日までに変更した。平成20年3月27日付け(第3回変更)で、本協定に整理事業を含めることの確認と、吾妻町の町村合併に伴う町名変更で「東吾妻町」とするほか、群馬県教育委員会等で実施した試掘確認調査と文化庁次長通知による埋蔵文化財調査対象地の考え方の提示により埋蔵文化財発掘調査対象面積の増加(1,367,507㎡)と、工事計画の変更に伴う発掘調査期間の変更(平成23年3月31日を平成28年3月31日)等、埋蔵文化財の調査計画・予算の大幅な見直しを行った。

立馬Ⅲ遺跡は、長野原町大字林にある。本遺跡は、国道145号線と一般県道林岩下線の交差点部分の建設工事に伴い実施された。周辺には立馬Ⅰ遺跡、立馬Ⅱ遺跡があり平成13年度より平成17年度まで調査が行われ、縄文時代早期の遺跡が検出した。これらの状況をふまえ、近接する平坦部である当地の遺跡の可能性について国交省八ッ場ダム工事事務所と県教委文化課・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団・長野原町教委・東吾妻町教委で毎月定例で行われている八ッ場ダム関連埋蔵文化財調整会議でも話題となっていた。平成17年9月国土交通省八ッ場ダム工事事務所長より県教委文化課長あて当地の試掘確認調査の依頼があり、県教委文化課は平成17年10月7日に実施し、陥穴と縄文時代早期の土器片を確認し、平成17年10月14日付けで文化課長より八ッ場ダム工事事務所長あて発掘調査の必要を通知するとともに、長野原町教育委員会に包蔵地の確認を伝えた。長野原町教委は文化財保護法第95条に基づき当地の埋蔵文化財包蔵地把握を提出し、県教委はこれを決定した。県教委文化課は調査の実施について八ッ場ダム工事事務所と調整を進め、平成19年度財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が行うこととした。

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団は、平成19年度八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査・整理事業計画として本事業を位置づけ計画を行い、他の事業との調整を図りながら9月より実施することとした。この計画を国土交通省関東地方整備局長あて通知し、平成19年4月2日付けで「平成19年度八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査・整理事業の委託契約」を国土交通省関東地方整備局長と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長とで締結した。

発掘調査は他の事業の延長から10月より実施することとなり文化財保護法第92条に基づく発掘調査届を平成19年10月1日付け群馬県教育委員会教育長あて提出し10月4日付けで県教委より指示を受けた。

第1章 調査の経過と方法

発掘調査日誌抄録

平成19年度(2007)

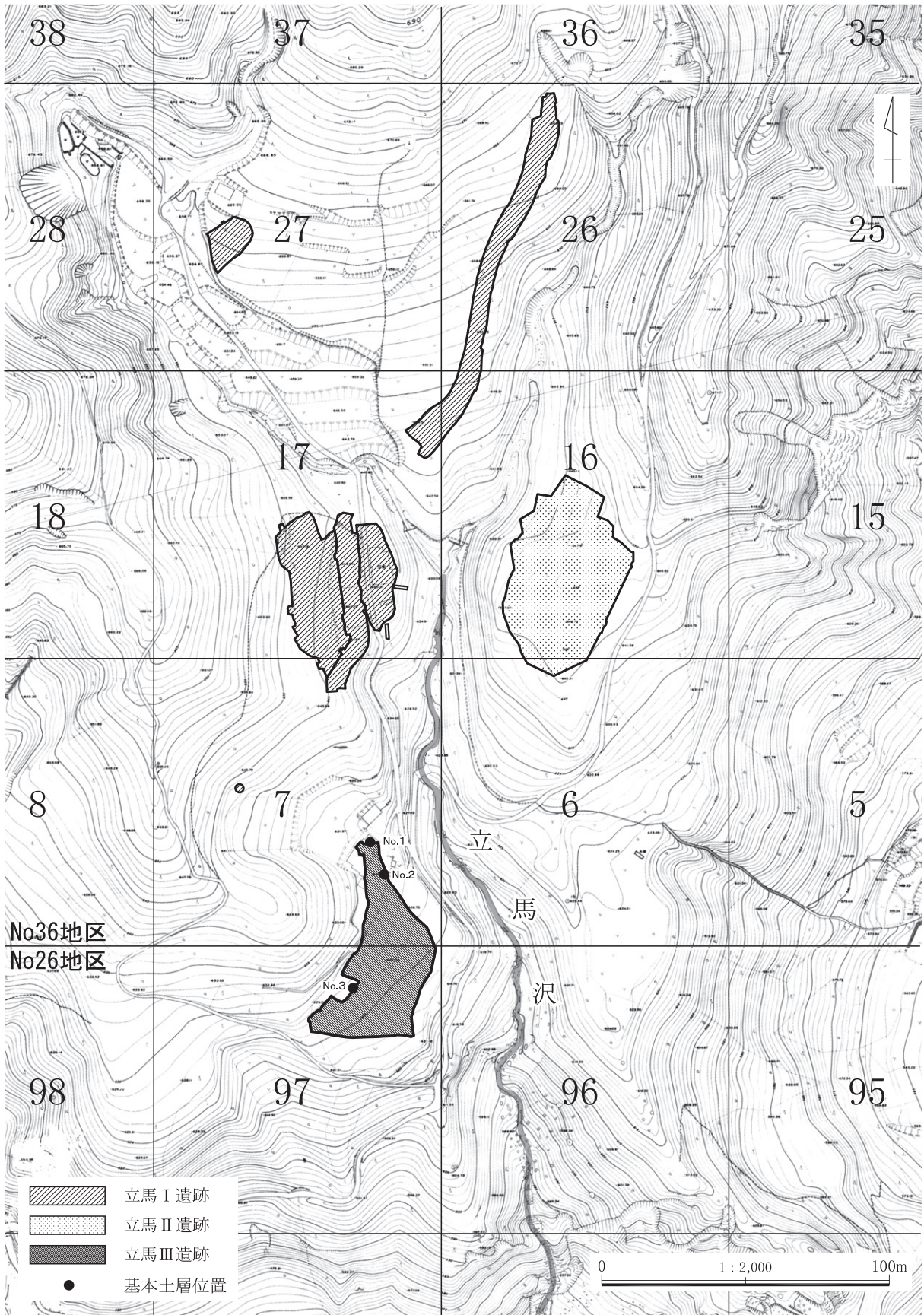
- 2007年10. 9 7区、97区調査区内草木の伐採開始。単管パイプ、ロープによる調査区安全対策
- 12 97区下段部表土掘削開始
- 15 遺構確認調査開始(1面)グリッド設定
- 17 中近世土坑、溝調査開始
- 2007年10. 19 7区下段部表土掘削
- 23 7区陥穴調査 7区中近世土坑、陥穴調査
- 31 1面目調査終了(溝、土坑、陥穴検出)
11. 2 7区、97区下段部1面目空撮
- 5 97区下段部より掘削開始(2面目調査)鋤簾による遺構検出
- 8 97区下段部1号竪穴、土坑調査開始 7区下段部1号住居、遺物包含層調査開始
- 12 7区下段部1号竪穴、集石土坑調査開始
- 19 97区下段部1～4号住居、1～3号集石調査開始
- 23 2面目調査終了(住居、土坑、集石)
- 26 7区、97区下段部2面目空撮 終了後2面下試掘トレンチ調査開始
- 30 調査終了 埋め戻し
12. 13 7区、97区上段部文化課試掘
- 17 上段部表土掘削 鋤簾による遺構検出作業
- 18 土坑、陥穴調査開始
- 20 調査終了 埋め戻し

第2節 調査の方法

調査区は2つに分かれ中グリッド名で7・97調査区と呼称した。7区は立馬Ⅰ、Ⅱ遺跡調査範囲にも含まれていたが、本遺跡の遺構番号は立馬Ⅰ、Ⅱ遺跡からの連番にせず、本遺跡のそれぞれの区ごとに1から付番を行った。発掘調査対象地は西側の尾根から続く傾斜地で、傾斜は東側を流れる折の沢の支流立馬沢へ向かっている。遺跡はその傾斜地の裾と立馬沢との間の緩斜面に位置する。対象地西側部分は家屋があったため平坦に削平され採石等により盛り土が成されていた。そのため遺構は希薄と考えられ一段低い緩斜面部から調査を行うこととなった。発掘調査はバックホーによる表土掘削を行い、作業員による鋤簾、移植ゴテ等での遺構検出、精査作業という手順で調査を進めた。表土を除去し、黒褐色土中に粕川テフラが少量残存する面を1面(平安以降面)とし遺構確認調査を行った。調査区南側(97区)は黒褐色土下面(縄文時代)までバックホーで掘削し、ローム漸移層までは作業員による掘削を行った。調査区北側7区においては1面黒色土中から縄文土器片及び黒曜石等が多数出土したためベルトを設定し、ローム漸移層まで遺物包含層の調査を行った。当初、斜面上段部分は家屋があったため盛り土され削平を受け遺構はないものと考えられていたが、段下緩斜面部の調査から遺構が残存する可能性が高くなり、文化課の試掘により遺構が確認されたため調査を行うこととなった。

遺構断面、平面測量においては、業者委託によるデジタル測量を行い、1/10、1/20、1/40、1/60、1/100を遺構ごとに選択して行った。

記録写真撮影は6×7、デジタルカメラを使用し、調査区全景写真撮影は委託業者によるラジコンヘリでの撮影を行った。



第1図 調査区設定図 (No.26・36地区)

第3節 基本土層

本遺跡の北側には立馬Ⅰ遺跡が隣接し、立馬沢を挟んで立馬Ⅱ遺跡が立地している。基本的な土層はすでに報告済みである立馬Ⅰ、Ⅱ遺跡に相似する。

本遺跡は西側に北側から続く山岳部の尾根が張り出しており、立馬沢に向かって傾斜する中腹に立地する。そのため傾斜地からの流失土が著しく、細粒黄橙色軽石を多量に混入する黒色土が厚く堆積している。この黒色土上面からは平安時代以降のものと考えられる土坑、陥穴などの遺構が検出された。遺跡北側から中央部にかけての黒色土中段からは、縄文時代早期から弥生時代にかけての土器や石鏃や小片などの遺物包含層が形成されている。また、ローム漸移層上面で傾斜は緩くなり南東斜面でもあるため縄文集落跡が検出された。

7区基本土層No.1

- I 表土 人為的埋土
- II 黒褐色土 細粒白色軽石を少量混入する。表土。
- III 灰褐色土 小礫を少量混入する。やや締まりあり。
- IV 黒褐色土 細粒黄橙色軽石を少量混入する。
- V 黒色土 細粒黄橙色軽石を多量に混入する。
- VI 黄褐色土 黄褐色粘質土を混入する。ローム漸移層。
- VII 黄橙色土 粘質性強く、しまりあり。
- VIII As-YPk

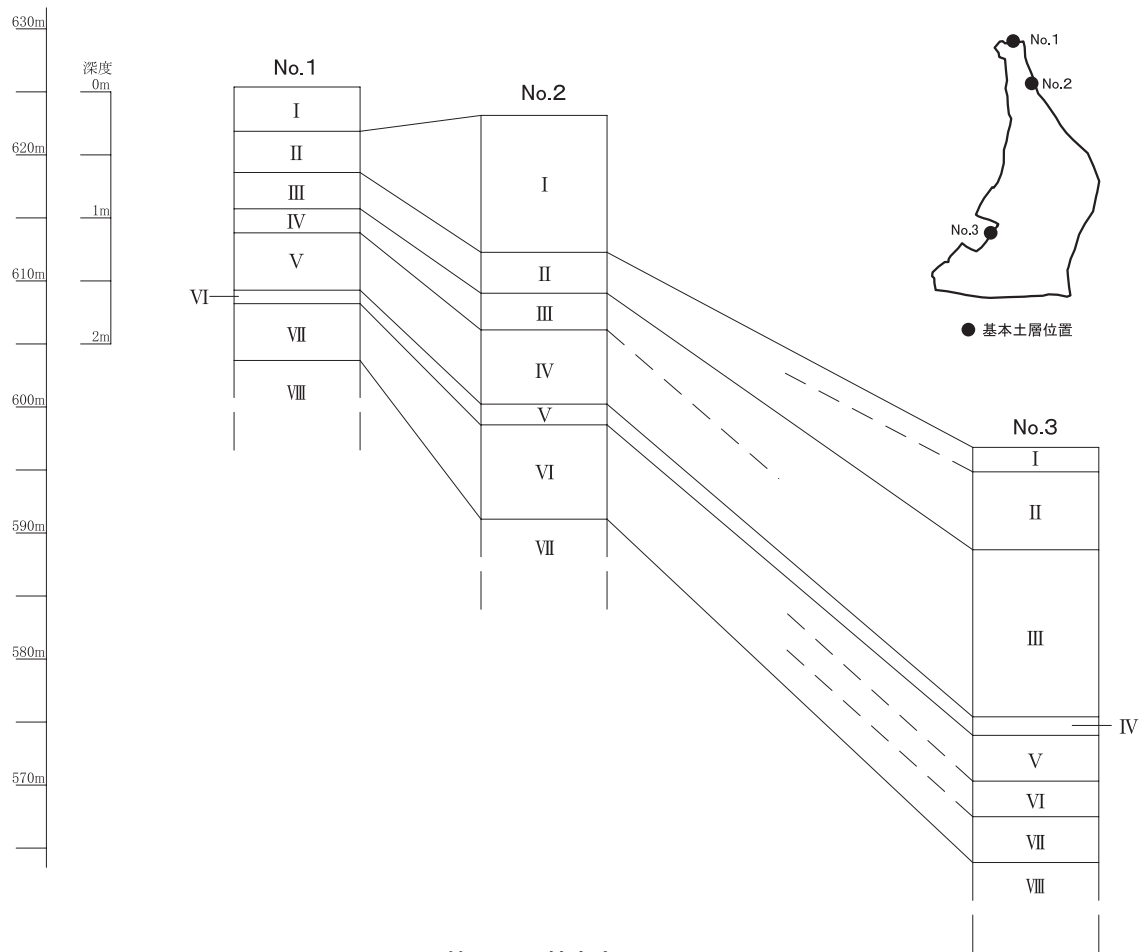
7区基本土層No.2

- I 黒褐色土 細粒白色軽石を少量混入する。表土。
- II 灰褐色土 細粒白色軽石をを少量混入する。締まりあり。
- III 黒褐色土 細粒黄橙色軽石を少量混入する。
- IV 黒色土 細粒黄橙色軽石を多量に混入する。
- V 黄褐色土 黄褐色粘質土を混入する。ローム漸移層。
- VI 黄橙色土 粘質性強く、締まりあり。
- VII As-YPk

97区基本土層No.3

- I 灰黄褐色土 細粒黄橙色色軽石を多量に混入する。
- II 黒褐色土 細粒黄橙色軽石を少量混入する。
- III 黒色土 細粒黄橙色軽石を少量混入する。
- IV 黄褐色土 黄褐色粘質土を混入する。ローム漸移層。
- V 黄橙色土 粘質性強く、締まりあり。
- VI 黄橙色土 V層より色調鈍く強く締まる。浅黄橙色土塊(大)を混入する。
- VII 灰白色粘土層
- VIII As-YPk

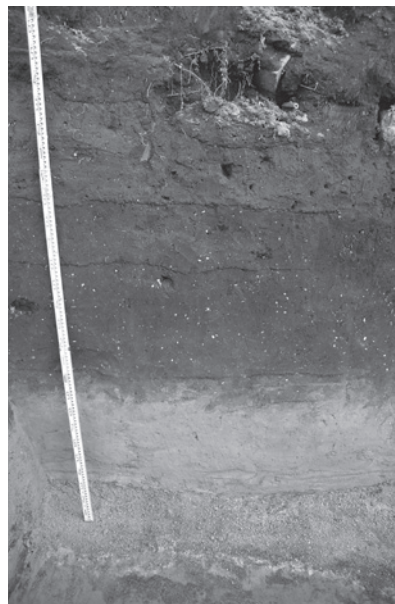
第3節 基本土層



第2図 基本土層図



基本土層 No. 1



基本土層 No. 2



基本土層 No. 3

第2章 地理的環境と歴史的環境

第1節 地理的環境

長野原町は群馬県の西北部、吾妻郡の南西隅に位置する。険しい山地を流れ下った吾妻川は、深い峡谷を刻みながら利根川に合流している。八ッ場ダム建設予定地付近から下流約2 kmの範囲は、吾妻川の川幅が狭まり、吾妻渓谷として国の名勝にもなっている。

遺跡地は吾妻川の北岸、王城山(海拔1,123m)の東南麓に位置している。王城山はおよそ90万年前の火山であるが、侵食が激しく原形が殆ど失われており、僅かに山頂付近に残された溶岩や噴出した火山灰と凝灰角礫岩から成層火山であったことが推測できる。

立馬Ⅲ遺跡は、王城山東南麓斜面の比較的緩やかな部分に立地している。既に報告されている立馬Ⅰ遺跡および立馬Ⅱ遺跡と同様に緩やかな傾斜地に遺跡が立地するという点は共通している。なお緩やかな傾斜地は、調査区域外にも存在しており、これらの緩い傾斜地には遺跡の存在が想定される。

小字名であり遺跡名ともなっている「立馬」については、飯森康広氏の論考がある。飯森氏は地元の古老たちの話から、立馬という地名は①馬が立ち上がるほど斜面が険しい所、②馬に乗せた荷駄を詰め替える場所、③狩猟場で追い込んだ獲物を打つ場所を立間(たつま)といい、一部では「ダツメ」ともいう、とのこと。氏は、立馬Ⅱ遺跡はまさしく狩猟における「立馬」であり、調査前まで狩猟が行われていたという証言を得ることができたという。その結果、③の由来が最も有力であると結論づけている。



第2節 歴史的環境

旧石器時代 柳沢城跡で細石器文化期の珪質岩製スクレイパーが確認されているのみである。中位段丘面には、厚さ50mにも及ぶ応桑泥流が堆積しており、発掘調査において遺跡が発見されにくい状況がある。

縄文時代 草創期については、現在のところ遺構は確認されていない。早期では石畑岩陰遺跡や楡木Ⅱ遺跡、立馬Ⅱ遺跡がある。石畑岩陰遺跡では、獣骨とともに押型文や撚糸文、表裏縄文土器が発見されている。また楡木Ⅱ遺跡においては、撚糸文をもつ住居跡が17軒発見されている。立馬Ⅱ遺跡では、早期住居跡2軒のほか、集石遺構4基が検出されている。

前期では、坪井遺跡において初頭に花積下層式期の住居跡が1軒、前期前葉では暮坪遺跡において二ツ木式期の住居跡が2軒、楡木Ⅱ遺跡では黒浜・有尾式期の住居跡9軒、長畝Ⅱ遺跡において関山期の住居跡2軒が検出されている。

中期では、立馬Ⅱ遺跡および楡木Ⅱ遺跡において前半期の住居跡がそれぞれ10軒と2軒検出されている。中期も後半になると、長野原一本松遺跡と吾妻川を隔てた横壁中村遺跡において、それぞれ250軒に及ぶ長期間継続する大集落が営まれるようになる。この他に坪井遺跡において19軒、幸神遺跡2軒、勘場木遺跡1軒、長畝Ⅱ遺跡で2軒検出されている。

後期では、前半に長野原一本松遺跡及び横壁中村遺跡において中期に続いて集落が営まれており、林中原遺跡や上原Ⅰ遺跡及びⅣ遺跡で住居跡が確認されている。

晩期では石畑岩陰遺跡で水式や安行式、千網式土器が採集されている。また川原湯勝沼遺跡においては、再埋葬の可能性のある2個の土器を埋設した土坑が発見されている。

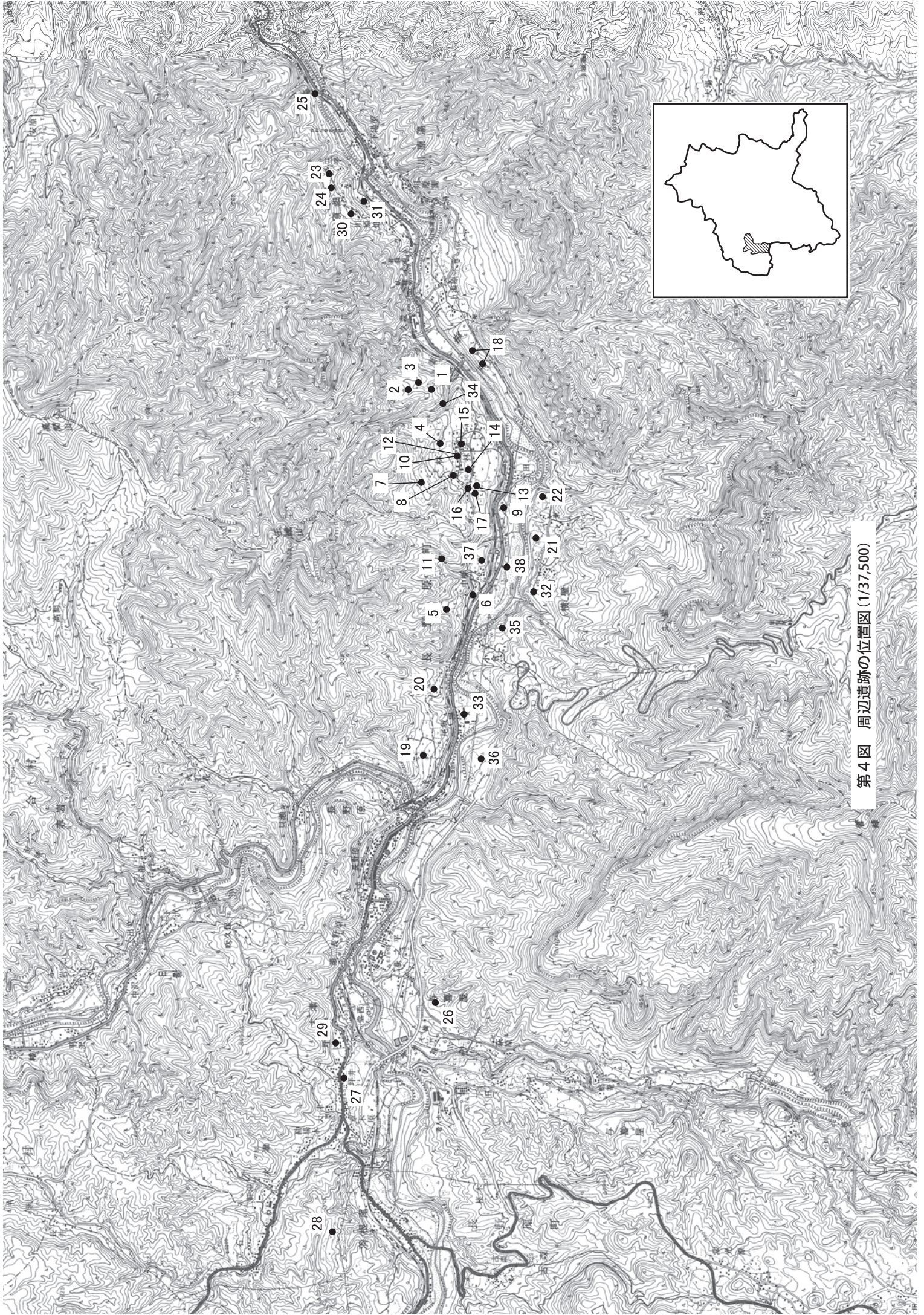
弥生時代 岩櫃山式の標式遺跡である岩櫃山鷹ノ巣遺跡(中期前半)が東吾妻町に存在するものの、八ッ場ダム関連の発掘調査での検出例は少ない。前期は、横壁中村遺跡において櫛王式の甕を埋設した土坑が検出されており、再送墓の可能性が指摘されている。中期後半期は、立馬Ⅰ遺跡において、竪穴住居2軒のほか、土器棺墓1基がある。後期では、二社平遺跡において樽式土器の破片が多く出土している。

古墳時代 上毛古墳総覧(昭和13年刊行)によると、長野原町では与喜屋と大津にそれぞれ1基ずつの記載があるが、町内で発掘された古墳は無い。集落では、林宮原遺跡と下原遺跡において、中期の住居がそれぞれ1軒調査されている。

古代 横壁中村遺跡、長野原一本松遺跡、楡木Ⅱ遺跡、花畑遺跡、川原湯勝沼遺跡等で奈良・平安時代の住居跡が検出されている。なかでも楡木Ⅱ遺跡において、「三家」と墨書で書かれた土器が数点存在することは興味深い。

中世 城郭では、発掘調査により多くの遺物が発見された柳沢城が注目されるが、その他に丸岩城や長野原城がある。一般集落では、横壁中村遺跡や二反沢遺跡、下原遺跡、林中原遺跡における掘立柱建物のほか、長野原一本松遺跡をはじめ、多くの遺跡で遺構・遺物が発見されている。

近世 天明3年の浅間山噴火による泥流で埋没した遺跡が、吾妻川兩岸の下位段丘面において多く発見されている。上郷岡原遺跡、尾坂遺跡、東宮遺跡では建物跡が、久々戸遺跡、尾坂遺跡、川原湯勝沼遺跡等においては、麻畑等の畑跡が検出されている。また、久々戸遺跡においては、江戸時代の街道である草津道が検出され、小林屋敷遺跡では、豪農であった小林家の屋敷の一部が調査されている。

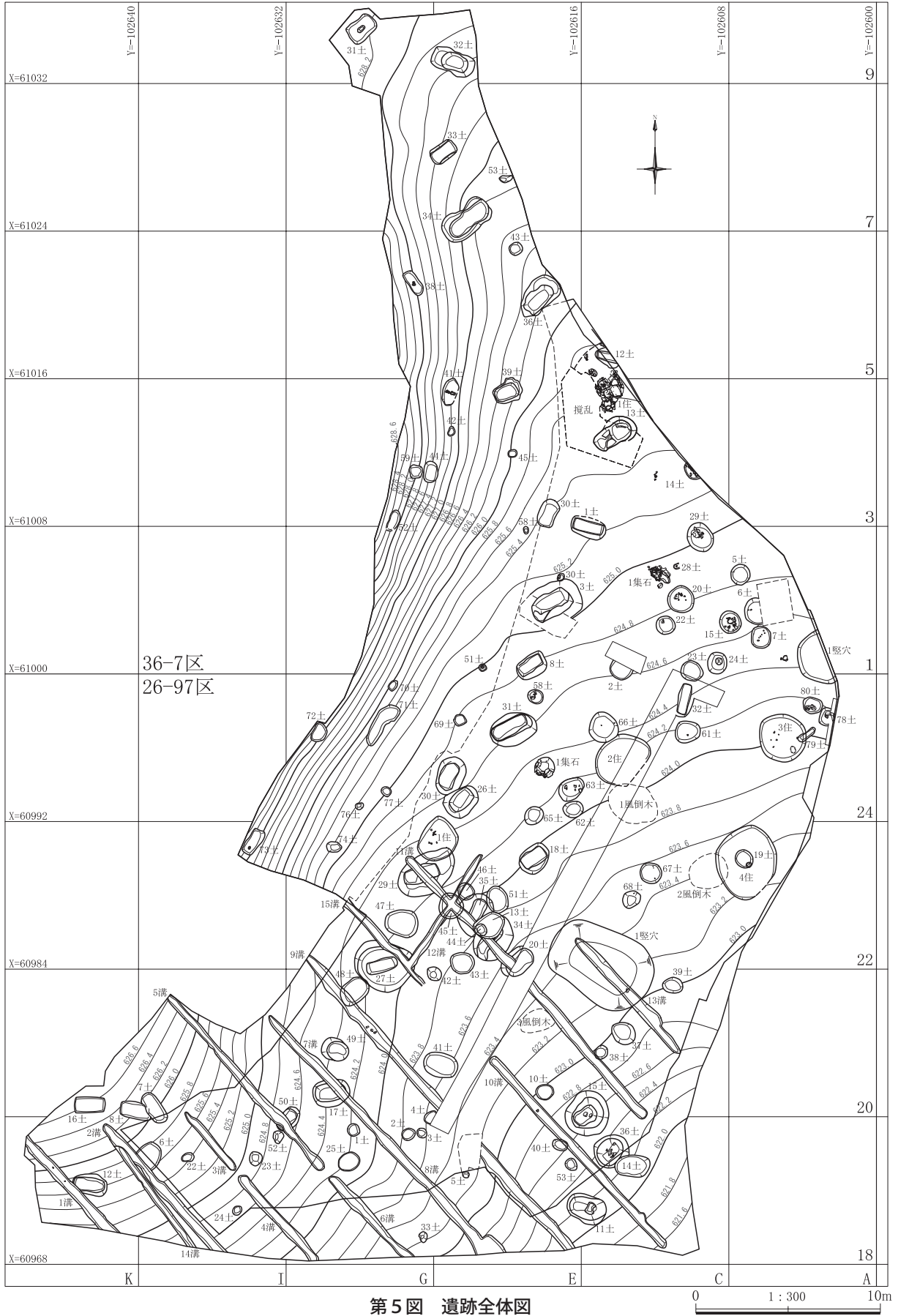


第4図 周辺遺跡の位置図 (1/37,500)

第1表 周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	所在地	概要	文献等
1	立馬Ⅲ遺跡	林	本報告書	
2	立馬Ⅰ遺跡	林	縄文時代早期前半の住居跡2軒、包含層遺物多数、晩期住居跡1軒、弥生時代中期住居跡2軒、平安時代住居跡3軒のほか、縄文時代～平安時代の陥穴多数検出。	群理文 2006『立馬Ⅰ遺跡』
3	立馬Ⅱ遺跡	林	縄文時代中期前半～後半の住居11軒。縄文時代早期包含層遺物多量出土。縄文時代～平安時代の陥穴多数検出。	群理文 2006『立馬Ⅱ遺跡』
4	花畑遺跡	林	平安時代の住居3軒、陥穴多数検出。	群理文 2002『ハッ場ダム発掘調査集成(1)』
5	楡木Ⅱ遺跡	林	縄文時代早期前半(撚糸系)の住居17軒、前期住居3軒、中期住居2軒。平安時代住居(9～10世紀)17軒。「三家」と書く墨書土器、刻字「称」を持つ石製紡錘車あり。中世の掘立柱建物群多数検出。信仰岩石『つぶらっこ様』と関係か。	群理文 2001『年報20』・同2002『年報21』・同2005『年報24』・同2006『年報25』
6	楡木Ⅲ遺跡	林	縄文時代前期、弥生時代前期を中心とする包含層検出。	No.5と同じ
7	上原Ⅱ遺跡	林	トレンチ調査の結果、遺跡は検出されなかった。	群理文 2005『年報24』
8	上原Ⅳ遺跡	林	縄文時代後期敷石住居、配石遺構。	群理文 2008『山根Ⅲ遺跡・上原Ⅳ遺跡・幸神遺跡』
9	下原遺跡	林	古墳時代中期住居跡1軒、平安時代住居跡1軒、中世の屋敷跡1カ所(15世紀代)中世から近世の畑跡3面検出。	群理文 2003『久々戸遺跡・中棚Ⅱ遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡』、同2006『下原遺跡(2)』
10	林中原Ⅰ遺跡	林	縄文時代前期住居3軒、中期1軒。中世城郭、中世から近世の掘立柱建物跡7棟。	群理文 2008『年報27』
11	二反沢遺跡	林	中世の石垣を伴う土坑ほか、鍛冶関連遺物。近世の畑跡検出。	群理文 2006『上郷B遺跡・廣石A・遺跡・二反沢遺跡』
12	林中原Ⅰ遺跡	林	試掘調査の結果、遺構は検出されなかった。	長野原町教委 2003『町内遺跡Ⅲ』
13	林中原Ⅰ遺跡Ⅱ	林	試掘調査の結果、遺構は検出されなかった。	長野原町教委 2004『町内遺跡Ⅳ』
14	林中原Ⅰ遺跡Ⅳ	林	縄文時代後期敷石住居跡1軒ほかを検出。	長野原町教委 2004『町内遺跡Ⅳ』
15	林中原Ⅱ遺跡	林	試掘調査の結果、遺構は検出されなかった。	長野原町教委 2004『町内遺跡Ⅳ』
16	林宮原遺跡	林	試掘調査の結果、縄文時代の包含層検出。	長野原町教委 2003『町内遺跡Ⅲ』
17	林宮原Ⅱ遺跡	林	古墳時代中期住居跡1軒、平安時代住居跡(9～10世紀)6軒検出。	長野原町教委 2004『町内遺跡Ⅳ』
18	川原湯勝沼遺跡	川原湯	縄文時代晩期の埋蔵2基。平安時代の住居跡3軒、天明三年の畑跡検出。	群理文 2005『川原湯勝沼遺跡(2)』
19	長野原一本松遺跡	長野原	縄文時代中期後半～後期の住居跡を中心とする集落跡。平安時代の住居跡、中世掘立柱建物跡等多数検出。	群理文 2002『長野原一本松遺跡(1)』、2007『長野原一本松遺跡(2)』2008『長野原一本松遺跡(3)』同2008『長野原一本松遺跡(4)』同『年報28』
20	幸神遺跡	長野原	縄文時代中期住居跡2軒ほかを検出。	群理文 2008『山根Ⅲ遺跡・上原Ⅳ遺跡・幸神遺跡』
21	横壁中村遺跡	横壁	縄文時代中期後半～後期の住居跡を中心とした集落跡。平安時代の住居も含め250軒以上検出。	群理文 2003『久々戸遺跡・中棚Ⅱ遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡』、同2005『横壁中村遺跡(2)』、同2006『横壁中村遺跡(3)』同2006『横壁中村遺跡(4)』、同2007『横壁中村遺跡(6)』同2008『横壁中村遺跡(7)』
22	横壁勝沼遺跡	横壁	縄文時代土坑数基。槍先形尖頭器1点表採。平安時代住居跡1軒検出。	群理文 2002『ハッ場ダム発掘調査集成(1)』
23	三平Ⅰ遺跡	川原畑	縄文時代前期住居跡3軒・土坑6基ほか、平安時代以降の掘立柱建物跡3棟・焼土10基などを検出。	群理文 2007『三平Ⅰ・Ⅱ遺跡』
24	三平Ⅱ遺跡	川原畑	縄文時代草創期～前期の土器・石器を多量に検出。掘立柱建物跡7棟ほかを含む中世屋敷跡1カ所。	群理文 2007『三平Ⅰ・Ⅱ遺跡』
25	石畑岩陰遺跡	川原畑	縄文時代草創期～晩期の包含層検出	『群馬県史』資料編1
26	長畝Ⅱ遺跡	与喜屋	縄文時代前期住居跡2軒、中期後半住居跡2軒検出。	長野原町教委 1992『長畝Ⅱ遺跡・坪井遺跡』
27	坪井遺跡	大津	縄文時代前期初頭住居跡1軒、中期後半住居跡19軒、平安時代住居跡1軒、掘立柱建物跡1棟ほかを検出。	長野原町教委 1992『長畝Ⅱ遺跡・坪井遺跡』、同2000『坪井Ⅱ遺跡』
28	暮坪遺跡	羽根尾	縄文時代前期前葉住居跡2軒ほかを検出。	長野原町教委 2001『暮坪遺跡』
29	小林助右衛門屋敷跡	長野原	天明泥流に埋没した吾妻の分限者小林助右衛門屋敷の一部、礎石建物跡2棟、土蔵跡1軒ほかを検出。	長野原町教委 2005『小林家屋敷跡』
30	上ノ平Ⅰ遺跡	川原畑	縄文時代中期中葉の住居跡16軒、陥穴134基、9～10世紀の住居跡20軒が発見され、県内2例目となる皇朝十二銭の貞観永寶が出土している。	群理文 2007『上ノ平Ⅰ遺跡』
31	東宮遺跡	川原畑	天明泥流で埋没した民家、それに伴う建物跡、畑等を検出。	群理文 2002『ハッ場ダム発掘調査集成(1)』同2008『年報27』
32	山根Ⅲ遺跡	横壁	縄文時代中期後半住居跡3軒、土坑39基、中近世の溝1条ほか検出。	群理文 2002『ハッ場ダム発掘調査集成(1)』同2008『山根Ⅲ遺跡・上原Ⅳ遺跡・幸神遺跡』
33	尾坂遺跡	長野原	天明泥流で埋没した民家と麻畑、溝等を検出。	群理文 2008『年報27』
34	東原Ⅰ遺跡	林	縄文時代土坑1基、平安時代住居跡1軒が確認され、保存措置が採られた。	長野原町教委 2006『町内遺跡Ⅵ』
35	西久保Ⅰ遺跡	横壁	縄文時代後期の住居跡、水場を検出。	群理文 2002『ハッ場ダム発掘調査集成(1)』
36	久々戸遺跡	長野原	天明泥流で埋没した畑、建物跡、縄文時代の土器片。	群理文 2003『久々遺跡・中棚Ⅱ遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡』
37	中棚Ⅰ遺跡	林	散布地	
38	中棚Ⅱ遺跡	林	天明泥流で埋没した畑、および安永九年と考えられる埋没畑。	群理文 2003『久々遺跡・中棚Ⅱ遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡』2004『久々遺跡(2)・中棚Ⅱ遺跡(2)・下原遺跡・横壁中村遺跡』

省略 群理文：財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団、県教委：群馬県教育委員会、長野原町教委：長野原町教育委員会



第5図 遺跡全体図

第3章 検出された遺構と遺物

第1節 遺跡の概要

本遺跡の立地する長野原町は群馬県の西北部、吾妻郡の南西隅に位置する。険しい山地を流れ下った吾妻川は、深い峡谷を刻みながら利根川に合流している。

遺跡はこの吾妻川の北岸、王城山(海拔1,123m)の東南麓斜面の立馬沢に向かって傾斜する比較的緩やかな部分に立地している。調査区は傾斜地からの流失土が著しく、細粒黄橙色軽石を多量に混入する黒色土が厚く堆積している。調査は試掘結果を踏まえ黒色土上面を第1面、黒色土下面からローム漸移層面を第2面とし調査を行った。第1面は概ね平安時代以降から中近世の遺構確認面とし、第2面は縄文時代遺構の確認面とした。

7区 第1面からは土坑が19基検出された。うち埋土や他の遺構との切りあい関係から中近世と考えられる土坑が7基、これらの土坑より旧く平安時代のものと推測される陥穴が16基、土坑が1基である。これらの遺構に伴う遺物は出土していない。

第2面からは竪穴住居跡1軒、竪穴状遺構1基、集石1基、土坑13基が検出された。竪穴住居跡は炉周辺に板状礫を並べる敷石住居で縄文時代中期に帰属する。竪穴状遺構は遺構の半分以上が調査区外に入るため住居跡としての確証がなく、竪穴状遺構としたが埋土中より縄文時代早期の土器片が出土している。土坑からは縄文時代早期から中期にかけての土器片が出土している。

7区では黒色土中位から下位部にかけての包含層で縄文時代早期から弥生時代中期の土器片や黒曜石製の石鏃や剥片が多量に出土した。土器に比べ黒曜石が多く、製作跡としての可能性も考えられたがその痕跡は見られず、西側斜面部からの流れ込みの可能性が高いと判断した。これら多量の黒曜石の出土から、本遺跡以西部にこれらの石材を使い石器を多量に製作していた遺跡の存在が想定される。

97区 第1面からは土坑30基、溝状遺構14条が検出された。中近世のものと考えられるのは土坑5基、溝状遺構14条で、性格は不明である。そのすべてのものが北西から南東にかけて、ほぼ一定の間隔で走行する。遺物は陶器丸碗や鉄製品が出土している。これらの遺構より旧く平安時代のものと推測される陥穴が18基、土坑が7基である。7区同様、これらの遺構に伴う遺物は出土していない。

第2面からは竪穴住居跡4軒、竪穴状遺構1基、集石1基、土坑35基が検出された。竪穴住居跡はすべて出土遺物から縄文時代早期に帰属する。住居内からは、炉などの内部施設は検出されなかった。竪穴状遺構は長軸が5m以上もあり、壁の立ち上がりや床面の状態などから住居跡とは性格が異なるものと考えられ竪穴状遺構とした。遺物は縄文時代早期の土器が出土していることから周辺住居跡と同時期のものと考えられる。集石は1号住居跡と2号住居跡の間にあり、ほぼ円形で外側に大型の礫を配置し内側隙間部分には小礫を配している。幾つかの石には被熱部分と思われる赤く焼けた痕跡が確認できた。周辺住居跡の屋外炉の可能性も否めない。土坑からは7区同様、縄文時代早期から中期にかけての土器片が出土している。

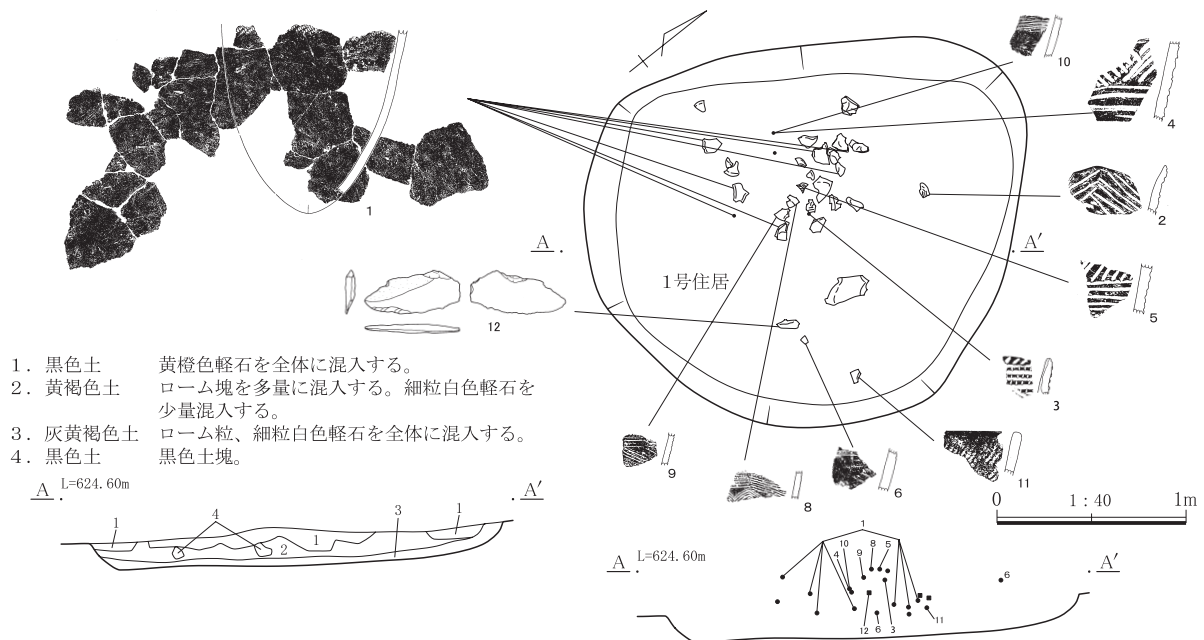
今回の調査から、本遺跡は西側に北側から続く山岳部尾根の立馬沢に向かって傾斜する東南麓斜面に形成された、縄文時代早期と中期の集落の一隅に位置すると考えられる。このことは、立馬Ⅰ・Ⅱ遺跡の調査報告や本遺跡の調査結果から、縄文時代早期から中期を中心とした集落がこの地域周辺に密度濃く展開する可能性を指摘できる。

第2節 縄文時代の遺構と遺物

第1項 竪穴住居跡

97区 1号住居跡(第7図 PL 3)

F-23・24～G-23グリッド、西側斜面裾部に位置する。黄褐色軽石を混入する黒色土(Ⅱ層)面を精査中に数点の土器の出土が確認された。明確な掘り込みが確認できなかったが土器片が多量に出土したため周辺を掘り下げながらの遺構検出となった。プランが確認できたのはローム漸移層上面であったため実存範囲は検出範囲より大きいと推定される。平面形状はやや不整形な楕円形を呈する。規模は長軸2.4m、短軸2.08m、壁高20cmを測り、長軸方位はN-0°を示す。埋土は上層にⅢ層が残存するが、主体はローム粒や塊を多く混入する黄褐色土による自然堆積と考えられる。柱穴や炉などの内部施設は検出されなかった。床面はほぼ平坦であるが踏み締まりは弱い。出土遺物から縄文時代早期に帰属する住居跡と考えられる。

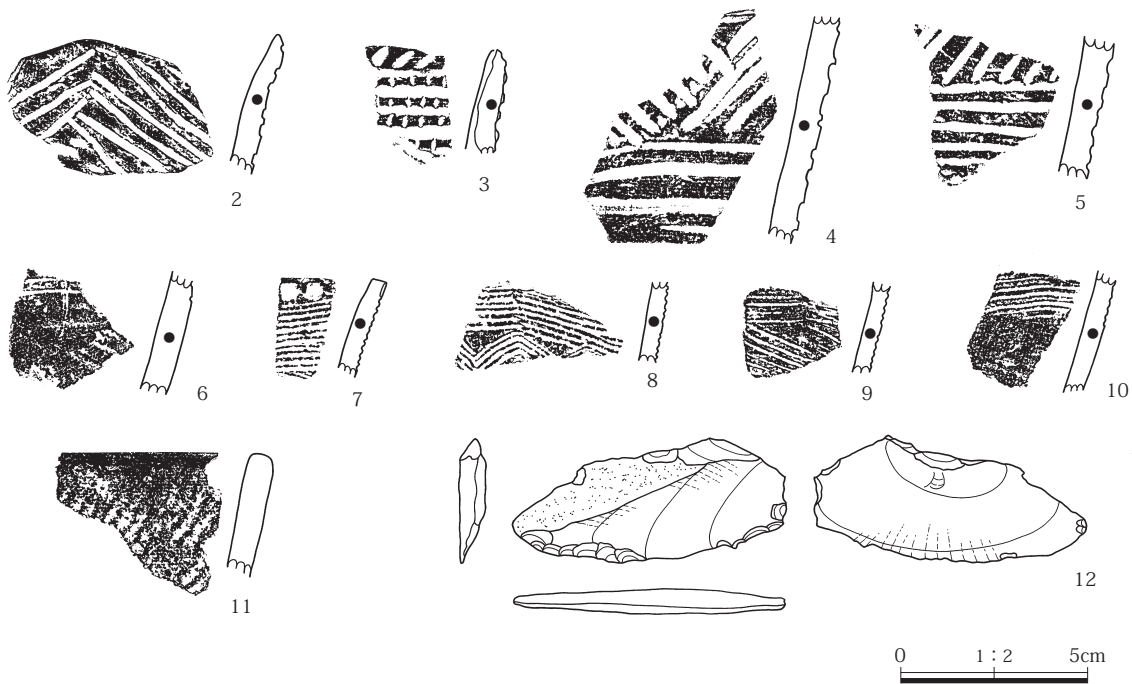
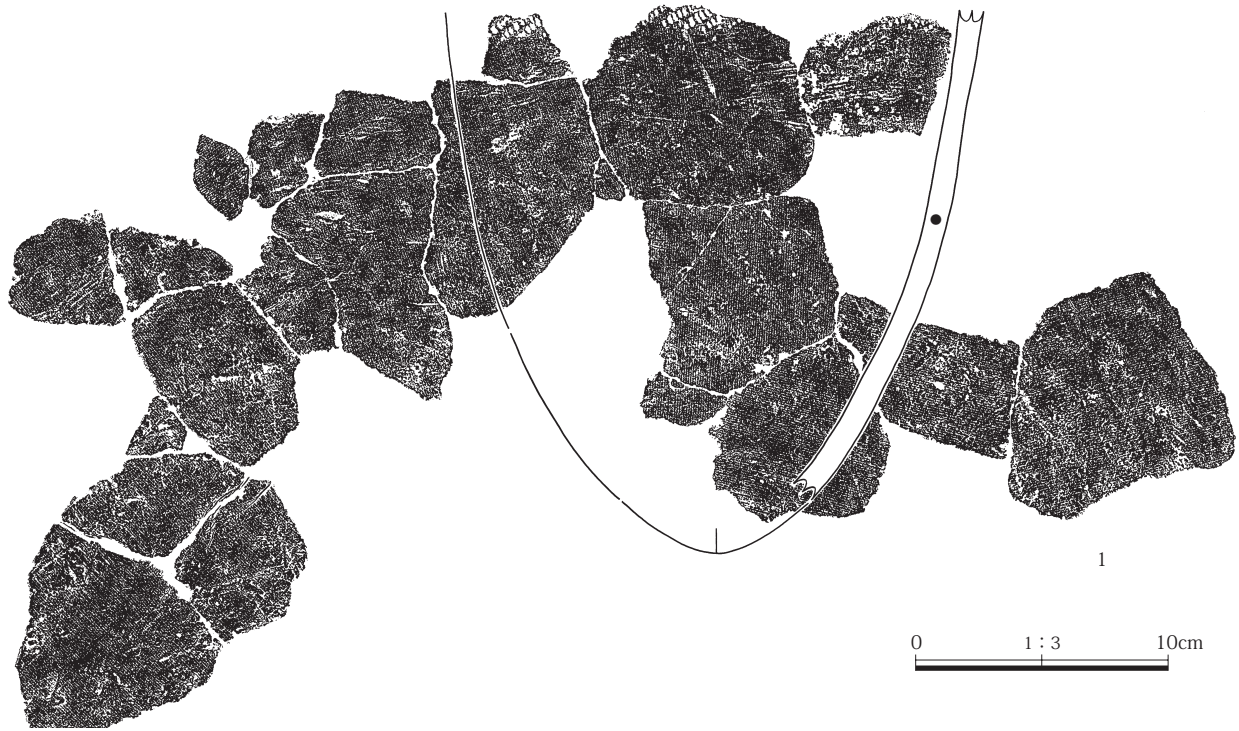


97区1号住居出土土器

1は口縁部付近のみ欠損した深鉢で、砲弾状の器形を呈し、底面は鈍角な尖底あるいは丸底になると思われる。おそらく口縁部付近になるであろう上端部に斜位の絡条体圧痕をめぐらせ、以下は無紋となる。無紋部は、ごく一部に擦痕が認められる以外は、丁寧に整形されて平滑である。内面にも条痕は施されない。2は波状口縁で、緩く外反する器形を呈す。波頂部から矢羽根状に沈線を施し、沈線下に沈線と同一工具によると思われる刺突を施す。3は平縁で、口縁端部に斜位のキザミを施し、以下、沈線を横位多段に施す。さらに沈線間に縦位の短沈線を施している。4は複数条の沈線をめぐらせて紋様帯を区画。紋様帯内は複合鋸歯紋が施されていると思われる。5も4と同様のモチーフとなる。6は半截竹管による平行沈線を横位に施し、以下は無紋となる。無紋部は平滑である。区画紋の部位か。7は口縁直下に刺突をめぐらせ、条線を横位に施す。8は条線を横位、鋸歯状に施す。9は菱形状に、10は横位に条線を施す。11は原体が判然としないが、単節LR

第3章 検出された遺構と遺物

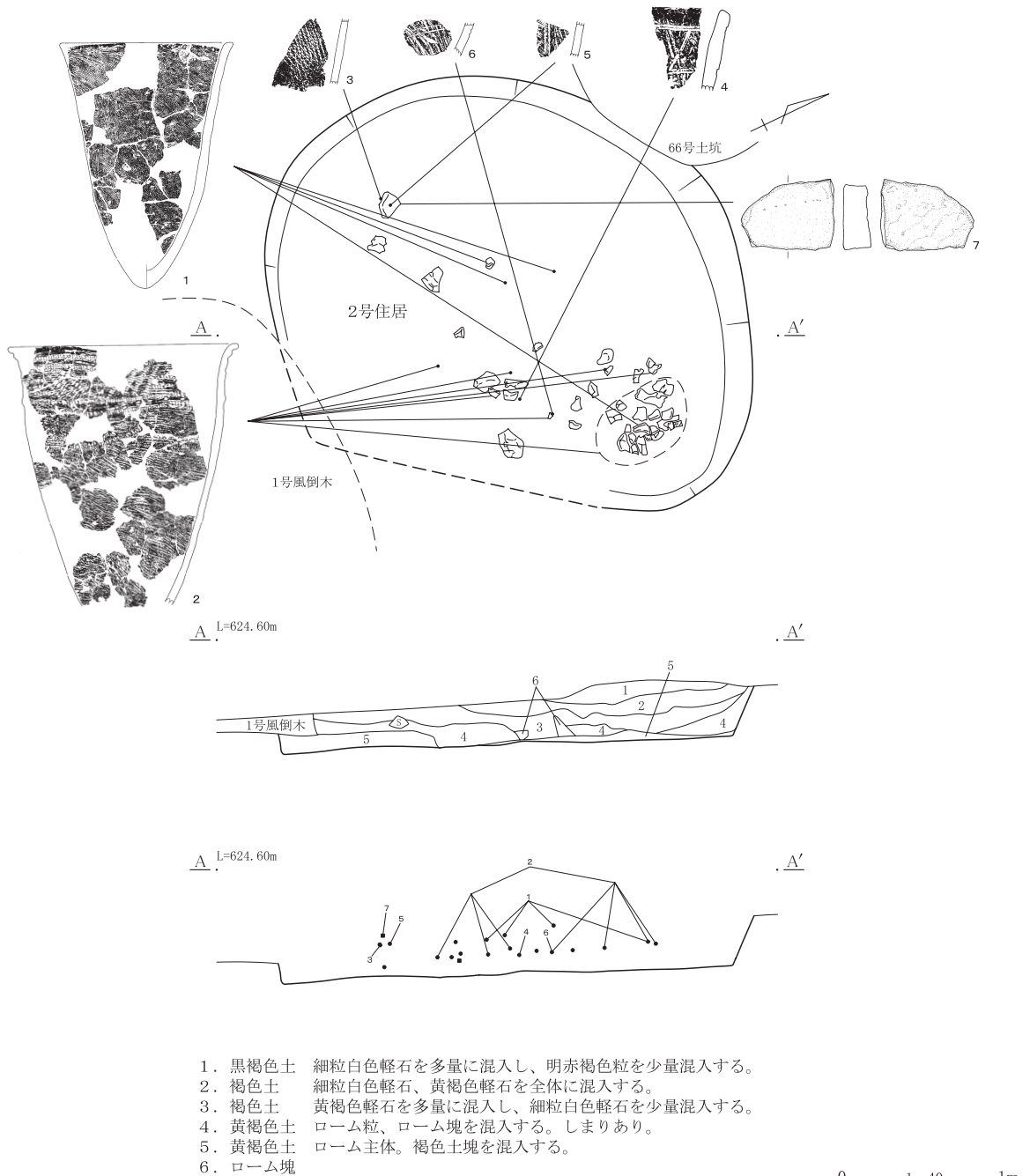
縄紋をまばらに施紋しているようだ。11以外は胎土に繊維を含み、また3～5, 8～10は石英粒を含み、ざらついた印象を受ける。帰属時期であるが、1は紋様構成や胎土、整形から子母口式にもっとも近い様相を呈しているといえる。2～6は中部系の沈線紋土器、7～10は「上林中道南式」に比定できよう。



第8図 97区1号住居跡・出土遺物

97区 2号住居跡(第9図 PL 4)

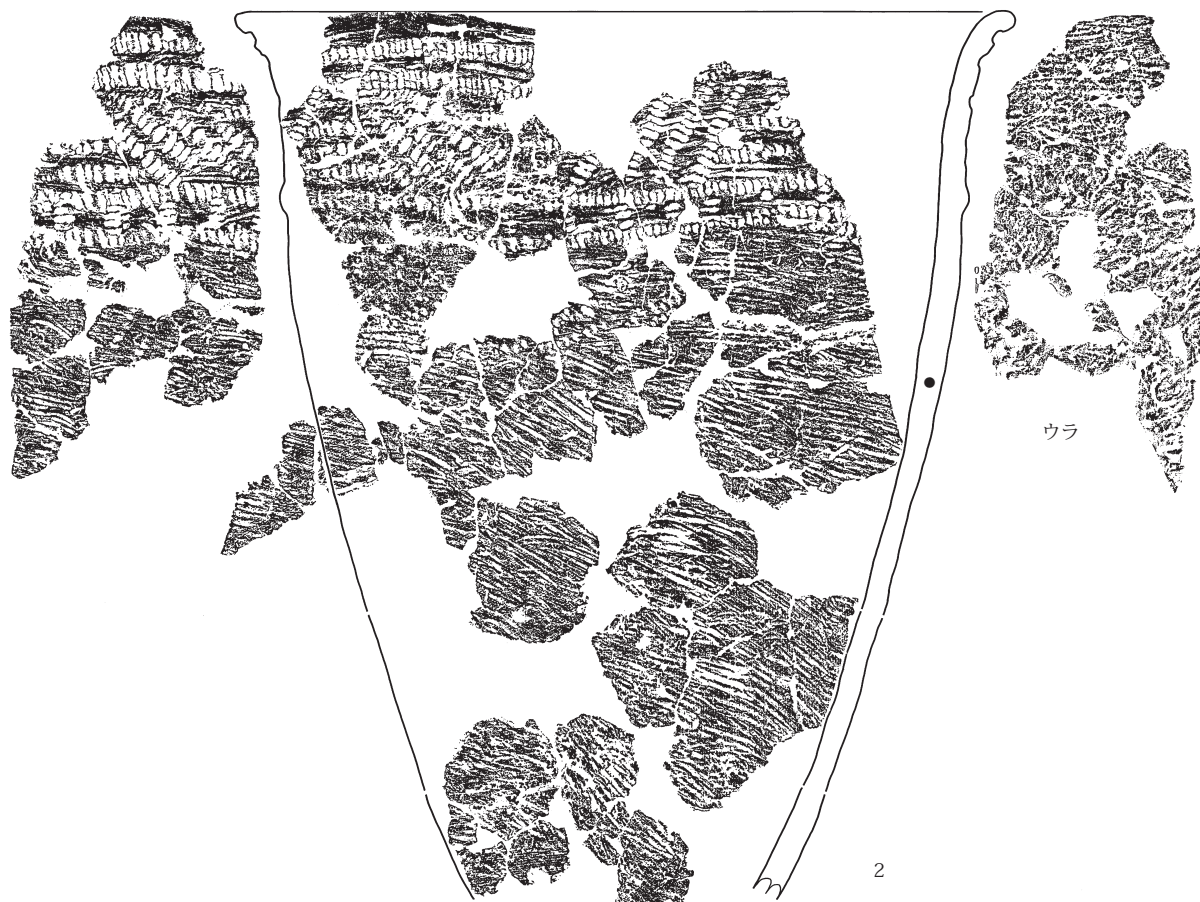
D-24・25グリッド、調査区ほぼ中央部に位置する。住居跡東壁の一部は削平されている。試掘トレンチにより土器片が集中して確認されたため遺構があると推定された。Ⅱ層の黒色土中では明確な遺構プランは確認できず、ローム漸移層まで掘り下げての検出となった。平面形状はやや不整形な楕円形を呈する。規模は長軸3.2m、短軸確認範囲2.62m、壁高36cmを測り、長軸方位はN-60°-Eを示す。埋土は褐色土主体で細粒白色軽石及び黄褐色軽石を全体に混入し、下層部は比較的締まりが強い。柱穴や炉などの内部施設は検出されなかった。床面はほぼ平坦であるが東部に向かってやや傾斜し、踏み締まりはやや硬い。出土遺物から縄文時代早期に帰属する住居跡と考えられる。



第9図 97区2号住居跡出土遺物



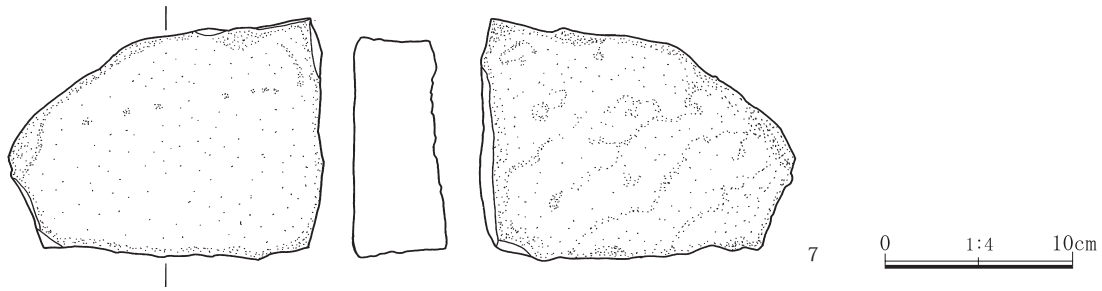
第10図 97区2号住居跡出土遺物



第11図 97区2号住居跡出土遺物

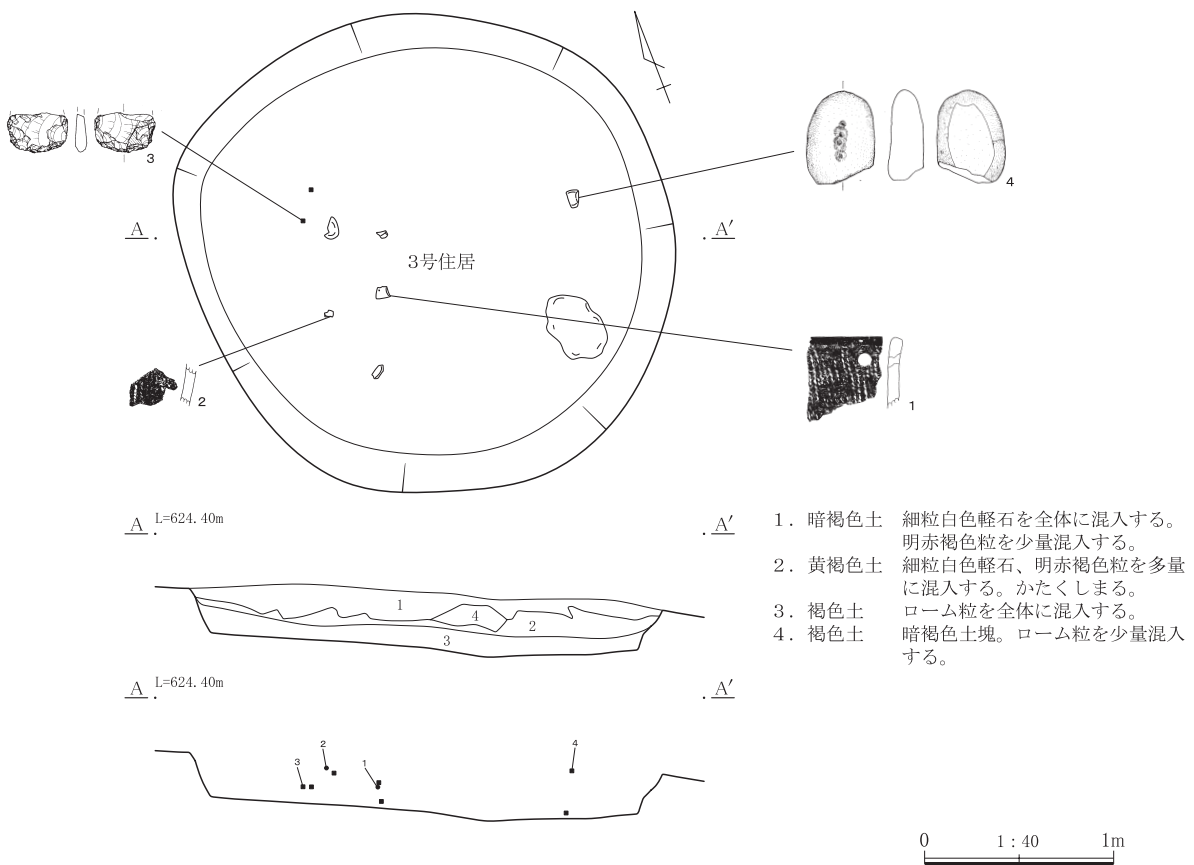
97区2号住居出土土器

1は口縁部が緩く外反する砲弾状の器形を呈す。口径22.8cm、器高32.8cmを測る。器面全面および口唇部に絡条体条痕と思われる細かな条痕を施す。内面は口縁部のみ部分的に条痕を施しており、指頭による調整と思われる凹凸がところどころに認められる。2は推定口径31.0cm、胴部が膨らみ、口縁が緩く外反する器形を呈す。低隆帯を1条めぐらせて口縁部紋様帯を区画。口縁下に2条、また隆帯に沿わせて絡条体圧痕をめぐらせ、紋様帯内に斜位、部分的に横位に絡条体圧痕を施す。隆帯上は縦位に絡条体圧痕を施している。紋様帯下および内面に条痕を施す。胎土に繊維を多く含む。3は撚糸紋Rを縦位、斜位に施す。胎土に結晶片岩を含む。4は沈線を2条めぐらせて区画、区画内にX字状あるいは鋸歯状に沈線を施す。5は平行沈線により縦位区画し、区画内に斜位のモチーフを描く。6は条痕を地紋とし、平行沈線を斜位に施す。1は子母口式、2は条痕紋系土器後半期、3は稲荷台式、4～6は中部系の沈線紋土器に比定できよう。

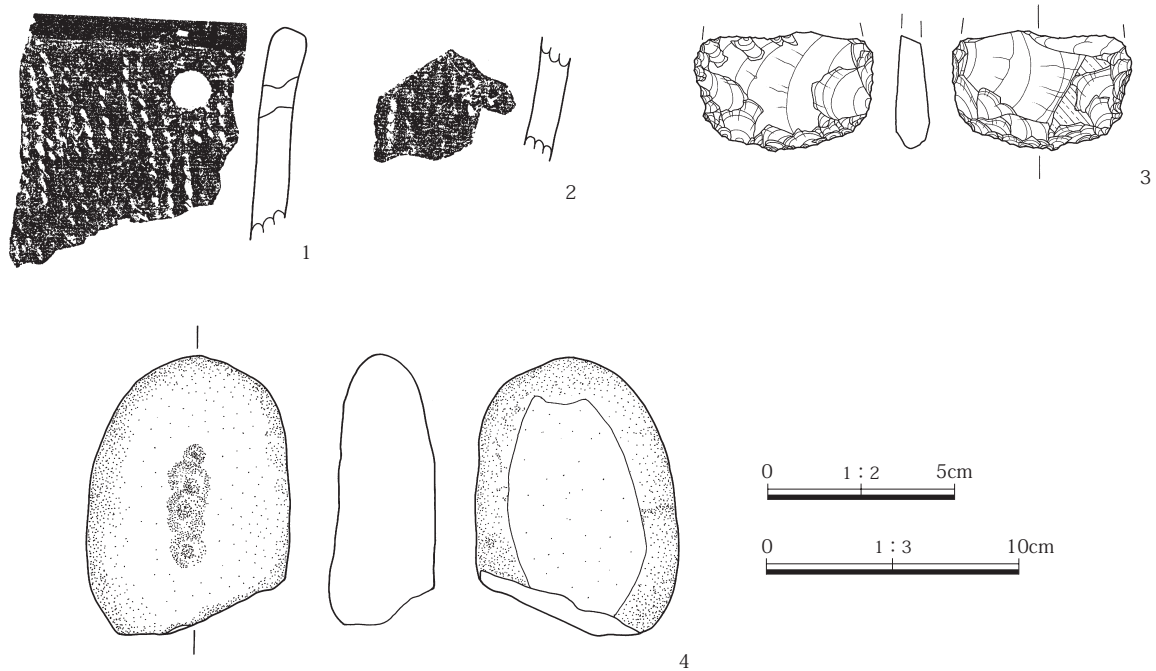


97区 3号住居跡(第12図 PL 5)

B-24・25グリッド、調査区東側に位置する。暗褐色土を埋土とする円形のプランが確認され、当初、土坑跡と考え調査を実施したが、推定範囲からは明確な壁面の立ち上がりが確認されなかった。そのためさらに調査した結果、壁の立ち上がりが確認でき出土遺物や床面や全体の形状から住居跡であると判断した。平面形状は円形を呈する。規模は長軸2.72m、短軸2.6m、壁高30cmを測り、長軸方位はN-50°-Wを示す。埋土は細粒白色軽石及び明赤褐色黄橙粒を混入し、比較的良く締まった土である。床面はほぼ平坦であるがやや軟弱で踏み締まりは弱い。柱穴や炉などの内部施設は検出されなかった。出土遺物から縄文時代早期に帰属する住居跡と考えられる。



第12図 97区2号住居跡出土遺物 3号住居跡・出土遺物



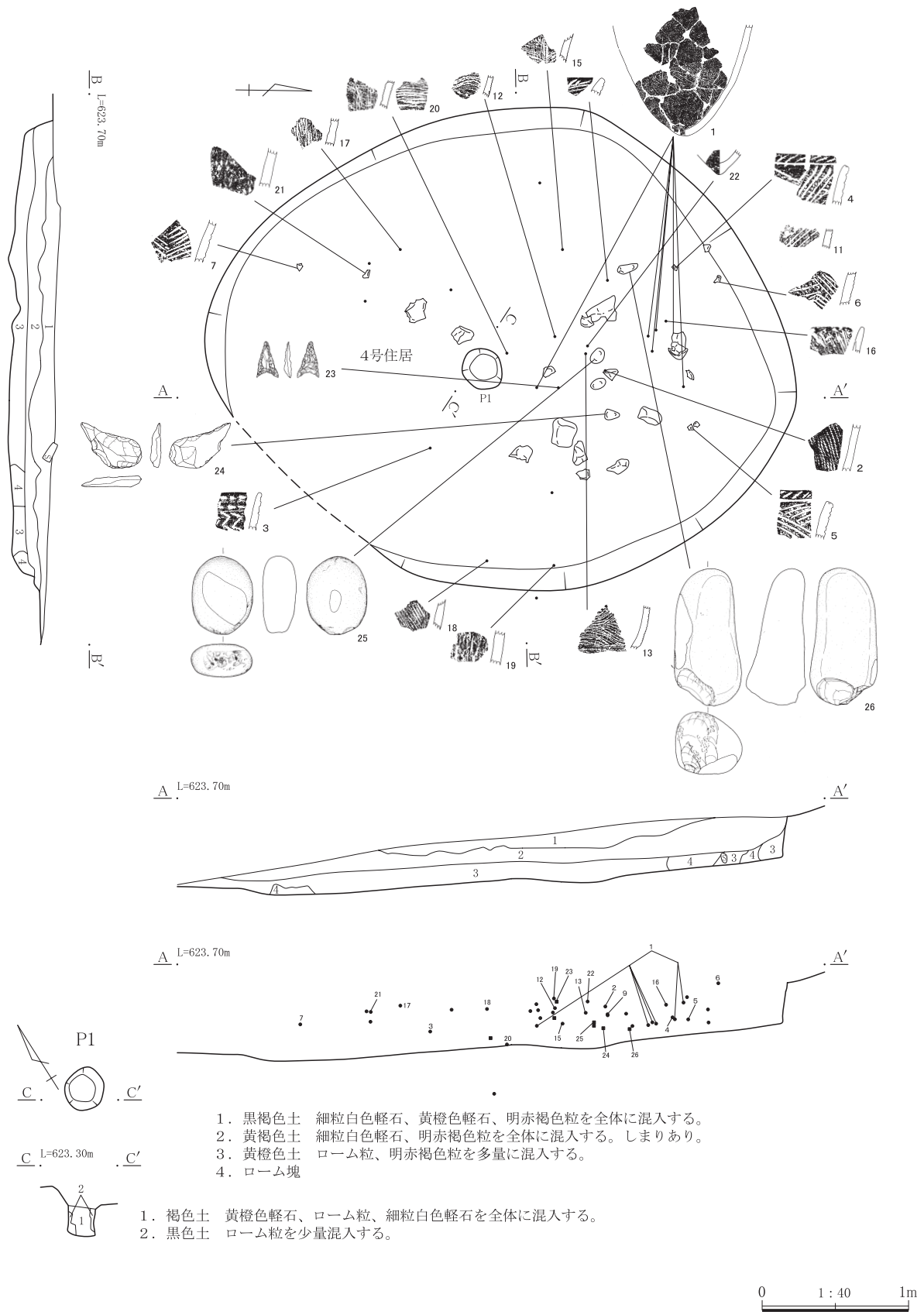
第13図 97区3号住居跡出土遺物

97区3号住居出土土器

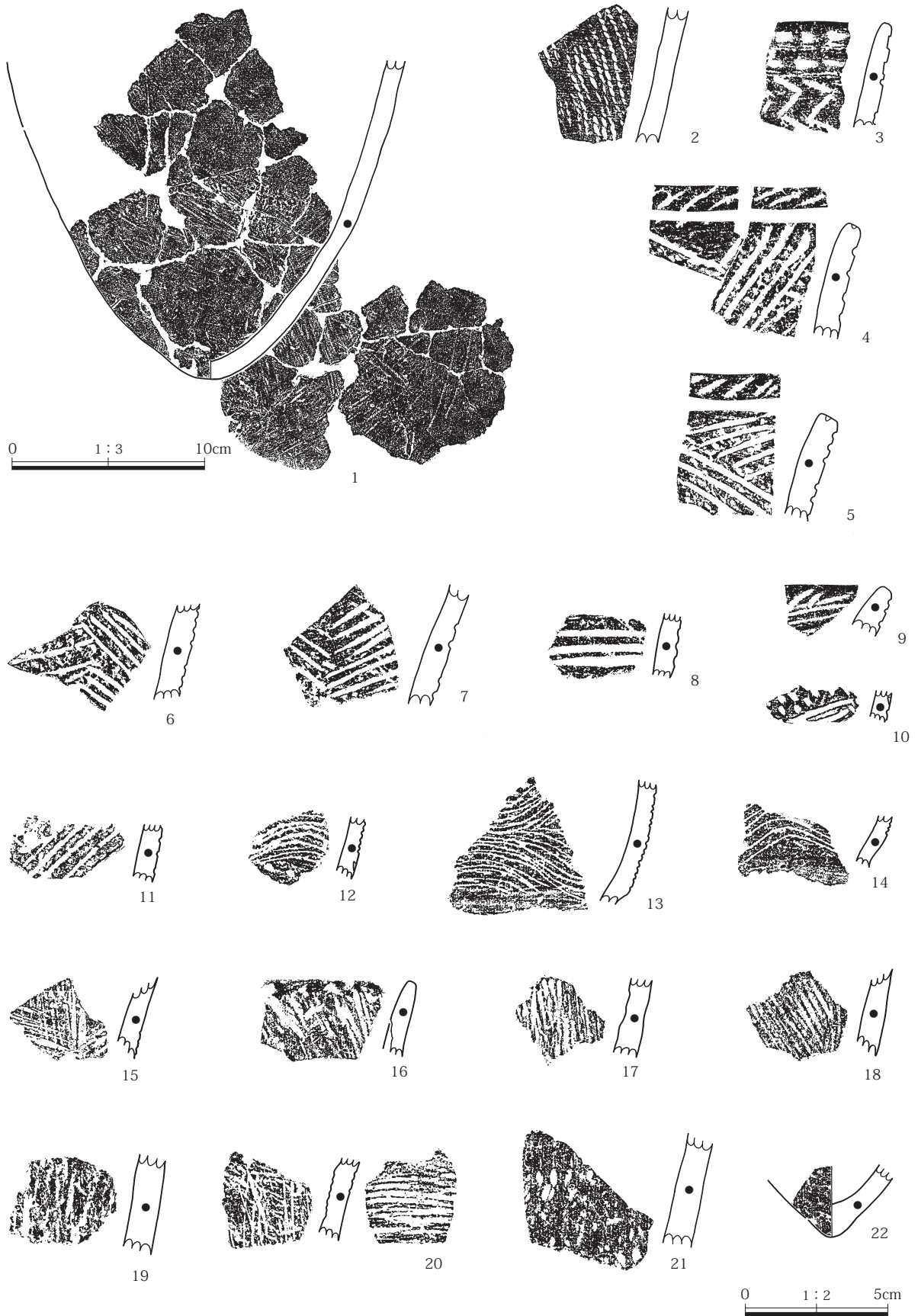
1は丸頭状の口唇部形状を呈し、若干肥厚する。撚糸紋Rを縦位施紋し、口唇部は丁寧に磨かれる。胎土に結晶片岩を含む。2は撚糸紋Rを縦位施紋する。胎土に結晶片岩を多く含む。ともに稲荷台式であろう。

97区 4号住居跡(第14図 PL 6)

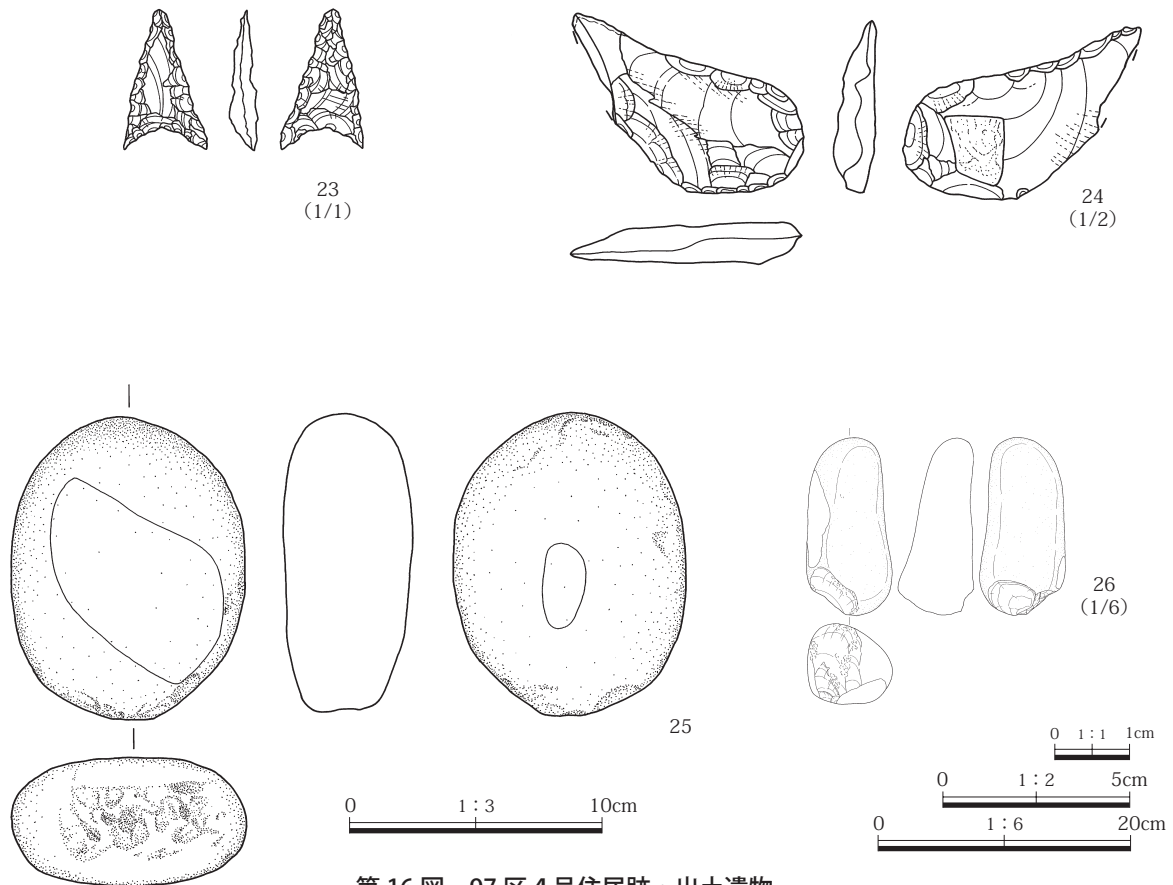
B-23、C-23グリッド、調査区東側に位置する。本住居跡も他の住居跡同様平面精査による明確な遺構確認ができなかったが、黒色土面を精査中に数多の土器小片が出土した。さらに黒色土面の精査を行いローム漸移層上面で黒褐色土を埋土とする住居跡のプランが確認できた。平面形状はやや不整形な楕円形を呈する。規模は長軸4.08m、短軸3.3m、壁高38cmを測り、長軸方位はN-0°を示す。埋土は細粒白色軽石及び黄橙色軽石、明赤褐色黄橙粒を全体に混入する強く締まった土である。床面はほぼ平坦であるが東側に向かってやや傾斜し、踏み締まりは強い。住居跡床面を数cm掘り下げた面で、住居跡ほぼ中央から黒色土で埋没する小穴状のプランが確認された。規模は長・短軸28cm、深20cmを測る円形を呈する。埋土は黄橙色軽石や細粒白色軽石を全体に混入し、焼土は確認できなかったが僅かに炭化物が混入する。本住居跡ではピットとして掲載したが、炉の可能性も否めない。出土遺物から縄文時代早期に帰属する住居跡と考えられる。



第14図 97区4号住居跡・出土遺物



第15図 97区4号住居跡出土遺物



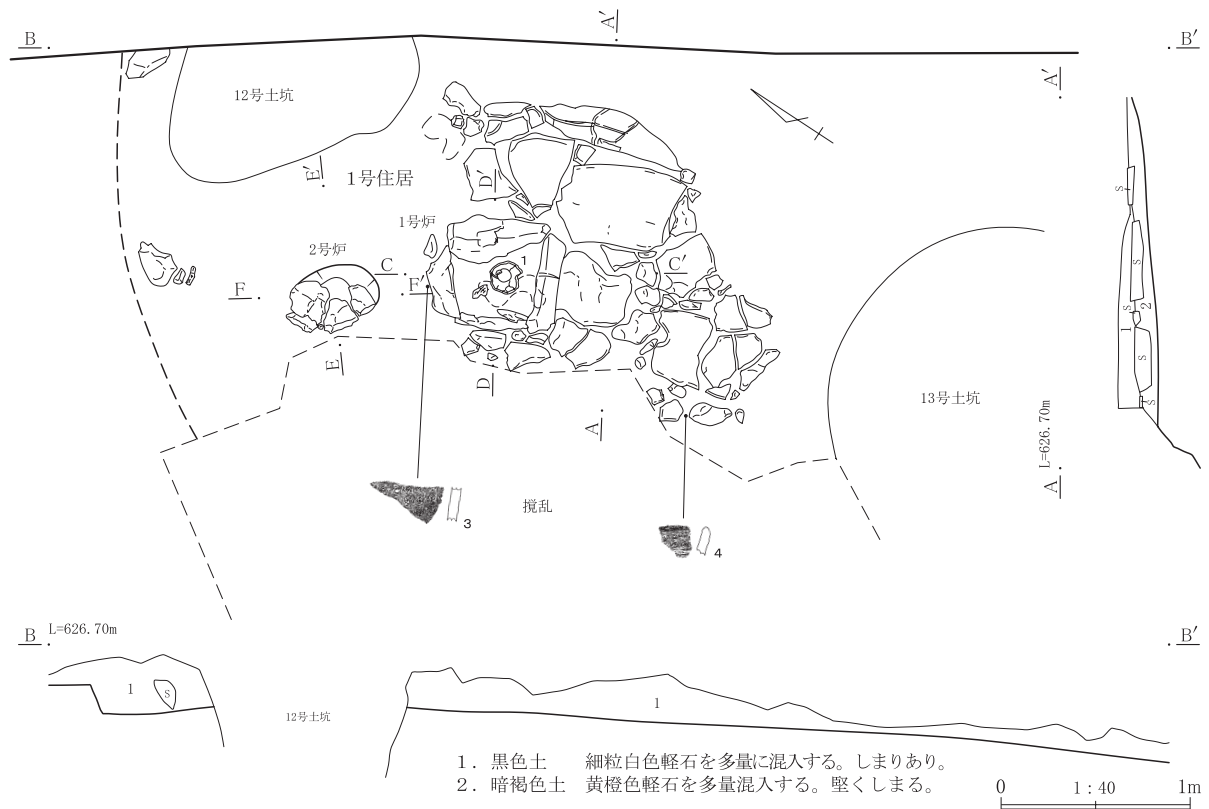
第16図 97区4号住居跡・出土遺物

97区4号住居出土土器

1は胴部下半のみ残存する深鉢で、砲弾状の器形を呈す。無紋であり、底面付近に部分的に条痕が施される以外は、丁寧に整形されて平滑である。内面の条痕は認められない。胎土や整形は、1号住居1に非常によく似ている。2は撚糸紋Rを縦位施紋する。3は口縁下に角押状刺突を2条めぐらせ、以下、縦位鋸歯状に沈線を施す。4～6は同一個体。緩く外反する器形を呈し、複数条の沈線を鋸歯状に施す。口唇部に斜位のキザミを付す。7はV字状に沈線を施す。おそらく横位鋸歯状のモチーフになるとと思われる。8は横位に沈線を施す。胎土に石英粒を含み、ざらつく。9は斜位に沈線を施す。10は逆V字状に沈線を施し、刺突を充填施紋する。11は斜位に沈線を施す。複合鋸歯状になるようだ。12～14は同一個体。無紋帯を設け、その部分で緩く屈曲する器形を呈す。屈曲部上位の紋様帯には多条の細沈線で対向する弧状モチーフを描き、間隙にやや鈍角なペン先状刺突を施す。胎土に石英粒を含み、ざらつく。15は縦位、斜位に沈線を施す。16～20は条痕を施すもの。16～19は外面のみで、施紋具は貝殻ではなく、半截竹管や棒状工具を束ねたようなもので沈線状に施紋する。19は胎土に石英粒を含む。20は内外面に条痕が施される。21はまばらに絡条体圧痕を施している。胎土に石英粒を多く含む。22は乳房状の底面破片。残存部は無紋である。1は子母口式、2は稻荷台式、3～15は中部系の沈線紋土器、16～20、22は3～15に併行する時期、21は条痕紋系後半期と思われる。

7区 1号住居跡(第17図 PL 7)

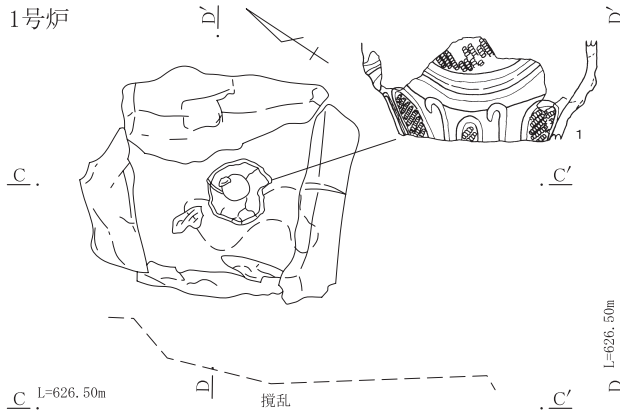
D-4グリッド、調査区北側に位置する。黄橙色軽石を混入する黒色土(Ⅲ層)面を精査中に敷石数点をを確認した。住居跡半分は調査区外であり、北、南部は平安時代以降の陥穴と重複している。また上面は後世攪乱により削平されていたため敷石面から数センチしか埋土は残存していなかった。このため明確な住居の形状及び範囲は確認できなかった。平面規模は検出範囲から長軸5.5m、短軸3.5m、深さ20cmを測り、長軸方位はN-30°-Wを示す。埋土は黄橙色軽石、細粒白色軽石を多量に混入する黒色土である。明確な掘り込みが確認できなかったが土器片が多量に出土したため周辺を掘り下げながらの遺構検出となった。プランが確認できたのはローム漸移層上面であったため実存範囲は検出範囲より大きいと推定される。平面形状はやや不整形な楕円形を呈する。規模は検出範囲長軸2.4m、短軸2.08m、壁高20cmを測り、長軸方位はN-0°を示す。床面には1号炉南北側約2m四方にほぼ平坦に敷石がなされる。敷石は板状礫を並べ隙間には小礫を充填している。炉は住居中央とやや北側で2基検出された。1号炉はやや厚い板状礫を3方向で使用している。規模は70cm×60cmを測り、内部には土器が埋設されている。土器周辺の埋土からは僅かながら焼土が確認できた。2号炉は1号炉よりやや北側にあり、楕円形を呈し、西側に地山礫を並べている。いくつかの礫には被熱痕を確認することができた。規模は48cm×32cmを測る。埋土には焼土や炭化物の混入する。1号炉内の埋設土器から縄文時代中期後半に帰属する住居跡と考えられる。



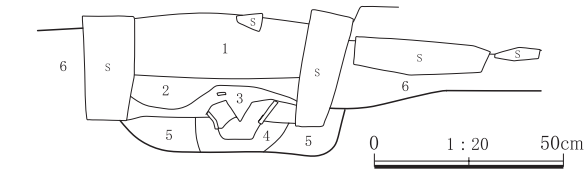
第17図 7区1号住居跡・出土遺物

第3章 検出された遺構と遺物

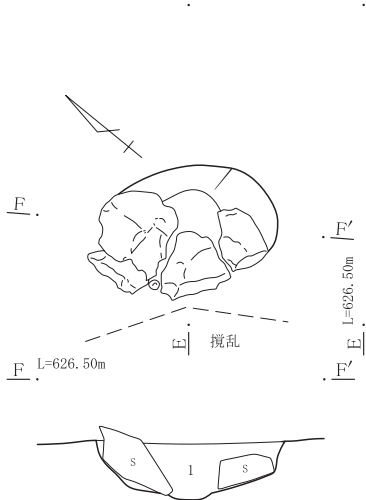
1号炉



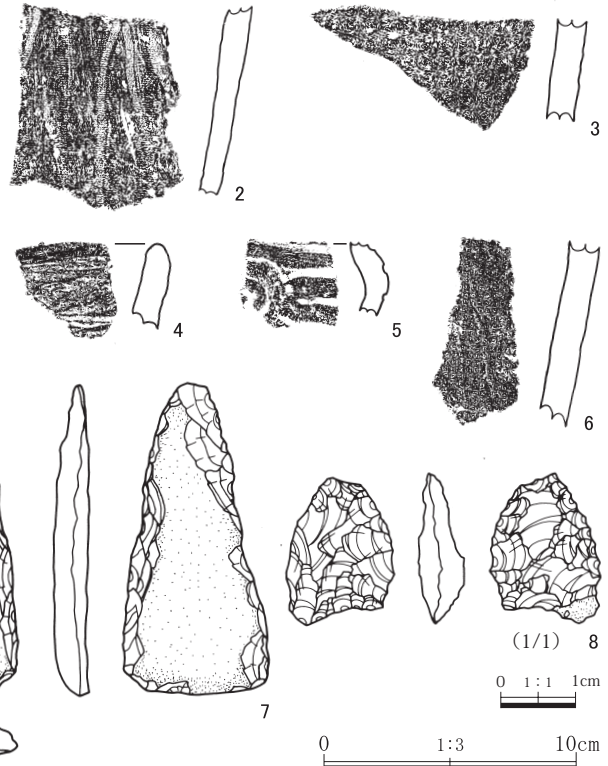
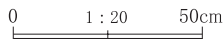
1. 黒色土 細粒白色軽石及び明赤褐色土粒を多量に混入する。
2. 暗褐色土 黄橙色軽石を少量混入する。やや粘質性を伴う。
3. 暗褐色土 細粒白色軽石を全体に混入し、炭化物を少量混入する。
4. 暗褐色土 黄橙色軽石を少量混入する。しまりない。
5. 褐色土 黄橙色軽石を多量混入する。堅くしまる。
6. 暗褐色土 黄橙色軽石を多量混入する。堅くしまる。



2号炉



1. 暗褐色土 黄橙色軽石、炭化物を全体に混入する。
2. 暗褐色土 黄橙色軽石を多量混入する。堅くしまる。



第18図 7区1号住居跡・出土遺物

7区1号住居跡出土土器

第18図No. 1は口縁下端部から胴上半部の炉内埋設土器で、加曽利E 3式である。No. 2は胴下半部の破片であり、無文である。No. 3とNo. 4は胴部破片である。表面はやや摩耗しているが、裏面の整形は良好である。No. 2～No. 4は後期初頭か。No. 5は口縁部の破片である。中期末から後期初頭に位置づけられる可能性がある。No. 6は隆線で円形文様を描いている。堀之内1式段階である。

第2項 竪穴住居跡出土の石器

第8図1号住居跡No.12は完形の削器である。正面左側に素材の礫表皮を残している。主要剥離面側には打痕を留め、打面調整後に横長剥片を作出している。下端部の主要剥離面側から、部分的に刃部加工を施し削器を製作している。

第12図2号住居跡No.7は、砥石と台石に使用されている。一部欠損しているが、厚みをもった扁平な川原石を素材としている。正面は平滑な礫面となっていて、砥石として使用されていたと推定される。さらに、平滑面の一部に不規則な凹みが認められ、凹石としても使用されていたと判断される。

第13図3号住居跡No.3は、剥片素材の削器である。基部は欠損している。正面左側縁部は礫摺理面を残している。刃部正面と主要剥離面の両面から刃部加工を施している。平面形は方形を呈し、刃部横断面は裏面側が凹んだ蒲鉾状の形態を呈している。搔器状の刃部加工ないしは調整加工が施されている。このことより、削器の破損品と認定したが、石匙の未製品の可能性もある。同図3号住居跡No.4は、楕円形の凹石・磨石・敲石である。一部は、使用により欠損している。正面には3ないし4個の凹穴が認められる。裏面の器体中央部には磨痕が認められる。明瞭ではないが長軸方向に凹み状の凹凸が認められることより、裏面も凹石として使用された可能性がある。さらに、正面右側縁部に不規則な敲打痕があるので、敲石としても使用されたと推定される。

第16図4号住居跡No.23は、無柄挟り入りの二等辺三角形の石鏃である。完形品である。横長の剥片を素材としている。正面及び裏面ともに細かな調整加工を施しているが、両面ともに器体中央部には剥片剥離面を残している。同図4号住居跡No.24は、刃部が三角形を呈する横長の削器である。刃部の一部は欠損している。その部分には、被熱剥離の痕跡が認められる。

同図4号住居跡No.25は、楕円形をした磨石・敲石である。正面と裏面ともに磨痕が認められる。さらに、下端部には敲石として使用したことによる破損がある。同図4号住居跡No.26は、スタンプ状の長楕円形形態の敲石である。川原石を素材としている。底面の一部には自然面を残している。横槌状の使用によると推定される横位方向からの破損と、下端方向の敲打による欠損が認められる。

第18図7区1号住居跡No.7は撥形の打製石斧で、正面右側に自然面を残し、刃部に摩耗痕が認められる。同図7区1号住居跡No.8は、裏面右脚部に自然面を残した石鏃の未製品である。

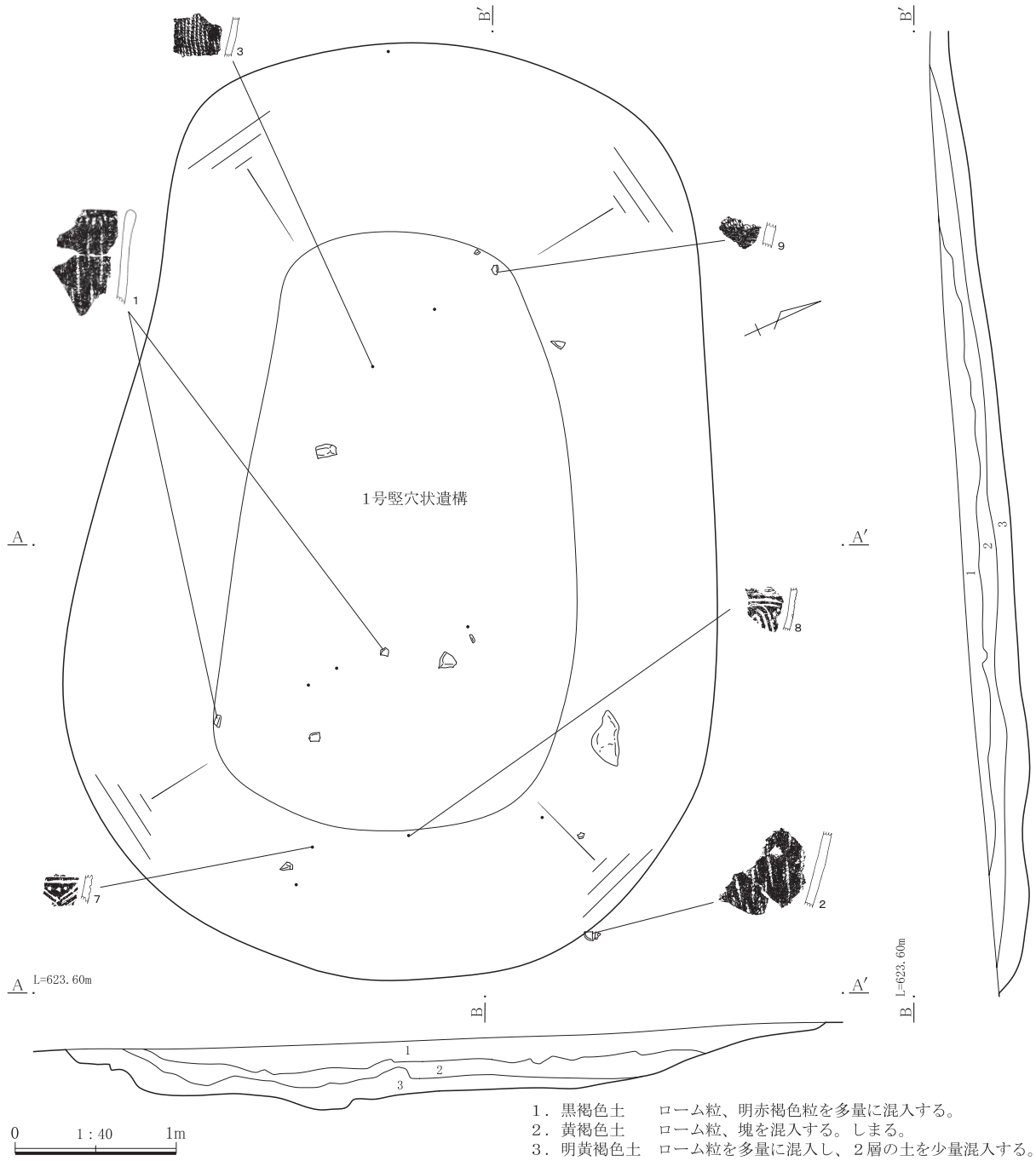
第2表 住居跡出土石器観察表

挿図番号	P L 番号	出土位置	器種	計測値①長さ(mm)②幅(mm)③厚さ(mm)④重さ(g)				石材
8図-12	P L 35	97-1号住居	削器	7.60	3.10	0.70	16.50	黒色安山岩
12図-7	P L 36	97-2号住居	砥石・台石	16.60	8.60	5.00	1632.90	粗粒輝石安山岩
13図-3	P L 36	97-3号住居	削器	7.00	3.20	1.10	21.40	珪質変質岩
13図-4	P L 36	97-3号住居	凹石・磨石・敲石	10.90	8.10	4.70	539.30	粗粒輝石安山岩
16図-23	P L 37	97-4号住居	石鏃	2.00	1.10	0.40	0.40	黒曜石
16図-24	P L 37	97-4号住居	削器	7.00	3.20	1.10	21.40	細粒輝石安山岩
16図-25	P L 37	97-4号住居	磨石・敲石	12.00	9.30	5.20	892.70	粗粒輝石安山岩
16図-26	P L 37	97-4号住居	敲石	14.10	6.95	6.00	749.90	粗粒輝石安山岩
18図-7	P L 38	7-1号住居	石斧	12.40	5.70	1.50	107.40	粗粒輝石安山岩
18図-8	P L 38	7-1号住居	石鏃	1.80	1.40	0.50	1.40	黒曜石

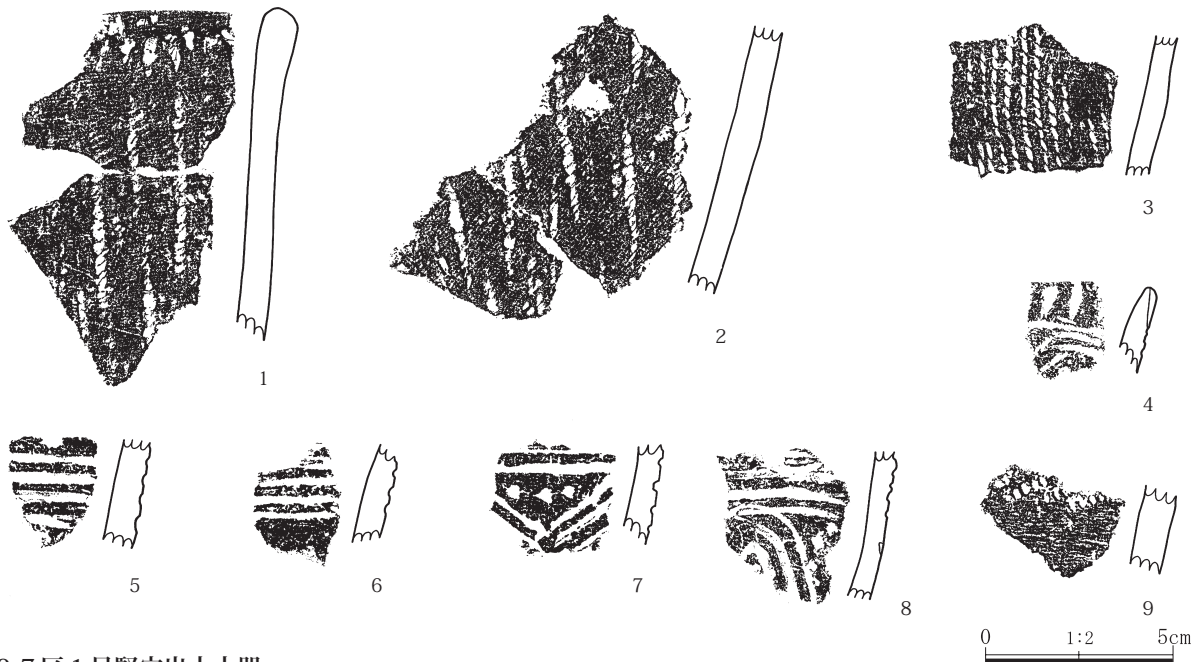
第3項 竪穴状遺構

97区 1号竪穴状遺構(第19図 PL 8)

D-20、21、22、23・E-21、22、23グリッド、調査区南部に位置する。上面精査中に撚糸文系や沈線文系の土器類が出土したため住居跡と考え調査を開始した。しかし緩やかな掘り込みは確認できたが、住居としての明確な壁面の立ち上がりや床面及び内部施設は確認できなかった。そのため竪穴状遺構として調査を行った。平面形は楕円形を呈する。規模は長軸5.8m、短軸3.9m、深さ32cmを測り、長軸方向はN-0°を示す。埋土はローム粒やローム塊を多量に混入する黄褐色土による自然堆積と考えられる。出土遺物から縄文早期に帰属するものと考えられる。

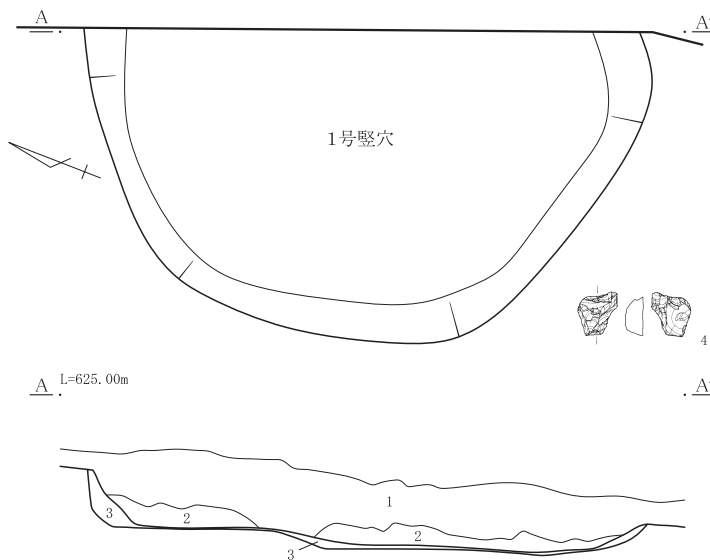


第19図 97区1号竪穴状遺構・出土遺物



97区1号竪穴出土土器

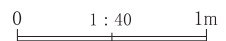
1, 2は同一個体。丸頭状の口唇部形状を呈し、若干肥厚する。撚糸紋1を縦位施紋する。胎土に結晶片岩を多く含む。3は撚糸紋Rを縦位施紋する。胎土に結晶片岩を含む。4は口縁下に縦位の短沈線を施し、曲線状モチーフを描く。胎土に石英粒を含み、ざらつく。5, 6は横位に沈線を施す。7は沈線により三角形状モチーフを描き、モチーフ内に刺突を施す。8は3本沈線により横位区画し、上下の紋様帯に曲線状モチーフを描いている。間隙にペン先状刺突を充填施紋する。9は斜位の絡条体圧痕を横位にめぐらせ、以下は無紋となる。1号住居1と同一個体と思われる。1～3は稲荷台式、4～8は中部系の沈線紋土器、9は子母口式に比定できよう。



1. 暗褐色土 細粒白色軽石を多量に混入する。
2. 暗褐色土 ローム粒、塊を混入し、縮まり強い。
3. 黄褐色土 ロームを多量に混入する。

7区 1号竪穴状遺構(第20図 PL 8)

A-1 グリッド、調査区東部に位置する。遺構半分は調査区外であるため全容は明確にはできなかった。出土土器も乏しく内部施設も検出されなかったため住居とするには資料が少なく、ここでは竪穴状遺構とし掲載した。平面形は円形を呈すると考えられる。規模は長軸5.8m、短軸3.9m、深さ32cmを測り、長軸方向はN-0°を示す。掘り込みは比較的良好で埋土は細粒白色軽石、暗赤褐色土粒を全体に混入する暗褐色土である。底面は比較的平坦で東側へやや傾斜をする。出土土器片から縄文時代早期に帰属するものと考えられる。



第20図 97区1号竪穴状遺構・出土遺物 7区1号竪穴状遺構

第3章 検出された遺構と遺物



7区 1号竪穴状遺構出土土器

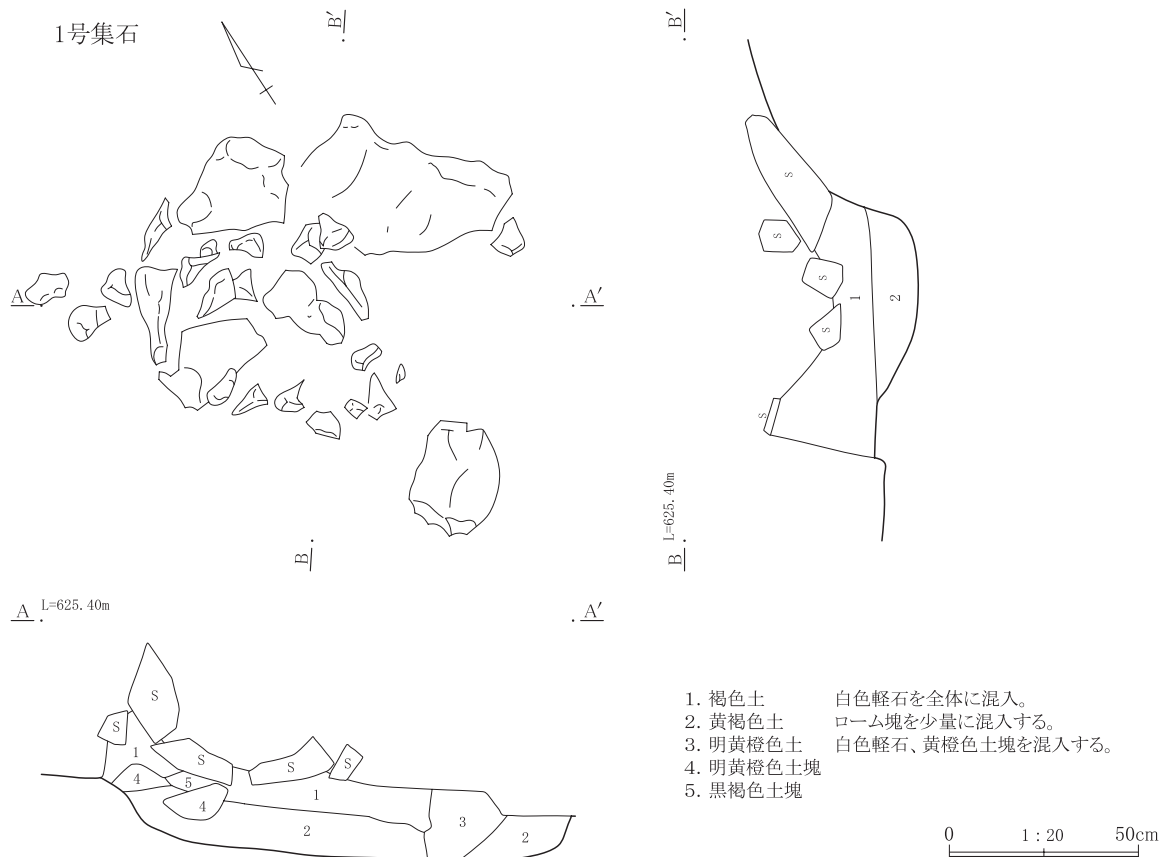
第21図No.1は胴下半部の破片である。絡条体圧痕と細い条の捺糸文が施されている。木の根式土器に類する時期の資料と思われる。同図No.2は胴部破片である。捺糸文と条痕文が施されている。同図No.3は胴下半部の破片と思われる、捺糸文の下部に条痕文が施されている。No.1～3は同一個体の破片の可能性があり、木の根式土器に並行する時期に位置づけられよう。

第4項 集石

2面(縄文時代)で検出された土坑のうち地山礫を伴ったものが数基あった。ここではそれらの土坑のうち明らかに礫を意識的に集めたものや、被熱痕があるものを集石遺構として掲載した。

7区 1号集石(第21図 PL9)

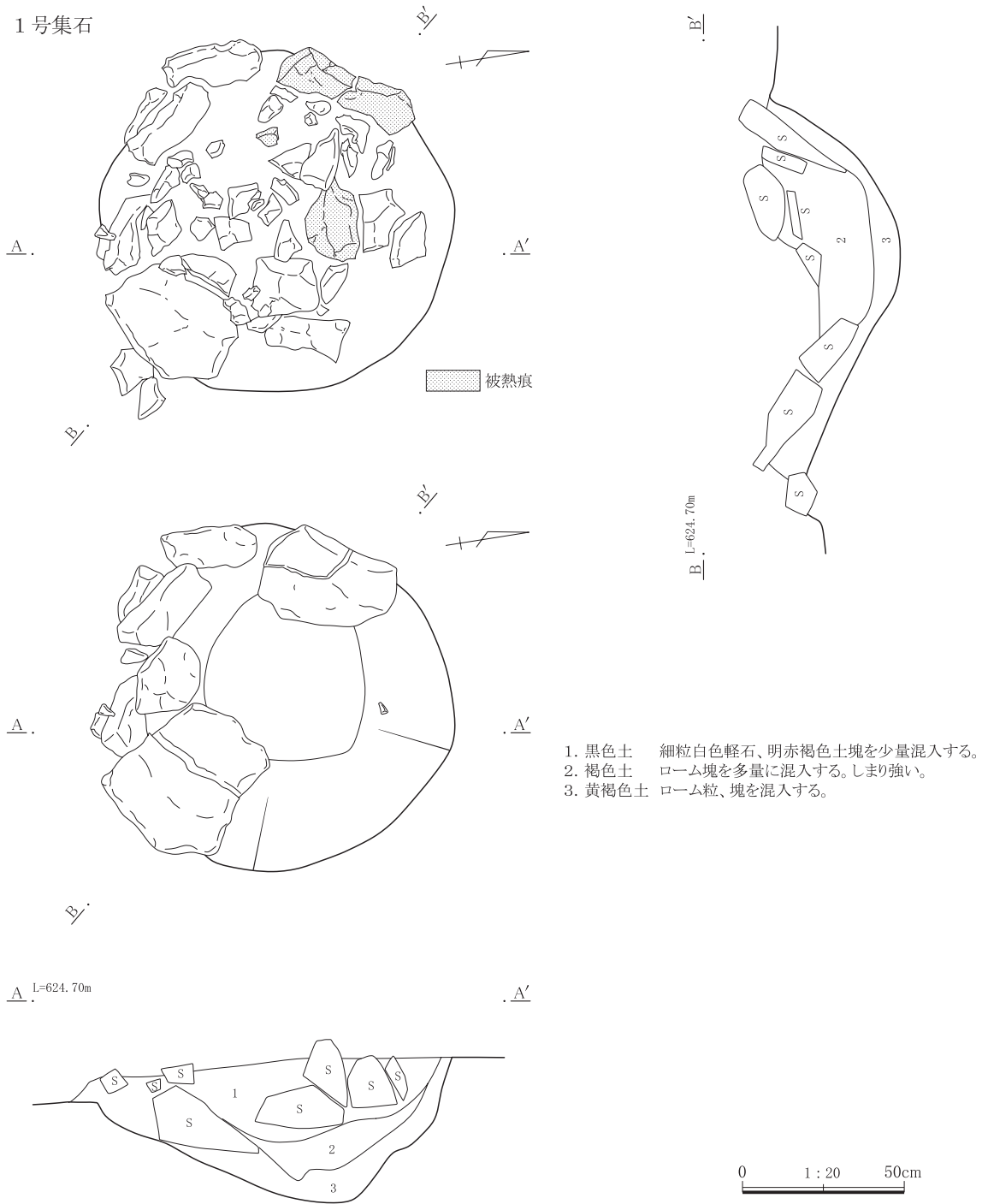
グリッドC-2・D-2、調査区北側に位置する。平面形は不正形な楕円形を呈する。規模は長軸1.26m、短軸56cm、深さ22cmを測る。長軸方位はN-58°-Wを示す。4、5個の巨礫を外側に配置し、内側や隙間に拳ほどの小礫を配する。出土遺物及び被熱痕は確認できなかった。



第21図 7区1号竪穴状遺構・出土遺物 7区1号集石

97区 1号集石(第22図 PL9)

グリッドE-24、調査区ほぼ中央に位置する。平面形は円形を呈する。規模は長軸1.12m、短軸1.1cm、深さ42cmを測る。長軸方位はN-10°-Wを示す。7、8個の礫を外側円形に配置し、内側や隙間に拳大の小礫を配する。外側の礫数点に被熱をうけたと考えられる痕跡がある。



第22図 97区1号集石

第5項 土坑(縄文時代)

黄橙色軽石を多量に混入する黒色土面を掘り下げローム漸移層面の調査(2面)において7区で13基、97区31基の土坑が検出されている。これらは確認面や遺構内の遺物や埋土、形状などから縄文時代の土坑と考えられ、取り上げ掲載した。

7区

5号土坑

(第23図、P L 10) B-2 グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも円形を呈する。規模は長軸・短軸ともに1.1m、深30cmを測る。長軸方位はN-0°を示す。埋土はローム塊を全体に混入する暗褐色土を主体とする。壁はやや垂直ぎみに立ち上がる。

6号土坑

(第23図、P L 10) B-1 グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも不整形を呈する。規模は長軸1.5m、短軸0.9m、深20cmを測る。長軸方位はN-20°-Wを示し、北側部で現代の攪乱と重複する。埋土はローム粒を混入する暗褐色土を主体とする。壁はやや緩やかに上がる。縄文土器片が覆土中より出土している。

7号土坑

(第23図、P L 10) B-1 グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。規模は長軸1.2m、短軸1.06m、深26cmを測る。長軸方位はN-0°を示す。埋土はローム粒を混入する暗褐色土を主体とし、炭化物を少量混入する。壁はやや垂直ぎみに立ち上がる。縄文土器小片が覆土中より出土している。

14号土坑

(第23図、P L 10) C-3 グリッドに位置する。平面形状は遺構半分が調査区外であるため明確にはできないが上面、下面とも円形を呈すると考えられる。規模は長軸1.14m、短軸0.48m、深80cmを測る。長軸方位はN-40°-Wを示す。埋土はローム粒を混入する暗褐色土を主体とする。地山礫が十数点出土したが石製品や被熱痕をもつものは見られなかった。

15号土坑

(第23図、P L 11) B-1、C-1 グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも円形を呈する。規模は長軸1.2m、短軸1.2m、深82cmを測る。長軸方位はN-0°-Wを示す。埋土はローム粒を混入する暗褐色土を主体とする。壁はやや垂直ぎみに立ち上がる。大中の礫と縄文土器片が出土している。

20号土坑

(第23図、P L 11) C-1・2 グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも円形を呈する。規模は長軸1.48m、短軸ともに1.44m、深30cmを測る。長軸方位はN-0°を示す。遺構形状が確認できず数十個の礫の底面付近で掘り込みが確認できた。埋土はローム粒を混入する暗褐色土を主体とし、炭化物を少量混入する。底面から覆土中に縄文土器片や地山礫数点が出土している。

22号土坑

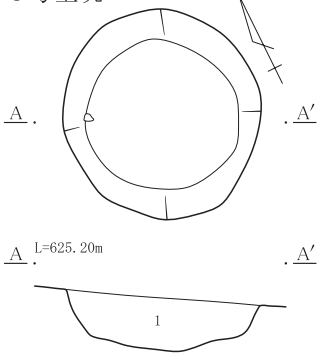
(第23図、P L 11) C-1 グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも円形を呈する。規模は長軸1.04m、短軸ともに1.0m、深26cmを測る。長軸方位はN-0°を示す。埋土はローム粒を混入する黒褐色土を主体とする。上部に地山礫数点が混入する。縄文土器片が覆土中より出土している。

23号土坑

(第23図、P L 11) 7区C-1、97区C-2 5グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。規模は長軸1.24m、短軸1.06m、深28cmを測る。長軸方位はN-72°-Wを示す。埋土はローム粒を混入

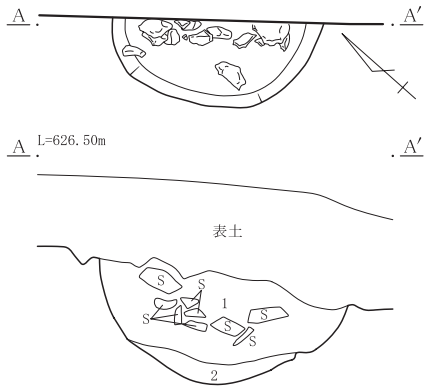
第2節 縄文時代の遺構と遺物

7区
5号土坑



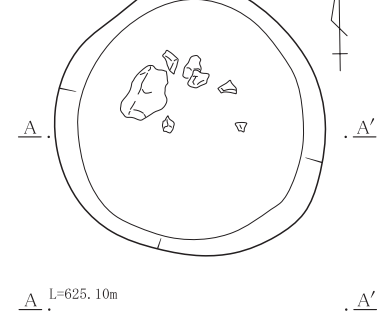
1. 暗褐色土 ローム塊、細粒白色軽石を全体に混入。

14号土坑



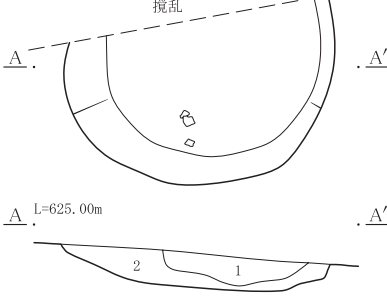
1. 暗褐色土 ローム塊、細粒白色軽石を全体に混入。
2. 暗褐色土 細粒白色軽石を全体に混入。

20号土坑



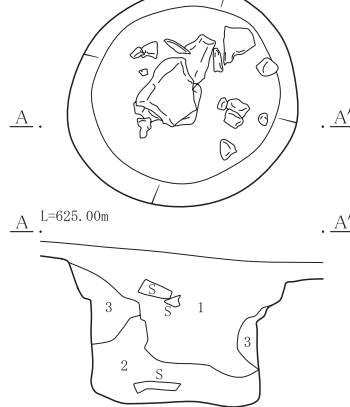
1. 黒褐色土 細粒白色軽石を多量に混入する。
2. 黒褐色土 細粒白色軽石を多量に混入する。黄橙色土塊を混入する。
3. 黒色土 細粒白色軽石を全体に混入する。黄橙色土塊を全体に混入する。
4. 黒色土 細粒白色軽石を混入する。黄橙色土少量混入。
5. 黒褐色土 細粒白色軽石を混入する。

6号土坑



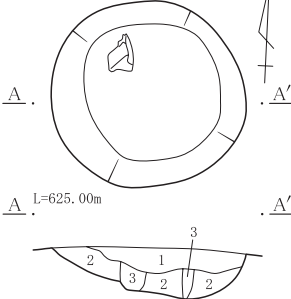
1. 黒褐色土 ローム塊、細粒白色軽石を少量混入する。
2. 暗褐色土 ローム粒、細粒白色軽石を全体に混入。

15号土坑



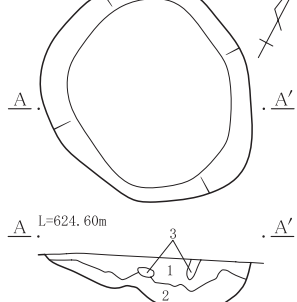
1. 黒褐色土 ローム粒、塊、細粒白色軽石を混入する。
2. 黄褐色土 ローム粒、塊を多量に混入する。炭化物を少量混入する。
3. 黄褐色土 ローム粒、塊を多量に混入する。

22号土坑



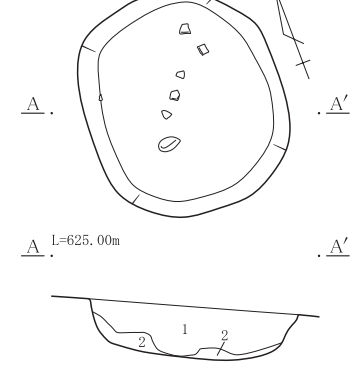
1. 黒色土 白色軽石を全体に混入する。黄橙色土塊を少量混入する。
2. 黒褐色土 白色軽石を少量混入する。黄橙色土塊を多量に混入する。
3. 黒色土 白色軽石を少量混入する黄橙色土塊を少量混入する。

23号土坑



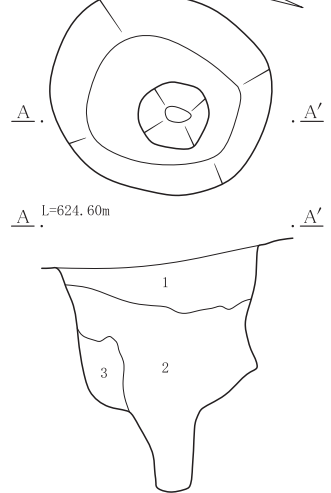
1. 黒褐色土 白色軽石を全体に混入する。黄橙色土塊を少量混入する。
2. 黄褐色土 ローム塊を多量に混入する。
3. 黒色土塊

7号土坑

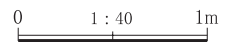


1. 黒褐色土 ローム粒を全体に含み、炭化物混入する。
2. 黄褐色土 ロームと黄褐色土、黒褐色土(1層)の混合。

24号土坑



1. 黒褐色土 白色軽石、黄橙色土塊を少量混入する。
2. 黒色土 白色軽石、黄橙色土塊を多量に混入し、下層に黄橙色軽石を多量に混入する。
3. 黄褐色土 ローム塊を多量に混入する。壁崩れ。



第23図 7区5,6,7,14,15,20,22,23,24号土坑

第3章 検出された遺構と遺物

する黒褐色土を主体とする。遺物は検出されなかった。

24号土坑

(第23図、P L 12) C-1 グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。規模は長軸1.18m、短軸1.02m、深120cmを測る。長軸方位はN-0°を示す。埋土は細粒黄橙色軽石、ローム粒を混入する黒褐色土を主体とする。底面中央部に深さ25cmほどの小穴が検出された。遺物は検出されなかった。

29号土坑

(第24図、P L 12) C-2 グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。規模は長軸1.64m、短軸1.36m、深18cmを測る。長軸方位はN-30°-Wを示す。埋土は細粒白色軽石、ローム塊を混入する褐色土を主体とする。上面での遺構形状が難しく集中していた川原石や礫周辺を精査し、底面付近で掘り込みを確認した。これらの石には石製品となるものや被熱痕をもつものは見られなかった。遺物は検出されなかった。

43号土坑

(第24図、P L 12) E-6 グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも円形を呈する。規模は長軸0.7m短軸0.68m、深14cmを測る。長軸方位はN-0°を示す。埋土は細粒白色軽石、ローム粒を混入する黒褐色土を主体とする。遺物は検出されなかった。

45号土坑

(第24図、P L 12) E-3・4 グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。規模は長軸0.48m、短軸0.42m、深16cmを測る。長軸方位はN-90°-Eを示す。埋土は細粒白色軽石、ローム粒を混入する黒褐色土を主体とする。遺物は検出されなかった。

51号土坑

(第24図、P L 13) F-1 グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも円形を呈する。規模は長0.46m、短軸0.44m、深22cmを測る。長軸方位はN-0°を示す。埋土はローム粒、塊を全体に混入する黒色土を主体とする。遺物は検出されなかった。

97区

22号土坑

(第24図、P L 13) J-19 グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。規模は長軸0.7m、短軸0.5m、深60cmを測る。長軸方位はN-70°-Eを示す。埋土はローム粒、塊を全体に混入する黒色土を主体とする。遺物は検出されなかった。

23号土坑

(第24図、P L 12) I-19 グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。規模は長軸0.8m、短軸0.7m、深20cmを測る。長軸方位はN-10°-Eを示す。埋土はローム粒を混入する黒色土を主体とする。遺物は検出されなかった。

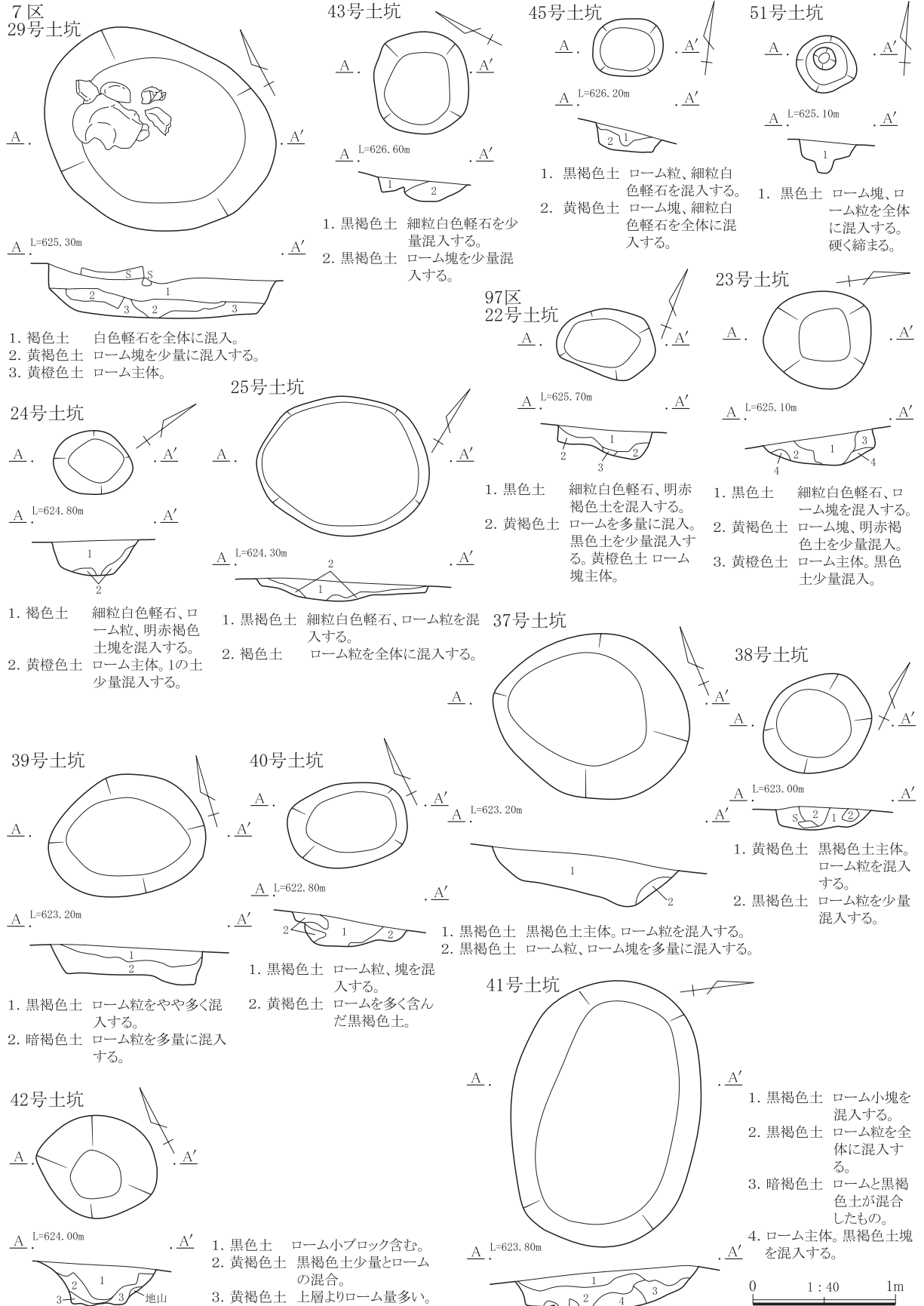
24号土坑

(第24図、P L 13) I-18 グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。規模は長軸0.56m、短軸0.44m、深24cmを測る。長軸方位はN-38°-Eを示す。埋土は細粒白色軽石、ローム粒を混入する締まりの強い褐色土を主体とする。遺物は検出されなかった。

25号土坑

(第24図、P L 14) H-19 グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。規模は長軸1.2

第2節 縄文時代の遺構と遺物



第24図 7区 29,43,45,51号土坑 97区 22,23,24,25,37,38,39,40,41,42号土坑

第3章 検出された遺構と遺物

m、短軸1.0m、深14cmを測る。長軸方位はN-60°-Eを示す。埋土はローム粒、塊を混入する黒色土を主体とする。遺物は検出されなかった。

37号土坑

(第24図、P L 14) D-21 グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。規模は長軸1.4m、短軸ともに1.2m、深32cmを測る。長軸方位はN-55°-Wを示す。埋土はローム粒を混入する黒褐色土を主体とする。遺物は検出されなかった。

38号土坑

(第24図、P L 14) D-20 グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも円形を呈する。規模は長軸0.74m、短軸0.7m、深18cmを測る。長軸方位はN-0°を示す。埋土はローム粒を混入する黒褐色土を主体とする。底面から川原石が出土している。遺物は検出されなかった。

39号土坑

(第24図、P L 14) C-21 グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。規模は長軸1.1m、短軸0.88m、深25cmを測る。長軸方位はN-75°-Wを示す。埋土はローム粒を混入する暗褐色土を主体とする。遺物は検出されなかった。

40号土坑

(第24図、P L 15) E-19 グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。規模は長軸0.84m、短軸0.6m、深20cmを測る。長軸方位はN-75°-Wを示す。埋土はローム粒を混入する黒褐色土を主体とする。遺物は検出されなかった。

41号土坑

(第24図、P L 15) F-20、G-20 グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。規模は長軸1.9m、短軸1.34m、深32cmを測る。長軸方位はN-75°-Wを示す。埋土はローム粒を混入する黒褐色土を主体とする。遺物は検出されなかった。

42号土坑

(第24図、P L 15) F-21・22、G-21・22 グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。規模は長軸0.84m、短軸0.7m、深29cmを測る。長軸方位はN-60°-Wを示す。埋土はローム粒を混入する黒色土を主体とする。遺物は検出されなかった。

43号土坑

(第25図、P L 15) F-21・22 グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも円形を呈する。規模は長軸1.25m、短軸1.2m、深15cmを測る。長軸方位はN-0°を示す。埋土はローム粒を混入する黒褐色土を主体とする。遺物は検出されなかった。

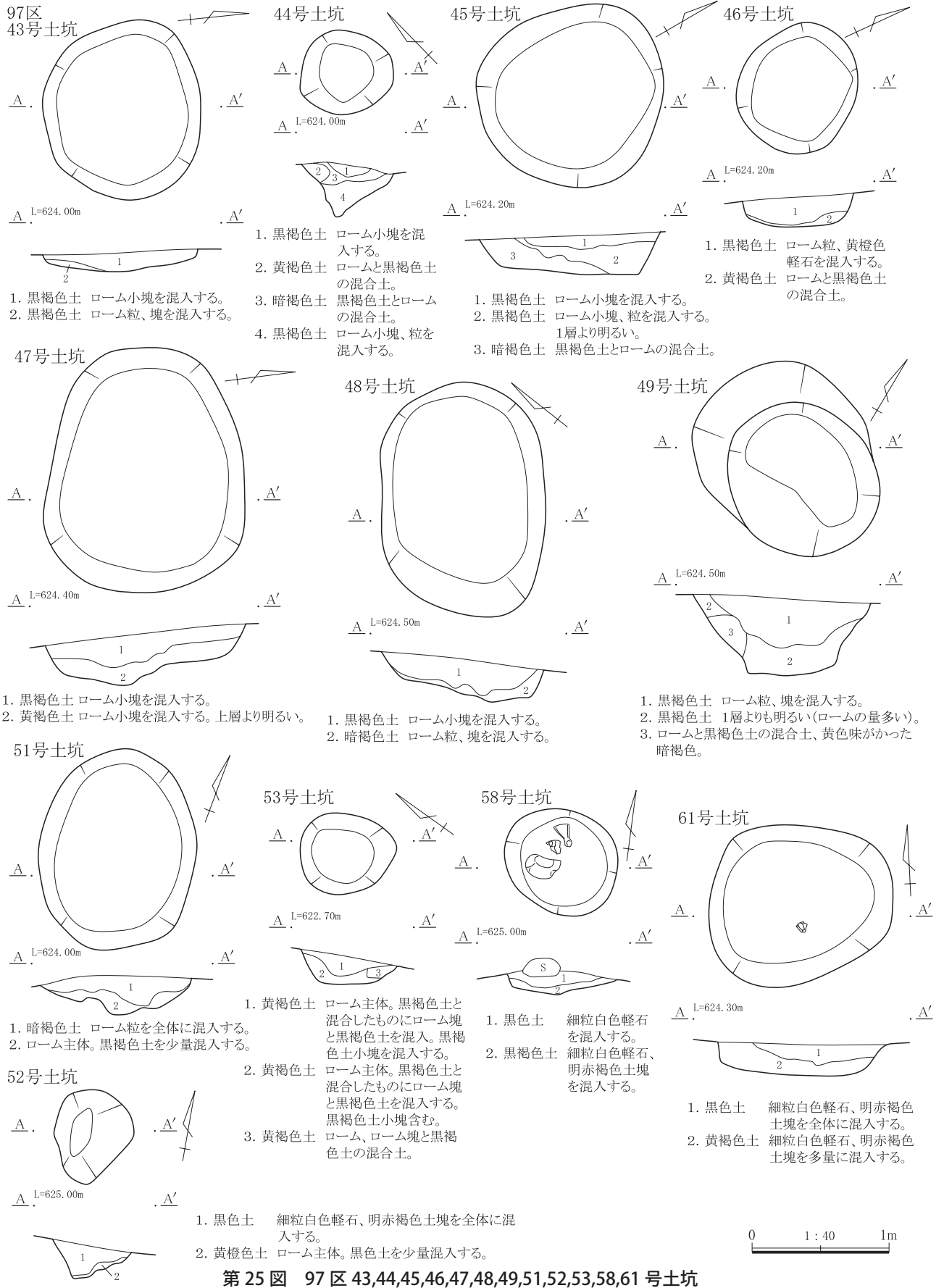
44号土坑

(第25図、P L 16) F-22 グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも円形を呈する。規模は長軸0.65m、短軸0.64m、深40cmを測る。長軸方位はN-0°を示す。埋土はローム粒を混入する黒褐色土を主体とする。遺物は検出されなかった。

45号土坑

(第25図、P L 16) F-22 グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも円形を呈する。規模は長軸1.38m、短軸1.35m、深30cmを測る。長軸方位はN-0°を示す。埋土はローム粒を混入する黒褐色土を主体とする。遺物は検出されなかった。

第2節 縄文時代の遺構と遺物



第25図 97区 43,44,45,46,47,48,49,51,52,53,58,61号土坑

46号土坑

(第25図、P L 16) F-22・23グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも円形を呈する。規模は長軸0.93m、短軸0.9m、深23cmを測る。長軸方位はN-0°を示す。埋土は黄橙色軽石、ローム粒を混入する黒褐色土を主体とする。遺物は検出されなかった。

47号土坑

(第25図、P L 16) G-22グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。規模は長軸1.8m、短軸1.49m、深38cmを測る。長軸方位はN-80°-Wを示す。埋土はローム粒を混入する黒褐色土を主体とする。遺物は検出されなかった。

48号土坑

(第25図、P L 17) G-22グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。規模は長軸1.72m、短軸1.2m、深29cmを測る。長軸方位はN-45°-Eを示す。埋土は黄橙色軽石、ローム粒を混入する黒褐色土を主体とする。遺物は検出されなかった。

49号土坑

(第25図、P L 17) H-21グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。規模は長軸1.5m、短軸1.2m、深57cmを測る。長軸方位はN-65°-Wを示す。埋土はローム粒を混入する黒褐色土を主体とする。遺物は検出されなかった。

51号土坑

(第25図、P L 17) F-22・23グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。規模は長軸1.5m、短軸1.15m、深30cmを測る。長軸方位はN-10°-Wを示す。埋土はローム粒を混入する暗褐色土を主体とする。遺物は検出されなかった。

52号土坑

(第25図、P L 17) I-19グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。規模は長軸0.7m、短軸0.58m、深26cmを測る。長軸方位はN-0°を示す。埋土は細粒白色軽石、ローム粒を混入する黒褐色土を主体とする。遺物は検出されなかった。

53号土坑

(第25図、P L 18) E-19グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。規模は長軸0.7m、短軸0.6m、深22cmを測る。長軸方位はN-35°-Wを示す。埋土はローム粒、塊を混入する黄褐色土を主体とする。遺物は検出されなかった。

58号土坑

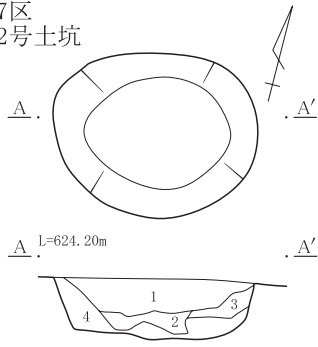
(第25図、P L 18) E-25グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。規模は長軸0.88m、短軸0.76m、深10cmを測る。長軸方位はN-45°-Wを示す。埋土は細粒白色軽石を混入する黒色土を主体とする。上面で川原石や石礫が数点検出された。これらの石には石製品となるものや被熱痕をもつものは見られなかった。遺物は検出されなかった。

61号土坑

(第25図、P L 18) C-25グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。規模は長軸1.34m、短軸1.16m、深20cmを測る。長軸方位はN-90°-Eを示す。埋土は細粒白色軽石を混入する黒色土を主体とする。縄文土器小片が覆土中より出土している。

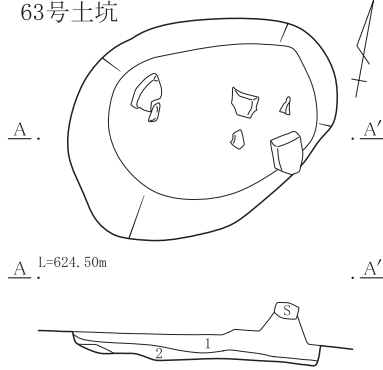
第2節 縄文時代の遺構と遺物

97区
62号土坑



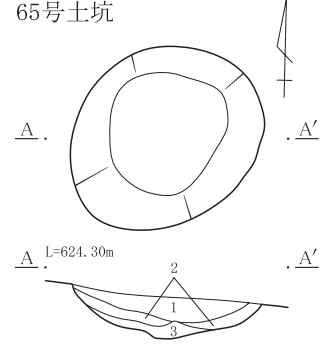
1. 黒色土 細粒白色軽石を全体に混入する。
2. 黒褐色土 細粒白色軽石、明赤褐色土を混入する。
3. 黒褐色土 ローム塊を混入する。
4. 黄褐色土 ローム塊を多量に混入する。

63号土坑



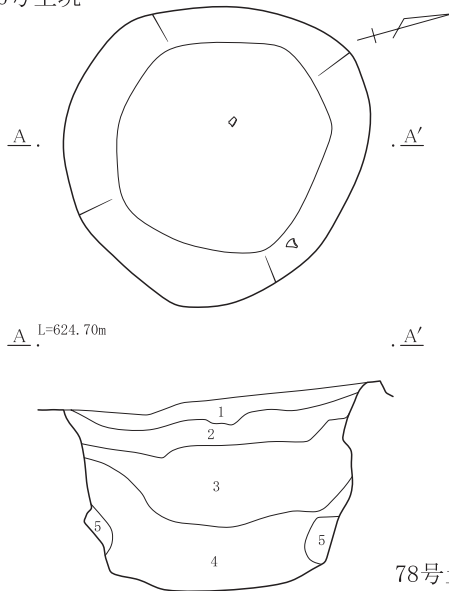
1. 黒色土 細粒白色軽石を混入する。
2. 黒褐色土 細粒白色軽石、明赤褐色土塊を混入する。

65号土坑



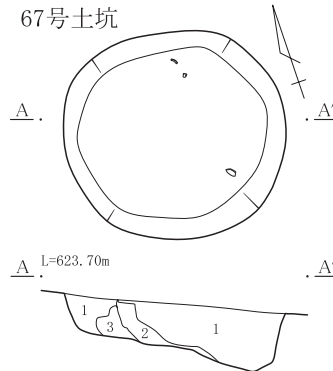
1. 黒色土 細粒白色軽石、ローム粒を混入する。
2. 黒褐色土 ローム塊を少量混入する。
3. 黄褐色土 ローム塊を多量に混入する。

66号土坑



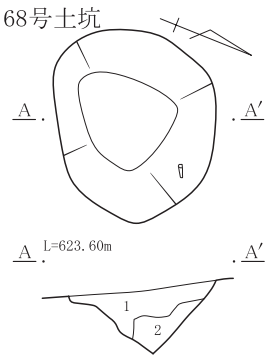
1. 黒褐色土 黄橙色軽石を混入する。
2. 暗褐色土 黄橙色軽石を混入する。
3. 黄褐色土 黄橙色軽石、細粒白色軽石を多量に混入する。
4. 褐色土 黄橙色軽石を混入する。縮まり強い。
5. 黄橙色土 ローム塊主体。壁くずれ。

67号土坑



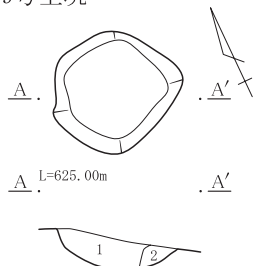
1. 黒褐色土 黄橙色軽石、細粒白色軽石を全体に混入する。縮まり強い。
2. 明黄褐色土 細粒白色軽石を少量混入する。
3. 黄褐色土 ローム塊主体。

68号土坑



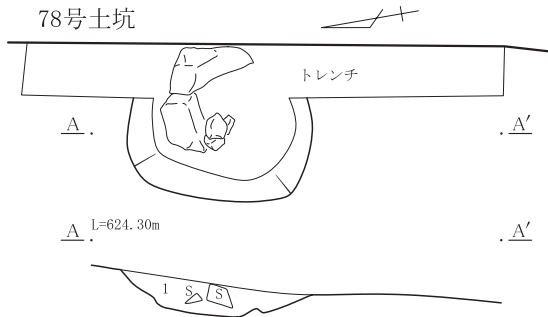
1. 黒色土 細粒白色軽石、明赤褐色土塊を混入する。
2. 黄褐色土 細粒白色軽石、明赤褐色土塊を混入する。縮まりあり。

69号土坑



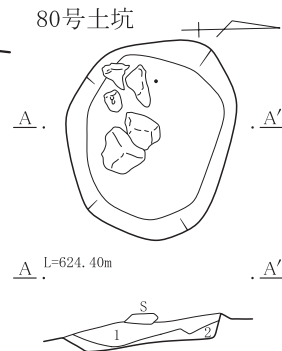
1. 黒色土 黄橙色軽石を全体に混入する。
2. 黄褐色土 ローム塊を多量に混入する。

78号土坑

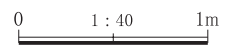


1. 黒褐色土 ローム粒を全体に混入する。

80号土坑



1. 黒色土 ローム粒、明赤褐色土を少量混入する。
2. 黄褐色土 ローム塊を多量に混入する。



第26図 97区 62,63,65,66,67,68,69,78,80号土坑

62号土坑

(第26図、P L 18) D-24、E-24グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。規模は長軸1.0m、短軸0.9m、深34cmを測る。長軸方位はN-90°-Eを示す。埋土は細粒白色軽石を混入する黒色土を主体とする。遺物は検出されなかった。

63号土坑

(第26図、P L 19) D-24、E-24グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。規模は長軸1.5m、短軸1.1m、深14cmを測る。長軸方位はN-50°-Eを示す。埋土は細粒白色軽石を混入する黒色土を主体とする。上面で礫が数点検出されたが、これらの石には石製品となるものや被熱痕をもつものは見られなかった。遺物は検出されなかった。

65号土坑

(第26図、P L 19) E-23・24グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。規模は長軸1.1m、短軸0.96m、深12cmを測る。長軸方位はN-30°-Eを示す。埋土は黄橙色軽石を多量に混入する締まりの強い黒褐色土を主体とする。遺物は検出されなかった。

66号土坑

(第26図、P L 19) D-25グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも円形を呈する。規模は長軸1.65m、短軸1.6m、深100cmを測る。長軸方位はN-0°を示す。埋土は黄橙色軽石を多量に混入する締まりの強い黒褐色土を主体とする。遺物は検出されなかった。

67号土坑

(第26図、P L 19) C-23、D-23グリッドに位置する。平面形状は上面、下面ともほぼ円形を呈する。規模は長軸1.2m、短軸1.1m、深30cmを測る。長軸方位はN-30°-Eを示す。埋土は黄橙色軽石を混入する黒褐色土を主体とする。遺物は検出されなかった。

68号土坑

(第26図、P L 20) D-22・23グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。規模は長軸1.1m、短軸0.9m、深36cmを測る。長軸方位はN-60°-Eを示す。埋土は黄橙色軽石を多量に混入する締まりの強い黒褐色土を主体とする。遺物は検出されなかった。

69号土坑

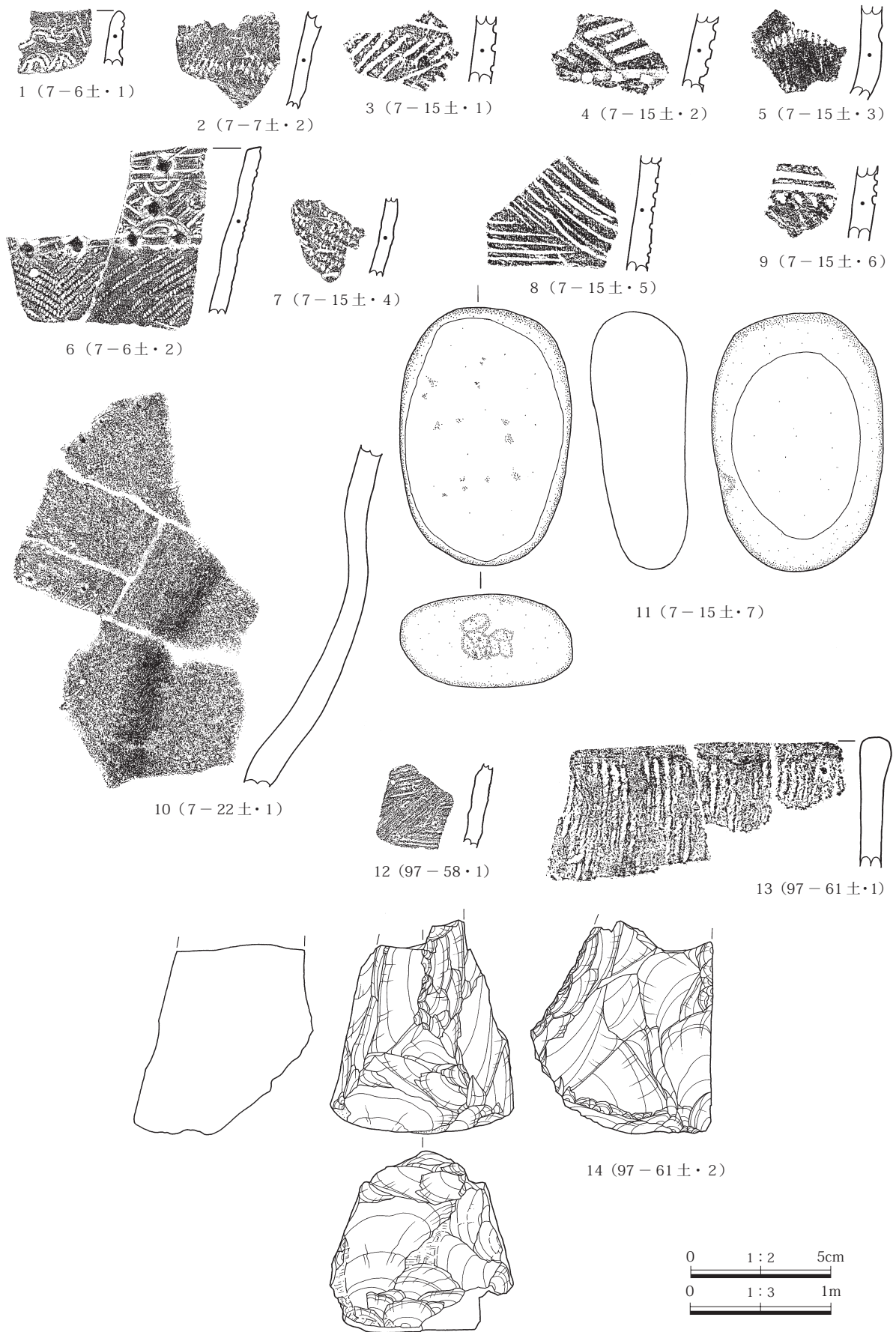
(第26図、P L 20) F-25グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。規模は長軸0.7m、短軸0.66m、深80cmを測る。長軸方位はN-80°-Wを示す。埋土は黄橙色軽石を多量に混入する締まりの強い黒褐色土を主体とする。遺物は検出されなかった。

78号土坑

(第26図、P L 20) A-25グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも不整形を呈する。規模は長軸1.0m、短軸0.59m、深18cmを測る。長軸方位はN-10°-Eを示す。埋土はローム粒を混入する黒色土を主体とする。地山礫が数点出土したが石製品となるものや被熱痕をもつものや遺物は検出されなかった。

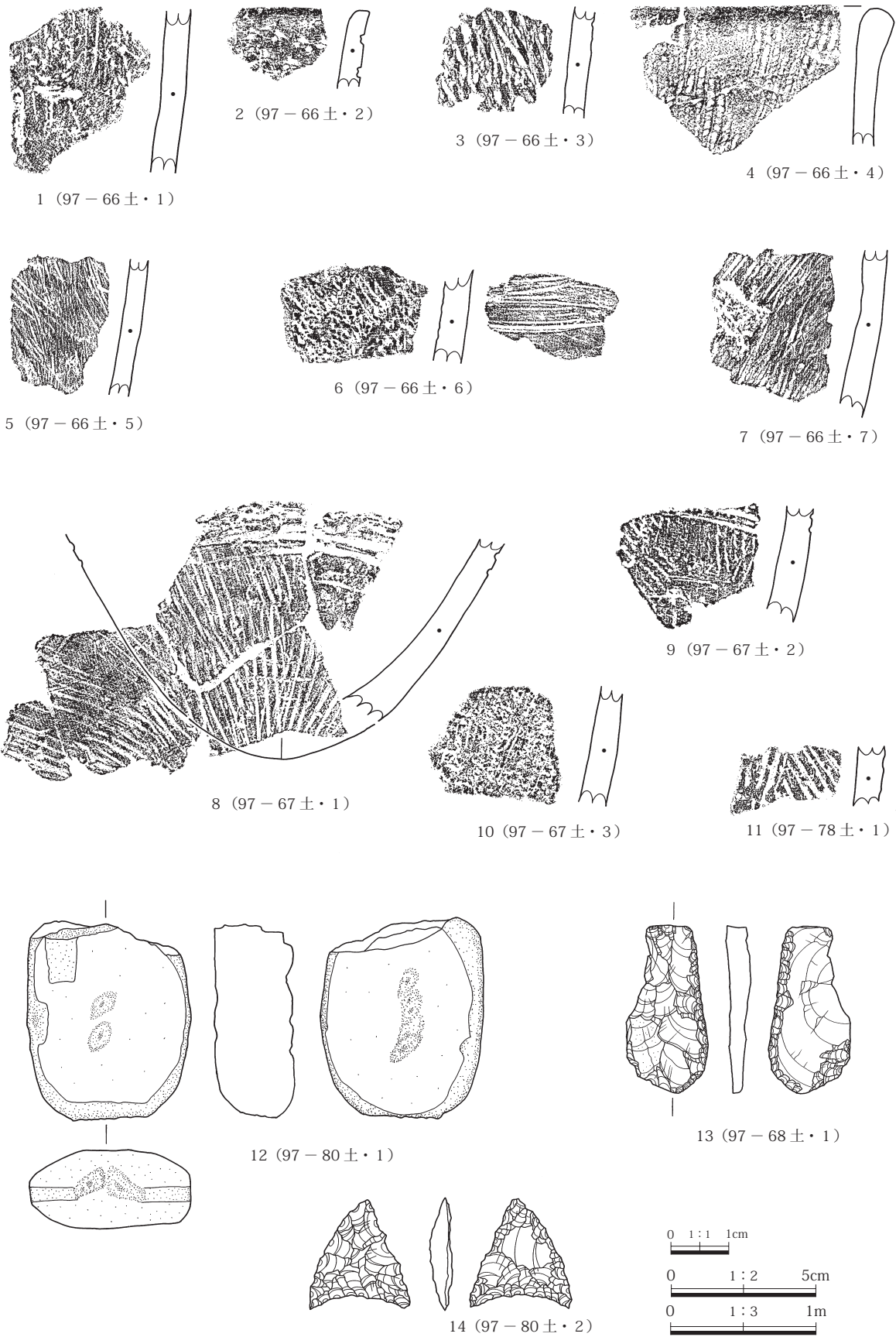
80号土坑

(第26図、P L 20) A-25グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。規模は長軸1.1m、短軸0.9m、深10cmを測る。長軸方位はN-70°-Wを示す。埋土はローム粒を混入する黒色土を主体とする。地山礫が数点出土したが石製品となるものや被熱痕をもつものは検出されなかった。縄文土器小片が覆土中より出土している。遺物は検出されなかった。



第27图 7·97区土坑出土遗物(1)

第3章 検出された遺構と遺物



第28図 7・97区土坑出土遺物(2)

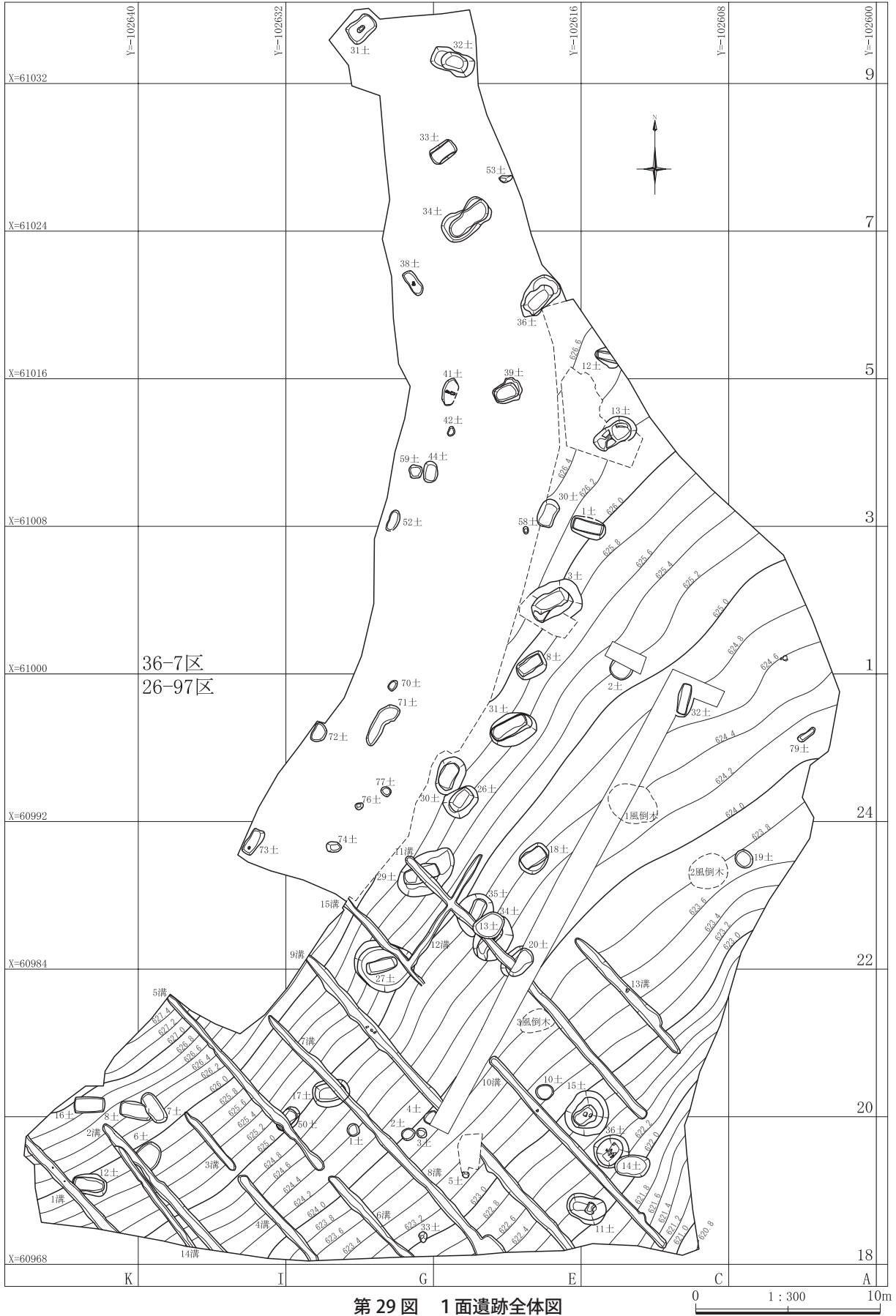
第6項 竪穴状遺構と土坑出土の土器・石器

第21図No.4 不定形方向から剥離された石器である。第27図No.1は口縁部破片で、胎土中に繊維を混入している。コンパス2段施されている。関山式である。図No.2は胴部破片で、若干繊維を混入している。絡条体圧痕文であり、花積下層式であろう。図No.3は胴部破片で、若干繊維を混入している。幾何学系の沈線文が施された田戸下層式である。図No.4も胴部破片である。胎土中に繊維を混入している。沈線と刺突文が施された田戸下層式である。No.6は口縁部破片である。繊維が混入している。口縁部には弧線文とボタン状貼付文が施され、以下0段多条R Lと付加条縄文が施された。関山Ⅱ式である。No.7は胴部破片で、繊維を混入している。弧線文とR L斜縄文が施された関山式である。図No.8は胴部破片である。半截竹管のよる集合沈線文を施した諸磯b式である。図No.9は胴部破片である。沈線と刺突文を施した田戸下層式である。No.10は頸部から胴部にかけての破片である。表面は摩滅しているが、曲線的な微隆起線状の盛り上がりがある。後期初頭の可能性があるであろう。No.11は磨石と敲石である。No.12は胴部破片であり、横位と斜位の条痕が施されている。No.13は口縁部破片である。口唇部は肥厚し、やや外反する。撚糸文土器の稲荷台式である。No.14はスタンプ状石器である。基部は欠損している。右側縁部に自然面を残している。また、底面の一部に自然面を残している。第28図No.1は胴下半部の破片で、繊維を混入している。縦位の条痕が施されている。図No.2は口縁部で、若干繊維を混入している。口唇部は逆「く」の字状にやや外反している。棒状工具により右下がり平行に刺突を施した田戸下層式である。図No.3は胴部破片で、繊維を混入している。表面には斜位の条痕を施すともに、裏面にも条痕を施している。田戸下層式であろうか。図No.4は口縁部破片である。口唇部は肥厚し、やや外反する。口唇部直下から撚糸文が施された稲荷台式である。図No.5は胴部破片で若干繊維を混入している。右下がり斜位の条痕を施した後に、縦位の条痕を施している。裏面には横位方向の整形痕が認められる。No.6は胴部破片で、細かな右下がり斜位の条痕が施されている。裏面には横位方向の整形痕が認められる。No.7は胴部破片である。斜位の沈線が施された子母口式である。No.8は丸底風尖底の胴下半部の破片である。縦位の沈線を施した後に、横位の沈線を3段施している。田戸下層式である。No.9は胴下半部の破片で、繊維を混入している。まばらな撚糸文を施した後に、横位の沈線文を施している。撚糸文土器終末期の木の根式土器に類する時期の資料である。No.10は胴部破片である。撚糸を施した後に、わずかに縦位の条痕を施している。木の根式に類するものであろう。No.11は胴部破片で、若干繊維を混入している。半截竹管により羽状の沈線を施した田戸下層式であろう。No.12は表裏面凹みのある凹石である。一部欠損しているのと、加熱されている。No.13は正面右側縁部の表裏面ともに刃部加工を施した削器である。No.14は無柄抉り入りの正三角形に近い、完形の石鏃である。

第3表 竪穴状遺構・土坑出土石器観察表

挿図番号	P L 番号	出土位置	器種	計測値①長さ(mm)②幅(mm)③厚さ(mm)④重さ(g)				石材
21図-4	PL-38	7-1号竪穴状遺構	石核	3.45	3.10	1.40	16.60	珪質変質岩
27図-15土-7	PL-39	7-15号土坑	磨石・敲石	13.50	9.00	5.00	977.20	粗粒輝石安山岩
27図-61土-1	PL-39	97-61号土坑	スタンプ状石器	7.55	6.50	6.40	343.00	黒色頁岩
28図-68土-2	PL-39	97-68号土坑	削器	5.70	2.80	0.90	12.30	珪質変質岩
28図-80土-1	PL-39	97-80号土坑	凹石	10.30	8.40	4.00	534.60	粗粒輝石安山岩
28図-80土-2	PL-39	97-80号土坑	石鏃	1.90	1.60	0.40	0.50	黒曜石

第3章 検出された遺構と遺物



第29図 1面遺跡全体図

第3節 平安時代以降の遺構と遺物

第1項 土坑(平安時代)

ここで取り上げた土坑は1面(粕川テフラが一部分残存している面)調査時に検出された土坑である。土坑の覆土などから時期を平安以降から中近世の遺構として掲載した。また陥穴も土坑としてここでは取り扱っている。

7区

42号土坑

(第30図、P L 21) F-4グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。規模は長軸0.5m、短軸0.34m、深18cmを測る。長軸方位はN-10°-Eを示す。埋土は白色軽石を混入する締まりの弱い黒色土を主体とする。遺物は検出されなかった。

53号土坑

(第30図、P L 21) E-7、F-7グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。規模は長軸0.74m、短軸0.36m、深26cmを測る。長軸方位はN-76°-Eを示す。埋土はローム粒を混入する黒褐色土を主体とする。遺物は検出されなかった。

97区

14号土坑

(第30図、P L 21) D-19グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。規模は長軸1.9m、短軸1.2m、深40cmを測る。長軸方位はN-90°-Eを示す。埋土はローム粒を少量混入する締まりの弱い黒褐色土を主体とする。遺物は検出されなかった。

19号土坑

(第30図、P L 21) B-23グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも円形を呈する。規模は長軸1.0m、短軸0.96m、深30cmを測る。長軸方位はN-0°を示す。埋土は砂質土を混入する灰褐色土を主体とする。遺物は検出されなかった。

72号土坑

(第30図、P L 22) H-25グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。規模は長1.0m、短軸0.76m、深22cmを測る。長軸方位はN-40°-Eを示す。埋土は黄橙色軽石を混入する黒褐色土を主体とする。遺物は検出されなかった。

74号土坑

(第30図、P L 22) H-23グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。規模は長軸0.8m、短軸0.48m、深30cmを測る。長軸方位はN-70°-Wを示す。埋土は黄橙色軽石を混入する黒褐色土を主体とする。遺物は検出されなかった。

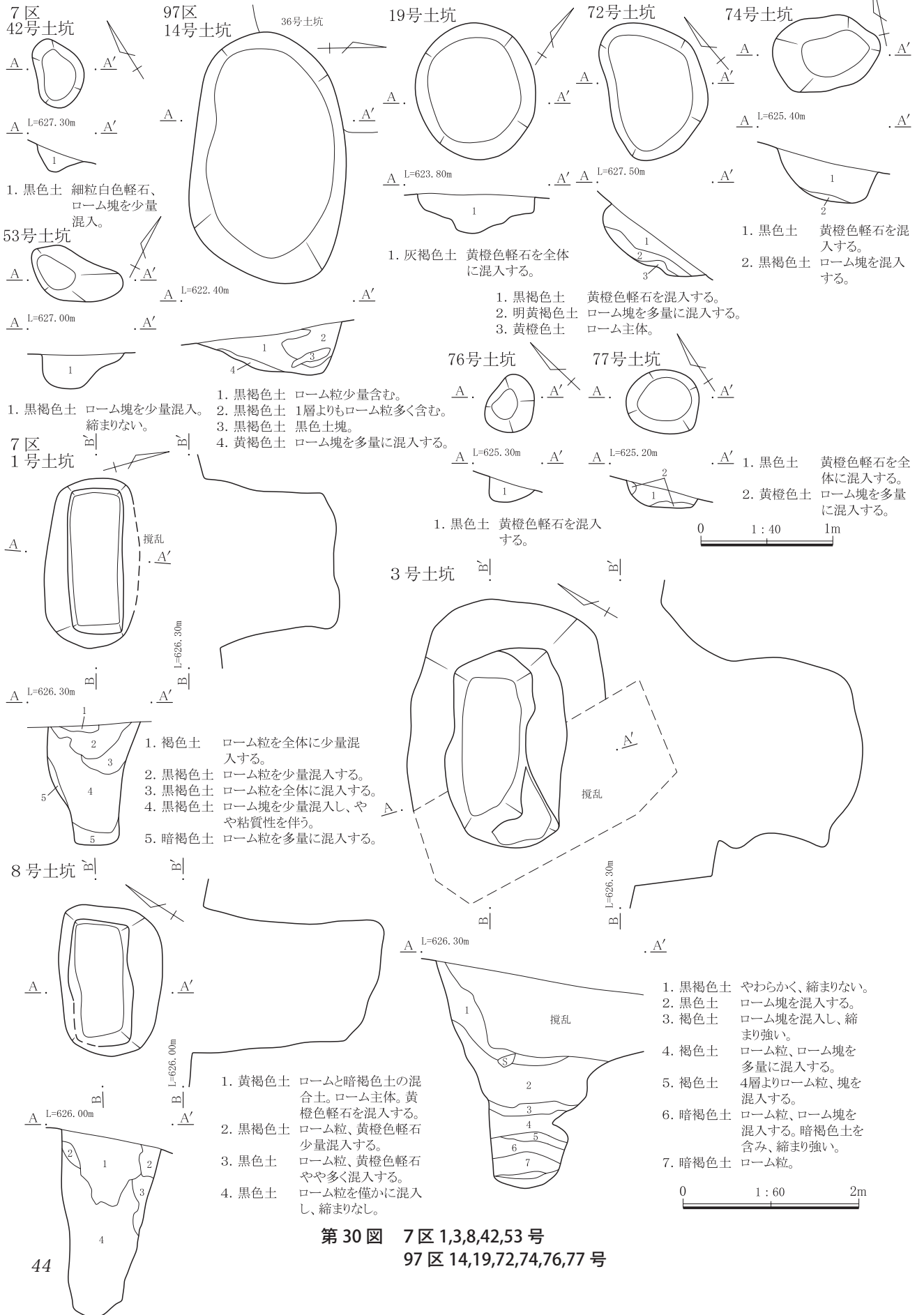
76号土坑

(第30図、P L 22) G-24、H-24グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。規模は長軸0.44m、短軸0.34m、深18cmを測る。長軸方位はN-60°-Eを示す。埋土は黄橙色軽石を混入する黒褐色土を主体とする。遺物は検出されなかった。

77号土坑

(第30図、P L 22) G-24グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。規模は長軸0.56m、短軸0.5m、深16cmを測る。長軸方位はN-55°-Wを示す。埋土は黄橙色軽石を混入する黒褐色土を主体とする。遺物は検出されなかった。

第3章 検出された遺構と遺物



第30図 7区 1,3,8,42,53号
 97区 14,19,72,74,76,77号

第2項 陥穴

7区

1号土坑

(第30図、P L23)D-2・3、E-2・3グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも長円形を呈する。規模は長軸1.96m、短軸1.3m、深138cmを測る。長軸方位はN-85°-Wを示す。埋土は上面部で灰褐色土が混入し、下面部にかけて黄橙色軽石、ローム粒を混入する黒褐色土を主体とする。底面中央部は非常に堅く締まっており構築時に底面を張った痕跡が見られた。遺物は検出されなかった。

3号土坑

(第30図、P L23)E-1・2グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも不整形を呈する。規模は長軸2.82m、短軸1.8m、深240cmを測る。長軸方位はN-57°-Eを示す。埋土は上面部で灰褐色土が混入し、下面部にかけて黄橙色軽石、ローム粒を混入する黒褐色土を主体とする。底面中央部は非常に堅く締まっており構築時に底面を張った痕跡が見られた。遺物は検出されなかった。

8号土坑

(第30図、P L23)7区E-1、97区E-25グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。規模は長軸1.7m、短軸1.1m、深208cmを測る。長軸方位はN-55°-Eを示す。埋土は上面部で灰褐色土が混入し、下面部にかけて黄橙色軽石、ローム粒を混入する黒褐色土を主体とする。底面中央部は非常に堅く締まっており構築時に底面を張った痕跡が見られた。遺物は検出されなかった。

12号土坑

(第31図、P L23)D-5グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも不整形を呈する。規模は長軸1.08m、短軸0.7m、深132cmを測る。長軸方位はN-74°-Wを示す。埋土は上面部で灰褐色土が混入し、下面部にかけて黄橙色軽石、ローム粒を混入する黒褐色土を主体とする。底面中央部は非常に堅く締まっており構築時に底面を張った痕跡が見られた。遺物は検出されなかった。

13号土坑

(第31図、P L23)D-4グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。規模は長軸2.38m、短軸1.06m、深160cmを測る。長軸方位はN-54°-Eを示す。埋土は上面部で灰褐色土が混入し、下面部にかけて黄橙色軽石、ローム粒を混入する黒褐色土を主体とする。底面中央部は非常に堅く締まっており構築時に底面を張った痕跡が見られた。遺物は検出されなかった。

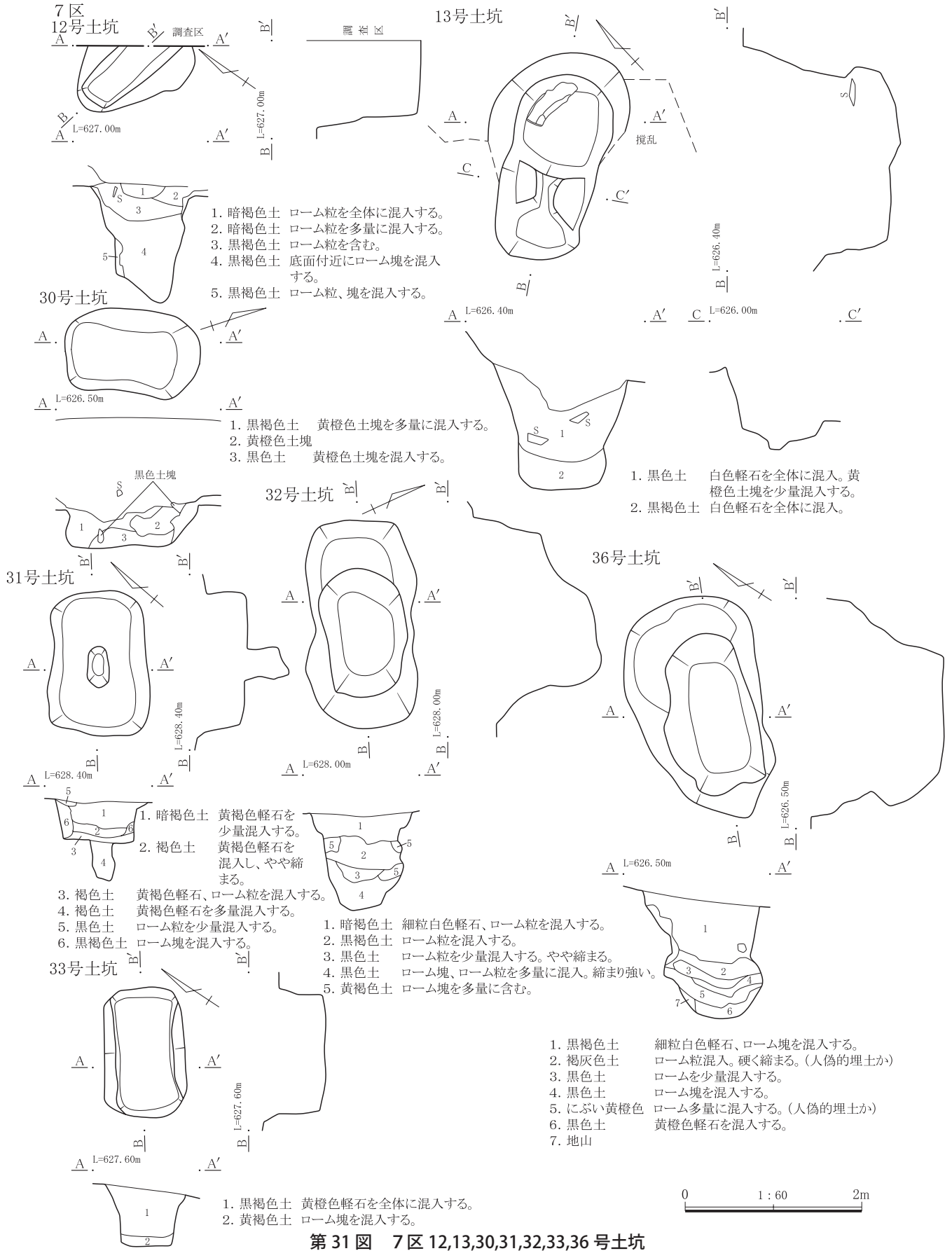
30号土坑

(第31図、P L24)E-3グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。規模は長軸1.54m、短軸0.92m、深46cmを測る。長軸方位はN-25°-Eを示す。埋土は上面部で灰褐色土が混入し、下面部にかけて黄橙色軽石、ローム粒を混入する黒褐色土を主体とする。底面中央部は非常に堅く締まっており構築時に底面を張った痕跡が見られた。遺物は検出されなかった。

31号土坑

(第31図、P L24)G-9グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。規模は長軸1.62m、短軸1.54m、深90cmを測る。長軸方位はN-49°-Eを示す。埋土は上面部で灰褐色土が混入し、下面部にかけて黄橙色軽石、ローム粒を混入する黒褐色土を主体とする。底面中央部は非常に堅く締まっており構築時に底面を張った痕跡が見られた。遺物は検出されなかった。

第3章 検出された遺構と遺物



第31図 7区12,13,30,31,32,33,36号土坑

32号土坑

(第31図、P L 24) F-9 グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。規模は長軸2.36m、短軸1.14m、深106cmを測る。長軸方位はN-69°-Wを示す。埋土は上面部で灰褐色土が混入し、下面部にかけて黄橙色軽石、ローム粒を混入する黒褐色土を主体とする。底面中央部は非常に強く締まっており構築時に底面を張った痕跡が見られた。遺物は検出されなかった。

33号土坑

(第31図、P L 24) F-7・8、G-8 グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも長方形を呈する。規模は長軸1.48m、短軸0.94m、深68cmを測る。長軸方位はN-54°-Eを示す。埋土は上面部で灰褐色土が混入し、下面部にかけて黄橙色軽石、ローム粒を混入する黒褐色土を主体とする。底面中央部は非常に強く締まっており構築時に底面を張った痕跡が見られた。遺物は検出されなかった。

34号土坑

(第32図、P L 25) F-6・7 グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。規模は長軸2.84m、短軸1.36m、深110cmを測る。長軸方位はN-56°-Eを示す。埋土は上面部で灰褐色土が混入し、下面部にかけて黄橙色軽石、ローム粒を混入する黒褐色土を主体とする。底面中央部は非常に強く締まっており構築時に底面を張った痕跡が見られた。遺物は検出されなかった。

36号土坑

(第31図、P L 25) E-5・6 グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。規模は長軸2.56m、短軸1.42m、深132cmを測る。長軸方位はN-40°-Eを示す。埋土は上面部で灰褐色土が混入し、下面部にかけて黄橙色軽石、ローム粒を混入する黒褐色土を主体とする。底面中央部は非常に強く締まっており構築時に底面を張った痕跡が見られた。遺物は検出されなかった。

38号土坑

(第32図、P L 25) G-6 グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。規模は長軸1.46m、短軸0.6m、深40cmを測る。長軸方位はN-35°-Wを示す。埋土は上面部で灰褐色土が混入し、下面部にかけて黄橙色軽石、ローム粒を混入する黒褐色土を主体とする。底面中央部は非常に強く締まっており構築時に底面を張った痕跡が見られた。遺物は検出されなかった。

39号土坑

(第32図、P L 25) E-5、F-5 グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。規模は長軸1.5m、短軸1.1m、深110cmを測る。長軸方位はN-65°-Eを示す。埋土は上面部で灰褐色土が混入し、下面部にかけて黄橙色軽石、ローム粒を混入する黒褐色土を主体とする。底面中央部は非常に強く締まっており構築時に底面を張った痕跡が見られた。遺物は検出されなかった。

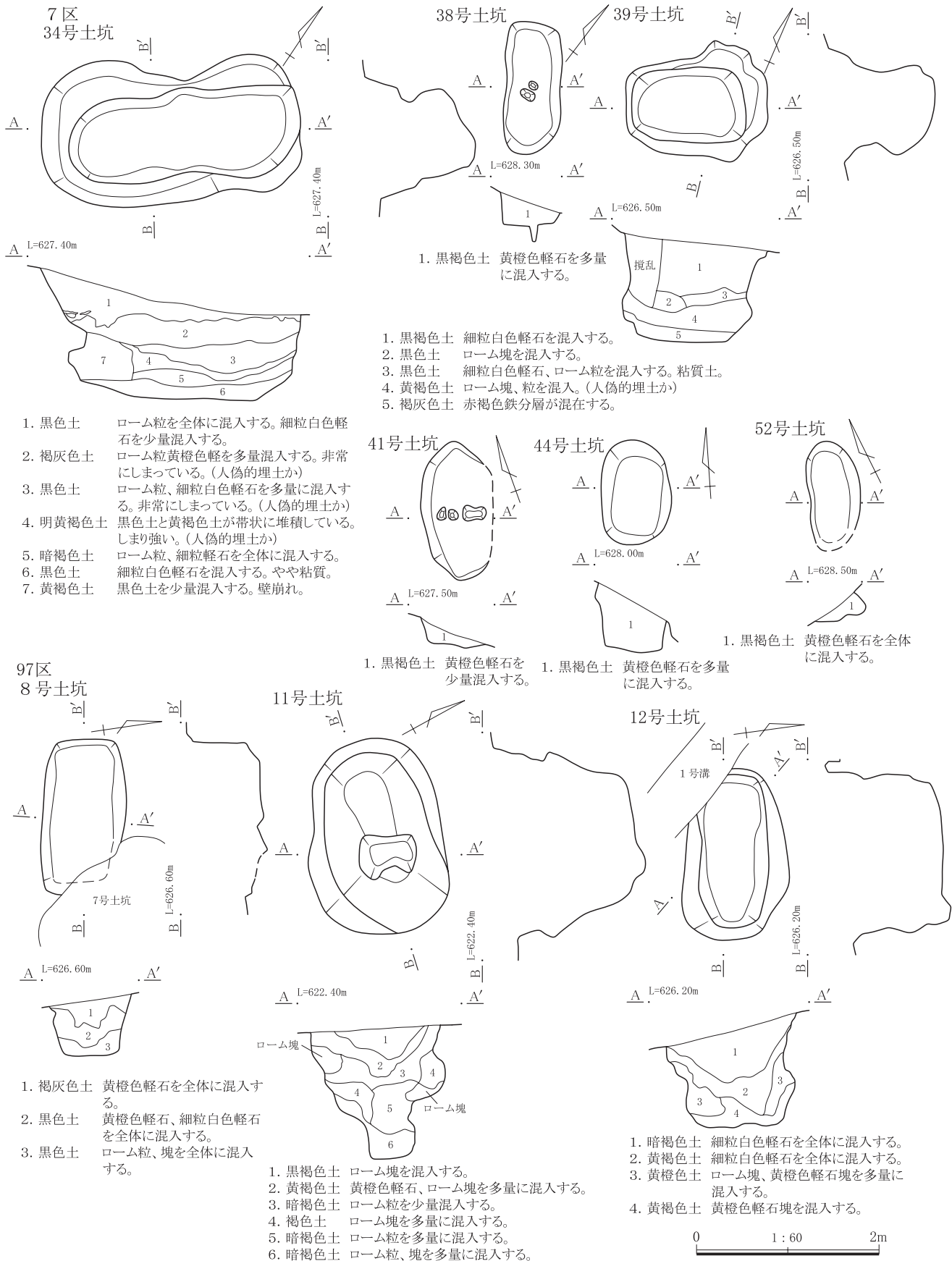
41号土坑

(第32図、P L 26) F-4 グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。規模は長軸1.54m、短軸0.8m、深10cmを測る。長軸方位はN-16°-Eを示す。埋土は上面部で灰褐色土が混入し、下面部にかけて黄橙色軽石、ローム粒を混入する黒褐色土を主体とする。拡張部での検出であったため上面部は掘削されており検出された底面の形状から陥穴として取り上げた。遺物は検出されなかった。

44号土坑

(第32図、P L 26) F-3、G-3 グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。規模は長軸1.16m、短軸0.76m、深66cmを測る。長軸方位はN-0°を示す。埋土はローム粒を混入する暗褐色土を主

第3章 検出された遺構と遺物



第32図 7区 34,38,39,41,44,52号土坑 97区 8,11,12号土坑

体とする。拡張部での検出であったため上面部は掘削されており検出された底面の形状から陥穴として取り上げた。遺物は検出されなかった。

5 2号土坑

(第32図、P L26) G-2・3グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも不整形を呈する。規模は長軸1.08m、短軸0.56m、深24cmを測る。長軸方位はN-22°-Eを示す。埋土は上面部で灰褐色土が混入し、下面部にかけて黄橙色軽石、ローム粒を混入する黒褐色土を主体とする。拡張部での検出であったため上面部は掘削されており検出された底面の形状から陥穴として取り上げた。遺物は検出されなかった。

9 7区

8号土坑

(第32図、P L26) J-20、K-20グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも不整形を呈する。規模は長軸1.44m、短軸0.9m、深60cmを測る。長軸方位はN-80°-Wを示す。埋土は上面部で灰褐色土が混入し、下面部にかけて黄橙色軽石、ローム粒を混入する黒褐色土を主体とする。底面中央部は非常に堅く締まっており構築時に底面を張った痕跡が見られた。遺物は検出されなかった。

1 1号土坑

(第32図、P L27) D-18、E-18グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。規模は長軸2.1m、短軸1.5m、深140cmを測る。長軸方位はN-10°-Eを示す。埋土は上面部で灰褐色土が混入し、下面部にかけて黄橙色軽石、ローム粒を混入する黒褐色土を主体とする。底面中央部は非常に堅く締まっており構築時に底面を張った痕跡が見られた。遺物は検出されなかった。

1 2号土坑

(第32図、P L27) K-18・19グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。規模は長軸1.9m、短軸1.1m、深140cmを測る。長軸方位はN-82°-Wを示す。埋土は上面部で灰褐色土が混入し、下面部にかけて黄橙色軽石、ローム粒を混入する黒褐色土を主体とする。底面中央部は非常に堅く締まっており構築時に底面を張った痕跡が見られた。遺物は検出されなかった。

1 5号土坑

(第33図、P L27) D-19・20、E-19・20グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも円形を呈する。規模は長軸2.46m、短軸2.4m、深200cmを測る。長軸方位はN-0°を示す。埋土は上面部で灰褐色土が混入し、下面部にかけて黄橙色軽石、ローム粒を混入する黒褐色土を主体とする。底面中央部は非常に堅く締まっており構築時に底面を張った痕跡が見られた。遺物は検出されなかった。

1 7号土坑

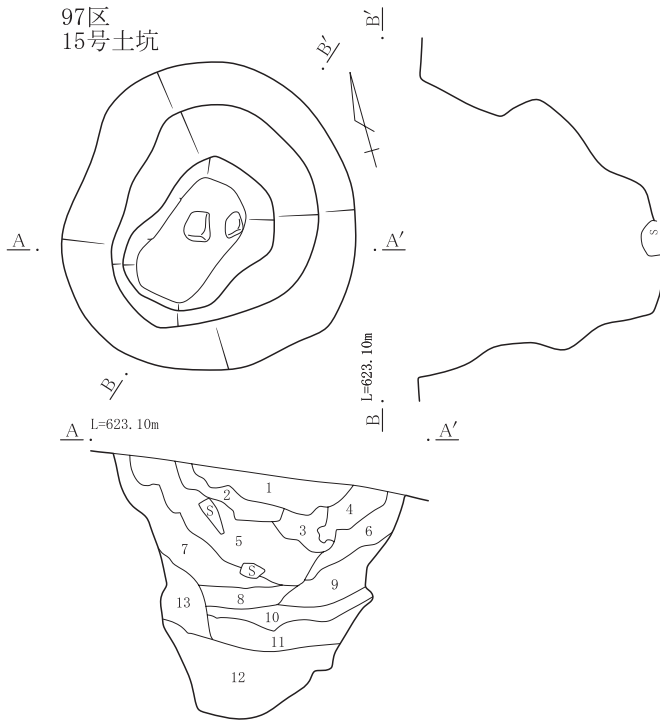
(第33図、P L27) H-20グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。規模は長軸2.0m、短軸1.5m、深220cmを測る。長軸方位はN-80°-Wを示す。埋土は上面部で灰褐色土が混入し、下面部にかけて黄橙色軽石、ローム粒を混入する黒褐色土を主体とする。底面中央部は非常に堅く締まっており構築時に底面を張った痕跡が見られた。遺物は検出されなかった。

1 8号土坑

(第33図、P L28) E-23グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。規模は長軸1.8m、短軸1.3m、深130cmを測る。長軸方位はN-50°-Eを示す。埋土は上面部で灰褐色土が混入し、下面部にかけて黄橙色軽石、ローム粒を混入する黒褐色土を主体とする。底面中央部は非常に堅く締まっており構築時に底面を張った痕跡が見られた。遺物は検出されなかった。

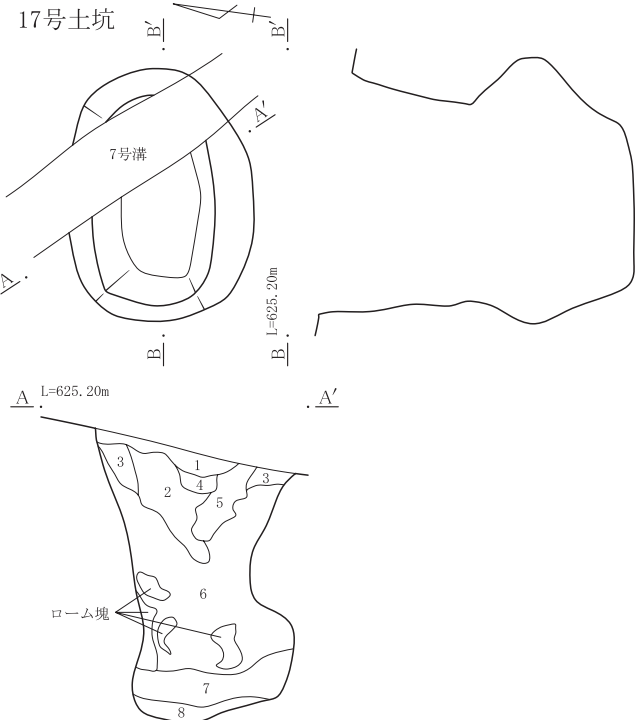
第3章 検出された遺構と遺物

97区
15号土坑



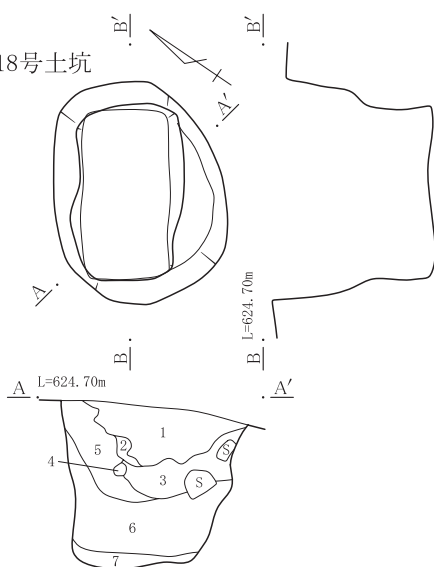
1. 暗褐色土 黄褐色軽石、黒褐色土を混入する。
2. 黒褐色土 暗褐色土を混入する。
3. 暗褐色土 黒褐色土を少量混入する。
4. 黄褐色土 ローム主体。暗褐色土を少量混入する。
5. 暗褐色土 ローム粒を全体に混合し、黄褐色軽石、黒褐色土塊を混入する。
6. 暗褐色土 ロームと暗褐色土を少量混入する。
7. 黒褐色土 ロームを少量混入する。縮まりなし。
8. 黄褐色土 ロームと暗褐色土が全体的混合したもの。黄褐色軽石多く混入する。
9. ロームと暗褐色土の混合土。
10. 黄褐色土 ローム主体。
11. 暗褐色土 ローム粒、塊を混入する。縮まりなし。
12. 暗褐色土 ローム粒、塊を混入する。
13. 黄褐色土 ローム主体。壁崩れ。

17号土坑



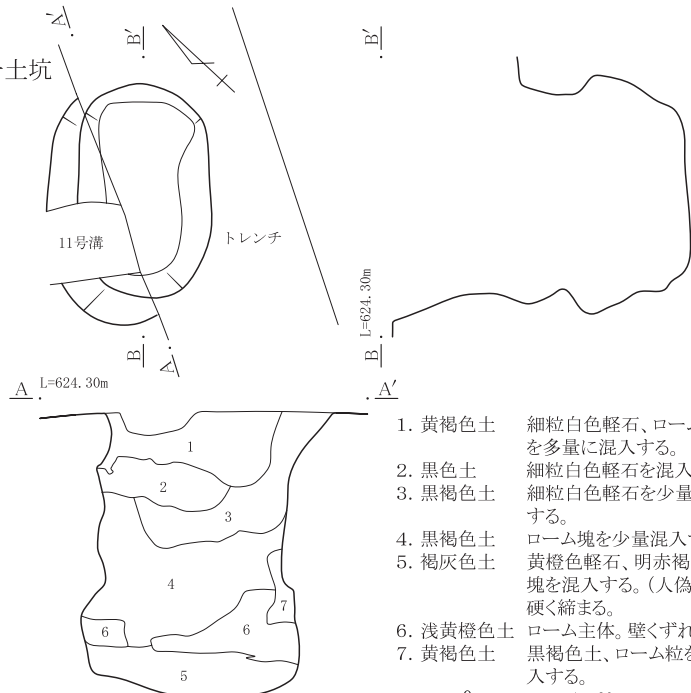
1. 黄褐色土 ローム塊を多量に混入する。
2. 褐灰色土 黄褐色軽石、炭化物を混入する。
3. 黒色土 黄褐色軽石を少量混入する。
4. 褐灰色土 黄褐色軽石、炭化物を少量混入する。
5. 灰白色土 黒色土塊、黄褐色軽石、細粒白色軽石を全体に混入する。
6. 黒色土 細粒白色軽石を少量混入する。縮まりなし。
7. 灰白色土 黄褐色軽石、灰主体の混合土(人偽的)
8. 黒色土 ローム塊を少量混入。

18号土坑

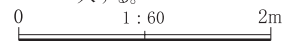


1. 黄褐色土 暗褐色土とロームの混合土。
2. 暗褐色土 黒褐色土を混入する。
3. 暗褐色土 黄褐色軽石を混入する。
4. 1層に同じ。
5. 黒褐色土 ロームを全体に混入する。
6. 黒褐色土 ローム塊、粒を少量混入する。
7. 黒褐色土 ローム粒、塊をやや多く混入する。

20号土坑



1. 黄褐色土 細粒白色軽石、ローム塊を多量に混入する。
2. 黒色土 細粒白色軽石を混入する。
3. 黒褐色土 細粒白色軽石を少量混入する。
4. 黒褐色土 ローム塊を少量混入する。
5. 褐灰色土 黄褐色軽石、明赤褐色土塊を混入する。(人偽的) 硬く縮まる。
6. 浅黄褐色土 ローム主体。壁くずれ。
7. 黄褐色土 黒褐色土、ローム粒を混入する。



第33図 97区 15,17,18,20号土坑

20号土坑

(第33図、P L 28) E-2 2・2 3 グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも不整形を呈する。規模は長軸1.9m、短軸1.3m、深230cmを測る。長軸方位はN-47° -Eを示す。埋土は上面部で灰褐色土が混入し、下面部にかけて黄橙色軽石、ローム粒を混入する黒褐色土を主体とする。底面中央部は非常に堅く締まっており構築時に底面を張った痕跡が見られた。遺物は検出されなかった。

26号土坑

(第34図、P L 28) F-2 4 グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。規模は長軸1.94m、短軸1.4m、深160cmを測る。長軸方位はN-46° -Eを示す。埋土は上面部で灰褐色土が混入し、下面部にかけて黄橙色軽石、ローム粒を混入する黒褐色土を主体とする。底面中央部は非常に堅く締まっており構築時に底面を張った痕跡が見られた。遺物は検出されなかった。

27号土坑

(第34図、P L 28) G-2 1・2 2 グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。規模は長軸3.01m、短軸3.0m、深264cmを測る。長軸方位はN-25° -Wを示す。埋土は上面部で灰褐色土が混入し、下面部にかけて黄橙色軽石、ローム粒を混入する黒褐色土を主体とする。底面中央部は非常に堅く締まっており構築時に底面を張った痕跡が見られた。遺物は検出されなかった。

29号土坑

(第34図、P L 29) F-2 3、G-2 3 グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。規模は長軸3.5m、短軸2.1m、深230cmを測る。長軸方位はN-53° -Eを示す。埋土は上面部で灰褐色土が混入し、下面部にかけて黄橙色軽石、ローム粒を混入する黒褐色土を主体とする。底面中央部は非常に堅く締まっており構築時に底面を張った痕跡が見られた。遺物は検出されなかった。

30号土坑

(第34図、P L 29) E-2 4 グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。規模は長軸2.14m、短軸1.45m、深198cmを測る。長軸方位はN-25° -Eを示す。埋土は上面部で灰褐色土が混入し、下面部にかけて黄橙色軽石、ローム粒を混入する黒褐色土を主体とする。底面中央部は非常に堅く締まっており構築時に底面を張った痕跡が見られた。遺物は検出されなかった。

31号土坑

(第35図、P L 29) E-2 5、F-2 5 グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。規模は長軸2.54m、短軸1.78m、深224cmを測る。長軸方位はN-65° -Eを示す。埋土は上面部で灰褐色土が混入し、下面部にかけて黄橙色軽石、ローム粒を混入する黒褐色土を主体とする。底面中央部は非常に堅く締まっており構築時に底面を張った痕跡が見られた。遺物は検出されなかった。

32号土坑

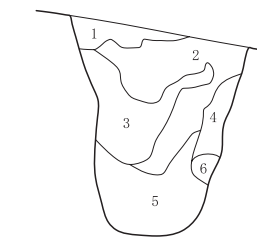
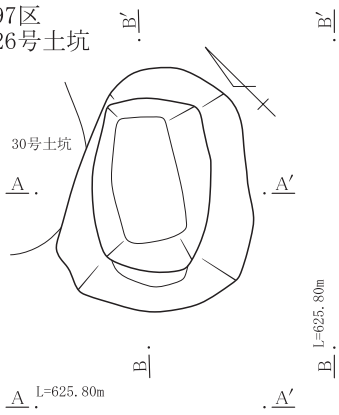
(第35図、P L 29) C-2 5 グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも長方形を呈する。規模は長軸1.69m、短軸0.68m、深156cmを測る。長軸方位はN-15° -Eを示す。埋土は上面部で灰褐色土が混入し、下面部にかけて黄橙色軽石、ローム粒を混入する黒褐色土を主体とする。底面中央部は非常に堅く締まっており構築時に底面を張った痕跡が見られた。遺物は検出されなかった。

34号土坑

(第35図、P L 30) F-2 2 グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも不整形を呈する。規模は長軸2.6m、短軸1.1m、深220cmを測る。長軸方位はN-40° -Eを示す。埋土は上面部で灰褐色土が混入し、下面部にか

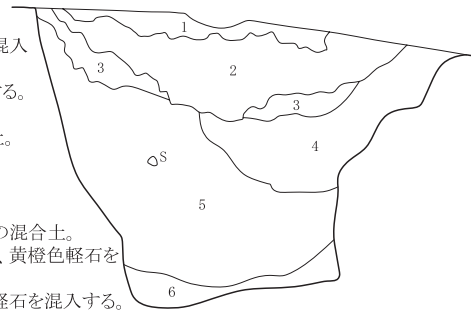
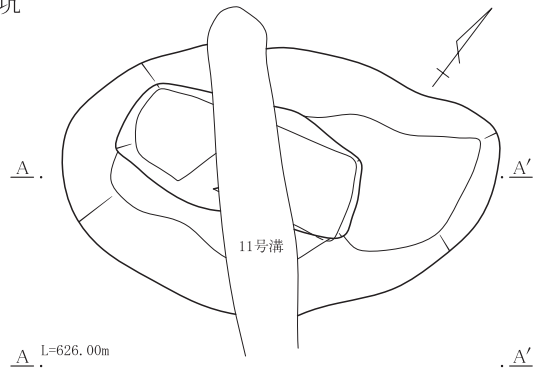
第3章 検出された遺構と遺物

97区
26号土坑



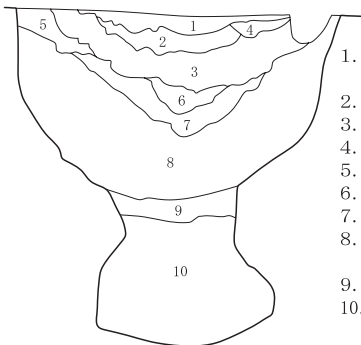
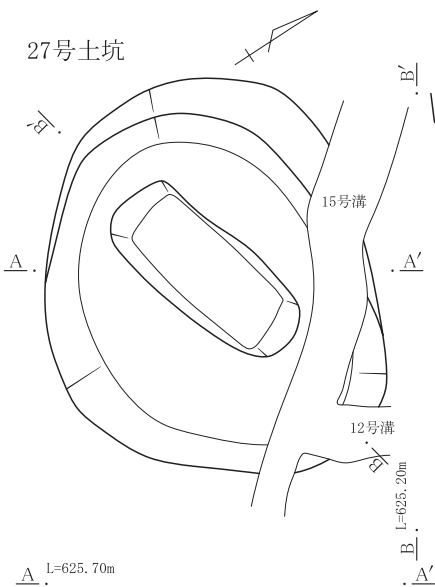
1. 褐色土 ローム塊を混入する。
2. 黒褐色土 細粒白色軽石、ローム粒を全体に混入する。
3. 黄褐色土 ローム粒、ローム塊を多量に混入する。
4. 暗褐色土 ローム粒を少量混入する。
5. 黒色土 ローム粒を多量に混入する。粘質土。
6. ローム塊

29号土坑



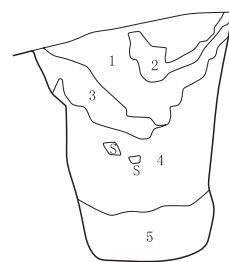
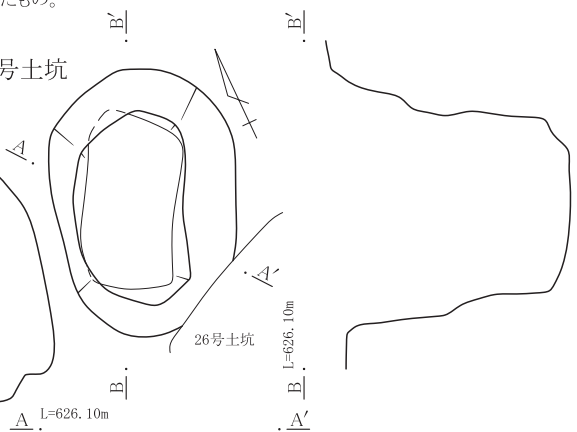
1. 黒褐色土 ローム粒混入する。
2. 黄褐色土 ロームと暗褐色土の混合土。
3. 黒褐色土 ローム全体に混合、黄褐色軽石を混入する。
4. 黒色土 ローム塊、黄褐色軽石を混入する。
5. 黒色土 ローム粒を混入する。縮まりなし。
6. 黒色土 ローム粒、塊を混合したもの。

27号土坑

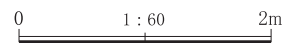


1. 黒褐色土 細粒白色軽石を少量混入する。縮まりなし。
2. 暗褐色土 ローム粒、炭化物を少量混入する。
3. 褐色土 ローム塊を全体に混入する。
4. 褐灰色土 細粒白色を混入する。
5. 黒褐色土 ローム粒を少量混入する。
6. 黒褐色土 細粒白色軽石を混入する。
7. 灰白色土 黄褐色軽石を全体に混入する。
8. 黒色土 黄褐色軽石細粒白色軽石を全体に混入する。
9. 黒褐色土 ローム塊を混入する。縮まりあり。
10. 黒色土 ローム粒、塊を混入する。粘質性を伴う。

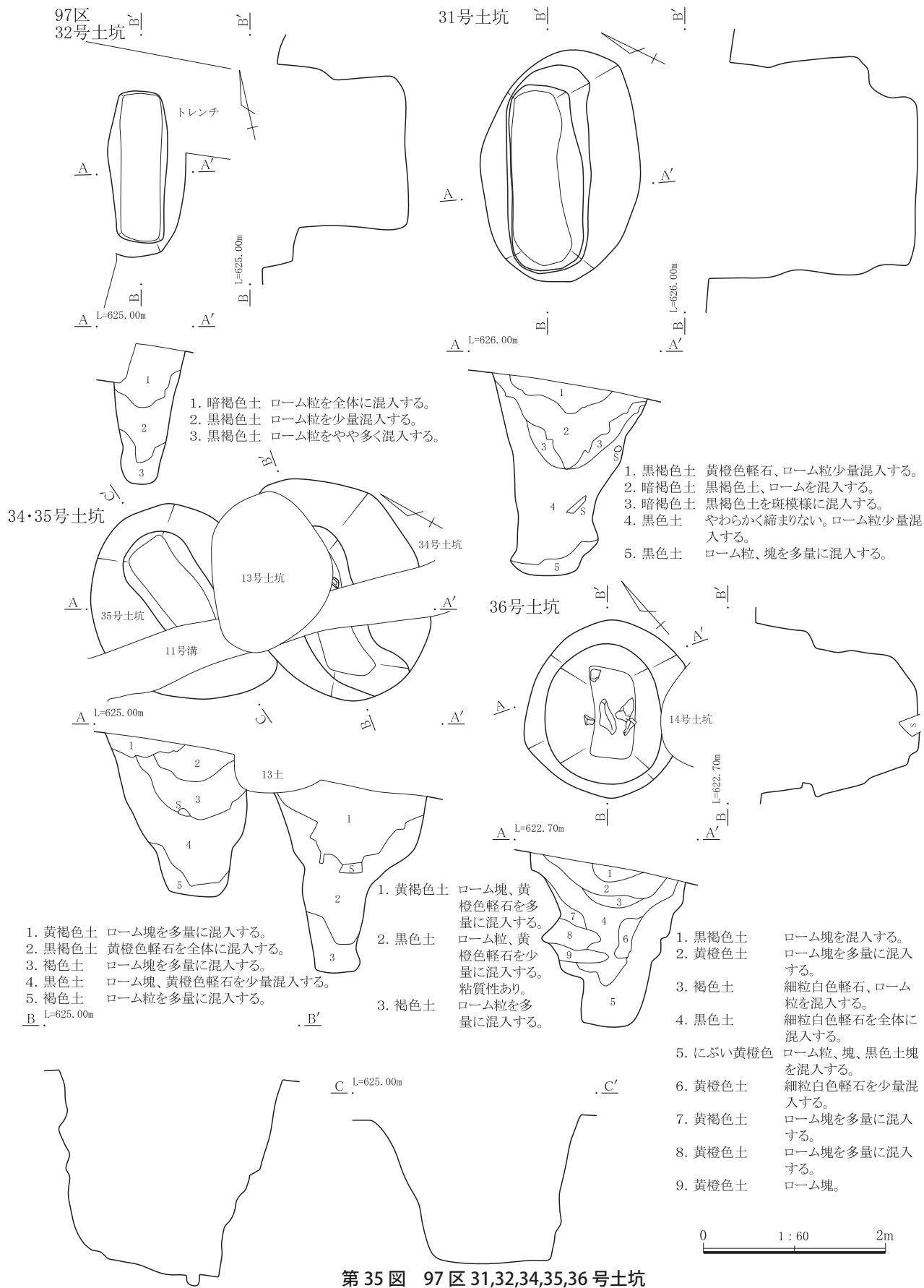
30号土坑



1. 黄褐色土 ローム粒、黄褐色軽石を多量に混入する。
2. 黒褐色土 黄褐色軽石を混入する。
3. 黒褐色土 ローム粒、黄褐色軽石を混入する。
4. 黒褐色土 細粒白色軽石、黄褐色軽石を少量混入する。
5. 黒色土 細粒白色軽石、ローム塊を混入する。縮まりあり。



第34図 97区 26,27,29,30号土坑



第3章 検出された遺構と遺物

けて黄橙色軽石、ローム粒を混入する黒褐色土を主体とする。底面中央部は非常に堅く締まっており構築時に底面を張った痕跡が見られた。遺物は検出されなかった。

35号土坑

(第35図、P L 30) F-22グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも不整形を呈する。規模は長軸2.34m、短軸1.4m、深162cmを測る。長軸方位はN-30°-Eを示す。埋土は上面部で灰褐色土が混入し、下面部にかけて黄橙色軽石、ローム粒を混入する黒褐色土を主体とする。底面中央部は非常に堅く締まっており構築時に底面を張った痕跡が見られた。遺物は検出されなかった。

36号土坑

(第35図、P L 30) D-19グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも不整形を呈する。規模は長軸1.9m、短軸1.6m、深176cmを測る。長軸方位はN-0°を示す。埋土は上面部で灰褐色土が混入し、下面部にかけて黄橙色軽石、ローム粒を混入する黒褐色土を主体とする。底面中央部は非常に堅く締まっており構築時に底面を張った痕跡が見られた。遺物は検出されなかった。

50号土坑

(第36図、P L 30) H-19・20、I-19・20グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。規模は長軸1.5m、短軸0.96m、深73cmを測る。長軸方位はN-45°-Eを示す。埋土は上面部で灰褐色土が混入し、下面部にかけて黄橙色軽石、ローム粒を混入する黒褐色土を主体とする。底面中央部は非常に堅く締まっており構築時に底面を張った痕跡が見られた。遺物は検出されなかった。

73号土坑

(第36図、P L 31) I-24グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも長方形を呈する。規模は長軸1.5m、短軸0.7m、深54cmを測る。長軸方位はN-35°-Eを示す。埋土は上面部で灰褐色土が混入し、下面部にかけて黄橙色軽石、ローム粒を混入する黒褐色土を主体とする。底面中央部は非常に堅く締まっており構築時に底面を張った痕跡が見られた。遺物は検出されなかった。

第3項 土坑(中近世)

7区

2号土坑

(第36図、P L 31) 7区D-5、97区D-25グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも不整形を呈する。規模は長軸1.2m、短軸0.8m、深20cmを測る。長軸方位はN-55°-Wを示す。埋土はローム粒を混入する暗褐色土を主体とする。遺物は検出されなかった。

97区

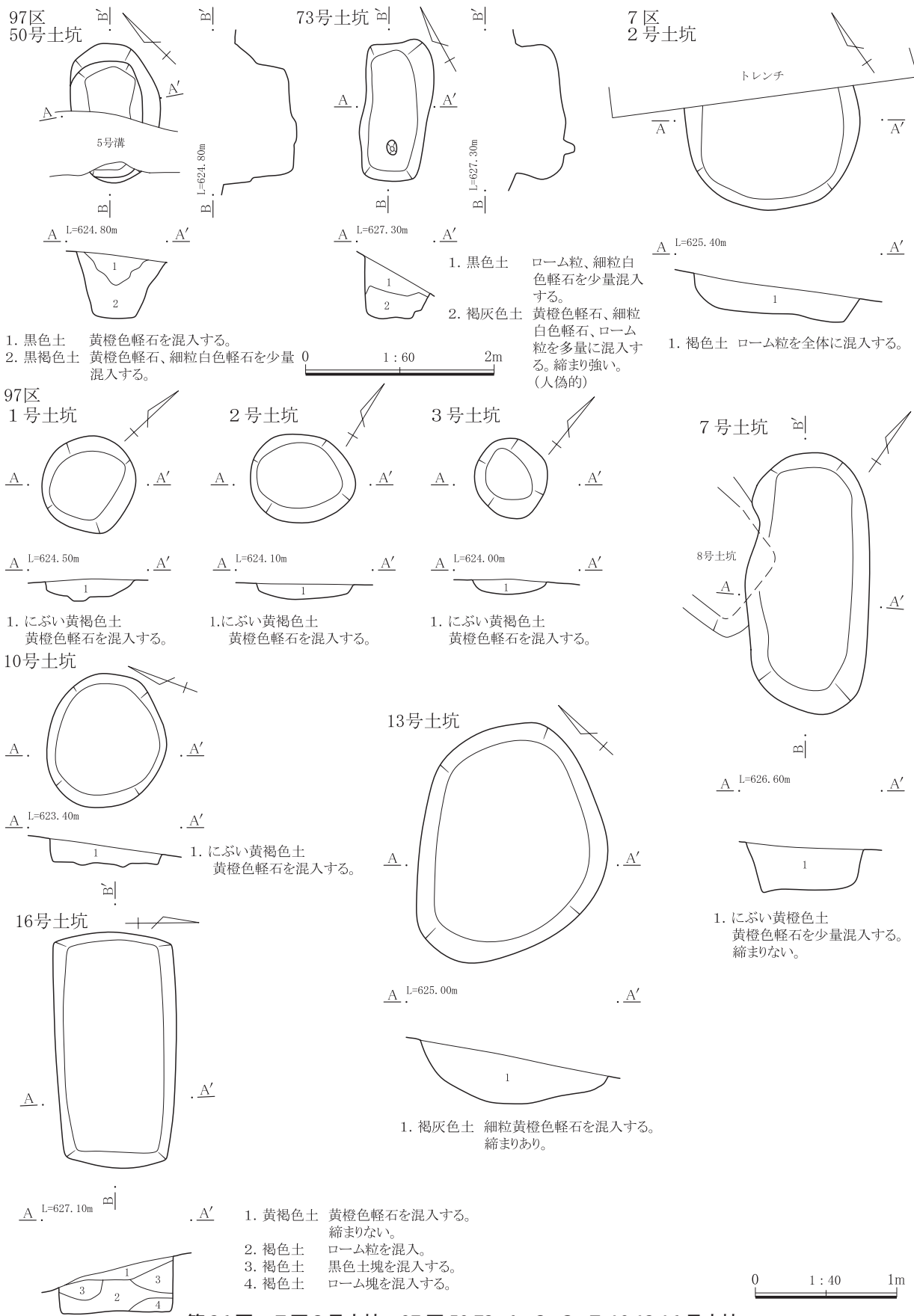
1号土坑

(第36図、P L 31) G-19、H-19グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも円形を呈する。規模は長軸0.7m、短軸0.68m、深14cmを測る。長軸方位はN-0°を示す。埋土は黄橙色軽石を少量混入する褐灰色土を主体とする。遺物は検出されなかった。

2号土坑

(第36図、P L 31) G-19グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。規模は長軸0.76m、短軸0.66m、深10cmを測る。長軸方位はN-15°-Wを示す。埋土は黄橙色軽石を少量混入する褐灰色土を主体とする。遺物は検出されなかった。

第3節 平安時代以降の遺構と遺物



第36図 7区2号土坑、97区50,73,1,2,3,7,10,13,16号土坑

第3章 検出された遺構と遺物

3号土坑

(第36図、P L 32) G-19グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。規模は長軸0.6m、短軸0.5m、深10cmを測る。長軸方位はN-0°を示す。埋土は黄橙色軽石を少量混入する褐灰色土を主体とする。遺物は検出されなかった。

7号土坑

(第36図、P L 32) J-19・20グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも長方形を呈する。規模は長軸1.84m、短軸0.86m、深40cmを測る。長軸方位はN-35°-Wを示す。埋土は黄橙色軽石を少量混入する締まりの弱い褐灰色土を主体とする。遺物は検出されなかった。

10号土坑

(第36図、P L 32) E-20グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも円楕円形を呈する。規模は長軸0.98m、短軸0.86m、深14cmを測る。長軸方位はN-0°を示す。埋土は黄橙色軽石を少量混入する褐灰色土を主体とする。遺物は検出されなかった。

13号土坑

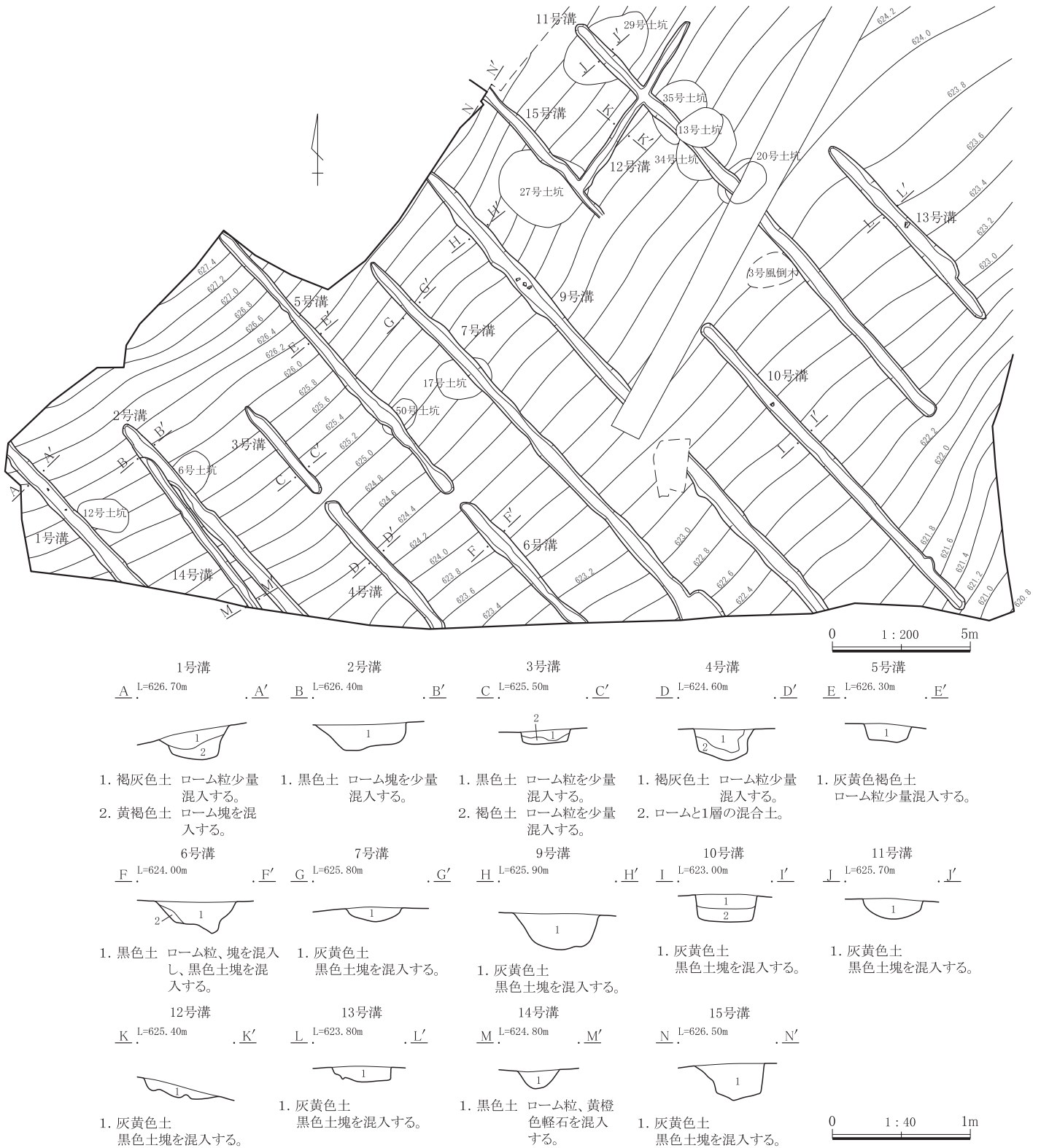
(第36図、P L 32) F-13グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも楕円形を呈する。規模は長軸1.8m、短軸1.3m、深26cmを測る。長軸方位はN-60°-Eを示す。埋土は黄橙色軽石を少量混入する締まりの強い褐灰色土を主体とする。遺物は検出されなかった。

16号土坑

(第36図、P L 33) K-20グリッドに位置する。平面形状は上面、下面とも長方形を呈する。規模は長軸1.7m、短軸0.86m、深40cmを測る。長軸方位はN-90°-Eを示す。埋土は黄橙色軽石を少量混入する褐灰色土を主体とする。遺物は検出されなかった。

第4項 溝状遺構(近世)

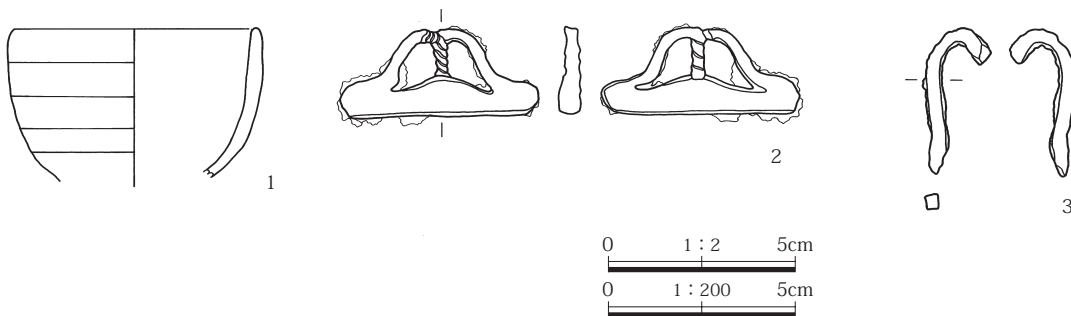
本遺跡からは14条の溝状の遺構が検出されている。その殆どが北西方向から南東方向に走行し、間隔も2m～3mの等間隔をなしている。溝遺構として考えるにはある一定の場所で一度で切れてしまい、また掘り込みが始まるというような形状であるため溝として決めつけることはできなかった。また畑のサクや畑の区画のためのものとも考えられたが、間隔や作物を植えた痕跡も認められなかったため、本遺跡では溝状遺構として取り扱った。



第37図 97区1～15溝状遺構

第4表 溝状遺構

番号	形状(長・幅・深)	走行方向	備考
1	(7.3m)・50cm・11cm	北西から南東	12号土坑と重複し、これより新しい。
2	(9.5m)・50cm・10cm	北西から南東	6号土坑、14号溝と重複し6号土坑より新しく、14号溝より古い。
3	4.2m・50cm・5cm	北西から南東	
4	(6.2m)・60cm・11cm	北西から南東	
5	(12.7m)・60cm・7cm	北西から南東	50号土坑と重複し、これより新しい。
6	(6.0m)・60cm・10cm	北西から南東	
7	(17.5m)・60cm・6cm	北西から南東	17号土坑と重複し、これより新しい。
9	(18.5m)・40cm・14cm	北西から南東	陶器丸碗が出土している。
10	14m・50cm・13cm	北西から南東	
11	19.2m・50cm・8cm	北西から南東	29号土坑と重複し、これより新しい。火打ち金、鉄製釘が出土している。
12	7.5m・40cm・4cm	北東から南西	11号溝、15号溝と重複し、これらより新しい。
13	8.5m・70cm・7cm	北西から南東	
14	(9.5m)・40cm・8cm	北西から南東	2号溝と重複しこれより新しい。
15	(6.5m)・50cm・14cm	北西から南東	12号溝と重複し、これより古い。



第5表9・11号溝状遺構出土遺物観察表

挿図番号・PL番号	器種・器形	計測値(口・高・底)	特徴及びその他
38図1・PL39	陶器丸碗	(6.3) 3.5 2.6	高台部を残し、全面に鉛釉、口縁部にウノフ釉を施釉。尾呂茶碗。瀬戸・美濃
38図2・PL39	火打ちがね	5.2 2.8 1.3	両腕上に折り曲げて結合、一端螺旋状。
38図3・PL39	釘	4.5 0.5 0.8	頭部分厚みあり。

第38図 97区溝状遺構出土遺物

第4章 遺構外出土遺物

第1節 遺構外出土遺物の概要

本遺跡の包含層からは、断続的ではあるが縄文時代草創期から晩期までの土器破片と石器が出土している。さらに、弥生時代の土器破片と近世の陶磁器破片が少量出土している。

縄文時代の撚糸文土器から早期の押型文土器、子母口式土器や沈線文系土器が数多く検出された。また、前期の関山式土器、諸磯式土器、及び中期の加曾利E式土器や後期の称名寺式土器破片等が少量ではあるが検出された。概略包含層から出土した土器では、子母口式土器段階と判定した3軒の住居跡とは別の、沈線文系土器破片が最も多く見られた。さらに、縄文時代晩期の氷式土器破片と細密条痕文土器などの弥生時代中期前半段階の土器破片が少量出土した。

一方、縄文時代の石器は、石鏃や石錐、削器、石核、打製石斧、磨製石斧、及び磨石、凹石、敲石等が出土した。石鏃の中には押型文段階と推定される鍬形鏃や、前期後半の小型石鏃も検出された。また、石鏃の未製品とともに黒曜石製の剥片と碎片も多数検出された。



第2節 遺構外出土土器(縄文草創期・早期)

第I群 草創期後半の土器

第1類 井草式(第39図1～4) PL40

1は口縁が外反する器形を呈す。R L縄紋を施す。口唇部にも施紋する。2は口縁下に絡条体を押捺して浅い凹みをつけ、以下、R 撚糸紋を縦位施紋する。3, 4はR 撚糸紋を縦位施紋する胴部破片である。

第2類 稻荷台式(第39図・第40図5～41) PL40.41

5～7は同一個体。丸頭状の口唇部形状を呈し、条間隔の空いたR 撚糸紋を縦位施紋する。8も同様の構成となる。9は口唇部が若干肥厚する。L 撚糸紋を縦位施紋する。10は丸頭状の口唇部形状を呈し、R 撚糸紋を縦位施紋する。口縁部に補修孔が穿たれる。11は口唇部が肥厚する。施紋が浅く判然としないが、L 撚糸紋を施しているようだ。12～24は胴部破片。12, 13, 16, 18～20はL、14, 15, 17, 21～24はR 撚糸紋を施す。14, 15は同一個体。24は途中で撚糸紋の走向を変えている。25～30はL 撚糸紋をまばらに施す。25はやや肥厚する口唇部形状を呈す。31, 32は同一個体で、施紋の浅いR 撚糸紋を施す。地紋に横位の擦痕を施している。33～37は条痕を縦位に施す。33は口唇部が丁寧に磨かれている。35, 36は同一個体。37は胴部破片であるが、施紋の深い条痕が施されている。38～41は無紋のもの。39は尖頭状で内削ぎの口唇部形状を呈す。40, 41は同一個体。口唇部の内外面を平らに磨くことによって、尖頭状の口唇部形状を作出している。

本類は胎土に結晶片岩を含むものが多く、5～8, 10～12, 14, 15, 17, 22～24, 31～39に含まれている。

第3類 稻荷原式(第40図42) PL41

42は節の大きな撚糸紋Rをまばらに縦位施紋する。

第II群 早期の土器

第1類 押型紋土器(第40図43) PL41

43は山形押型紋を縦位带状施紋する。薄手のつくりである。

第2類 田戸上層式併行の土器(第40図44～49) PL41

44は口縁部が内湾することから、キャリパー状の器形になると思われる。沈線により区画し、区画内に入組紋を描いているようだ。間隙に貝殻腹縁紋を矢羽根状に充填施紋する。口唇部は平らに成形し、沈線を1条めぐるせている。口唇部の内外端に貝殻腹縁によるキザミを付す。45～48は同一個体。47が内湾、48が外反することからキャリパー状の器形になると思われ、45, 46が口縁部紋様帯、47が屈曲部上位、48が胴部紋様帯の部位にそれぞれ相当すると思われる。沈線により幾何学モチーフを描き、沈線間に貝殻腹縁紋を充填施紋する。沈線の転換点などに刺突を施している。49は横位沈線を施し、沈線間に貝殻腹縁紋を斜位に充填施紋する。

第3類 子母口式(第40図50) PL41

50は口唇部を肥厚させ、口唇部と段帯部にL R縄紋を斜位に押捺する。破片が小さく判然としないが、波状口縁になるようだ。

第4類 中部系の沈線紋土器(第40・41・42・43・44図51～155)

a種 沈線と刺突を施すもの

a 1種 ペン先状刺突を施すもの(第40図51～54) PL41

51, 52は同一個体で、緩く外反する器形を呈す。先端の尖ったペン状工具による1本書き沈線で曲線や幾何学モチーフを描き、沈線間にペン先状刺突を施す。口唇部にも刺突を斜位に施す。53は波状口縁を呈す。51, 52と同様の沈線で曲線モチーフを描く。沈線間に、先端のみ押捺した短い刺突を複数条横並びに施している。口唇部にはペン先状刺突によるX字状のキザミを施す。断定はできないが、51, 52と同一個体の可能性が高い。54は口縁がくの字状に外反する器形を呈す。多条の細沈線により対向する弧状モチーフを描き、モチーフ間にやや鈍角なペン先状刺突を充填施紋する。口唇部にキザミを付す。胎土に石英粒を含み、ざらつく。本種のペン先状刺突は長野県御代田町下荒田遺跡出土資料との関連性を、また53の刺突はc種との関連性を示唆していよう。

a 2種 モチーフの間隙に刺突を施すもの(第40・41図55～69) PL41

55は角頭状の口唇部形状を呈し、緩く外反する器形を呈す。角状工具による浅く太い沈線と刺突を施す。56, 57は同一個体。口縁部に斜位の短沈線帯を成形し、横位沈線下に刺突をめぐらす。沈線は55と同様の沈線である。58は波状口縁を呈し、口縁が短く外反する。口縁下に刺突列をめぐらせ、竹管外皮によると思われる太沈線で複合鋸歯状紋を描く。沈線下に刺突を施す。胎土に石英粒、金雲母を含む。59は半截竹管内皮による平行沈線を重畳させた多条沈線により対弧状モチーフを描き、間隙に刺突を施す。胎土に石英粒を含む。60は多条の沈線により曲線モチーフを描き、刺突を沿わせている。61は横位沈線間に刺突を充填施紋する。沈線は緩く弧を描いており、曲線モチーフになるのかもしれない。62～64は同一個体。縦位区画、横位、斜位の沈線を施す。横位沈線間に刺突を施す。62にはV字状のモチーフが見られる。65は横位沈線で区画し、区画内にV字状モチーフを描く。間隙に刺突を施す。66は横位、弧状の沈線間に刺突を充填施紋する。67は浅く太い沈線を横位に施し、櫛歯状刺突を充填施紋する。68は多条の沈線を斜位に施し、刺突を施す。69は多条の沈線を斜位に施し、間隙に同様の短沈線を施している。胎土に石英粒を含み、ざらつく。

a 3種 区画紋として刺突を施すもの(第41・42図70～88) PL41.42

70は緩く外反する器形を呈す。口縁下に刺突をめぐらせ、斜位の沈線を施す。口唇部にキザミを付す。71は口縁下に刺突をめぐらせ、鋸歯状の沈線を施す。口唇部にキザミを付す。72は波状口縁を呈す。口縁に沿って半截竹管状工具による刺突列を2条施し、複合鋸歯紋を描く。口唇部にキザミを付し、さらに波頂部内面にV字状、斜位に延びる押引を施す。胎土に石英粒を含み、ざらつく。73は口縁から横位多段に半截竹管状工具による刺突列を施す。74, 76, 79は同一個体。幅広で鈍角なペン先状刺突に近い刺突を口縁下に2条めぐらせ、複合鋸歯紋のようなモチーフを描く。紋様帯下は多段の刺突列で区画する。口唇部にキザミを付す。75は口縁下に斜位の刺突列、3条の横位沈線を施して区画、さらに紋様帯内を縦位区画し、縦位鋸歯状の沈線を施す。77は角押状の刺突列で区画、紋様帯内に多条の沈線により弧状モチーフを描く。78は半截竹管による刺突列で紋様帯を区画、紋様帯内は半截竹管による多条の沈線を横位、斜位に施す。紋様帯下は無紋となる。80～88は紋様帯下端の部位。80は半截竹管による刺突を横位に4条施す。区画紋上位に斜位の沈線が見える。紋様帯下は横位の浅い条痕が施されている。81は3条の横位沈線の上から刺突を1条施して紋様帯を区画、紋様帯内は多条の沈線によりモチーフが描かれる。紋様帯下は無紋となる。82は竹管外皮による刺突列により紋様帯を区画、紋様帯内は横位多段に沈線を施している。紋様帯下は無紋となる。83は先割れ工具による刺突をめぐらせて紋様帯を区画する。紋様帯下は縦位の条痕が施される。84は半截竹管状工具による沈線を横位、斜位に施し、横位沈線下に刺突をめぐらす。85は角状工具による太沈線を横位に施し、沈線間に斜位の細沈線を施紋するもので、刺突列で区画している。86は横位沈線を施し、先割れ工具による円形刺突で区画する。紋様帯下は無紋となる。87は角状工具により浅く太い沈線を施し、角押刺突で挟んでいる。

第4章 遺構外出土遺物

紋様帯下は条痕状の浅い沈線を縦位に施す。88は横位沈線を施し、斜位の短沈線で区画する。紋様帯下は無紋となる。

a 4種 口唇部にキザミを付すもの(第42図89～98) PL42

89は斜位に沈線を施す。90は角状工具による浅く太い沈線を斜位に施し、口唇部に角押状刺突を施す。91は外反する器形を呈す。多条の短沈線を斜位に施す。口唇部に縦位、斜位のキザミを付す。92も外反する器形を呈す。多条の沈線を横位、弧状に施す。補修孔が穿たれている。93は緩く外反する器形を呈す。沈線を垂下させて縦位区画し、区画内は縦位鋸歯状沈線を描くと思われる。口唇部の刺突はペン先状に似る。94は条線を斜位に施す。胎土に石英粒を含み、ざらつく。95は胴部が膨らみ、口縁が緩く外反する器形を呈す。口縁下に横位3条の沈線をめぐらせ、紋様帯内は縦位区画、斜位の沈線を施す。角状工具を用いた浅く太い沈線である。口唇部内面にキザミを付す。96, 98は同一個体。斜位や斜格子目、弧状の沈線を施す。97は多条の沈線を斜位に施す。

b種 沈線を施すもの(第42・43・44図99～139) PL43.44

99, 100は同一個体。横位沈線によって区画し、区画内に斜位の沈線を充填施紋する横帯が口縁下に少なくとも2帯認められる。101, 102は同一個体。口縁下に3条の沈線をめぐらせ、以下、斜位に沈線を施す。102は横位沈線間に斜位の沈線を充填施紋するが、101よりも下位の部位と思われ、斜位の沈線を充填施紋した横帯が複数段施されていることがわかる。103は横位沈線によって紋様帯を区画し、上下2帯の紋様帯をもつ。上位は横位鋸歯状の沈線を施し、下位は斜格子目紋を施す。施紋具は多截竹管内皮のような緩い凹弧をもつ工具である。104は緩く外反する器形を呈す。口縁下から斜格子目沈線を施す。106は直立する器形を呈す。半截竹管状工具による沈線を口縁下に3条と胴部上半にめぐらせて1帯の幅広の紋様帯を区画する。さらに紋様帯内を縦位区画し、区画内を対角線を境に方向を変えた斜位の沈線を充填施紋する。105は106と同一個体のような。107は106の区画内と同様の沈線を施す。108は緩く外反する器形を呈す。多条の沈線を斜位に施す。109は横位、斜位に沈線を施す。110は斜位に多条の沈線を施す。器壁4mmと薄いつくりである。111, 112は同一個体。口縁が緩く外反する器形を呈す。角状工具による斜位の沈線を施しており、横位鋸歯状のモチーフになるとと思われる。口縁内面は磨かれて平滑である。113は多条の沈線を弧状に施す。114～116は同一個体。口縁が緩く外反する器形を呈す。竹管外皮によるような底面が丸く太い沈線を斜位多段に施す。横位沈線で画されており、紋様帯下は無紋となる。117は角状工具による太沈線を横位、斜位に施す。118は角状工具による太沈線を斜位に施す。119は多截竹管内皮によるような沈線を斜位に施す。地紋に擦痕を施す。120は角状工具による太沈線を横位に施す。121は120と同一個体。器面がほとんど剥落しているが、横位多段に沈線を施しているようだ。122, 123は角状工具による浅く太い沈線を鋸歯状に施す。124は沈線により幾何学モチーフを描き、内部に沈線を充填施紋する。125は斜位に沈線を施す。126は横位沈線で区画し、区画内に複合鋸歯状の沈線を施す。127～131は縦位区画の沈線が認められるもの。127は複数条の沈線により縦位区画し、区画内に斜位の沈線を施す。128は破片の左端が縦位沈線の部分で欠損している。縦位区画された紋様帯内を縦位鋸歯状沈線で三角形状に区画し、内部を斜位や弧状の沈線で充填施紋していると思われる。129は1条の沈線を垂下させて縦位区画し、紋様帯内に縦位鋸歯状の沈線を施す。胎土に石英粒を含み、ざらつく。130, 131も129と同様の構成になるものと思われる。130は地紋に条痕状の沈線を施している。132～135は紋様帯下端の部位と思われ、横位沈線により紋様帯を区画するものである。それぞれ複数条の沈線で紋様帯を区画し、紋様帯内に斜位の沈線を施している。134, 135には縦位区画の沈線が見られる。紋様帯下は無紋となる。136も紋様帯下端の部位と思われるが、紋様帯を画す区画紋が施されない。137～139は平

行沈線を用いて紋様を描出するもので、若干様相を異にする土器である。137は縦位区画していると思われ、紋様帯内には波状や斜位の平行沈線を施す。地紋に擦痕を施している。138, 139は同一個体。斜位の沈線に波状沈線を沿わせている。

c種 「上林中道南式」(第44図140～155) PL44

140, 142, 143は同一個体。直立する器形を呈し、口縁下に先割れ工具による刺突をめぐらせる。縦位区画の条線を施し、紋様帯内は鋸歯状や菱形状の条線を施す。間隙に櫛歯状刺突を施す。141は弧状の条線を施す。144～151は横位や鋸歯状、菱形状などの条線を施し、間隙に櫛歯状刺突を施す。152は斜位の条線を施す。153は斜位の条線を施し、条線に沿って櫛歯状刺突によるレンズ状紋を描いている。154, 155は同一個体で紋様帯下端の部位。条線を施した上から角押状刺突を押捺して紋様帯を画している。紋様帯下は無紋となる。

第5類 絡条体圧痕紋を施すもの(第44図156～159) PL44

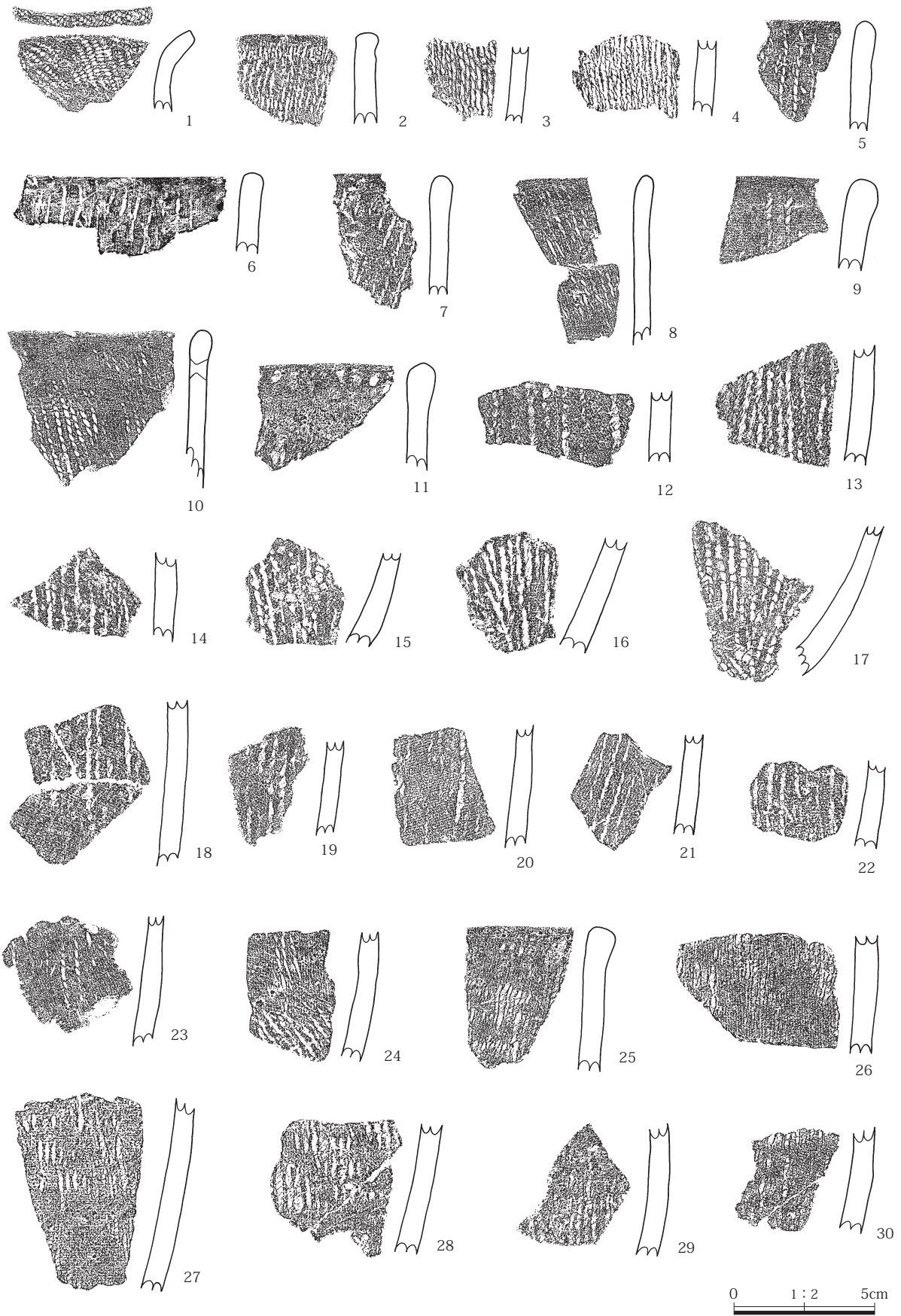
156, 157は同一個体で、緩く外反する器形を呈す。斜位の絡条体圧痕を施す。内面は平滑に成形されている。158はまばらに横位の絡条体圧痕を施す。159は縦位の絡条体圧痕を施す。

第6類 条痕を施すもの(第44・45図160～179) PL44.45

160～175は半截竹管状工具や先割れ工具などを用いて条痕状に施したもので、いわゆる条痕紋系土器の貝殻条痕とは様相を異にする。また内面には施紋されない。164の口唇部には斜位のキザミが付されており、第42図96などとの関連がうかがえる。171は内面が研磨されて平滑である。176～179は分厚いつくりや内外面に条痕が施されるといった様相をもつもので、おそらく160～175より後出のものであり、条痕紋系土器に伴うものであろう。

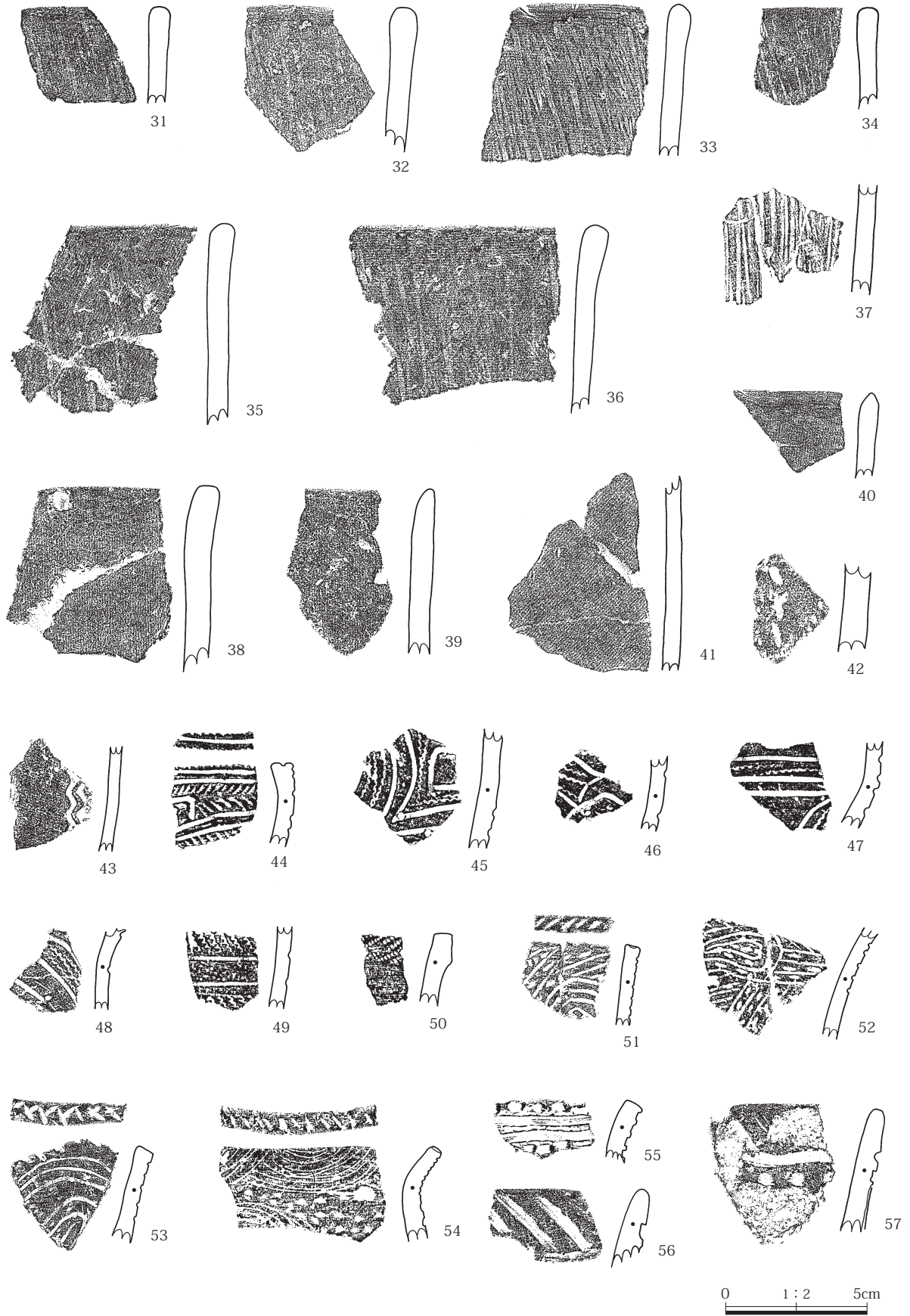
第7類 無紋土器(第45図180～184) PL45

180は丸頭状の口唇部形状を呈す口縁部破片。181～183は胴部破片で、181は石英粒を含み、ざらつく。183は外面が研磨されて平滑である。184は乳房状の底面である。本類は無紋土器のため帰属時期は確定できないが、胎土の様相等から判断すれば概ね4類に伴うものと考えられる。

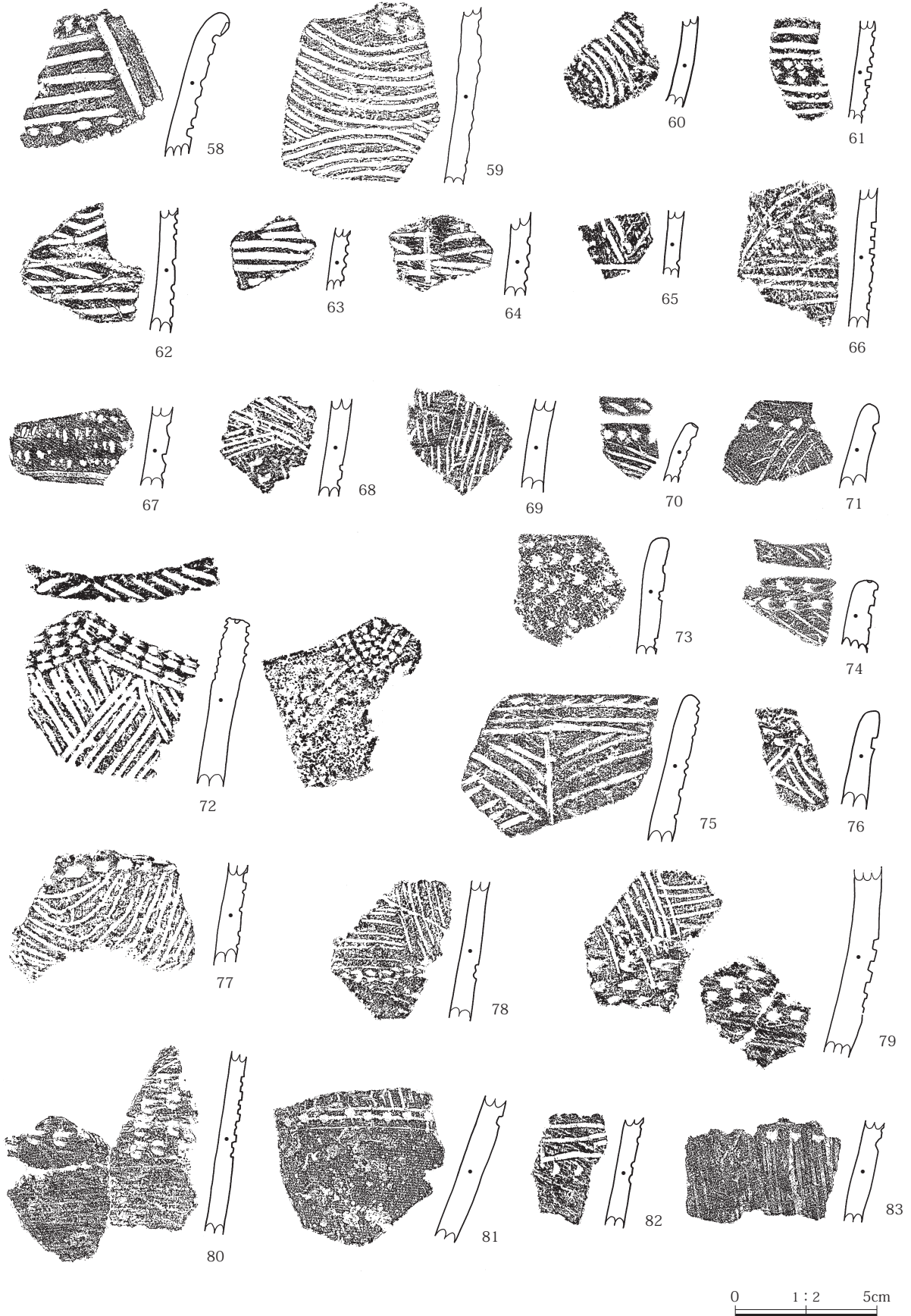


第39図 縄文草創期・早期遺構外出土土器(1)

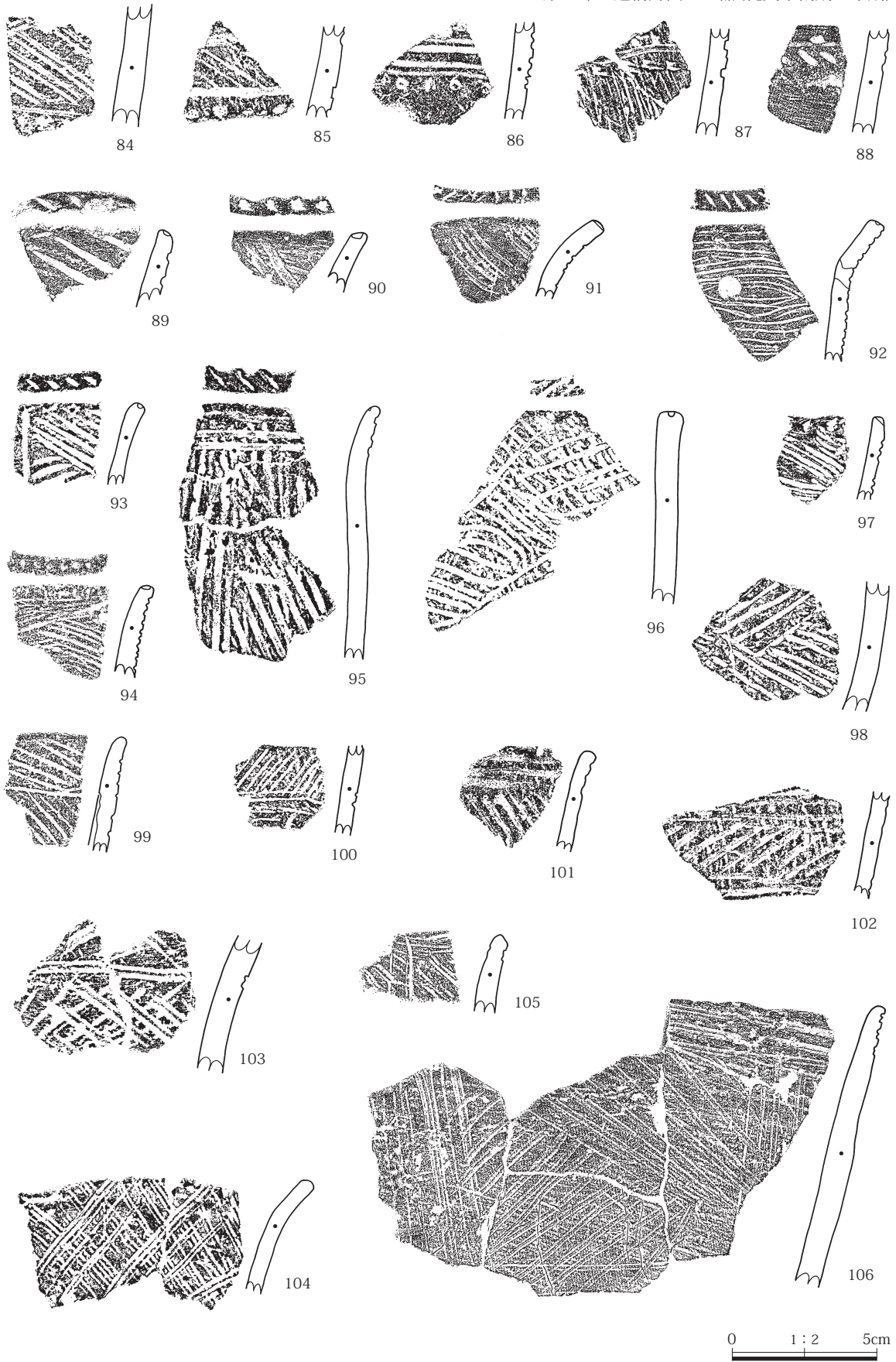
第2節 遺構外出土器(縄文草創期・早期)



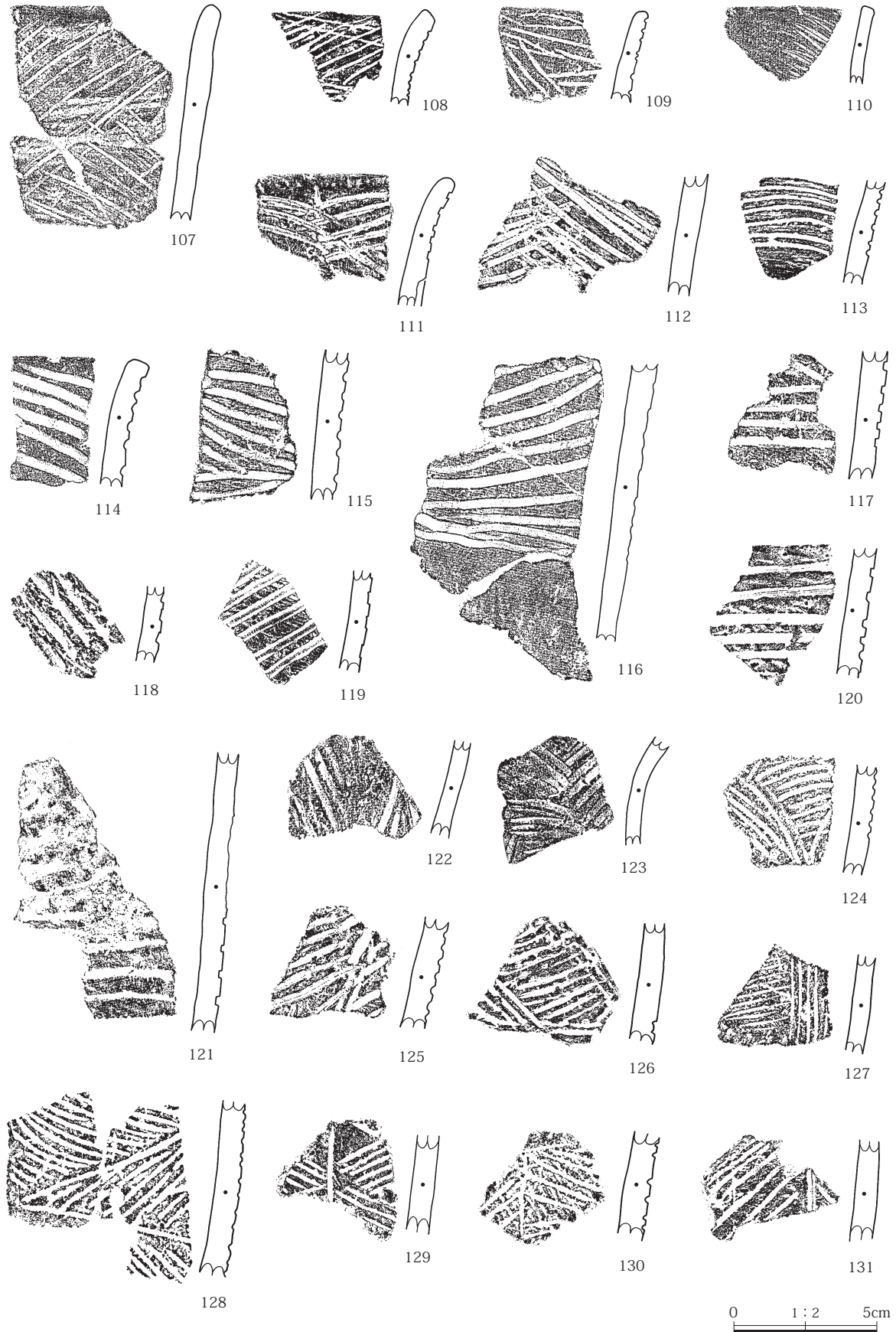
第40図 縄文草創期・早期遺構外出土土器(2)



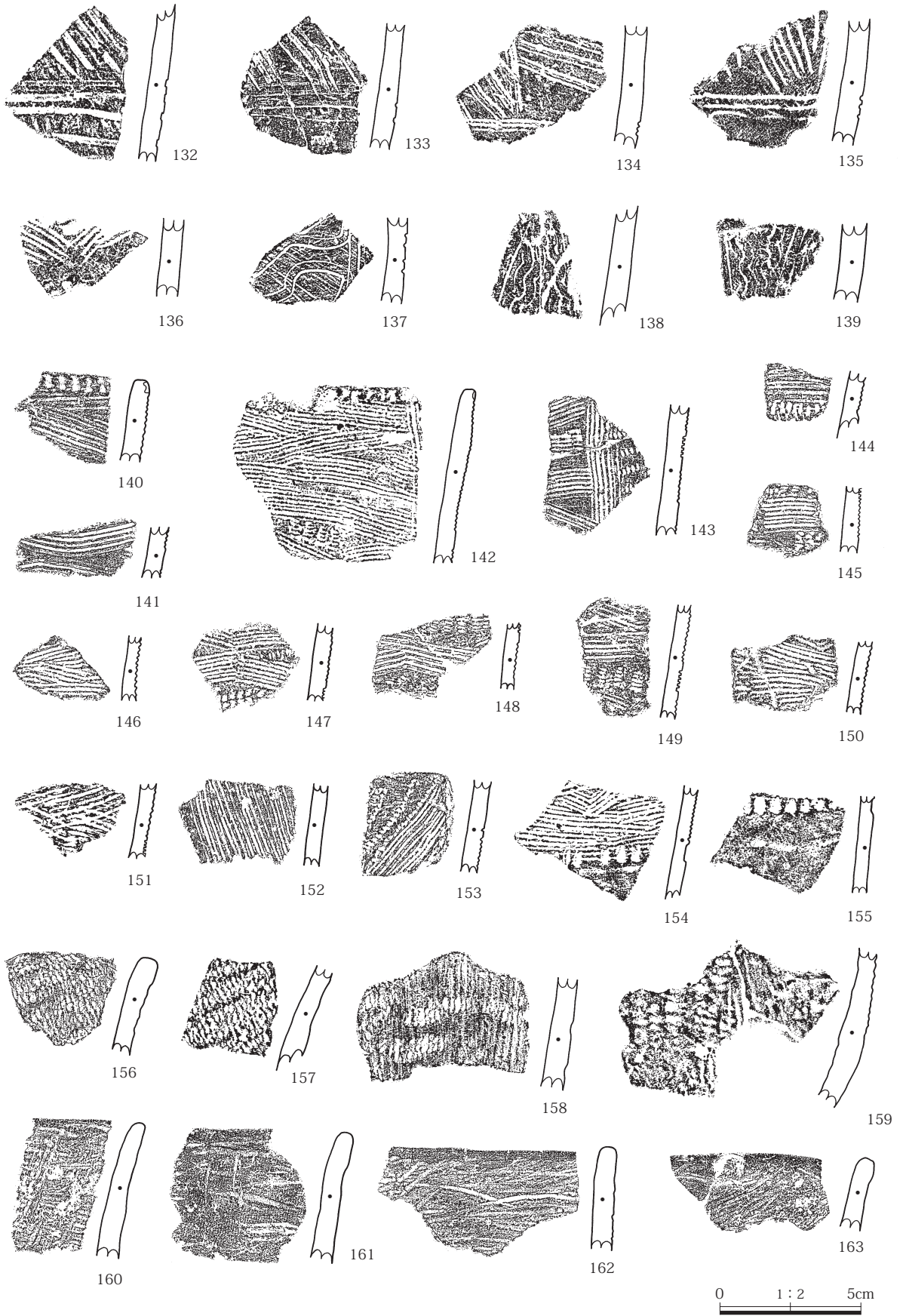
第41図 縄文草創期・早期遺構外出土土器(3)



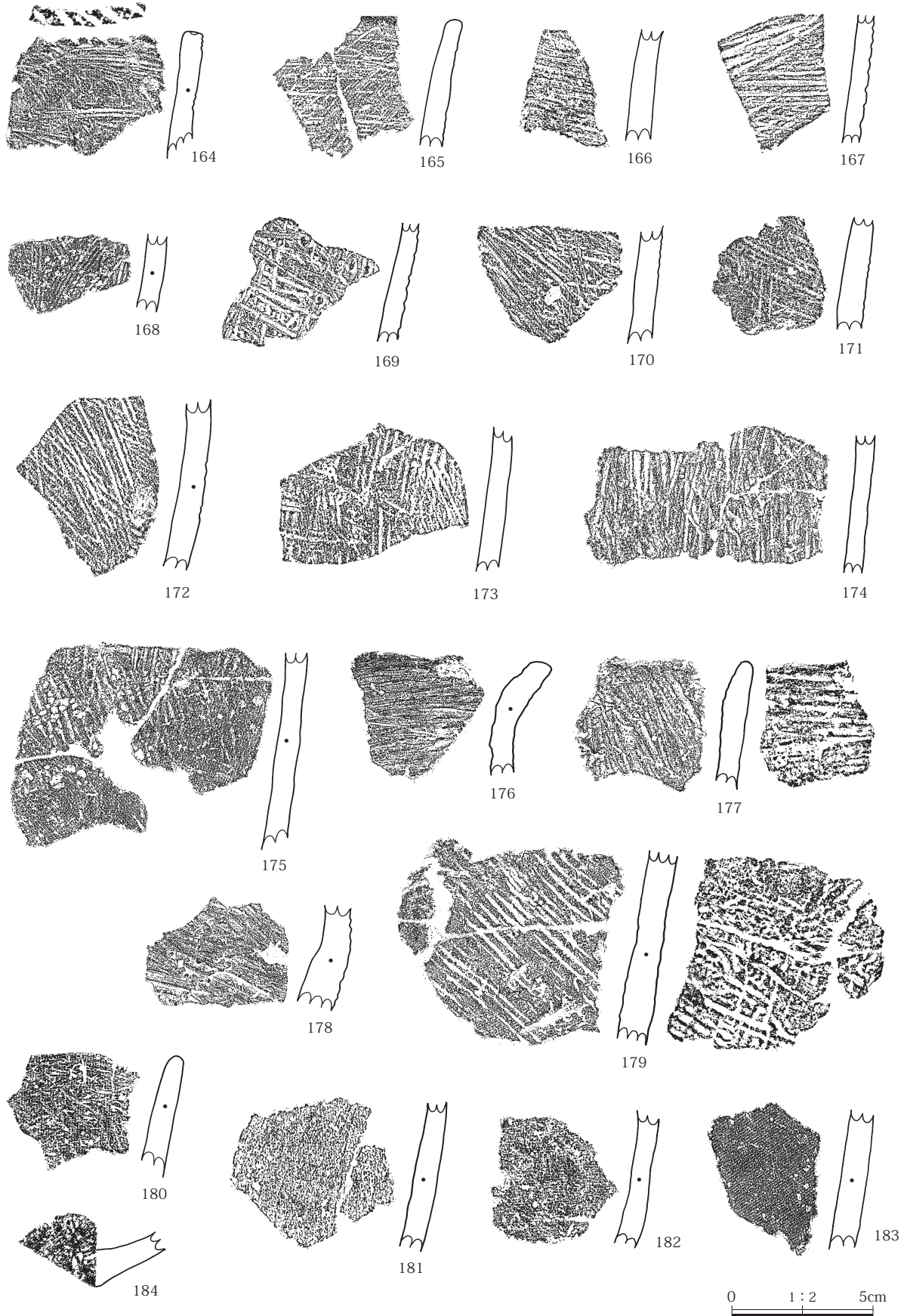
第42図 縄文草創期・早期遺構外出土土器(4)



第 43 図 縄文草創期・早期遺構外出土土器 (5)

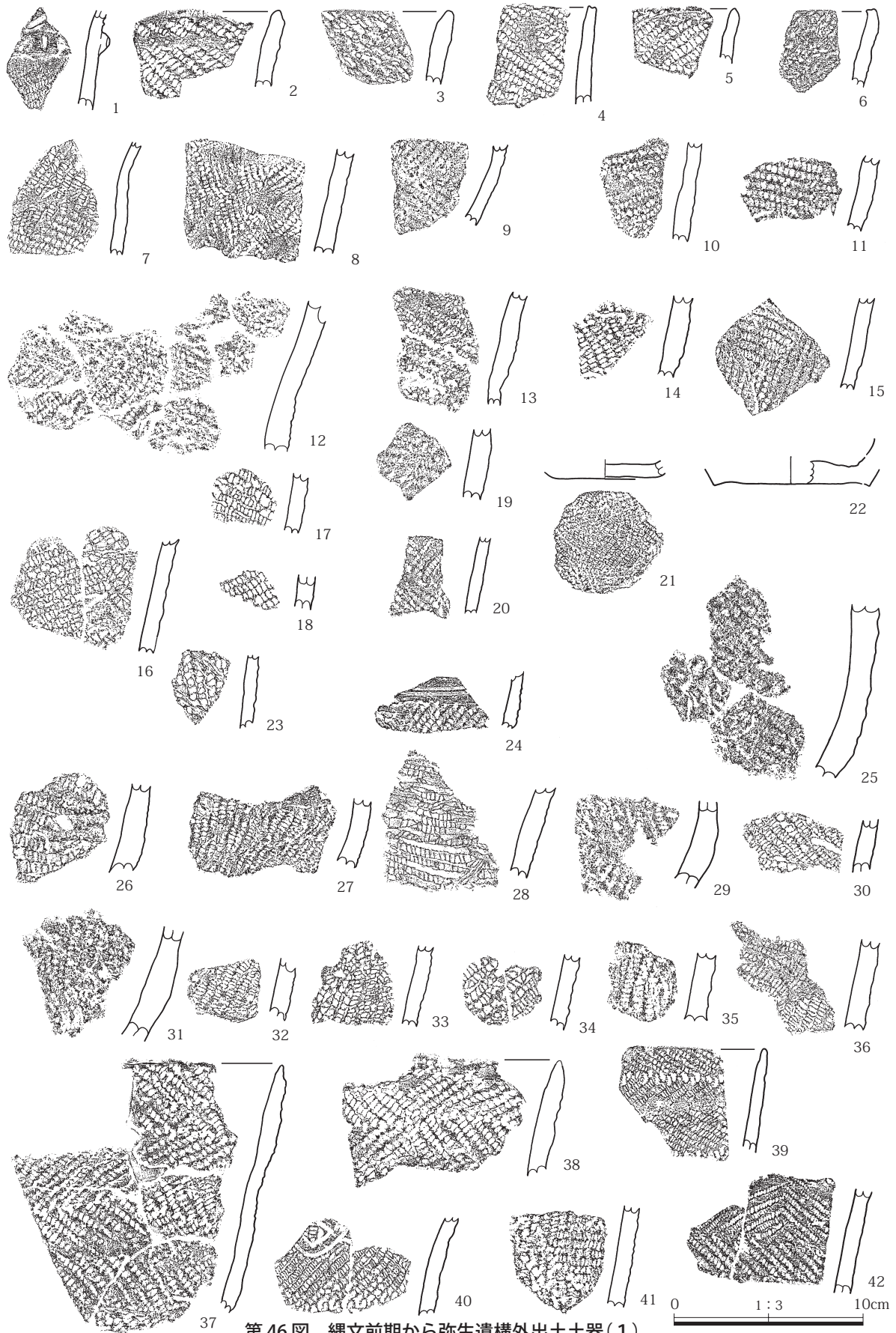


第44図 縄文草創期・早期遺構外出土土器(6)



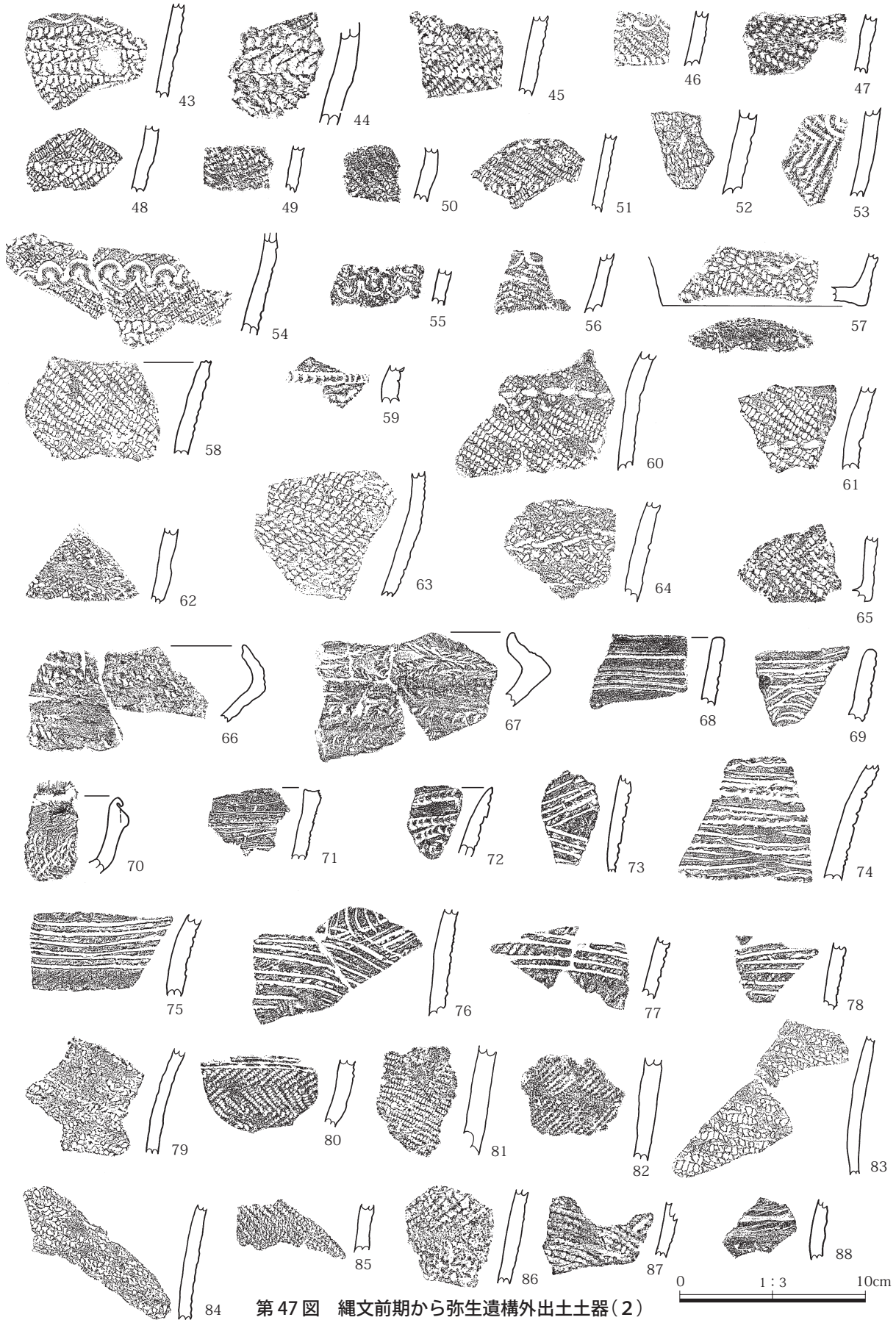
第45図 縄文草創期・早期遺構外出土土器(7)

第3節 遺構外出土土器（縄文前期から弥生中期）



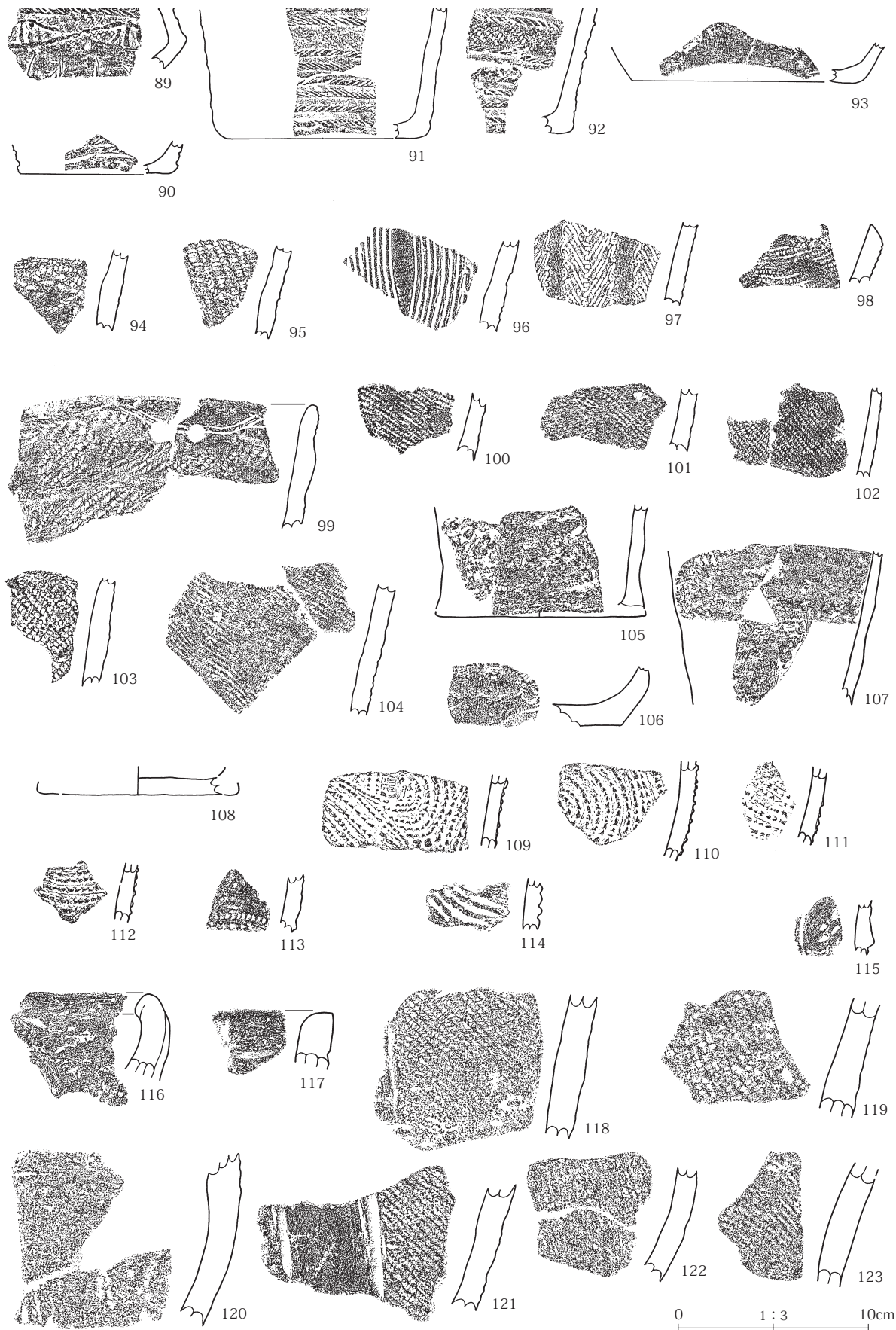
第46図 縄文前期から弥生遺構外出土土器(1)

第4章 遺構外出土遺物



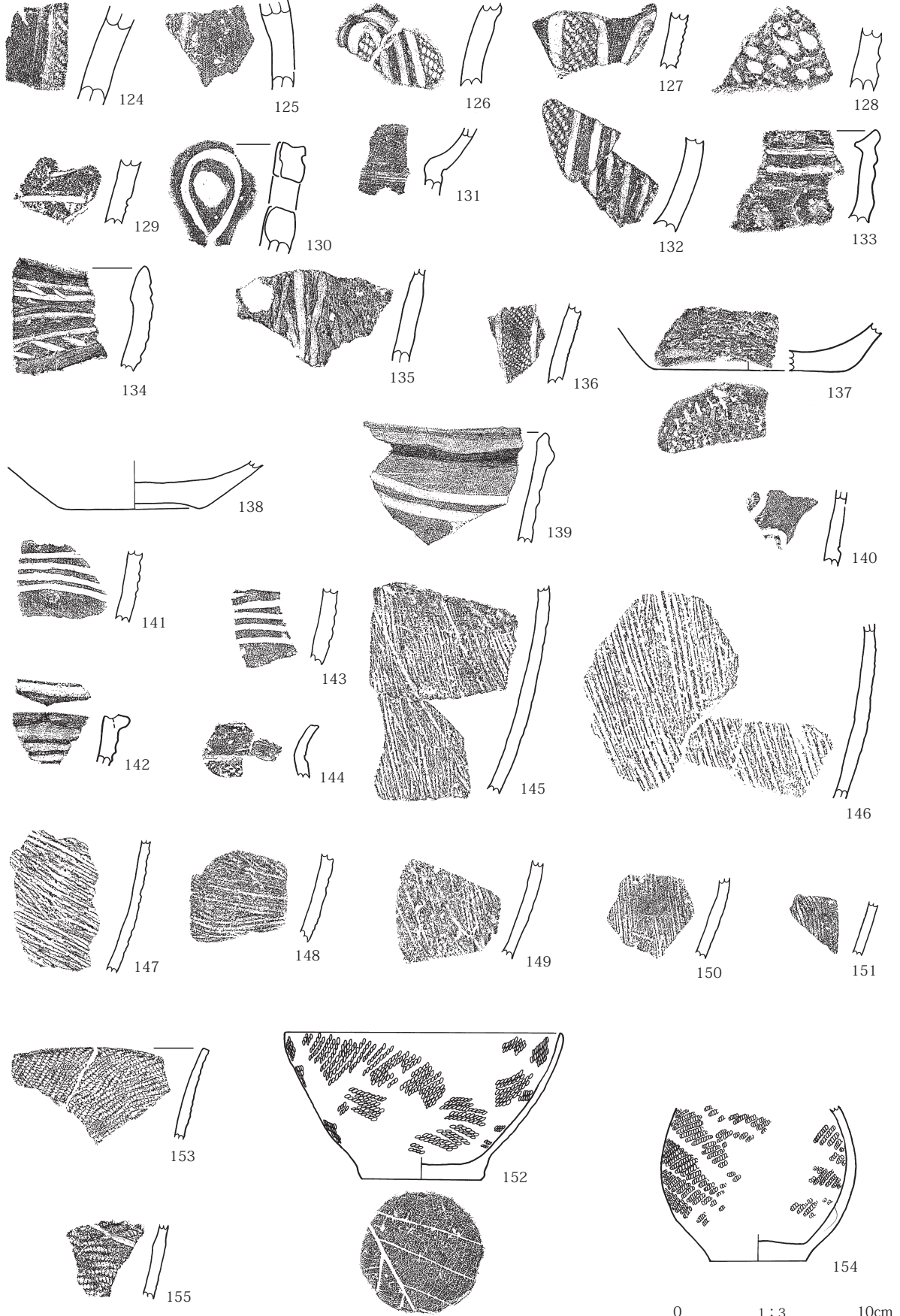
第47図 縄文前期から弥生遺構外出土土器(2)

第3節 遺構外出土土器(縄文前期から弥生中期)



第48図 縄文前期から弥生遺構外出土土器(3)

第4章 遺構外出土遺物

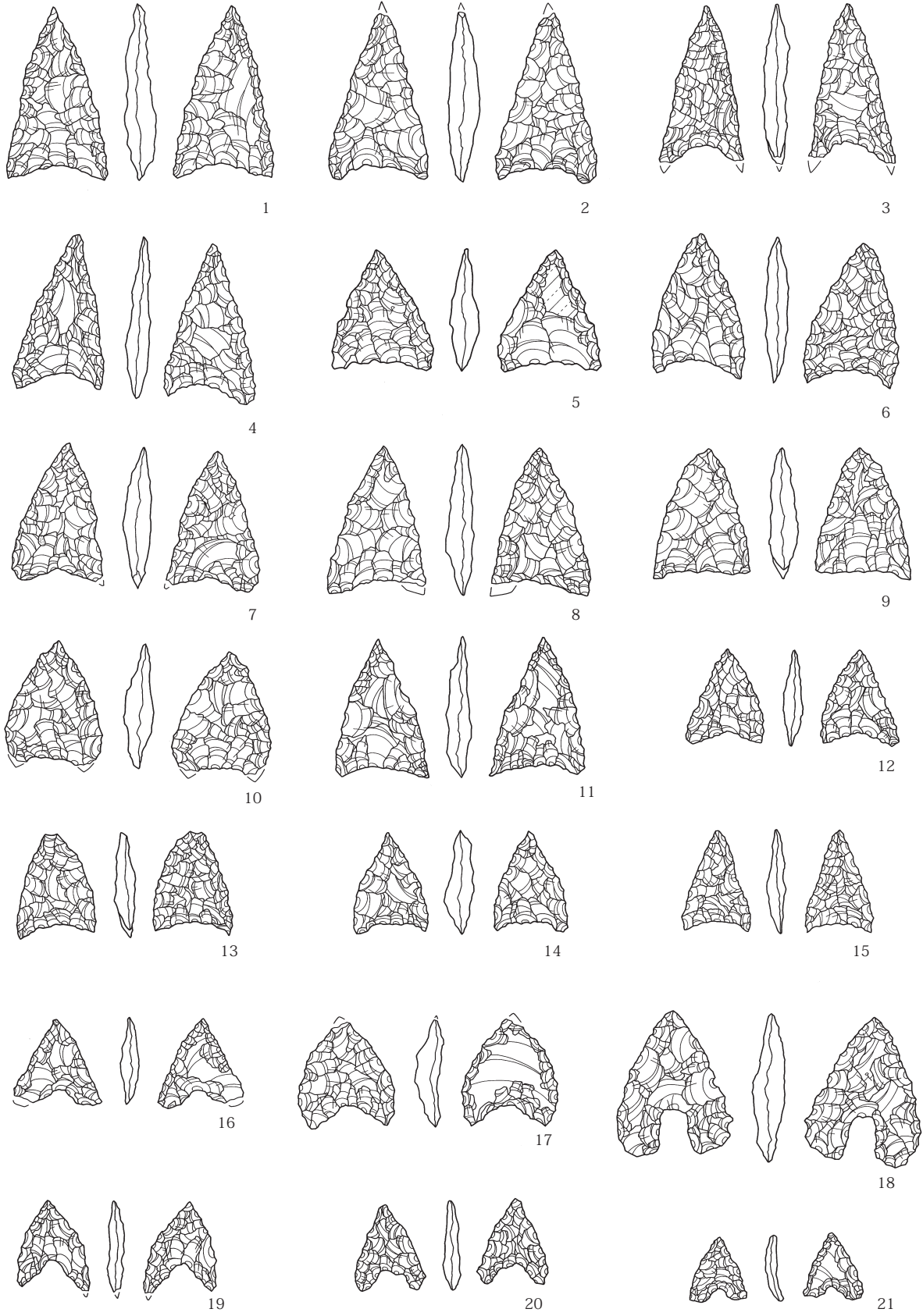


0 1:3 10cm

第49図 縄文前期から弥生遺構外出土土器(4)

第4節 遺構外出土石器

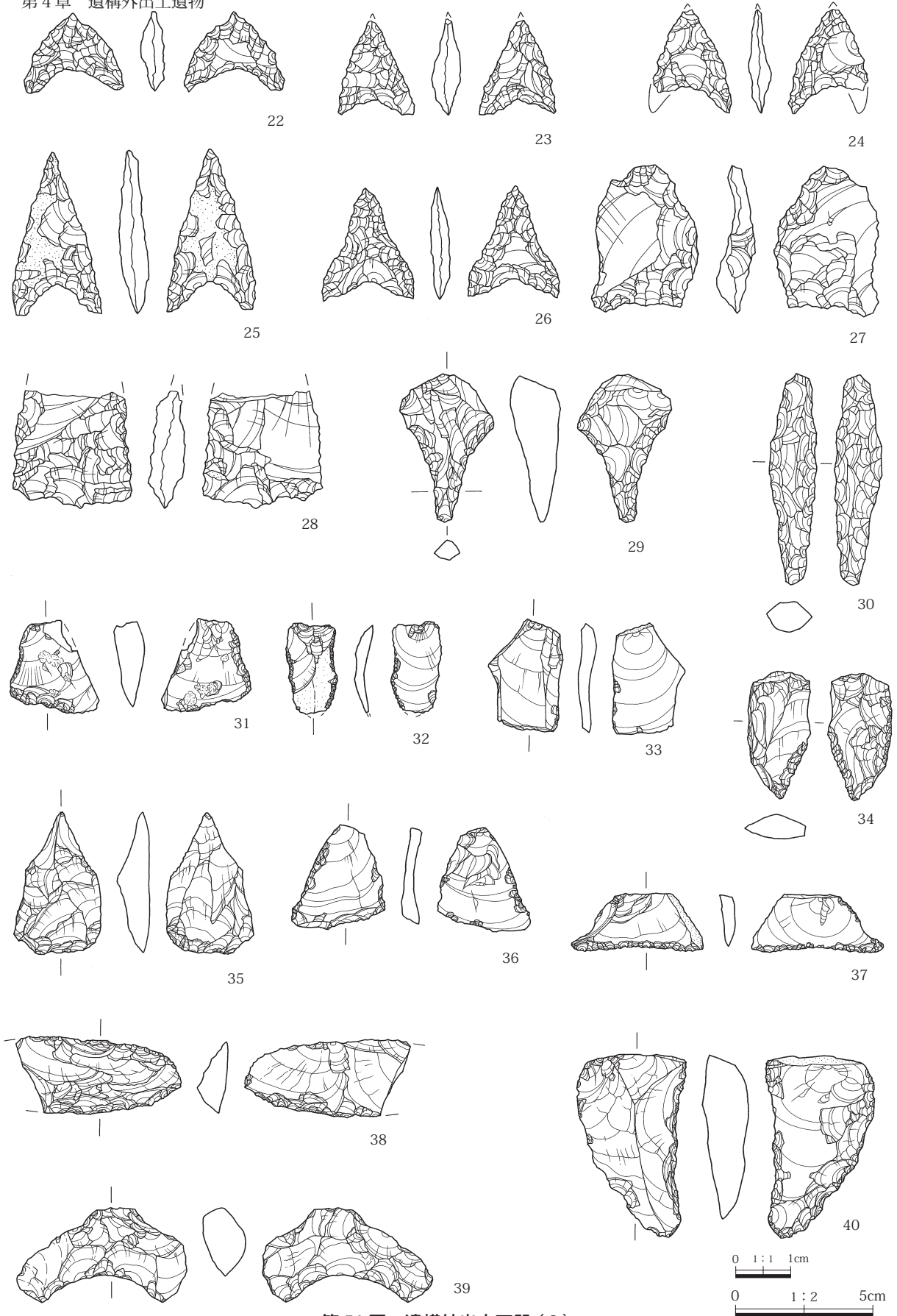
第4節 遺構外出土石器



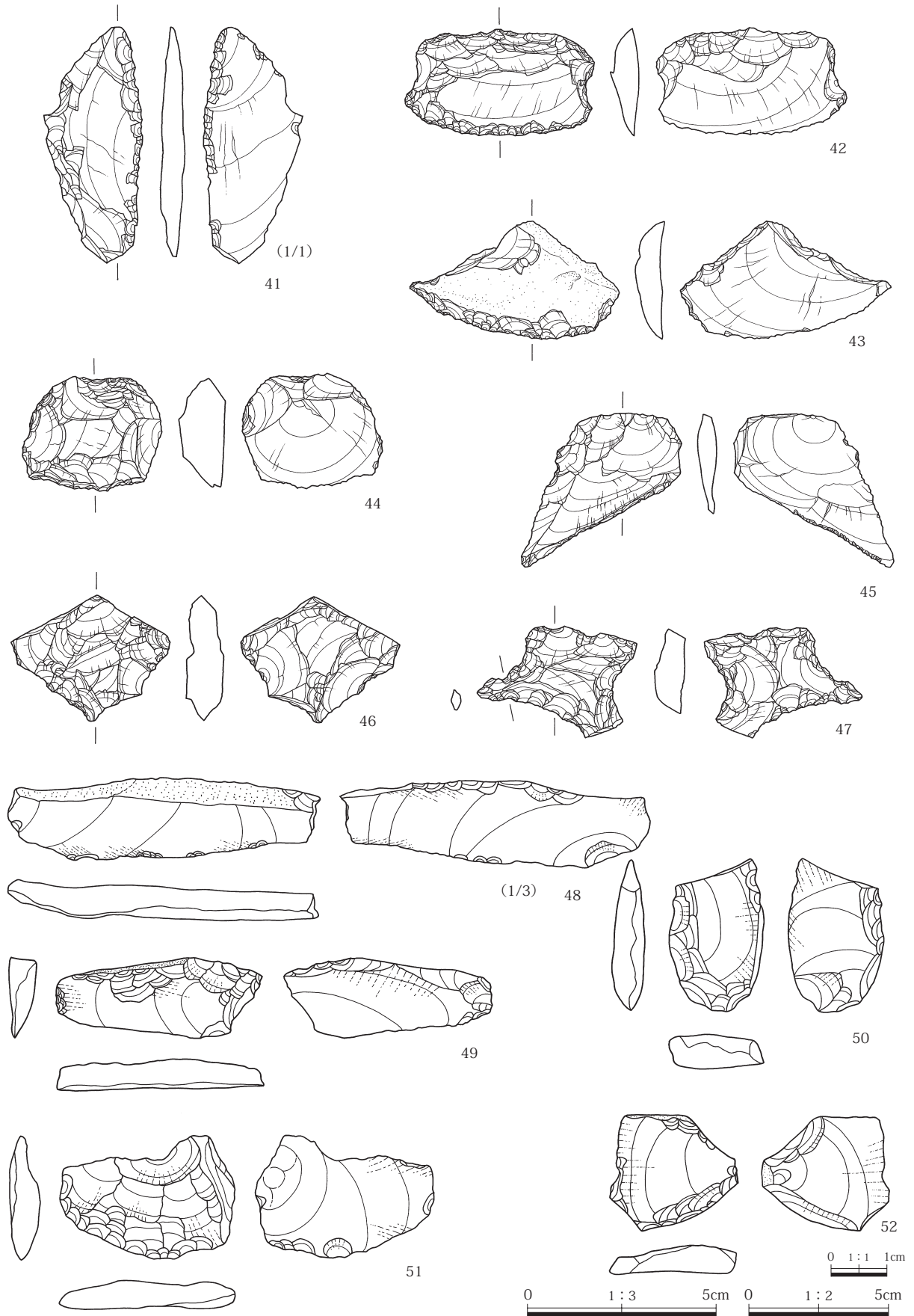
第50圖 遺構外出土石器(1)

0 1:1 1cm

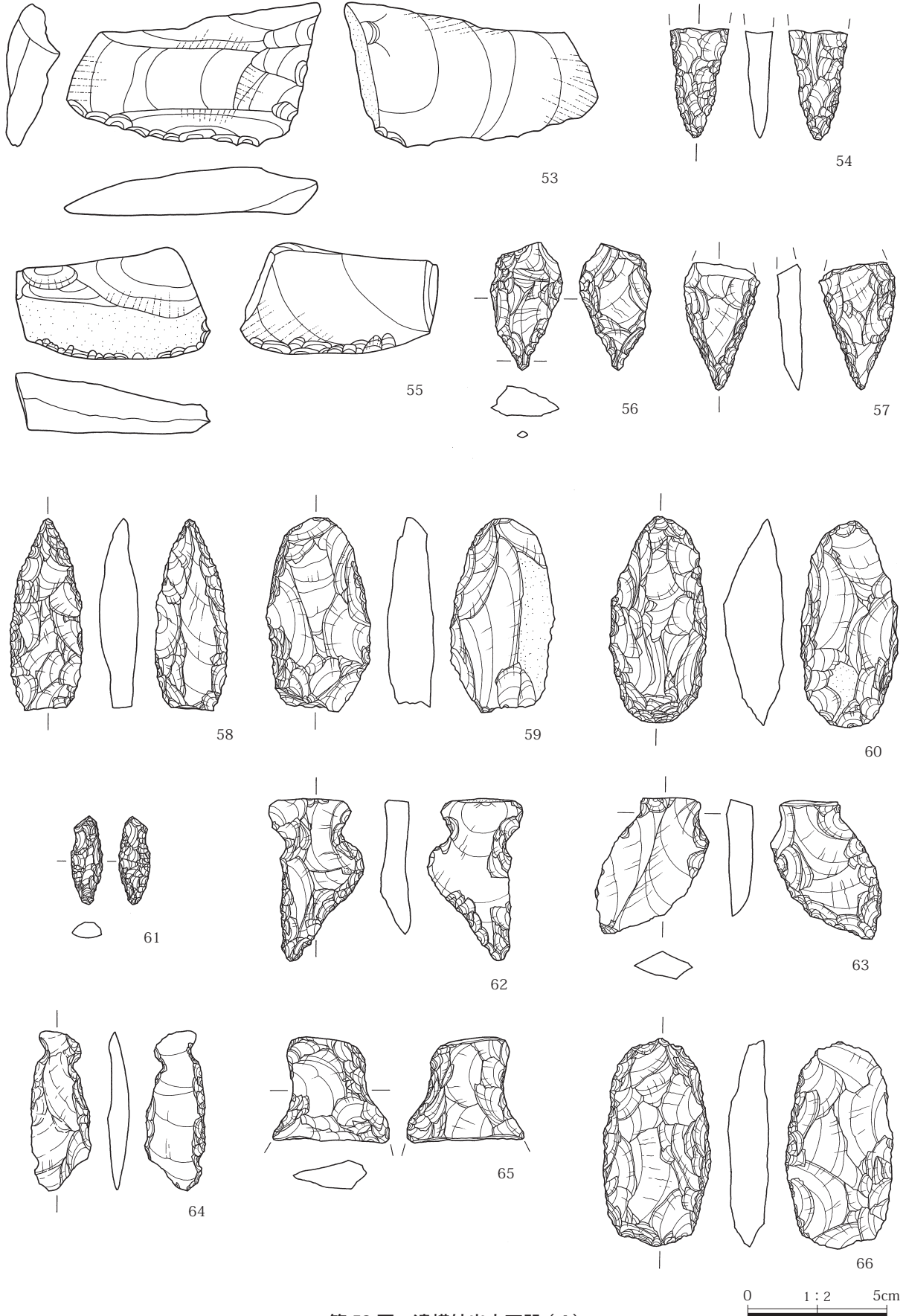
第4章 遺構外出土遺物



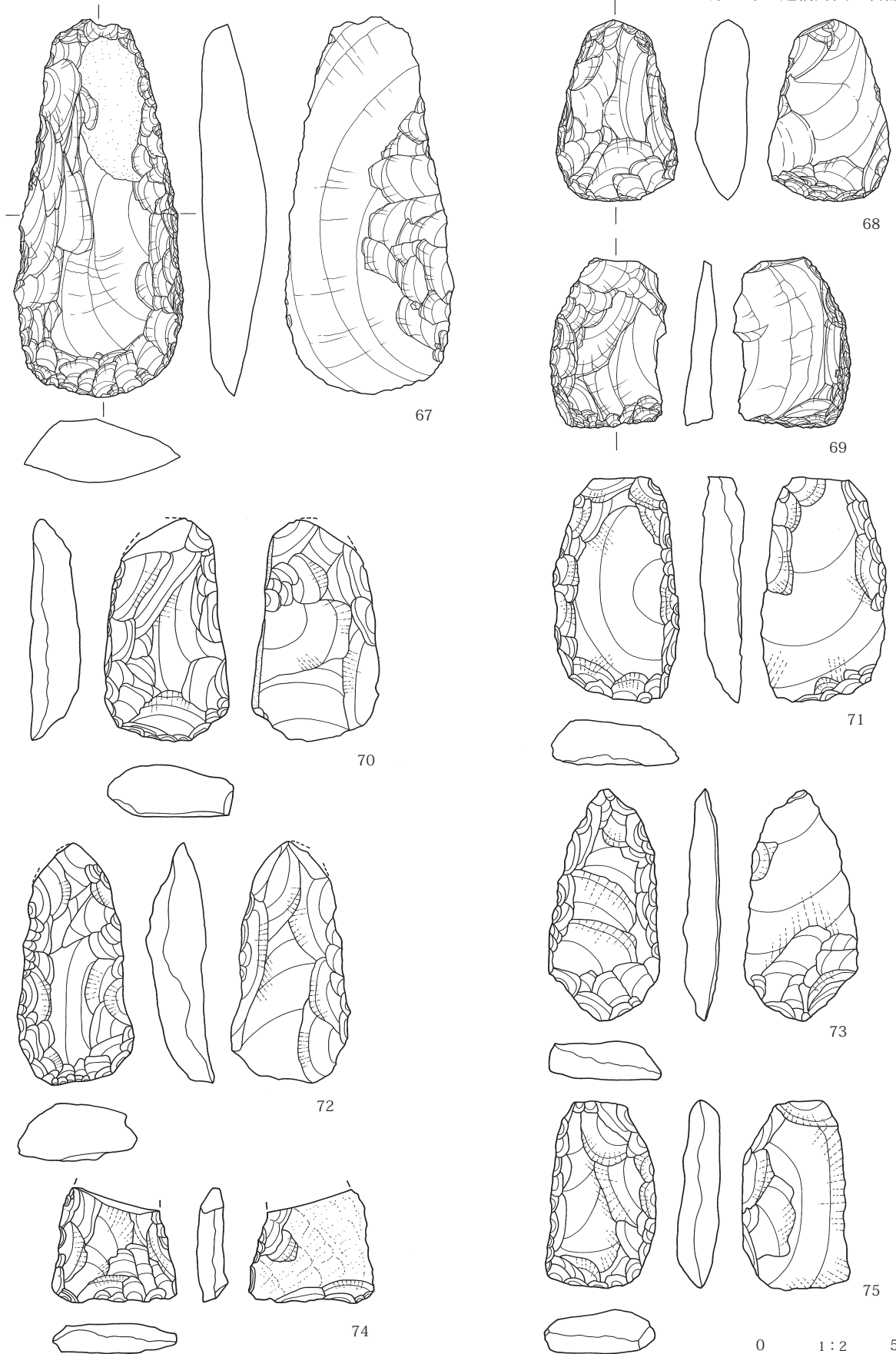
第51図 遺構外出土石器(2)



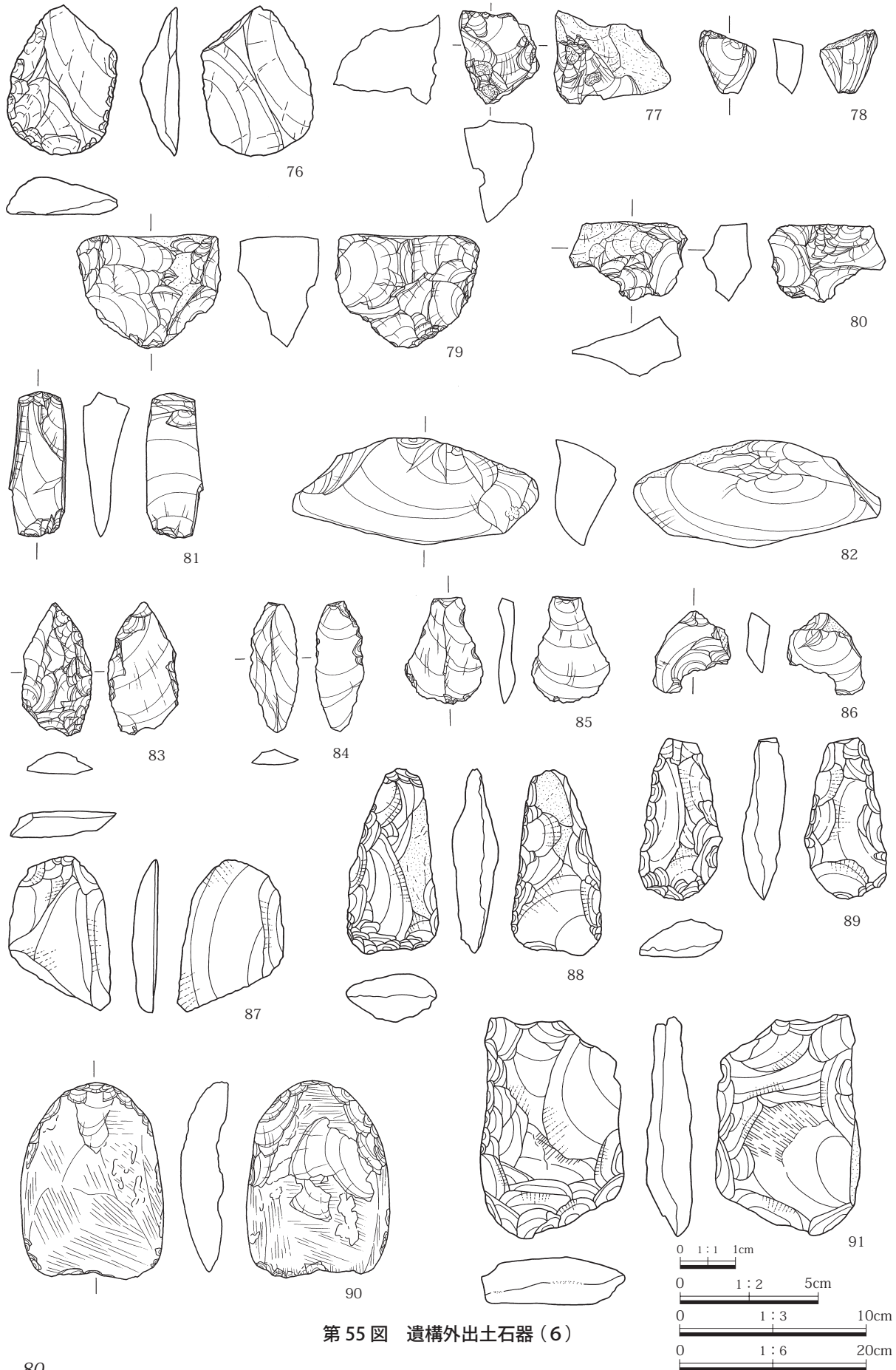
第52図 遺構外出土石器(3)



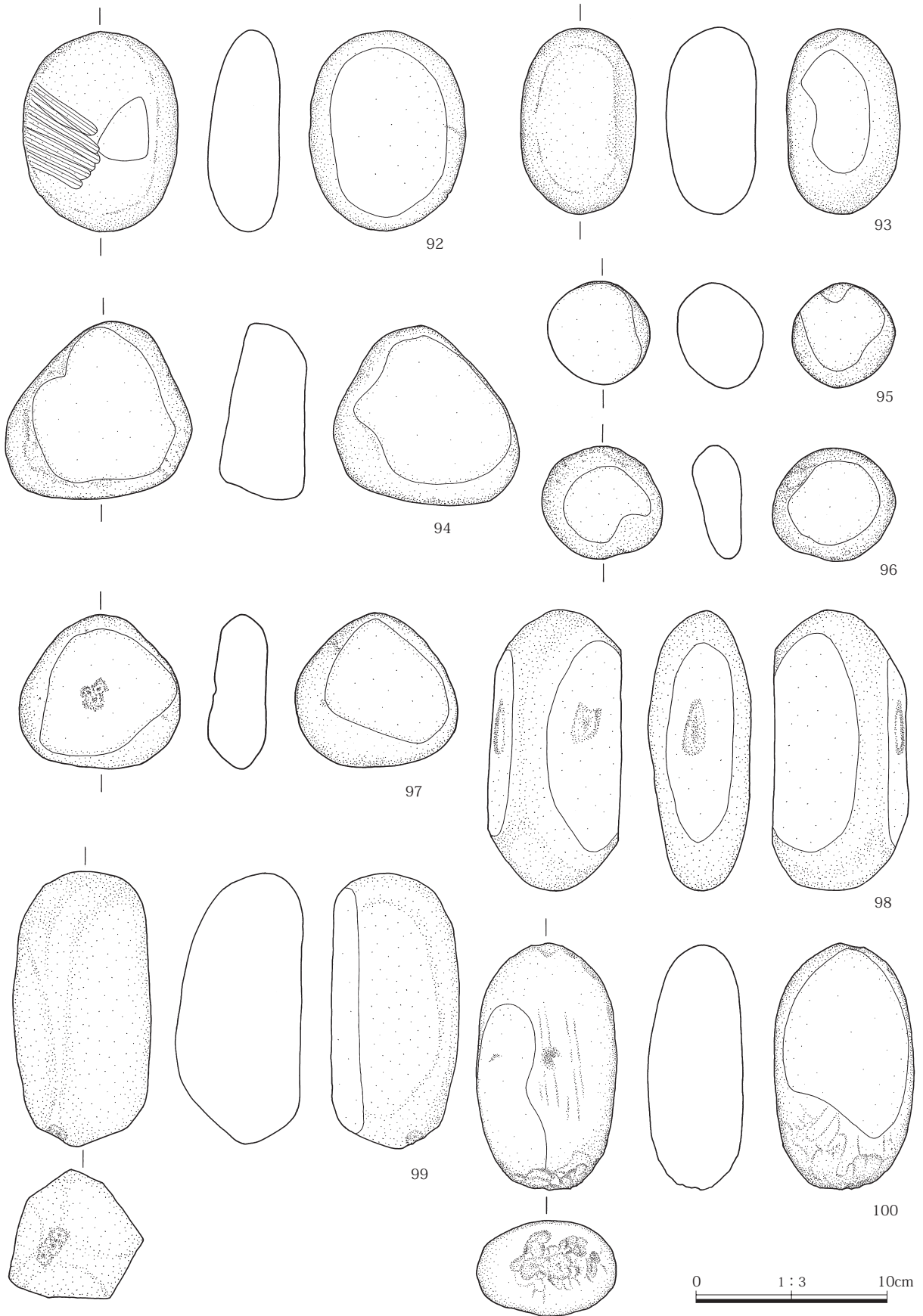
第53図 遺構外出土石器(4)



第54図 遺構外出土石器(5)



第55図 遺構外出土石器(6)



第56図 遺構外出土石器(7)

第6表 縄文早期以降グリッド出土遺物観察表

図版番号 PL番号	No.	器種	出土位置	部位	胎土	焼成	色調	器形・文様の特徴	時期
挿図 46 PL46	1	深鉢	7-D-4	胴部	繊維	良好	鈍赤褐色	刻みを付す横位隆帯上位は沈線文。下位は横位LRを施す	前期初頭
挿図 46 PL46	2	深鉢	7-D-4	口縁	繊維	良好	鈍橙色	口唇部歪む。口唇部直下より横位RL施文。内面凹凸	前期初頭
挿図 46 PL46	3	深鉢	97-A-25	口縁	繊維	良好	黒褐色	無節R横位施文	前期初頭
挿図 46 PL46	4	深鉢	7-D-4	口縁	繊維	良好	灰褐色	口唇部端部より0段多条RL横位施文	前期初頭
挿図 46 PL46	5	深鉢	7-C-3	口縁	繊維	良好	鈍褐色	LR横位施文。下端に結束の痕跡。羽状構成か	前期初頭
挿図 46 PL46	6	深鉢	7-C-2	口縁	繊維	良好	暗褐色	横位LRを施す。施文は口唇端部に及ぶ	前期初頭
挿図 46 PL46	7	深鉢	7-D-4	胴部	繊維	良好	褐灰色	薄手。屈曲部。横位LRとRLによる羽状構成	前期初頭
挿図 46 PL46	8	深鉢	7-D-3	胴部	繊維	良好	鈍褐色	LRとRLの羽状構成。やや乱雑な施文	前期初頭
挿図 46 PL46	9	深鉢	97-D-24	胴部	繊維	良好	褐色	横位LR・RLによる羽状構成	前期初頭
挿図 46 PL46	10	深鉢	7-D-3	胴部	繊維	良好	鈍褐色	横位LRを施す。内面凹凸顕著	前期初頭
挿図 46 PL46	11	深鉢	97-E-20	胴部	繊維	軟質	鈍褐色	横位RLを施す。内面煤付着	前期初頭
挿図 46 PL46	12	深鉢	7-B-1	胴部	繊維	良好	鈍褐色	器面磨滅。横位LR・RLによる羽状・菱形状構成	前期初頭
挿図 46 PL46	13	深鉢	7区表採	胴部	繊維	良好	褐色	器面剥落。横位RLを施す。内面凹凸顕著	前期初頭
挿図 46 PL46	14	深鉢	7区表採	胴部	繊維	やや軟	暗褐色	0段多条RLを横位に施す。端部結束か	前期初頭
挿図 46 PL46	15	深鉢	7-C-3	胴部	繊維	良好	鈍褐色	追加施文部か。上位は横位LR・RL施文。下位はRL横位施文	前期初頭
挿図 46 PL46	16	深鉢	7-D-5	胴部	繊維	やや軟	鈍褐色	横位LR・RLによる菱形状構成	前期初頭
挿図 46 PL46	17	深鉢	7-C-3	胴部	繊維	良好	鈍褐色	横位RLを施す	前期初頭
挿図 46 PL46	18	深鉢	7-D-5	胴部	繊維	良好	褐色	無節R横位施文	前期初頭
挿図 46 PL46	19	深鉢	7-E-5	胴部	繊維	やや軟	鈍褐色	横位RLを施す	前期初頭
挿図 46 PL46	20	深鉢	7-D-4	胴部	繊維	良好	鈍褐色	横位LR・RLによる羽状構成。あるいは菱形状か	前期初頭
挿図 46 PL46	21	深鉢	7-B-1	底面	繊維	良好	鈍橙色	平底。端部は丸みを帯びる。底面に0段多条RLを密に施文する	前期初頭
挿図 46 PL46	22	深鉢	7-C-2	底面	繊維	良好	暗褐色	平底。あるいは上げ底か。底面は撫でにより平滑	前期初頭
挿図 46 PL46	23	深鉢	7-B-4	胴部	繊維	良好	褐色	薄手の器厚。横位RLを施す	前期初頭
挿図 46 PL46	24	深鉢	7-C-3	胴部	繊維	良好	暗褐色	幅狭の横位平行沈線以下横位LRを施す	前期初頭
挿図 46 PL46	25	深鉢	7-B-1	胴部	繊維	軟質	暗褐色	0段多条RL・LRによる横位羽状構成	花積下層式
挿図 46 PL46	26	深鉢	7-B-4	胴部	繊維	やや軟	鈍褐色	底面近く尖底か。0段多条RL斜位施文	花積下層式
挿図 46 PL46	27	深鉢	7-D-5	胴部	繊維	良好	鈍褐色	0段多条LRを横位に施す。原体幅短い	花積下層式
挿図 46 PL46	28	深鉢	7-D-5	胴部	繊維	良好	明褐色	付加条RL+lを施す	前期前半
挿図 46 PL46	29	深鉢	7-D-4	胴部	繊維	やや軟	明褐色	底面近く尖底か。0段多条RL斜位施文	花積下層式
挿図 46 PL46	30	深鉢	7-E-2	胴部	繊維	良好	鈍褐色	0段多条RLを横位に施す	花積下層式
挿図 46 PL46	31	深鉢	7-B-1	胴部	繊維	良好	鈍橙色	底面直上か。あるいは尖底。無節R斜位施文	花積下層式
挿図 46 PL46	32	深鉢	7-B-1	胴部	繊維	良好	鈍橙色	0段多条LRを横位に施す	花積下層式
挿図 46 PL46	33	深鉢	7-D-24	胴部	繊維	やや軟	鈍褐色	胴部下半か。LR斜位施文	花積下層式
挿図 46 PL46	34	深鉢	97-E-23	胴部	繊維	軟質	鈍褐色	横位LRを施す	花積下層式
挿図 46 PL46	35	深鉢	7-B-1	胴部	繊維	やや軟	黒褐色	0段多条RLを横位に施す	花積下層式

図版番号 PL番号	No.	器種	出土位置	部位	胎土	焼成	色調	器形・文様の特徴	時期
挿図 46 PL46	36	深鉢	7-C-3	胴部	繊維	良好	暗褐色	0段多条LR・RLによる横位羽状構成	花積下層式
挿図 46 PL46	37	深鉢	7-C-2・3	口縁	繊維	やや軟	鈍橙色	口唇部尖る。横位結節LR・RLによる崩れた菱形状構成。	関山式
挿図 46 PL46	38	深鉢	7-B-3	胴部	繊維	やや軟	鈍橙色	口唇部歪む。結節LR・RL横位施文による菱形状構成	関山式
挿図 46 PL46	39	深鉢	97-C-23	口縁	繊維	良好	灰褐色	口唇部尖る。結節LR・RLによる横位羽状構成。	関山式
挿図 46 PL46	40	深鉢	97-D-22	胴部	繊維	良好	鈍褐色	長足末端環付LRと平行沈線による交互波状文を配す	関山1式
挿図 46 PL46	41	深鉢	7-C-2	胴部	繊維	やや軟	灰褐色	末端環付RL以下LR・RLによる菱形状構成	関山式
挿図 46 PL46	42	深鉢	7-C・B-2	胴部	繊維	良好	黄橙色	横位LRとRLの縦位羽状構成下、横位RLを施す	関山1式
挿図 47 PL46	43	深鉢	97-D-22	胴部	繊維	やや軟	褐灰色	コンパス文以下横位刺突列と末端環付LRを横位多段に配す	関山1式
挿図 47 PL46	44	深鉢	7-C-2	胴部	繊維	やや軟	鈍橙色	上位は横位RL、下位は末端環付LRを多段に施す	関山式
挿図 47 PL46	45	深鉢	7-C-1	胴部	繊維	やや軟	黄橙色	末端環付横位LR・RLによる羽状構成	関山式
挿図 47 PL46	46	深鉢	7-D-2	胴部	繊維	良好	鈍褐色	コンパス文以下末端環付RLを横位に施す	関山1式
挿図 47 PL47	47	深鉢	7-D-4	胴部	繊維	良好	褐色	やや薄手。横位LR・RLによる羽状構成	関山1式
挿図 47 PL47	48	深鉢	97-D-22	胴部	繊維	良好	浅黄橙	末端環付横位LR・RLによる菱形状構成	関山1式
挿図 47 PL47	49	深鉢	7-D-4	胴部	繊維	良好	鈍褐色	横位LRとRLによる羽状構成	関山1式
挿図 47 PL47	50	深鉢	7-D-4	胴部	繊維	良好	鈍褐色	横位LRを施す	関山1式
挿図 47 PL47	51	深鉢	7-C-1	胴部	繊維	良好	鈍橙色	LRと末端環付RLによる横位羽状構成	関山式
挿図 47 PL47	52	深鉢	7-D-4	胴部	繊維	良好	橙色	横位LRとRLによる羽状構成	関山1式
挿図 47 PL47	53	深鉢	7-D-2	胴部	繊維	軟質	灰褐色	半截竹管によるコンパス文以下はLR・RLによる菱形状構成か	関山1式
挿図 47 PL47	54	深鉢	97-C-24	胴部	繊維	良好	鈍褐色	末端環付横位LR・RLによる羽状構成にコンパス文を加える	関山1式
挿図 47 PL47	55	深鉢	7-C-2	胴部	繊維	良好	鈍褐色	横位RLと半截竹管よるコンパス文	関山1式
挿図 47 PL47	56	深鉢	7-D-2	胴部	繊維	良好	鈍褐色	コンパス文と横位LR・LRが施される。縦位波状構成か	関山1式
挿図 47 PL47	57	深鉢	7-D-4	底面	繊維	良好	鈍褐色	僅かに上げ底。横位RLを施す。施文は底面に及ぶ	関山1式
挿図 47 PL47	58	深鉢	7-D-4	口縁	繊維	良好	灰褐色	横位RLを施す。口唇端部も施文される。内面凹凸顕著	黒浜式
挿図 47 PL47	59	深鉢	97-A-25	胴部	繊維	良好	橙色	半截竹管による横位連続爪形文	黒浜式
挿図 47 PL47	60	深鉢	7-D-4	胴部	繊維	良好	黒褐色	横位RLを地文とし、屈曲部に横位刺突文を施す	黒浜式
挿図 47 PL47	61	深鉢	7-C-4	胴部	繊維	良好	灰褐色	横位RLを地文とし、大柄の刺突文を横位に施す	黒浜式
挿図 47 PL47	62	深鉢	97-M-20	胴部	繊維	良好	鈍褐色	横位RLとLRによる羽状構成	黒浜式
挿図 47 PL47	63	深鉢	97-D-24	胴部	繊維	良好	灰褐色	横位LRとRLによる羽状構成。内面平滑	黒浜式
挿図 47 PL47	64	深鉢	7-D-2	胴部	繊維	良好	灰褐色	横位RLを施す。原体端部結節部を回転施文する	黒浜式
挿図 47 PL47	65	深鉢	7-D-4	胴部	繊維	良好	褐色	横位LR・RLによる羽状構成	黒浜式
挿図 47 PL47	66	深鉢	7-C-3	口縁	細粒	やや軟	暗褐色	強く内湾する口縁部。波状縁か。横位RLを施す	諸磯b式
挿図 47 PL47	67	深鉢	7-E-4・25	口縁	細粒	やや軟	鈍橙色	屈折部の浮線文。爪形状刻みを付す	諸磯b式
挿図 47 PL47	68	深鉢	7-D-2	口縁	細粒	良好	褐色	平縁。浅い横位平行沈線が多段に施される	諸磯b式
挿図 47 PL47	69	深鉢	7-C-3	口縁	細粒	良好	暗褐色	緩やかな波状縁。平行沈線文と円形貼付文を付す	諸磯b式
挿図 47 PL47	70	深鉢	97-C-25	口縁	粗粒	良好	暗褐色	口唇部外反。瘤状小突起以下弧線状沈線を施す。地文はLR	諸磯b式

図版番号 PL番号	No.	器種	出土位置	部位	胎土	焼成	色調	器形・文様の特徴	時期
挿図 47 PL47	73	深鉢	7-C-3	胴部	細粒	良好	鈍褐色	横位無節Lを地文とし、平行沈線を斜位に施す。菱形状意匠か	諸磯b式
挿図 47 PL47	74	深鉢	7-C-3	胴部	粗粒	良好	褐色	口縁部下の横位平行沈線多段施文。一部が結節状となる	諸磯b式
挿図 47 PL47	75	深鉢	7-D-3	胴部	細粒	良好	暗褐色	横位無節Lを地文とし、平行沈線を横位に施す。施文は深い	諸磯b式
挿図 47 PL47	76	深鉢	7-C-3	胴部	粗粒	良好	鈍褐色	平行沈線による弧状・斜位意匠を配す	諸磯b式
挿図 47 PL47	77	深鉢	7-D-4	胴部	細粒	良好	鈍橙色	横位無節Lを地文とし、平行沈線を横位に施す。施文は深い	諸磯b式
挿図 47 PL47	78	深鉢	7-C-3	胴部	細粒	良好	灰褐色	横位無節Lを地文とし、平行沈線を横位に施す。	諸磯b式
挿図 47 PL47	79	深鉢	7-D-1	胴部	細粒	良好	灰褐色	横位RLを施す	諸磯b式
挿図 47 PL47	80	深鉢	7-D-5	胴部	繊維少	良好	橙色	横位平行沈線以下横位LR・RLによる羽状構成。内面煤付着	諸磯a式
挿図 47 PL47	81	深鉢	7-C・D-1	胴部	細粒	良好	褐灰色	胴部上半か。横位RLを施す	諸磯b式
挿図 47 PL47	82	深鉢	97-F-24	胴部	細粒	良好	鈍橙色	横位RLを施す	諸磯b式
挿図 47 PL47	83	深鉢	7-B-1	胴部	細粒	良好	黒褐色	横位RLを施す。内面研磨	諸磯b式
挿図 47 PL47	84	深鉢	7-E-1	胴部	粗粒	良好	鈍橙色	胴部下半。横位RL細縄文を施す	諸磯b式
挿図 47 PL47	85	深鉢	7-B-1	胴部	細粒	良好	鈍褐色	縦位LRを施す	諸磯b式
挿図 47 PL47	86	深鉢	97-D-20	胴部	粗粒	やや軟	褐色	胴部下半か。LR横位施文。内面煤付着	諸磯b式
挿図 47 PL47	87	深鉢	7-C-3	胴部	細粒	やや軟	褐灰色	横位RLを施す	諸磯b式
挿図 47 PL47	88	深鉢	7-C-1	胴部	細粒	良好	褐色	横位浮線文。幅広の刻みを施す	諸磯b式
挿図 48 PL47	89	深鉢	7-D-3	胴部	粗粒	良好	褐色	浮線文による下半区画文。地文は横位RL	諸磯b式
挿図 48 PL47	90	深鉢	7-C-3	底面	細粒	良好	褐灰色	無節Lを地文とし、横位平行沈線を施す	諸磯b式
挿図 48 PL47	91	深鉢	7-D-3	底面	細粒	良好	鈍橙色	横位浮線文。矢羽状刻みを施す	諸磯b式
挿図 48 PL47	92	深鉢	7-D-2	底面	粗粒	良好	鈍褐色	横位RLを地文とし横位浮線文を多段に付す。矢羽状刻みを施す	諸磯b式
挿図 48 PL47	93	鉢か	7-C-3	底面	粗粒	良好	橙色	底径広く強く開く体部下半。薄手で無文	諸磯b式
挿図 48 PL47	94	深鉢	7-D-4	胴部	繊維	良好	褐色	横位RLを施す。やや乱れた施文	前期前半
挿図 48 PL47	95	深鉢	7-D-4	胴部	繊維	良好	暗褐色	0段多条横位RL原体端部結節部を施す。内面凹凸顕著	前期前半
挿図 48 PL47	96	深鉢	97-K-18	胴部	細粒	良好	灰褐色	幅狭の弧状平行沈線による対弧状意匠	諸磯b式
挿図 48 PL47	97	深鉢	7-E-2	胴部	細粒	良好	灰褐色	縦位結節羽状縄文を等間隔に配す。内面煤付着	五領ヶ台式
挿図 48 PL47	98	深鉢	97-E-24	胴部	細粒	良好	黒褐色	LR縄文を横位に施す	前期後半
挿図 48 PL47	99	深鉢	7-C-3・4	口縁	粗粒	良好	褐色	口縁部に幅狭平行沈線による連弧文。横位無節L。補修孔有	前期後半
挿図 48 PL47	100	深鉢	97-C-24	胴部	細粒	良好	鈍褐色	RL細縄文を横位に施す	前期後半
挿図 48 PL47	101	深鉢	97-C-22	胴部	細粒	良好	鈍褐色	RL細縄文を横位に施す	前期後半
挿図 48 PL48	102	深鉢	97-E-24	胴部	粗粒	良好	褐色	RL細縄文を横位に施す	前期後半
挿図 48 PL48	103	深鉢	97-F-25	胴部	細粒	良好	暗褐色	LR・RL横位施文による羽状構成	前期後半
挿図 48 PL48	104	深鉢	7-D-2	胴部	粗粒	良好	鈍褐色	RL細縄文を横位に施す	前期後半
挿図 48 PL48	105	深鉢	97-D-24	胴部	粗粒	良好	鈍褐色	張出し底面。底面欠損。胴部は無文	前期後半
挿図 48 PL48	106	深鉢	7-C-4	底面	細粒	良好	鈍褐色	外器面剥落、無文か。底面は平滑。内面煤付着	前期後半
挿図 48 PL48	107	深鉢	97-D-24	胴部	粗粒	良好	鈍褐色	張出し底面か。横位LRを乱雑に施す。内面煤付着	前期後半

図版番号 PL番号	No.	器種	出土位置	部位	胎土	焼成	色調	器形・文様の特徴	時期
挿図 48 PL48	109	深鉢	97-D-24	胴部	細粒	良好	灰褐色	結節浮線文による弧線状意匠。円形小貼付文も付される	諸磯 c 式末
挿図 48 PL48	110	深鉢	97-B-25	胴部	細粒	良好	灰褐色	結節浮線文による同心円状意匠	諸磯 c 式末
挿図 48 PL48	111	深鉢	97-D-23	胴部	細粒	良好	灰褐色	結節浮線文による弧線状意匠。同心円状意匠か	諸磯 c 式末
挿図 48 PL48	112	深鉢	97-B-24	口縁	細粒	良好	褐灰色	結節浮線文による弧線状意匠。同心円状意匠か	諸磯 c 式末
挿図 48 PL48	113	深鉢	97-A-25	胴部	細粒	良好	鈍橙色	弧状細隆線を付し連続刺突文を側線とする	勝坂 1 式
挿図 48 PL48	114	深鉢	7-C-4	胴部	細粒	良好	鈍褐色	隆線側線として平行沈線を重複施文する	焼町
挿図 48 PL48	115	深鉢	7-B-2	胴部	細粒	良好	鈍褐色	隆線による楕円状区画。平行沈線を側線とし、刺突文を充填する	焼町
挿図 48 PL48	116	深鉢	7-D-2	口縁	粗粒	良好	灰褐色	肥厚口縁部より垂下する隆帯区画文	加曽利 E 3 式
挿図 48 PL48	117	深鉢	7-D-3	口縁	粗粒	やや軟	鈍褐色	口縁部下に 1 条の沈線を施す。	加曽利 E 3 式
挿図 48 PL48	118	深鉢	7-D-4	胴部	粗粒	やや軟	鈍橙色	垂下沈線による磨消部区画。L R 縦位充填施文	加曽利 E 3 式
挿図 48 PL48	119	深鉢	97-C-25	胴部	粗粒	良好	やや軟	縦位 L R を施す	加曽利 E 3 式
挿図 48 PL48	120	深鉢	7-D-3	口縁	粗粒	やや軟	鈍褐色	器面磨滅。沈線による磨消部区画。L R 縦位充填施文	加曽利 E 3 式
挿図 48 PL48	121	深鉢	7-D-3	胴部	粗粒	良好	褐色	垂下沈線による磨消部区画。L R 縦位充填施文	加曽利 E 3 式
挿図 48 PL48	122	深鉢	7-D-4	胴部	粗粒	やや軟	明褐色	器面磨滅。縦位撚糸 R が施される	加曽利 E 3 式
挿図 48 PL48	123	深鉢	7-D-3	胴部	粗粒	やや軟	明褐色	器面磨滅。L R 縦位充填施文	加曽利 E 3 式
挿図 49 PL48	124	深鉢	7-D-3	胴部	粗粒	良好	明褐色	沈線による磨消部区画。L R 縦位充填施文	加曽利 E 3 式
挿図 49 PL48	125	深鉢	7-D-3	胴部	粗粒	やや軟	褐色	弧状沈線と磨消部	加曽利 E 3 式
挿図 49 PL48	126	深鉢	7-D-3	胴部	細粒	良好	鈍褐色	沈線による逆 U 字状懸垂文。L R 縦位充填施文	加曽利 E 3 式
挿図 49 PL48	127	深鉢	7-C-4	胴部	細粒	良好	暗褐色	沈線による逆 U 字状懸垂文。L R 縦位充填施文	加曽利 E 3 式
挿図 49 PL48	128	深鉢	7-D-1	胴部	粗粒	やや軟	鈍橙色	沈線による区画文か。刺突文を充填する	加曽利 E 3 式
挿図 49 PL48	129	深鉢	7-C-2	胴部	細粒	良好	黄橙色	斜位沈線による施文部区画。無節縄文の充填か	加曽利 E 4 式
挿図 49 PL48	130	深鉢	97-E-23	突起	細粒	良好	浅黄橙	捻転状突起。内面剥落。中位に孔を設け外縁を沈線が沿う	堀之内 1 式
挿図 49 PL48	131	深鉢	7-D-2	胴部	粗粒	良好	褐色	頸部屈曲部。口縁部は緩やかに内湾する。無文	堀之内 1 式
挿図 49 PL48	132	深鉢	7-D-3	胴部	細粒	良好	明褐色	数条の弧状沈線による懸垂文構成。L R 縦位充填施文	堀之内 1 式
挿図 49 PL48	133	深鉢	97-F-22	口縁	細粒	良好	橙色	内稜鋭い。口縁部に 3 条の沈線が沿い、以下円文が配される	堀之内 1 式
挿図 49 PL48	134	深鉢	97-E-25	口縁	細粒	良好	鈍橙色	波状縁。1 本描き沈線を横位に施し、斜位短沈線を加える	堀之内 1 式
挿図 49 PL48	135	深鉢	97-F-22	胴部	粗粒	良好	鈍褐色	体部中位。数条の沈線による懸垂文構成下端	堀之内 1 式
挿図 49 PL48	136	深鉢	97-E-20	胴部	粗粒	良好	暗褐色	沈線による施文部と磨消部区画。施文部は縦位 LR 充填施文	称名寺式
挿図 49 PL48	137	注口?	97-F-23	底面	細粒	良好	橙色	強く開く胴部。無文で底面に網代痕が残る	後期
挿図 49 PL48	138	注口	97-E-21	底面	細粒	良好	灰褐色	上げ底を呈す。内外面とも丁寧な研磨により平滑	後期
挿図 49 PL48	139	深鉢	7-E-2	口縁	細粒	堅緻	鈍褐色	波底面。口縁部隆線以下太い沈線が沿う。内面平滑	高井東式
挿図 49 PL48	140	深鉢	97-G-23	胴部	細粒	良好	褐色	縦位 R L を地文とし 2 条の沈線が施される	後期?

第7表 遺構外出土石器観察表

挿図番号	P L 番号	出土位置	器種	計測値①長さ(mm)②幅(mm)③厚さ(mm)④重さ(g)				石材	成・整形技法の特徴及び備考
50 図1	P L 4 9	97-C-24	石鏃	2.95	1.70	0.50	1.30	黒曜石	黒曜石、凹基無茎、完形品
50 図2	P L 4 9	7-E-1	石鏃	2.85	1.70	0.55	1.50	黒曜石	凹基無茎、先端の一部破損
50 図3	P L 4 9	7-D-4	石鏃	2.70	1.45	0.50	1.10	黒曜石	凹基無茎、脚の一部破損
50 図4	P L 4 9	97-D-24	石鏃	2.70	1.55	0.45	1.30	黒曜石	凹基無茎、完形品
50 図5	P L 4 9	7-C-2	石鏃	2.35	1.60	0.50	0.90	黒曜石	凹基無茎、完形品
50 図6	P L 4 9	7-B-1	石鏃	2.45	1.60	0.40	1.30	黒曜石	凹基無茎、完形品
50 図7	P L 4 9	97-D-24	石鏃	2.35	1.55	0.50	1.00	黒曜石	凹基無茎、脚の一部破損
50 図8	P L 4 9	97-C-25	石鏃	2.50	1.70	0.55	1.30	黒曜石	凹基無茎、脚の一部破損
50 図9	P L 4 9	7-D-5	石鏃	2.25	1.65	0.50	1.40	黒曜石	凹基無茎、完形品
50 図10	P L 4 9	7-D-5	石鏃	2.10	1.70	0.55	1.20	黒曜石	凹基無茎、脚の一部破損
50 図11	P L 4 9	7-D-2	石鏃	2.05	1.75	0.50	0.90	黒曜石	凹基無茎、完形品
50 図12	P L 4 9	97-C-25	石鏃	1.60	1.30	0.35	0.60	黒曜石	凹基無茎、完形品
50 図13	P L 4 9	7-E-3	石鏃	1.80	1.35	0.35	0.50	黒曜石	凹基無茎、完形品
50 図14	P L 4 9	97-D-25	石鏃	1.70	1.20	0.50	0.50	黒曜石	凹基無茎、完形品
50 図15	P L 4 9	97-D-25	石鏃	1.70	1.15	0.35	0.50	黒曜石	凹基無茎、完形品
50 図16	P L 4 9	7-D-2	石鏃	1.50	1.50	0.30	0.40	黒曜石	凹基無茎、脚の一部破損
50 図17	P L 4 9	97-D-25	石鏃	1.80	1.60	0.50	0.90	黒曜石	凹基無茎、先端の一部破損
50 図18	P L 4 9	7-D-2	石鏃	2.50	2.00	0.60	1.40	黒曜石	凹基無茎、鏃形鏃、完形品
50 図19	P L 4 9	7-E-3	石鏃	1.55	1.25	0.30	0.40	黒曜石	凹基無茎、小型、脚の一部破損
50 図20	P L 4 9	7-C-2	石鏃	1.50	1.20	0.30	0.30	黒曜石	凹基無茎、小型、完形品
51 図21	P L 4 9	7-D-5	石鏃	1.10	1.00	0.30	0.10	黒曜石	凹基無茎、小型、完形品
51 図22	P L 4 9	7-C-4	石鏃	1.45	1.80	0.45	0.60	黒曜石	凹基無茎、完形品
51 図23	P L 4 9	7-D-4	石鏃	1.70	1.40	0.55	0.60	黒曜石	凹基無茎、先端一部破損
51 図24	P L 4 9	97-C-23	石鏃	1.85	1.40	0.40	0.60	黒曜石	凹基無茎、先端・左脚一部破損
51 図25	P L 4 9	97-C-24	石鏃	2.90	1.60	0.55	1.50	珪質頁岩	凹基無茎、完形品
51 図26	P L 4 9	7-D-4	石鏃	2.00	1.65	0.35	0.70	珪質変質岩	凹基無茎、完形品
51 図27	P L 4 9	97-C-23	石鏃	2.65	1.90	0.70	2.70	黒曜石	未製品
51 図28	P L 4 9	97-E-25	石鏃	2.15	2.20	0.60	2.50	黒曜石	未製品
51 図29	P L 4 9	7-C-2	石錐	2.70	1.70	0.90	2.50	黒色安山岩	
51 図30	P L 4 9	7-D-1	石錐	3.80	0.90	0.55	1.70	黒色安山岩	最大幅が器体中央部基部よりの棒状形態
51 図31	P L 4 9	7-D-2	削器	3.30	3.20	1.05	8.50	黒曜石	未製品、加熱による変色
51 図32	P L 4 9	97-C-25	削器	3.30	1.85	0.70	2.20	黒曜石	正面に自然面を残す
51 図33	P L 4 9	7-D-2	削器	4.00	2.65	0.60	7.10	珪質頁岩	下端平坦な刃部形成
51 図34	P L 4 9	97-E-24	削器	4.60	2.30	0.90	11.00	珪質頁岩	基部に自然面を残す
51 図35	P L 4 9	7-D-2	削器	5.10	3.15	1.20	16.80	珪質頁岩	未製品
51 図36	P L 4 9	97-E-25	削器	3.75	3.40	0.70	6.70	珪質頁岩	
51 図37	P L 4 9	97-F-24	削器	2.05	4.80	0.55	4.40	珪質頁岩	正面右側に自然面を残す
51 図38	P L 4 9	97-E-23	削器	2.80	6.00	1.10	17.60	黒色安山岩	横長剥片を素材
51 図39	P L 4 9	97-C-24	削器	3.40	6.10	1.55	22.30	黒色安山岩	抉り入り
51 図40	P L 4 9	7-D-2	削器	6.60	4.00	1.65	40.10	珪質頁岩	凹状に湾曲した刃部
52 図41	P L 4 9	97-E-25	削器	4.20	1.70	0.45	3.40	黒色頁岩	正面右側縁に刃部形成
52 図42	P L 4 9	7-C-2	削器	3.80	6.70	1.00	32.50	黒色頁岩	両側縁に抉りを施した横長方形形態
52 図43	P L 4 9	7-C-2	削器	4.15	7.45	1.00	24.80	黒色頁岩	正面に自然面を残す
52 図44	P L 4 9	7-D-2	削器	4.05	5.00	1.60	36.50	黒色頁岩	円形に近い形態
52 図45	P L 4 9	97-D-25	削器	5.40	5.65	0.70	14.10	珪質頁岩	刃部斜軸形態
52 図46	P L 4 9	97-C-24	削器	4.45	5.70	1.35	33.00	珪質頁岩	不定形方向からの剥離
52 図47	P L 4 9	7-D-5	削器	3.90	5.60	1.10	20.30	黒色安山岩	刃部加工は粗い、石錐の可能性もあり
52 図48	P L 5 0	97-F-25	削器	16.60	4.40	1.70	112.50	粗粒輝石安山岩	正面に自然面を残す、縦長に近い剥片素材
52 図49	P L 5 0	7-B-1	削器	7.30	2.80	1.00	19.40	黒色頁岩	横長剥片を素材とし、一部自然面を残す
52 図50	P L 5 0	7-D-1	削器	5.40	3.40	1.20	25.00	黒色頁岩(化石入り)	基部の一部破損、縦長剥片使用

挿図番号	P L 番号	出土位置	器種	計測値①長さ(mm)②幅(mm)③厚さ(mm)④重さ(g)				石材	成・整形技法の特徴及び備考
52 図 51	P L 5 0	97 - E - 24	削器	6.30	4.30	1.00	26.40	黒色頁岩	主要剥離面に打瘤を残す
52 図 52	P L 5 0	97 - D - 25	削器	4.50	4.10	9.50	14.50	珪質頁岩	一部自然面を残す
53 図 53	P L 5 0	97 - D - 24	削器	8.20	4.00	1.90	59.20	黒色頁岩	主要剥離面に打瘤を残す、表面摩滅
53 図 54	P L 5 0	7 - D - 1	削器	3.90	6.90	2.10	54.10	珪質頁岩	器体中央部で破損、未製品
53 図 55	P L 5 0	97 - D - 22	石槍	3.90	2.05	0.95	6.50	黒色頁岩	正面刃部側に自然面を残す
53 図 56	P L 5 0	7 - C - 1	石槍	4.50	2.60	1.05	10.40	細粒輝石安山岩	不定形剥片を素材
53 図 57	P L 5 0	7 - B - 1	石槍	4.55	2.70	0.90	10.10	細粒輝石安山岩	刃部断面三角形形状、基部破損
53 図 58	P L 5 0	97 - D - 25	石槍	6.85	2.60	1.40	26.20	黒色安山岩	未製品、主要剥離面側に剥片素材面を残す
53 図 59	P L 5 0	97 - C - 25	石槍	6.90	3.70	1.65	49.40	黒色頁岩	未製品、裏面側に自然面を残す
53 図 60	P L 5 0	7 - E - 2	石槍	7.30	3.50	2.20	54.00	黒色頁岩(化石入り)	未製品、小型石斧状、裏面に自然面を残す
53 図 61	P L 5 0	7 - D - 5	石匙	3.10	1.10	0.60	2.60	黒色安山岩	小型縦形
53 図 62	P L 5 0	7 - C - 1	石匙	5.80	3.40	1.10	16.70	黒色安山岩	刃部斜軸形態、基部に自然面を残す
53 図 63	P L 5 0	97 - D - 25	石匙	4.90	4.00	1.00	18.00	黒色頁岩(有孔化石入り)	主要剥離面側に微細な剥離、基部破損
53 図 64	P L 5 0	7 - D - 4	石匙	5.70	2.10	0.70	8.00	黒色頁岩	扁平な剥片素材使用
53 図 65	P L 5 0	7 - C - 1	石匙	3.75	4.20	1.00	18.10	黒色安山岩	基部破損品
53 図 66	P L 5 0	97 - E - 25	打製石斧	7.40	3.80	1.50	48.10	黒色頁岩	小型片刃、石筥状形態
54 図 67	P L 5 0	7 - D - 1	打製石斧	13.00	5.80	2.30	168.90	黒色頁岩	片刃、石筥状、横長剥片素材
54 図 68	P L 5 0	7 - D - 2	打製石斧	6.30	4.20	1.90	51.00	黒色頁岩	小型の片刃、石筥状
54 図 69	P L 5 0	97 - B - 24	打製石斧	5.90	4.05	1.10	32.50	黒色頁岩(有孔化石入り)	片刃、石筥状の石斧破損品
54 図 70	P L 5 0	7 - D - 5	打製石斧	7.60	4.30	1.80	69.60	黒色頁岩(化石入り)	小型、基部破損、正面右側縁自然面あり
54 図 71	P L 5 0	7 - D - 6	削器	7.80	4.20	1.50	65.50	黒色頁岩	両側縁は急角度の剥離、石筥状形態
54 図 72	P L 5 0	7 - C - 1	打製石斧	8.80	3.50	2.00	69.80	黒色頁岩	小型片刃、石筥状形態、基部の一部破損
54 図 73	P L 5 0	97 - C - 24	打製石斧	7.90	3.90	1.30	42.90	黒色頁岩	小型片刃、石筥状形態、削器の可能性あり
54 図 74	P L 5 0	97 - A - 24	打製石斧	3.90	4.30	1.00	18.70	珪質頁岩	小型石斧の刃部破損品
54 図 75	P L 5 0	7 - D - 3	打製石斧	5.30	3.90	1.40	25.00	黒色安山岩	正面下端と右側縁に刃部、横長剥片素材
55 図 76	P L 5 0	7 - C - 2	打製石斧	2.30	2.10	1.05	4.50	黒色頁岩	石筥状片刃石斧刃部破損品の可能性あり
55 図 77	P L 5 0	97 - C - 22	石核	3.35	4.20	2.50	28.10	黒曜石	不規則な方向からの剥離
55 図 78	P L 5 0	7 - D - 3	石核	5.15	2.00	1.65	17.30	黒曜石	自然面を残す、剥片の可能性もあり
55 図 79	P L 5 0	97 - E - 21	石核	2.80	4.20	2.10	17.80	黒色安山岩	上端と正面右側に自然面残す
55 図 80	P L 5 0	97 - E - 24	石核	4.00	5.20	2.90	62.30	碧玉	不規則な方向からの剥離、自然面を残す
55 図 81	P L 5 0	7 - D - 2	剥片	1.90	4.40	1.10	7.70	碧玉	角柱状形態
55 図 82	P L 5 0	7 - C - 2	剥片	2.90	2.80	0.80	4.20	黒曜石	一部自然面を残す
55 図 83	P L 5 0	97 - D - 23	剥片	3.80	2.80	0.55	4.80	黒色安山岩	
55 図 84	P L 5 0	7 - C - 2	剥片	4.70	1.75	0.50	3.80	珪質頁岩	主要剥離面上端部に僅かな調整加工
55 図 85	P L 5 0	97 - D - 25	剥片	4.50	2.01	0.80	8.30	珪質頁岩	
55 図 86	P L 5 0	7 - D - 2	剥片	2.10	1.20	0.90	3.10	珪質頁岩	
55 図 87	P L 5 0	7 - D - 2	剥片	5.50	3.80	0.90	19.10	黒色安山岩	
55 図 88	P L 5 1	7 - D - 4	打製石斧	9.80	4.80	2.50	98.00	黒色頁岩(化石入り)	小型、器体摩滅、基部欠損の可能性あり
55 図 89	P L 5 0	7 - D - 1	打製石斧	8.60	4.50	2.00	80.30	黒色安山岩	一部破損、横長剥片使用
55 図 90	P L 5 1	7 - E - 5	磨製石斧	7.05	5.10	1.80	89.50	蛇紋岩	小型、再生品?
55 図 91	P L 5 1	7 区表採	打製石斧	11.30	7.40	2.50	241.10	黒色頁岩	正・裏面ともに節理面及び自然面を残す
56 図 92	P L 5 1	7 - E - 3	磨石	10.50	6.80	3.80	419.80	粗粒輝石安山岩	擦痕あり、砥石使用の可能性もあり
56 図 93	P L 5 1	7 区表採	磨石	9.80	6.00	4.70	419.80	粗粒輝石安山岩	
56 図 94	P L 5 1	7 - C - 1	磨石	9.40	9.80	4.50	612.80	粗粒輝石安山岩	
56 図 95	P L 5 1	7-F-5	磨石	5.40	5.40	4.50	182.00	粗粒輝石安山岩	
56 図 96	P L 5 1	97-E-24	磨石	6.40	6.00	2.40	100.00	粗粒輝石安山岩	
56 図 97	P L 5 1	7-F-5	磨石・凹石	8.40	8.00	3.10	308.10	粗粒輝石安山岩	
56 図 98	P L 5 1	7 - D - 4	磨石・凹石	14.60	6.80	5.40	950.20	黒色頁岩	
56 図 99	P L 5 1	97 - E - 21	磨石・敲石	14.40	6.70	6.50	920.40	砂岩	
56 図 100	P L 5 1	7 区表採	磨石・凹石	8.00	8.40	3.10	308.10	粗粒輝石安山岩	

第5章 調査の成果とまとめ

第1節 立馬Ⅲ遺跡の遺構と遺物

須田 正久

1. 縄文時代の遺構と遺物分布状況

本遺跡からは、縄文時代早期子母口式段階の住居跡3軒と、中期加曽利E2式後半からE3式前半に位置づけられると推定される住居跡1軒が検出された。また、第3号住居から少量の擦糸文土器の破片が出土した。本住居跡も早期段階の所産と判断した。これより、今回の調査区からは、早期段階の4軒と中期の1軒、あわせて5軒の住居跡が検出された。さらに、竪穴状遺構2基が検出された。1基は長軸5.8m・短軸3.9mの大型な隅丸の長楕円形の遺構で、もう1基は半分が調査区外で全容は明確ではないが楕円形を呈すると考えられるものである。壁の立ち上がり状況や、柱穴及び焼土等が検出されなかったことから、住居跡としては認定できなかった。双方の遺構とも覆土中から早期段階の土器破片が出土したことから、住居跡とほぼ同時期に形成された遺構と判断した。また、2カ所の集石が確認された。どちらの石も被熱を受けたと思われる石が数点出土しており、屋外炉の可能性も否定できないが、本報告書では集石として掲載した。周辺部からは擦糸文土器の破片が出土していることから、住居跡よりも古い段階の遺構として認定した。さらに、土坑が44基検出されている。よって、今回の調査区は、立馬沢の西側で北から南方向へ下がる丘陵の南東斜面に形成された、縄文時代早期と中期の集落の一隅に位置していると判断した。

2. 包含層から出土した土器と石器

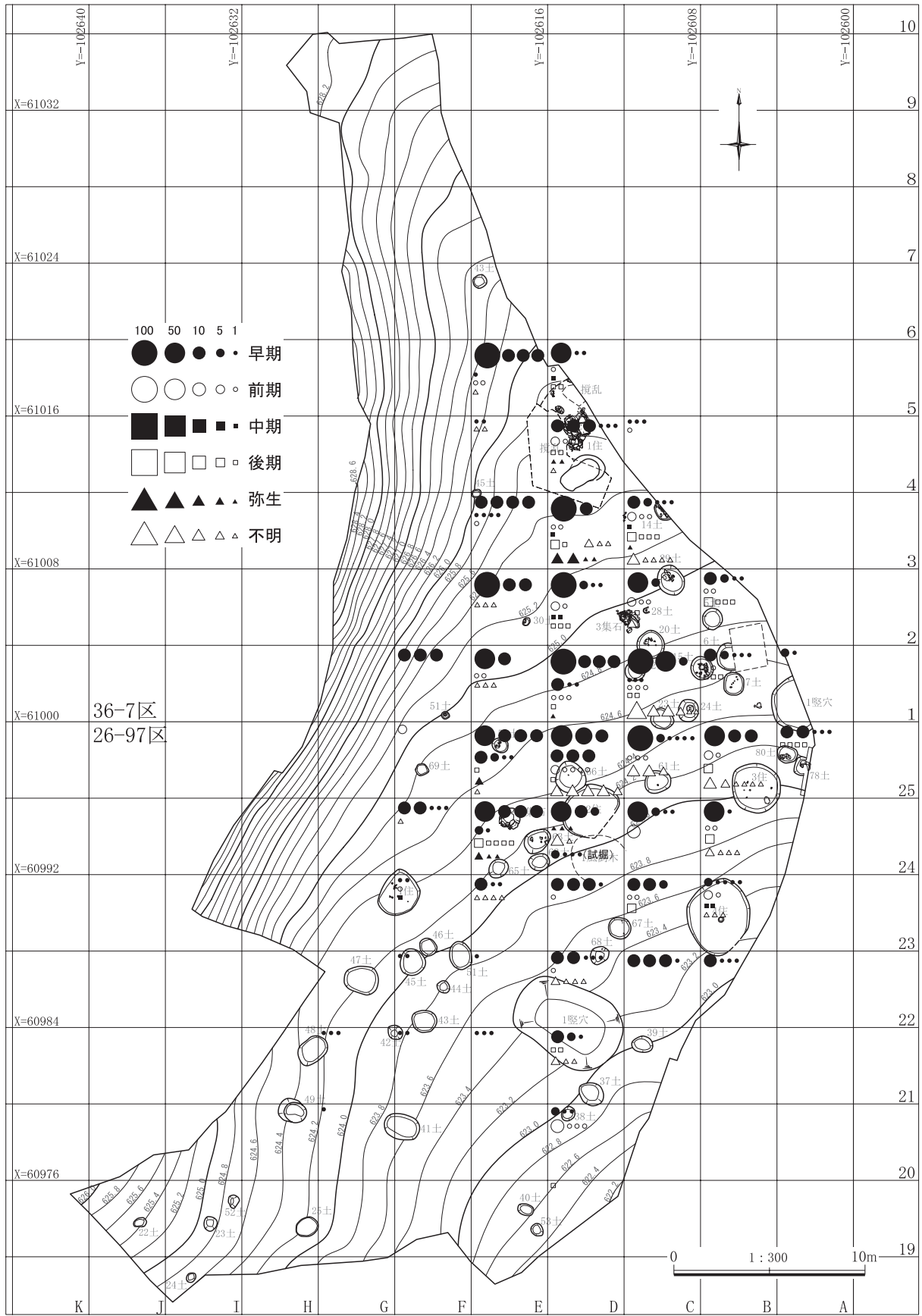
今回の調査ではローム層上位の黒色土中から、縄文時代、弥生時代あわせて2,000点以上の資料が出土している(時期については第57図参照)。包含層から出土した土器の多くは早期段階のものであり、遺跡の出土の2/3を占める。石器は560点余りが出土している。特に、黒曜石製の剥片と破片が多数出土し、全体の2/3を占める。遺構から出土した黒曜石を素材とした製品は、石鏃や石錐及び削器であった。よって、これらの製品を製作する段階で産出された剥片等と類推した。しかし、本調査区の斜面上位からの流れ込みの可能性も予測され、本地点で石器製作が行われていたかの判断は下せなかった。さらに、これらの剥片等の時期であるが、透明度が高く、気泡を余り含まず漆黒の黒曜石である。本種の黒曜石は、前期の段階で増加する傾向が推定されるが、早期の段階での傾向については、今後の資料増加を待ち判断していきたい。

3. 立馬Ⅰ・立馬Ⅱ・立馬Ⅲ遺跡の出土土器の比較

平成18年度に立馬Ⅰ、Ⅱ遺跡の報告書が刊行されている。今回の報告に関わる立馬Ⅲ遺跡の土器所属時期を比較し、立馬遺跡に関わる資料の概略を集約しておきたい。

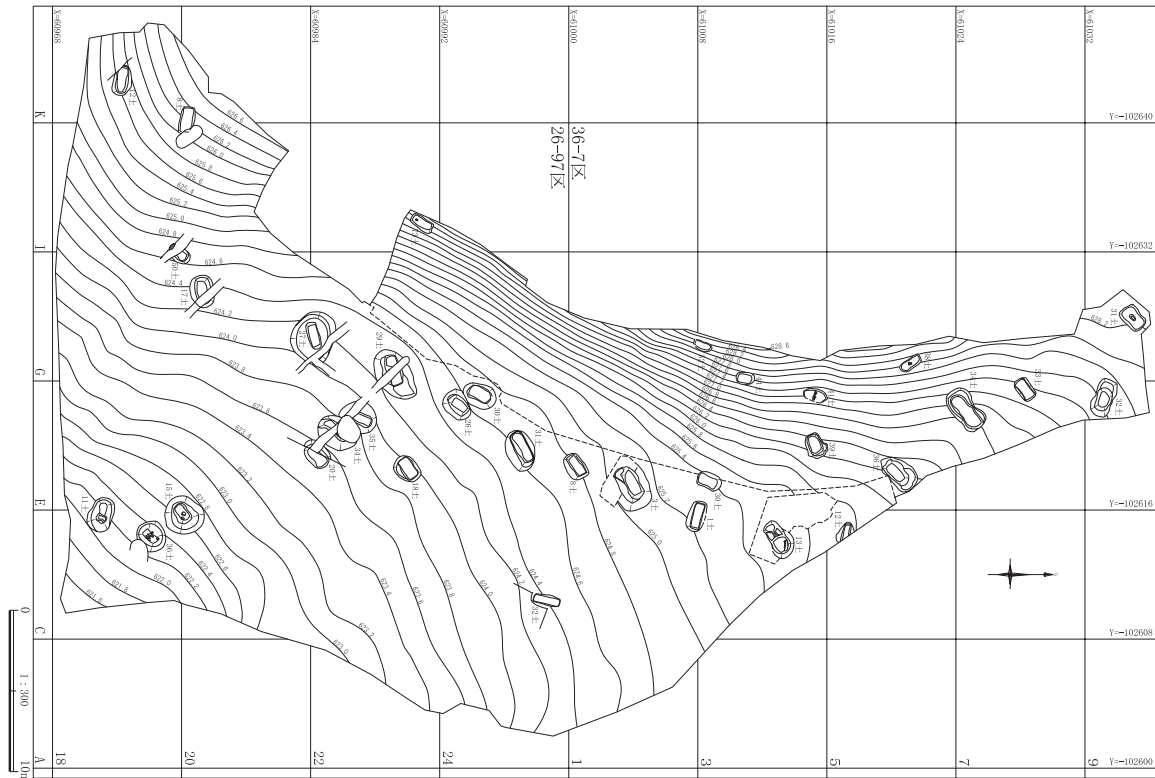
立馬Ⅰ遺跡では縄文時代早期の住居跡3軒が報告されている。縄文土器破片は4,518点出土している。その内、第Ⅱ群とした早期の土器破片が、2,881点出土している。立馬Ⅱ遺跡では早期から前期の遺構は発見されなかったが、中期の五領ヶ台式段階から阿玉台式段階の住居跡9軒と、中期の住居跡2軒が報告されている。また遺構外出土土器も、中期初頭から中期前半の時期の土器破片が多く出土している。

立馬Ⅲ遺跡の遺構外グリッドから検出された土器破片は、2,536点である。縄文土器破片は2,250点で、弥生土器は41点、所属時期不明の破片は245点である。その他、中世内耳鍋破片1点と近世の陶器破片3点が出土している。縄文土器の分類は、擦糸文系土器破片が131点で、押型文系土器破片が12点、早期沈線文系土器破片が1,923点である。よって、早期の土器破片が2,066点である。次いで、前期の土器破片が106点であった。これより、立馬Ⅲ遺跡の出土縄文土器破片数からするならば、本遺跡は立馬Ⅰ遺跡に近接した様相を呈すると判断されよう。



第57図 遺物分布図

第2節 立馬Ⅲ遺跡の陥穴について



第58図 1面陥穴配置図

第2項 陥穴

すでに調査報告されている立馬Ⅰ遺跡や立馬Ⅱ遺跡において、陥穴について時代・形状について分類をおこなっている。本遺跡もこれらの遺跡と隣接する同遺跡であるため、飯森康広氏が報告書で分類している形態的特徴に照らし合わせ比較分類を行いたい。

立馬Ⅲ遺跡から検出された陥穴は34基である。本遺跡の陥穴からは花畑遺跡や立馬Ⅰ遺跡の陥穴の底面で確認されている金属製工具による掘削工具痕は検出されなかった。しかし、一部斜面部のものを除いては、1面の遺構検出段階において埋没土上面にテフラ(平安時代)が部分的に残存しているものもある。また縄文時代の遺構検出面より60cmから1m以上上面であることや縄文時代住居を(7区1号住)を壊しているものもある。このようなことから本遺跡の陥穴も平安時代以降の所産と位置付けたい。

形態的特徴 立馬Ⅰ、Ⅱ遺跡の分類に準ずる。

筒型：上面・底面ほぼ円形で、壁が垂直に立ち上がる茶筒形なもの。

スリ鉢形：上面・底面ほぼ円形だが底面積は小さく、壁が斜めに立ち上がるもの。

箱形1類：上面・底面が長方形か隅丸長方形で、壁が垂直に立ち上がるもの。

箱形2類：上面は楕円形で途中から長方形になって底面も長方形も隅丸長方形となる。壁面は下半部が垂直で途中から外販して、上面に向かって斜めに立ち上がるため、断面くの字をなすもの。

逆台形：上面は楕円形か隅丸長方形で、壁は斜めに立ち上がるもの底面は隅丸細長方形をなす。

溝状：上面は細長い溝楕円形、底面は端部の丸い細長い溝状になる。壁の長辺は斜め気味のV字形になるが、短辺側はほぼ垂直気味に立ち上がるもの。

斜面部のものは縄文面のみ調査となったため、上面部分は欠損してしまい底面付近の検出となった。そのため平面、断面から推定して分類した。推定不可能なものについては形状不明とした。

第8表 遺跡別陥穴形状表

	立馬Ⅲ遺跡		立馬Ⅰ遺跡		立馬Ⅱ遺跡	計
	7区	97区	7区・17区	16区・26区	16区	
筒型	0	0	2	2	0	4
スリ鉢形	0	0	3	2	1	6
箱形1類	9	7	11	14	7	48
箱形2類	4	9	32	8	4	57
逆台形	3	2	4	4	6	19
溝状	0	0	4	0	3	7
計	16	18	56	30	21	141

本遺跡の陥穴は確認面や覆土上面に含まれるテフラから、すべて平安時代以降のものと推定した。しかし、その構築年代については明確な確証はなく、ここでは形態的特徴から見た立馬Ⅰ、Ⅱ遺跡と本遺跡の陥穴についての傾向を示しておきたい。

立馬Ⅰ、Ⅱ遺跡と本遺跡で共通するのは、総数141基に対してその大半を占めるのが箱形1類、2類である。立馬Ⅰでは75%、立馬Ⅱ遺跡で52%を占め、本遺跡で85%を占める。このことは立馬遺跡周辺では箱形の形状をした陥穴が、遺跡を形成した人々の主流であったと考えられる。この箱形の陥穴が明晰で、生活した人々にとっては、対象とした動物の捕獲法や狩猟法に適した形状であったのではないだろうか。反面、筒形やスリ鉢形、溝状の形状をした陥穴は本遺跡からは検出されなかった。筒形やスリ鉢形に近いものはあったが、立馬Ⅰ、Ⅱ遺跡から検出されている底面が細長い溝状の形状を持つものは確認できなかった。これは構築時期や、立馬Ⅰ、Ⅱ遺跡がやや緩やかな平坦面をもつ本遺跡よりさらに北側山岳尾根部に立地することに関係があるのかもしれない。また、立馬Ⅰ、Ⅱ遺跡の溝状の陥穴には、逆茂木を有するという特徴がある。しかし、本遺跡では底面に逆茂木痕などの何らかの施設を伴ったと考えられる痕跡をもったものは、すべて箱形1類のものであった。

本遺跡の陥穴埋土はほとんどが類似するものである。斜面部から流失したと思われるAs-YPkを混入する黒色土が主体となっている。一方、6基の陥穴からは周辺の基本土層に見られない堅く締まった軽石を混入する灰白色の粘土質土が見られるものがあった。これらの土は人為的に床面として構築された可能性が高いと推定される。これらの粘土は底面というより中段付近に検出されるケースが多く、一度使用し埋没しかけた埋土の上に粘土をはり再度使用面として利用した可能性が高いのではないだろうか。中にはこの粘土が埋土を挟んで2回に分けて構築しているものもあった。

立馬Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ遺跡から検出された陥穴の調査結果から、遺跡周辺の縄文時代から続く、狩猟生活の様相の一端を解明する手がかりになるのではないだろうか。

参考 文献

「立馬Ⅰ遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2006 飯森康広

「立馬Ⅱ遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2006 飯森康広

第6章 自然化学分析

第1節 陥穴の放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤茂・丹生越子・廣田正史・瀬谷薫・小林紘一

Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani・藤根 久

1. はじめに

群馬県に位置する立馬Ⅲ遺跡より検出された土坑試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

表1 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-11080	遺構：29号土坑 調査区：97区 グリッド：G 層位：2層	試料の種類：黒色土壌 状態：wet	湿式篩分 106 μm サルフィックス 酸洗浄 1.2N
PLD-11081	遺構：35号土坑 調査区：97区 グリッド：G 層位：2層	試料の種類：炭化材 試料の性状：不明 状態：wet	超音波洗浄サルフィックス 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1N, 塩酸：1.2N）
PLD-11082	遺構：36号土坑 調査区：97区 グリッド：G 層位：3層	試料の種類：炭化材 試料の性状：不明 状態：wet	超音波洗浄サルフィックス 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1N, 塩酸：1.2N）

3. 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、¹⁴C年代を暦年代に較正した年代範囲を、図1に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は年代値、誤差を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代（yrBP）の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。

なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

暦年較正

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い（¹⁴Cの半減期5730 \pm 40年）

を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年較正にはOxCal3.10（較正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

表2 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	δ ¹³ C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP ± 1σ)	¹⁴ C年代 (yrBP ± 1σ)	¹⁴ C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-11080	-23.12 ± 0.14	2508 ± 21	2510 ± 20	770BC(11.0%) <u>740BC</u> 690BC(11.8%) <u>660BC</u> 650BC(45.4%) <u>550BC</u>	780BC(20.6%) <u>720BC</u> <u>700BC(74.8%)</u> 540BC
PLD-11081	-26.79 ± 0.18	4433 ± 24	4435 ± 25	3270BC(8.5 %) <u>3240BC</u> <u>3100BC(59.7 %)</u> 3020BC	3330BC(19.6 %) <u>3220BC</u> 3180BC(1.4 %) <u>3160BC</u> <u>3120BC(66.9 %)</u> 3000BC 2990BC(7.5 %) <u>2930BC</u>
PLD-11082	-28.88 ± 0.19	4065 ± 24	4065 ± 25	2830BC(3.6 %) <u>2820BC</u> <u>2630BC(53.5 %)</u> 2560BC 2520BC(11.1 %) <u>2490BC</u>	2840BC(8.6 %) <u>2810BC</u> <u>2680BC(67.8 %)</u> 2550BC 2540BC(18.9 %) <u>2490BC</u>

4. 考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。得られた暦年代範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それぞれより確かな年代値の範囲が示された。

土坑の年代測定を行った結果、97区29号土坑2層（黒色土壌）は、2σ暦年代範囲において700-540 cal BC(74.8%)で、縄文時代晩期の年代範囲を示す。

97区35号土坑2層（炭化材）は、2σ暦年代範囲において3120-3000 calBC(66.9%)、97区36号土坑3層（炭化材）は、2σ暦年代範囲において2680-2550 calBC(67.8%)であり、縄文時代中期の年代範囲を示す。

29号土坑の土壌試料は、堆積後の植物根や生物攪乱による二次汚染物質が含まれる可能性が考えられ、新しい年代値が得られる可能性がある。一方、35号土坑2層や36号土坑3層中の炭化材は小片ではあるものの、土壌試料と比較した場合二次汚染による影響は低い。

以上のことから、少なくとも35号土坑と36号土坑は、縄文時代中期の土によって埋没した可能性が高い。

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425-430.
- Bronk Ramsey, C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355-363.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代. 3-20.
- Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Bertrand, C.J.H., Blackwell, P.G., Buck, C.E., Burr, G.S., Cutler, K.B., Damon, P.E., Edwards, R.L., Fairbanks, R.G., Friedrich, M., Guilderson, T.P., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., Manning, S., Bronk Ramsey, C., Reimer, R.W., Remmele, S., Southon, J.R., Stuiver, M., Talamo, S., Taylor, F.W., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C.E. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP. Radiocarbon, 46, 1029-1058.

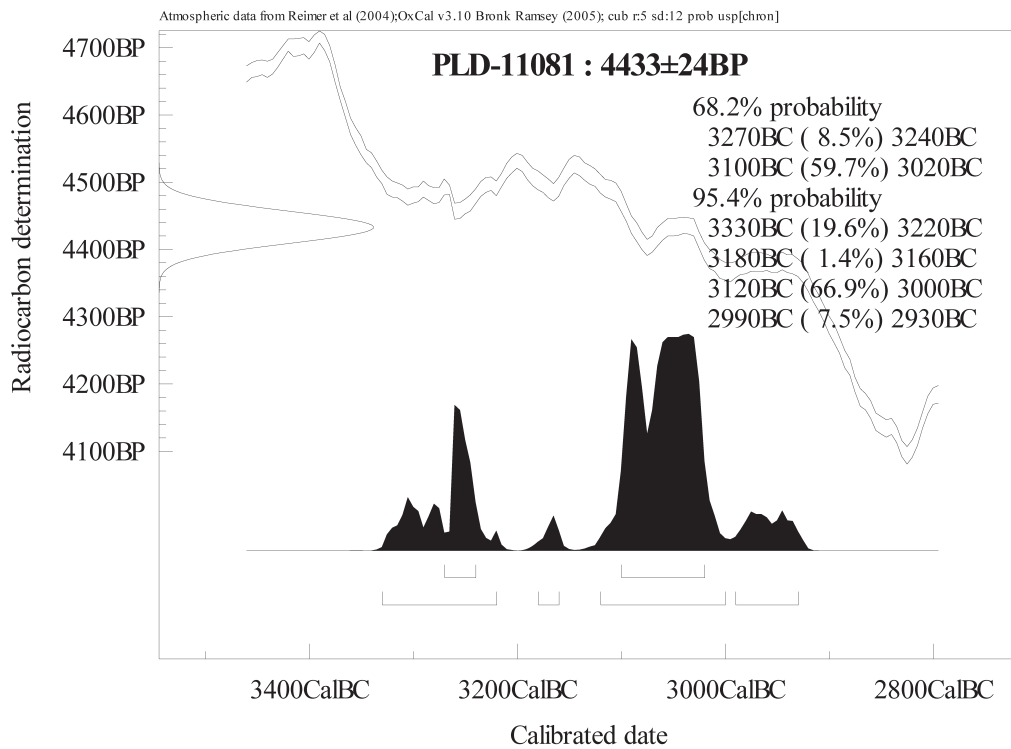
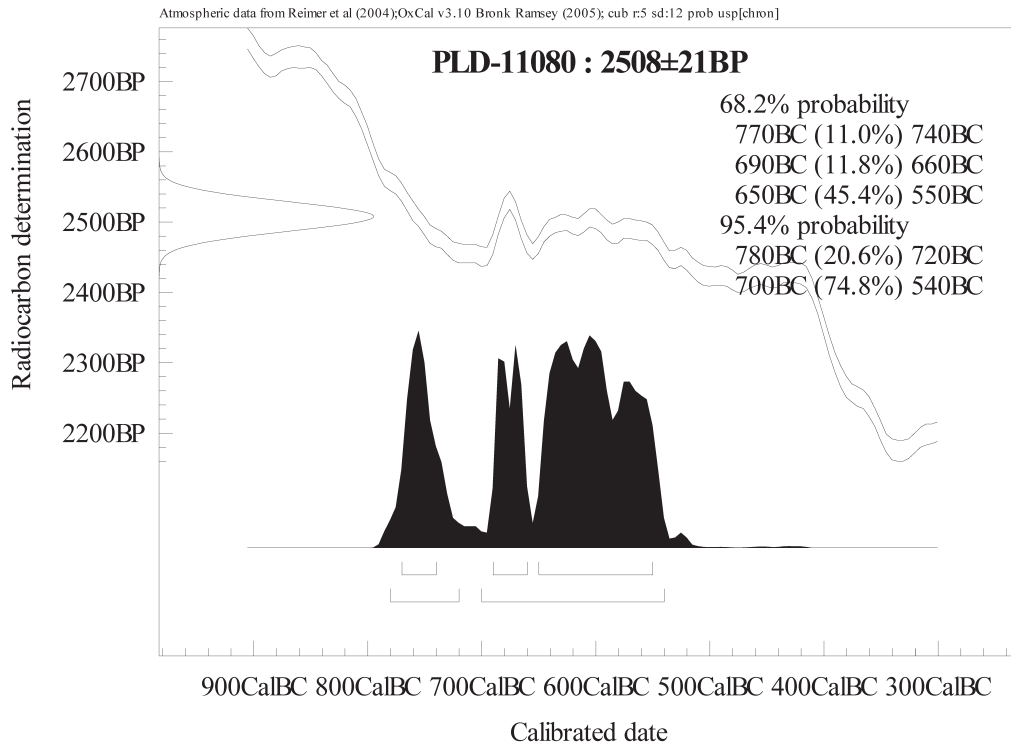


図1 暦年転正図

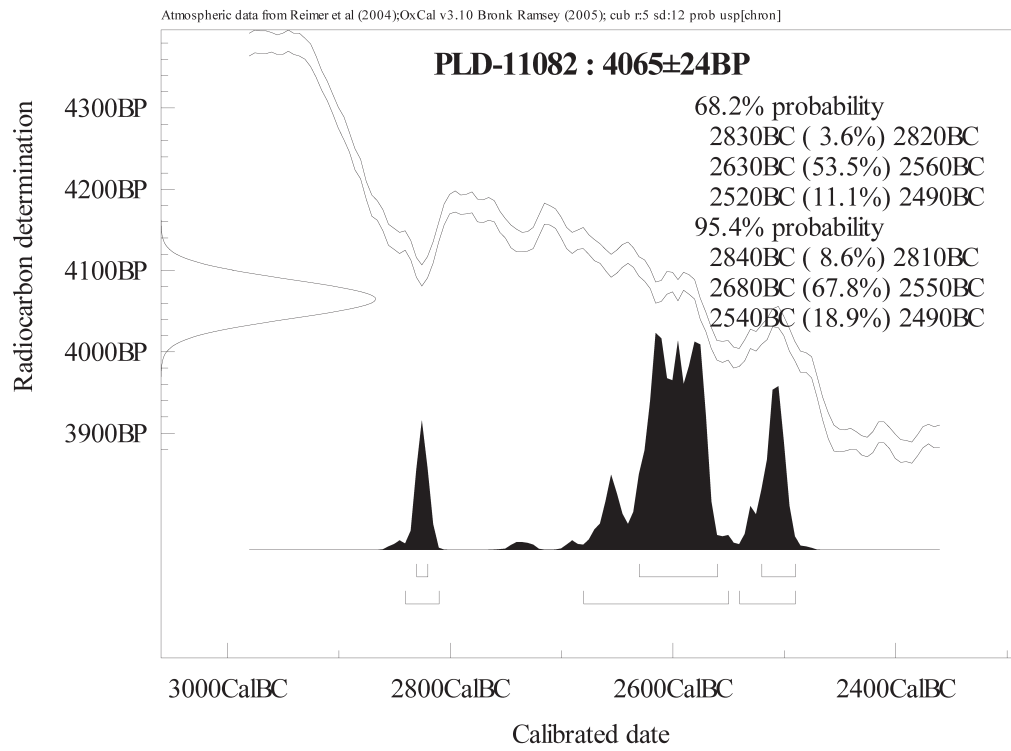


図2 暦年転正図

第7章 考察

第1節 立馬Ⅲ遺跡出土の縄文時代晩期終末から弥生時代中期中葉にかけての土器

篠原 正洋

本稿では、立馬Ⅲ遺跡出土の縄文時代晩期終末から弥生時代中期中葉に比定できる掲載した14点の土器について、その胎土や文様、施文具などの特徴を観察し、併せて系譜や編年的位置付けなどについても若干の考察を試みたい。なお、当該期の様式を構成する主要な形式は、甕(胴部上半、口縁部下に屈曲を有する器形)、深鉢(屈曲がなく口縁に向かって直線的に開く器形)、鉢(浅鉢)、壺としておく。

また、本遺跡と隣接する立馬Ⅰ遺跡や八ッ場ダム地域における周辺遺跡の当該期の出土土器についての集成・考察は、既に『山根Ⅲ遺跡(2)・上原Ⅳ遺跡・幸神遺跡』(群埋文 2008 100～107頁)において、筆者による拙稿があるので併せて参照頂きたい。

第49図141・143(以下、番号は報告書の掲載番号に一致する)は同一個体の鉢(浅鉢)の胴部であろう。棒状工具を使用して底がやや丸味を帯びる沈線で文様を作出する。沈線内には赤色塗彩が施される。沈線は計5条廻るが、最上部の沈線は左右が意図的に分断される。また下部4条の沈線は平行沈線文を描出するものではなく、第49図141については上から2条目と3条目の沈線により変形工字文を展開するようにも見えるが、第49図143では変形工字文特有の交点を伴わずに、4条の沈線が曲線的にその間隔を変化させながら廻っていることが判る。平行沈線文、変形工字文のどちらの範疇とも言い難い。胎土は白色砂粒を少量含み、焼きは堅緻である。内外面とも丁寧に磨かれ特に内面には光沢がある。これは氷Ⅰ式の器面調整の特徴の一つでもあるナデミガキ(ミガキに近いナデ)とも考えられる。第49図142は浅鉢の口縁部である。口外帯と3条の浮線が廻る。また口唇部にも1条の沈線が廻る。胎土は白色砂粒を少量含み、焼きは堅緻である。内外面とも丁寧にナデ調整が施される。口外帯と浮線文の特徴から氷Ⅰ式に比定できる。348は甕の口縁部であろう。口縁外面にはLRを横位に施文する。頸部無文帯はケズリによって作出しているため、口縁部と頸部との境界には段が生じている。胎土はやや大粒の砂粒多く含み、焼きは良好。胎土と焼きの様子、口縁部縄文施文等を考慮し弥生前期から中期前半に比定したい。第49図145～151は甕の胴部破片を一括した。地文は全て細密条痕文であるが、氷Ⅰ式期の条間が密で施文の方向も整然としたシャープな細密条痕文とは異なり、施文具には目の粗い莖束状工具を使用していると考えられる。ここで仮に、胎土が黒味を帯び、砂粒の混入少なく焼きが堅緻で、柁目材の木口や(小林1991)、松などの針状葉を束ねたもの(谷口2004)を施文具とした繊細で整然とした細密条痕文を古相、逆に胎土が赤味を帯び、砂粒の混入多く焼きが甘くて目の粗い細密条痕文をそれよりも新しい様相と仮定しよう。その観点から分類すれば、第49図145～151はどれも後者に近いと考えられる。弥生前期から中期前半に比定したい。第49図152・153は鉢である。第49図152は口縁がやや内湾気味に立ち上がる器形である。口唇部は丸味を帯びやや細く尖っている。地文はLR縄文で、胴上半は横位、下半は斜め右下方へ施文する。底面は上げ底で外底に木葉痕が見られる。内面は非常に丁寧なミガキが施される。胎土は白色砂粒を少量含み、焼きは堅緻である。第49図153は口縁が直線的に開く器形である。口唇部は平らに面取りされている。地文はLR縄文で、残存している口縁部下部では横位施文している。内面は第49図152と同様丁寧なミガキが施されている。胎土は白色砂粒やや多く含み、焼きは堅緻である。第49図152・153と同類の鉢は県内では、尾島遺跡群阿久津宮内遺跡(群埋文190集により1995報告済み)より出土しており、弥生中期中葉に比定できる。第49図154は小形壺の胴部である。地文はLRを横位施文する。外底は無文。内面はナ

デ調整と指頭による圧痕が残る。胎土は砂粒やや多く含み、焼きは良好。弥生中期前半から中葉にかけての時期に比定したい。

参考文献 小林青樹 1991「浮線文系土器様式の細密条痕技法」国学院大学考古学資料館紀要7輯

谷口 肇 2004「清川村北原遺跡及び大井町矢頭遺跡出土「細密条痕」関連資料」神奈川考古40号

第2節 立馬Ⅲ遺跡出土の石器

中束 耕志

1. 打製石斧と削器及び石槍

本遺跡で特に注目される石器に、第54図No.67の石篋状の形態で刃部がやや丸みを帯びた、短冊形打製片刃石斧がある。正面の右上段に一部自然面を残しているが、縁辺部に主要剥離面側から細かな調整剥離を施している。本資料は横長剥片を素材とし、打痕部は正面側からの調整剥離で除去されている。同図No.68や第53図No.66は小型石篋状形態の片刃打製石斧である。本資料に類似する製作技法の石器が、第54図No.71とNo.73等である。同図No.71は両側縁と下部の調整剥離角度が異なり、縦形の削器と判断した。No.73は類似する資料であるが、形態的にはNo.72に類似し、削器の可能性もあるが、片刃石斧と判断した。

一方、第53図No.55や同図No.58の石槍の未製品、及び第53図No.59やNo.60の石槍のブランクが出土している。No.55は器体中央部で破損し、破損部が厚くなり、下部の押圧剥離状況も異なることから、製作途中の破損品と判断した。また、同図No.58は下端部が破損している可能性があるのと、主要剥離面に素材面を残していることから、完形品に近い石槍の未製品と推定した。No.59とNo.60は小型石斧に類似しているが、両者とも自然面を留めていることと、部分的にしか調整加工が施されていないことから石槍の未製品と判断した。

以上、これらの包含層から出土した資料であるが、小型片刃石斧と削器及び石槍のブランクは、基本的な製作技法と形態的な類似等から、草創期の石槍の伝統を引き継いだ早期の段階に位置づけられる可能性もあると考えられよう。

また、上記の資料とは異なる第55図No.91の打製石斧が出土している。本資料は大形で両側縁部にやや挟りを加えた打製石斧である。両面ともに部分的ではあるが、摩耗痕が認められる。さらに、中央部で破損しているが、欠損後調整剥離を施しているため、打製石斧の再生品と判断した。

その他、同図No.90の磨製石斧が1点出土している。本資料は小形の磨製石斧である。刃部は平担であり、一部使用による破損が認められる。また、基部は殴打等による破損が認められる。縦断面形態は蒲鉾状を呈し、片刃状の作りとなっている。正面中央部より下端の刃部寄りが、基部側とは研磨の状態が異なっていることより、破損部を再度研磨し、再生した可能性も推測される。

2. 包含層出土の黒曜石製剥片と碎片

本遺跡の発掘調査でグリッドの包含層から、縄文時代早期から後期の土器破片とともに、624点余りの黒曜石製の剥片と碎片(チップ)が出土した。ハッ場ダム建設に伴って発掘調査された他の遺跡と比較して、本遺跡の出土量はやや多い印象を受けるが、実測図及び写真を掲載できなかったため、これらの資料について概略記述しておきたい。

写真1は第55図No.77やNo.80に類する、残核に近い資料と大きな貝殻状剥片である。31点の出土である。最上段の左端の資料は、長さ3.9cmで幅1.8cm、厚さ1.0cmであり、一部自然面を残している。不規則な方向からの剥離を加えている。漆黒で極めて透明度の高い黒曜石である。一部、気泡の混入が認められる。上から4段

第7章 考察

目の右側3点は、方柱状ないしは断面三角形状を呈する縦長剥片である。右端から3番目の資料は、長さ3.2cmで正面左側に自然面を残している。最下段右端の資料は、長さ1.8cmで幅2.2cmの貝殻状剥片である。

写真2は写真3との中間ぐらいの大きさの剥片である。明確な区分はないが、この大きさの資料の内、やや大きめの剥片が上段で118点である。上段よりやや小さめの資料を下段に掲載した。154点である。上段左端の資料は、長さ1.8cmで幅1.8cm程度である。正面左端に角礫の自然面を残し、打面調整後に上端から貝殻状に剥離された資料である。上段右端の資料は、長さ2.8cmで幅1.2cmの縦長状の調整剥片である。

また、これらの資料と類する大きさの剥片で、一部石鏃等の破損品と思われる押圧剥離の施された資料も含まれている。

下段左端の資料は、長さ1.8cmで幅0.7cmの調整剥片である。右端の資料は極めて薄く、長さ1.2cmで幅1.8cmの貝殻状の調整剥片である。

写真3は微細な碎片(チップ)である。321点検出された。上段右端の資料は、長さ1.2cmで幅1.9cmである。本遺跡出土の黒曜石製の製品は、石鏃と削器及び石錐である。石鏃等の石器製作に関連し、押圧剥離による縁部調整加工等で産出された微細なチップであろう。

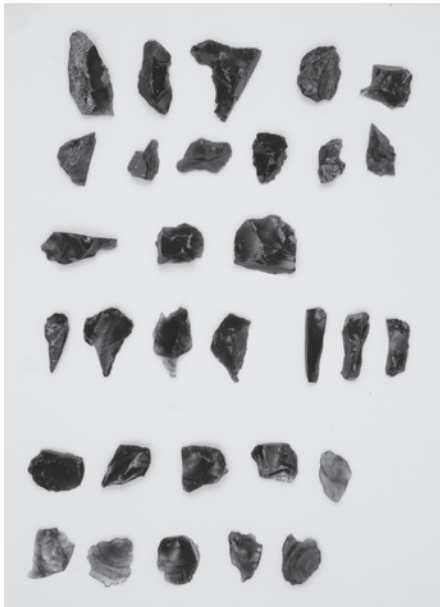


写真1

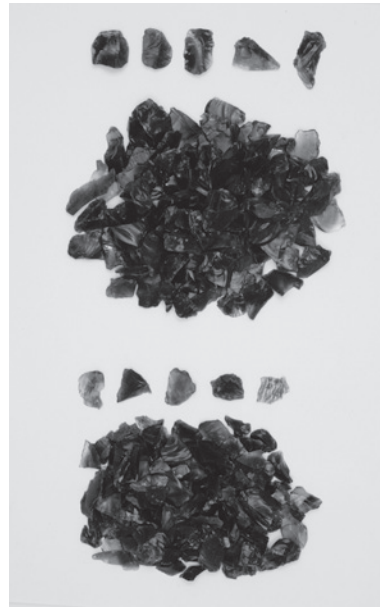


写真2

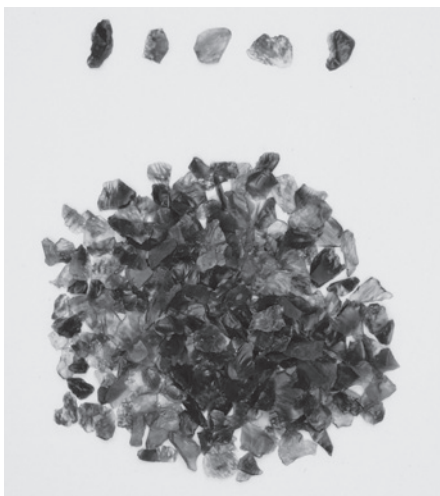


写真3



黒曜石製剥片・破片の出土状態

第3節 立馬遺跡出土の石皿

桜井 美枝

1 資料の来歴

以下で紹介する資料は、立馬 I 遺跡より出土した石皿である。昭和40年代末頃、遺跡地の地権者が耕作中に発見し、近年まで保管していたものである。立馬遺跡が当事業団によって発掘調査されることとなり、地権者の遺族から寄贈された。

出土地点は立馬 I 遺跡の26・27区境の南半部で、当時は畑地となっていた。南に向かって落ちる傾斜地であるが、周辺域内では傾斜は緩やかで、比較的平坦な地点である。当時から周知の縄文時代遺跡で、畑地からは多くの縄文土器や石器が表採されていた。

2点の石皿は、地表下20～30cm程度の地中から、2点並んで出土した。周囲からも自然礫が数点出土したようであるが、詳細については不明である。2点の石皿の下からは磨石が各1点出土しており、磨石の上に石皿を伏せるように配置されていた。第59図1の石皿の下位からは長さ12cm程度の長楕円形の円礫素材の磨石が、2の石皿下位からはより球状に近い円礫素材の磨石が出土しており、使用面の形状に適した磨石がセットとなっていた。おそらく、実際に組んで使用されていたのであろう。残念ながら2点の磨石については、寄贈を受けてから現在までの間に散逸してしまった。

2 石器の特徴

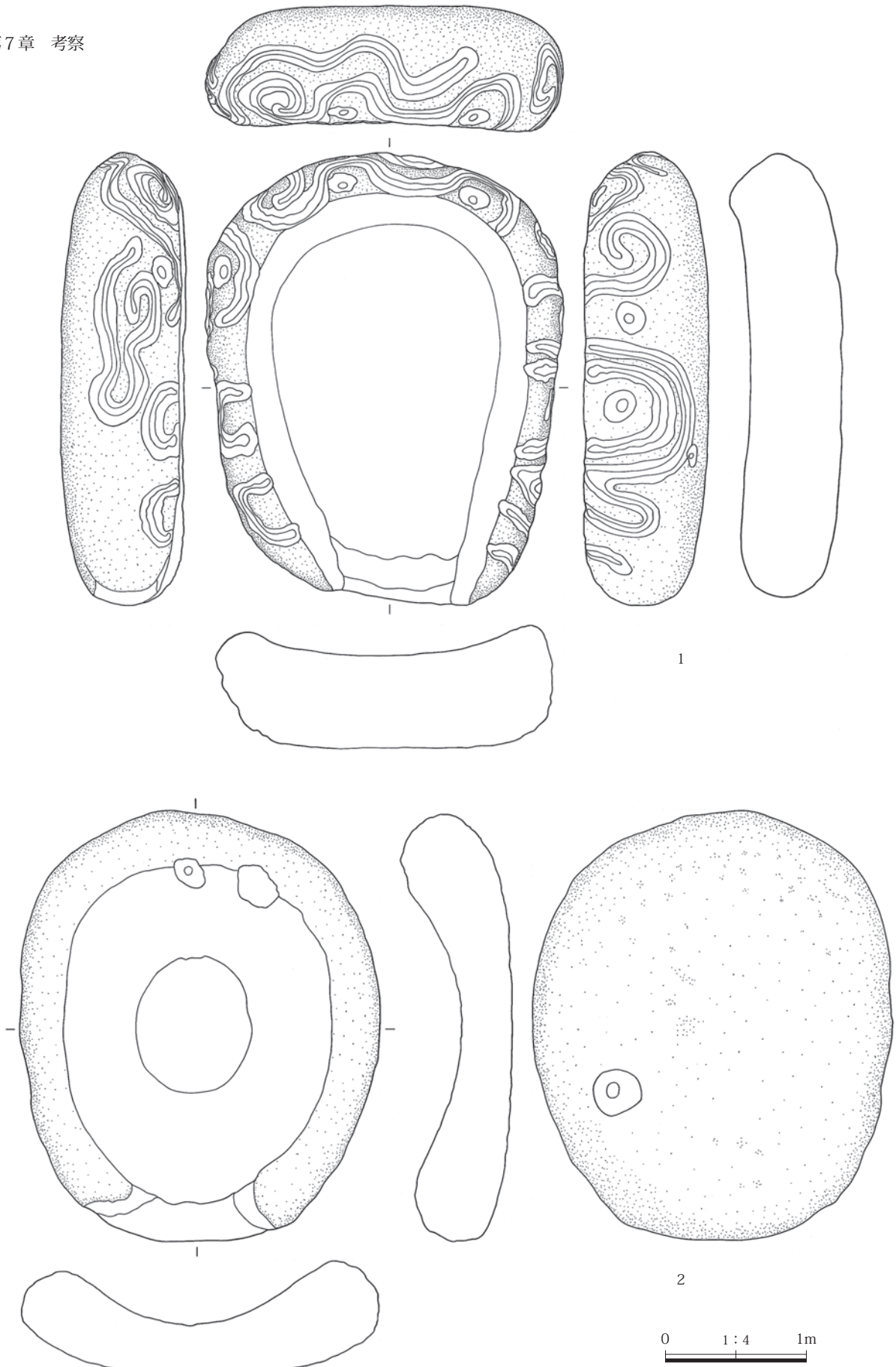
第59図1は盤状の円礫を素材とし、使用面と掃き出し口、側面の文様部分を作り出している。使用面は比較的平坦であるが、使用によって非常に平滑化している。掃き出し口は敲打によって作出されている。文様は上幅1～1.5cm、下幅5mm程度の浅い溝で表現されている。溝は敲打によって作出されているが、その形状から、加撃点が非常に小さい敲打具が使用されたと推測される。文様には「U」字状や波状などのパターンは認められるが、特別な規則性は見られない。溝によって画された部分や溝間の空間部に、直径2cm程度の凹みが数カ所あるが、いずれも敲打によって整形された浅い凹みで、回転穿孔によって穿たれた物ではない。裏面にも弱い摩耗の痕跡が認められた。使用の際に裏面と接地面がこすれて、摩耗したと考えられる。長さ32.8cm、幅25.2cm、厚さ8.9cm、重量9.31kg、石材は粗粒輝石安山岩である。

2も盤状の円礫を素材としており、使用面と掃き出し口を作り出す。使用面は深く凹んでおり、使用によって平滑化している。掃き出し口は敲打によって作出される。表裏に凹みが1点ずつあるが、1の石皿同様、敲打によって整形された浅い凹みである。こちらの資料も、裏面には弱い摩耗が見られる。長さ30.4cm、幅26.5cm、厚さ8.0cm、重量6.13kg、石材は粗粒輝石安山岩である。

これまでの調査で、これらの石皿が出土した地点に最も近いのは、平成13～14年度に行われた第1次調査で26～17区にかけて細長く帯状に調査された区域である。この調査の際には明確に縄文時代に属する遺構は発見されていないが、包含層中からは早期から晩期にわたる土器破片が出土している。これらの石皿は、共伴する遺物が不明なため時期を特定するのは困難であるが、形態的な特徴から前期から中期の所産である可能性が高い。非常に特徴的な出土状態であり、石皿の使用法や管理の状況等を考察する上で興味深い資料である。ただし、平面図などのデータがなく、周辺の遺構の状況も未確認であり、詳細な検討は不可能である。今後類例を待ってさらなる検討を行いたい。

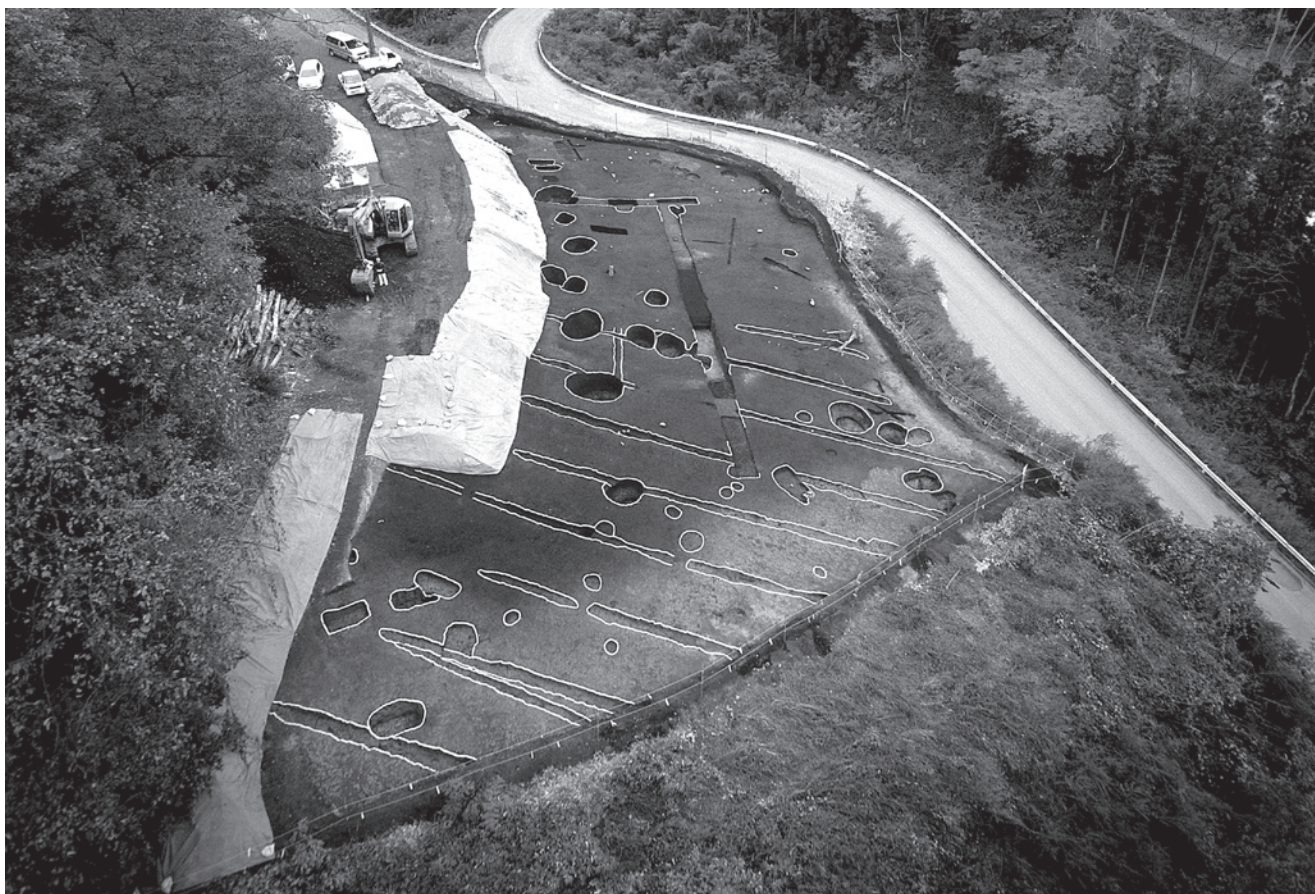
参考文献

飯森康広 2006 『立馬 I 遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団



第59図 立馬I遺跡出土石皿

写真図版



遺跡1面全景（西から）



遺跡2面全景（南から）

PL2



7区 拡張部全景（南から）



97区 拡張部全景（北から）



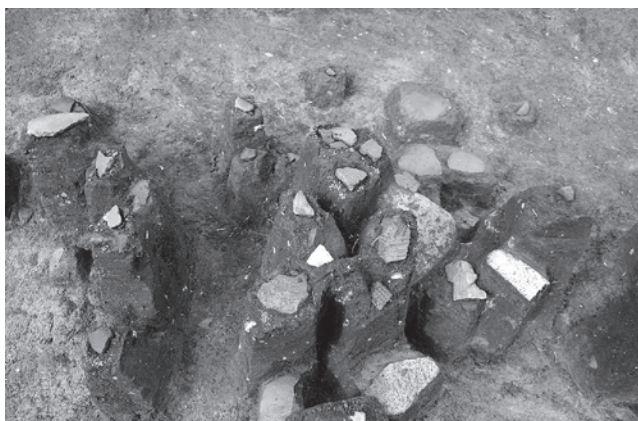
97区 1号住居跡全景（東から）



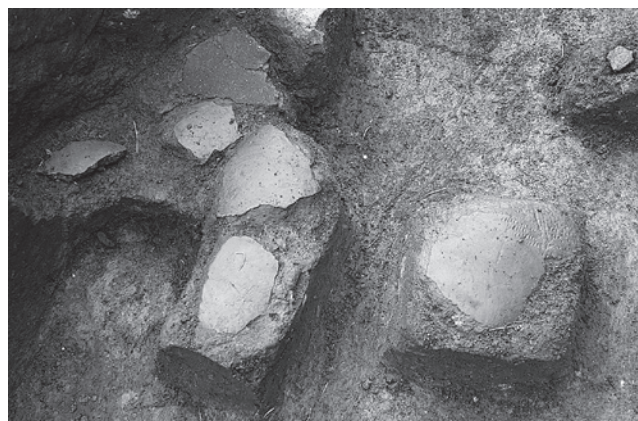
97区 1号住居跡セクションA-A'（東から）



97区 1号住居跡遺物出土状況（北から）



97区 1号住居跡遺物出土状況（東から）



97区 1号住居跡遺物出土状況 近接



97区 2号住居跡全景（南から）



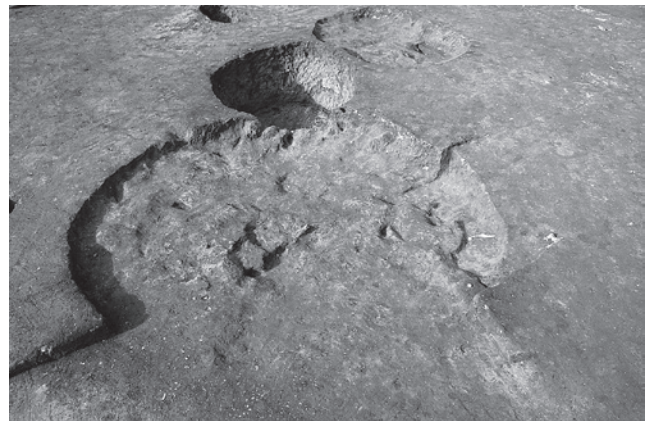
97区 2号住居跡セクションA-A'（西から）



97区 2号住居跡遺物出土状況（南から）



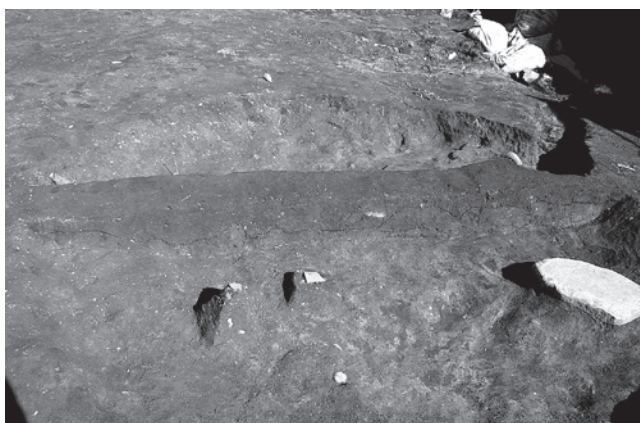
97区 2号住居跡遺物出土状況 近接



97区 2号住居跡全景（東から）



97区 3号住居跡全景（南から）



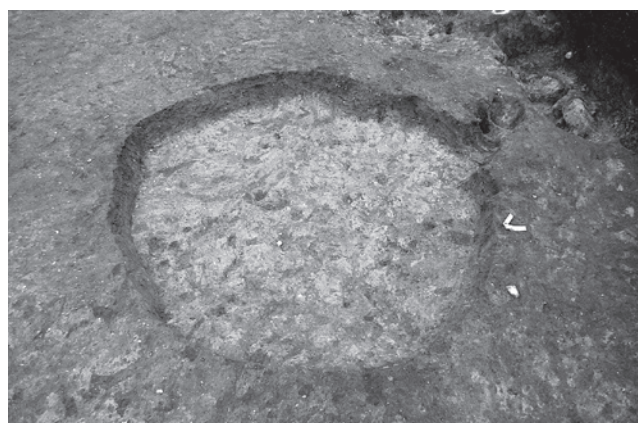
97区 3号住居跡セクションA-A'（南から）



97区 3号住居跡セクションA-A'（南から）



97区 3号住居跡全景（南から）



97区 3号住居跡掘り方全景（南から）



97区 4号住居跡遺物出土状況（東から）



97区 4号住居跡セクションA-A'（東から）



97区 4号住居跡遺物出土状況 近接



97区 4号住居跡遺物出土状況 近接



97区 4号住居跡1号ピット全景（南から）



7区 1号住居跡全景（西から）



7区 1号住居跡1号炉全景（西から）



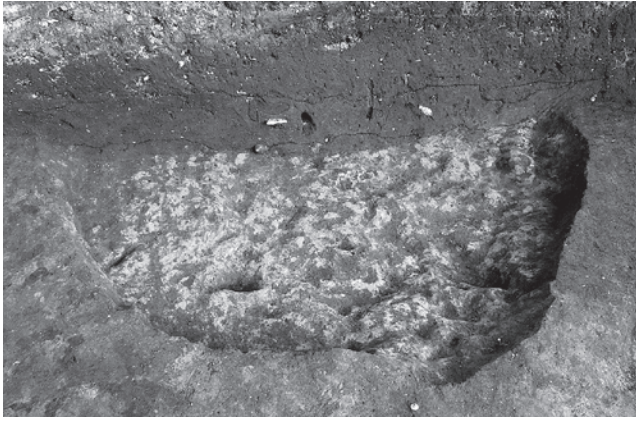
7区 1号住居跡1号炉内炭化物出土状況（西から）



7区 1号住居跡石囲炉 炉体土器出土状況



7区 1号住居跡2号炉全景（西から）



7区 1号竪穴状遺構全景（西から）



7区 1号竪穴状遺構掘り方全景（南から）



97区 1号竪穴状遺構全景（南から）



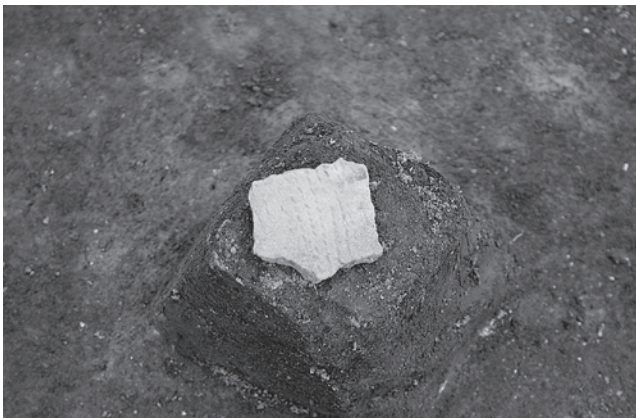
97区 1号竪穴状遺構遺物出土状況（南から）



97区 1号竪穴状遺構セクションA-A'（東から）



97区 1号竪穴状遺構セクションB-B'（北から）



97区 1号竪穴状遺構遺物出土状況 近接



97区 1号竪穴状遺構全景



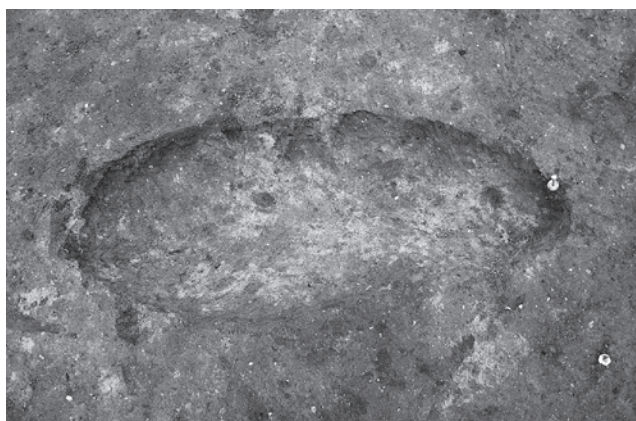
7区 1号集石全景（南から）



7区 1号集石全景（北から）



7区 1号集石セクション（南から）



7区 1号集石（内部石除去）全景（南から）



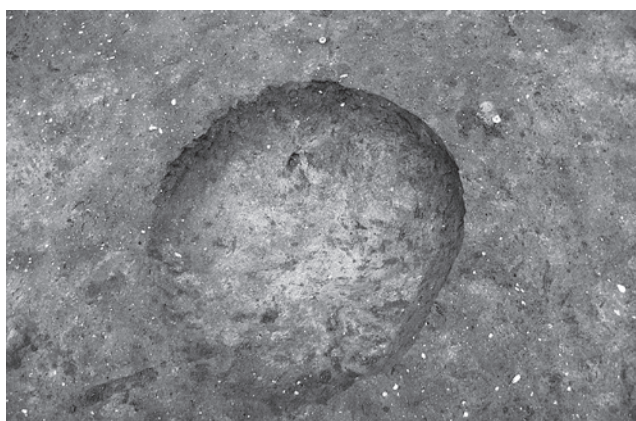
97区 1号集石全景（南から）



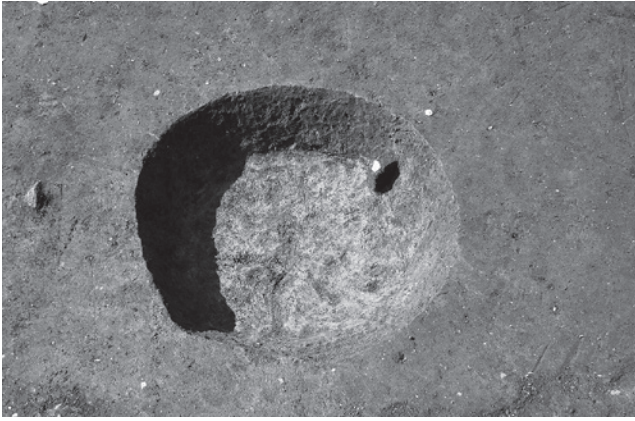
97区 1号集石セクション（東から）



97区 1号集石セクション（東から）



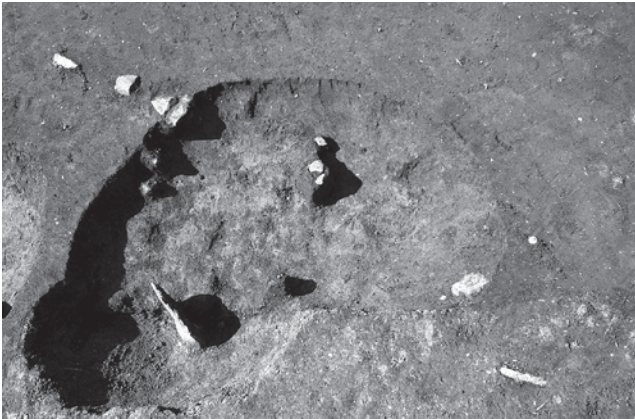
97区 1号集石（内部石除去）全景（東から）



7区 5号土坑全景（東から）



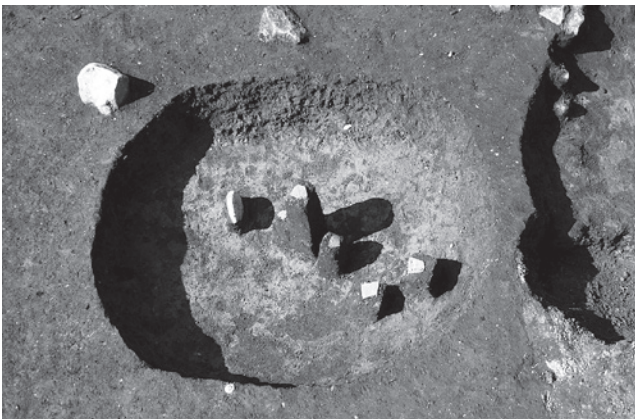
7区 5号土坑セクション（南から）



7区 6号土坑全景（東から）



7区 6号土坑セクション（西から）



7区 7号土坑遺物出土状況（東から）



7区 7号土坑セクション（南から）



7区 14号土坑全景（南西から）



7区 14号土坑セクション（東から）



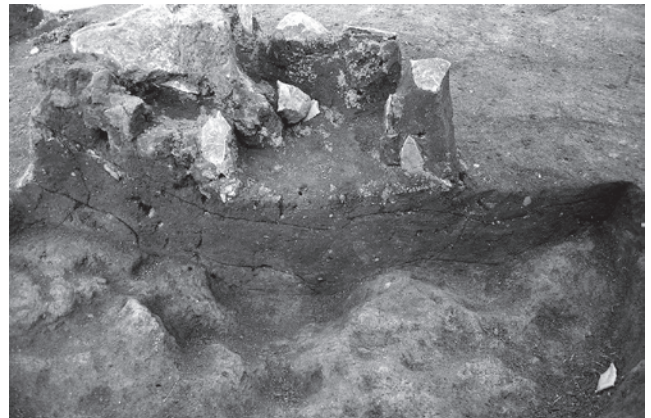
7区 15号土坑全景 (西から)



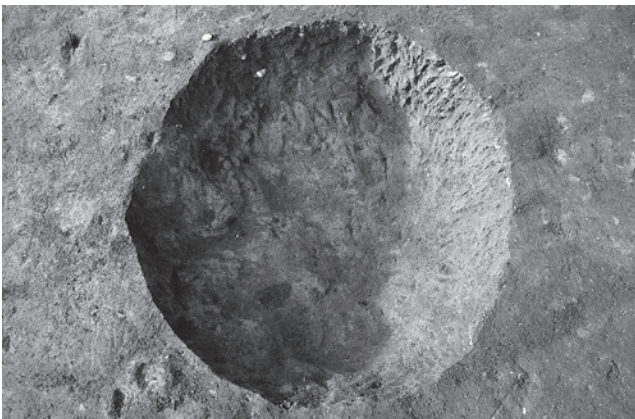
7区 15号土坑セクション (西から)



7区 20号土坑全景 (東から)



7区 20号土坑セクション (南から)



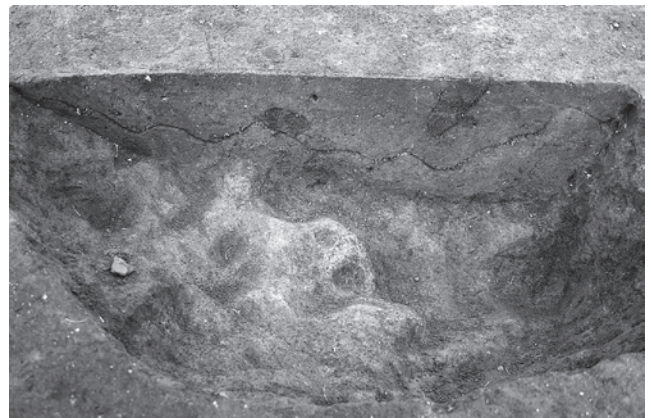
7区 22号土坑全景 (東から)



7区 22号土坑セクション (南から)

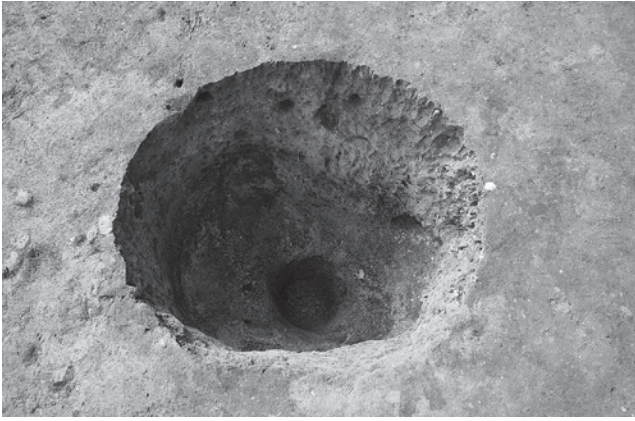


7区 23号土坑全景 (東から)



7区 23号土坑セクション (南から)

PL12



7区 24号土坑全景（東から）



7区 24号土坑セクション（東から）



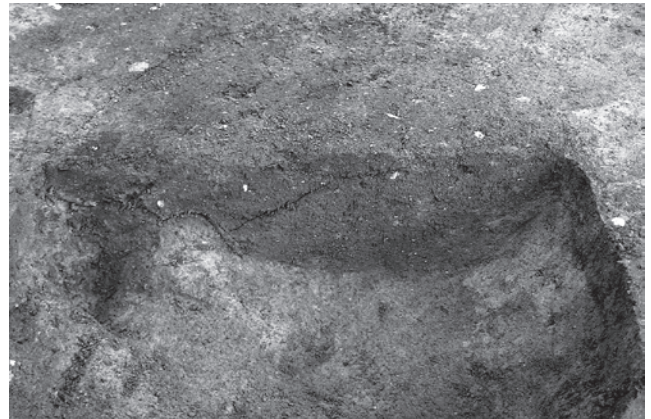
7区 29号土坑全景（北から）



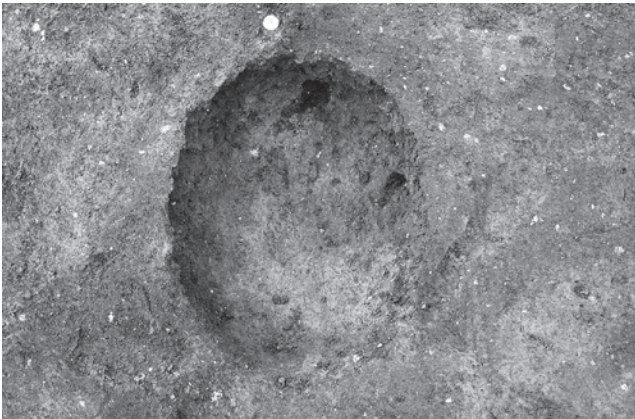
7区 29号土坑全景（北から）



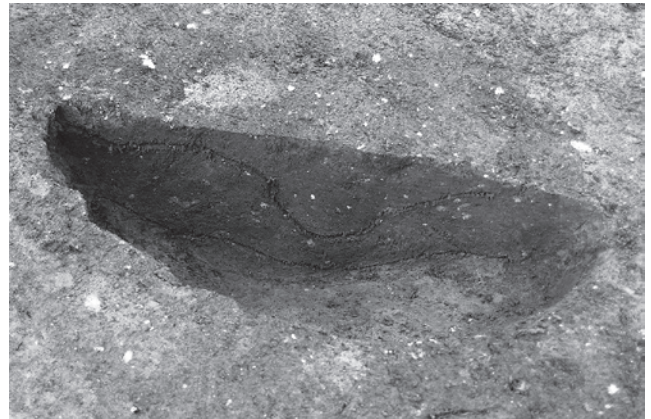
7区 43号土坑全景（東から）



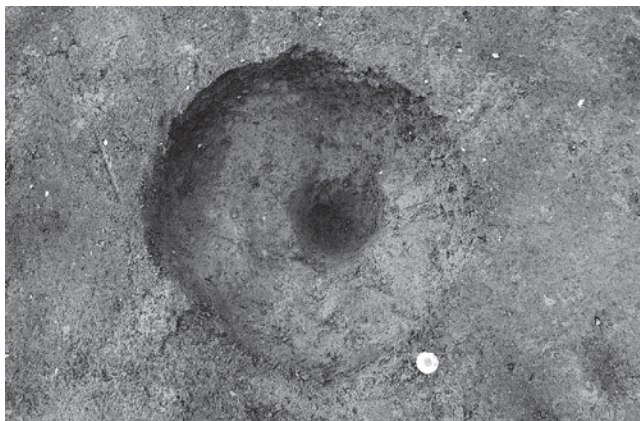
7区 43号土坑セクション（西から）



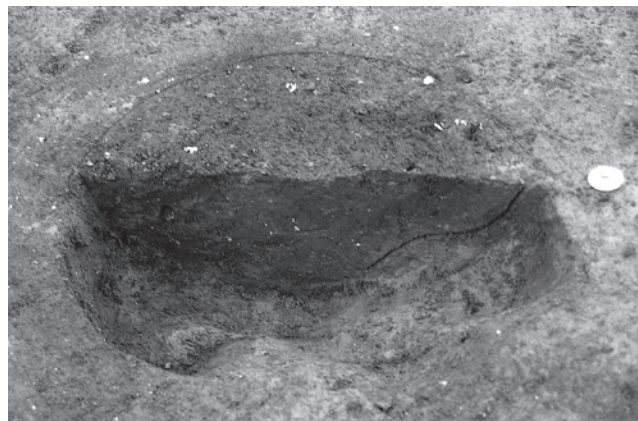
7区 45号土坑全景（東から）



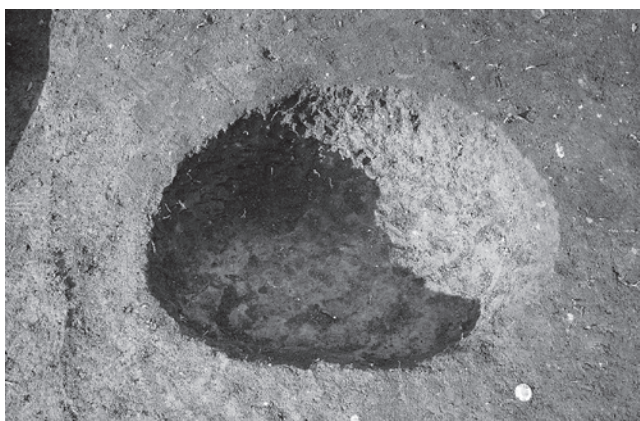
7区 45号土坑セクション（南から）



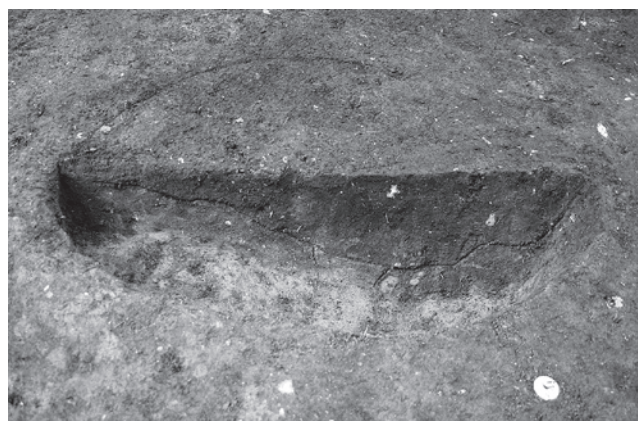
7区 51号土坑全景（東から）



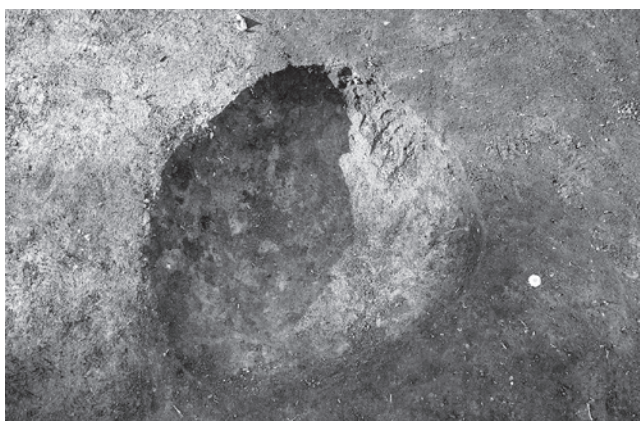
7区 51号土坑セクション（南から）



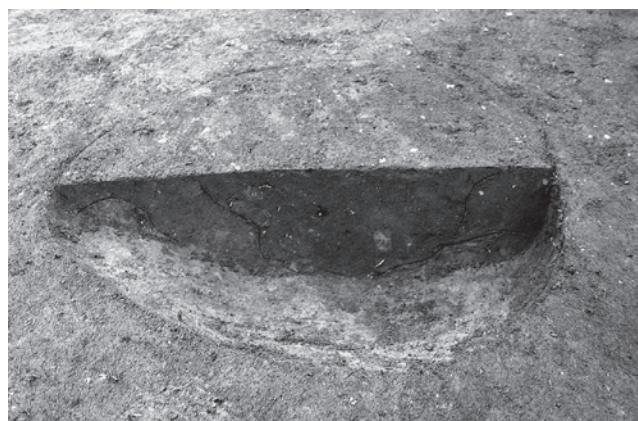
97区 22号土坑全景（南から）



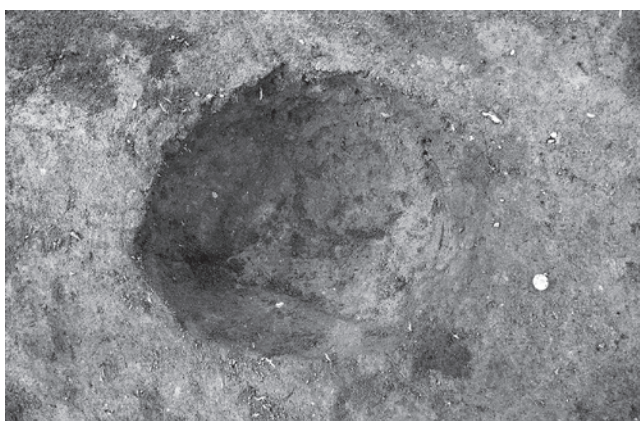
97区 22号土坑セクション（南から）



97区 23号土坑全景（南から）



97区 23号土坑セクション（南から）



97区 24号土坑全景（南から）



97区 24号セクション（南から）

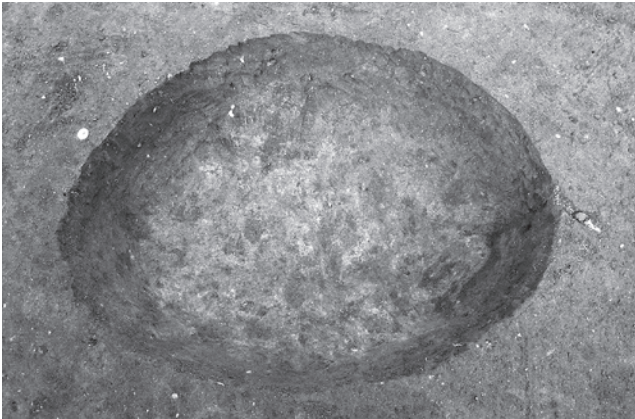
PL14



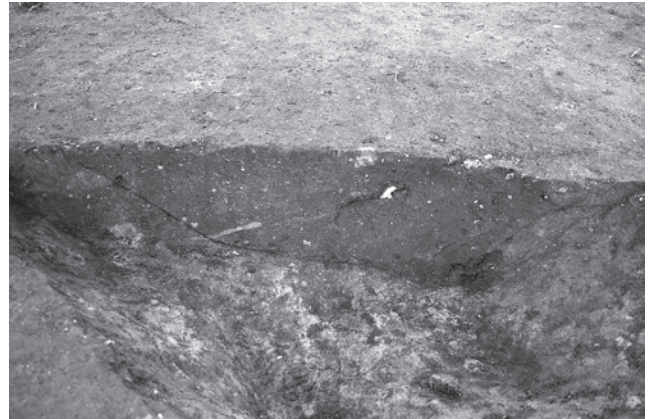
97区 25号土坑全景(南から)



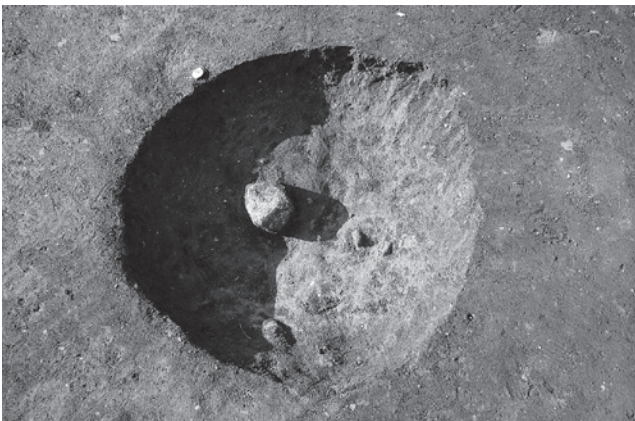
97区 25号土坑セクション(南東から)



97区 37号土坑全景(東から)



97区 37号土坑セクション(南から)



97区 38号全景(東から)



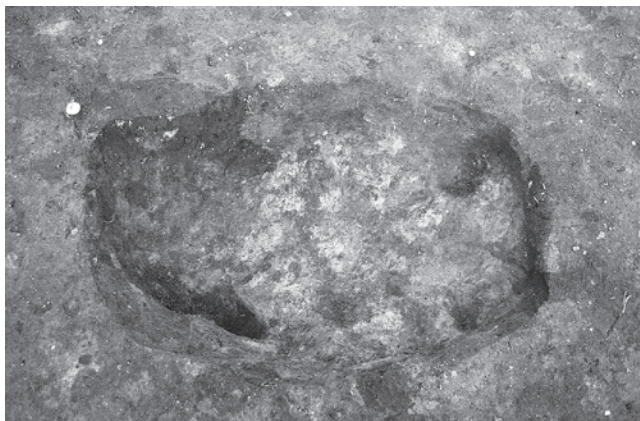
97区 38号セクション(南から)



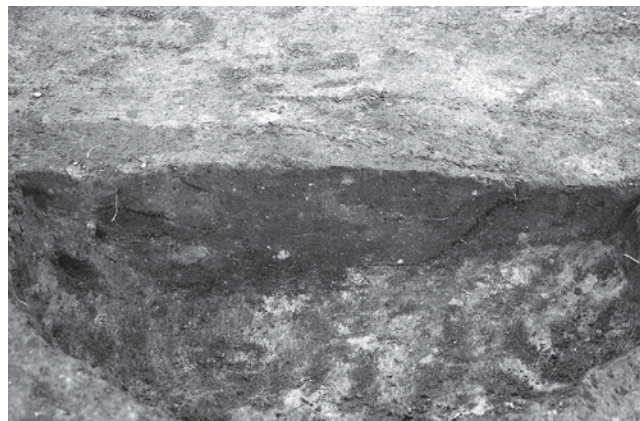
97区 39号土坑全景(南から)



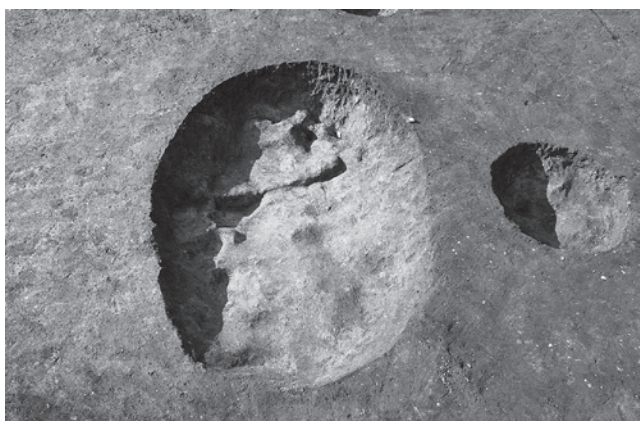
97区 39号セクション(南から)



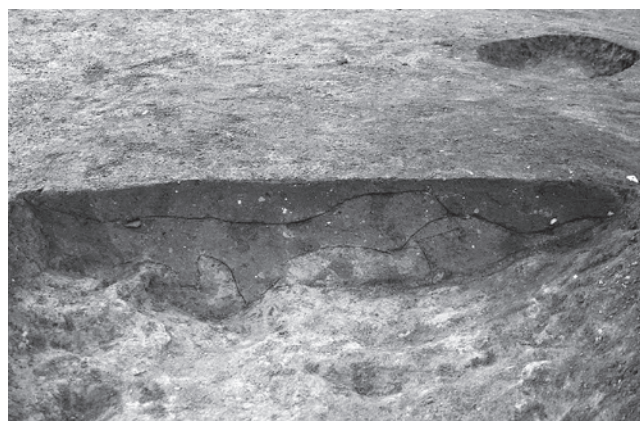
97区 40号土坑全景（北から）



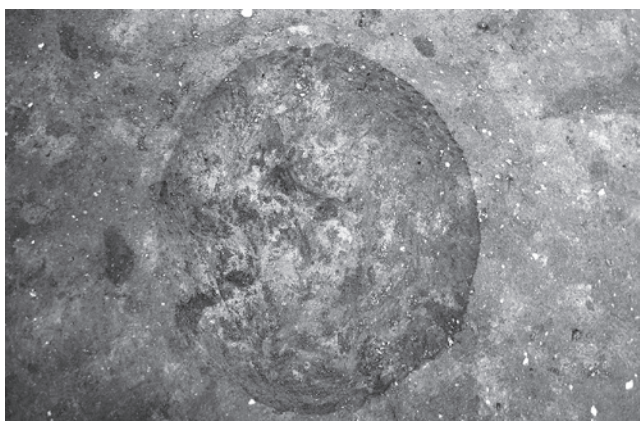
97区 40号土坑セクション（南から）



97区 41号土坑全景（東から）



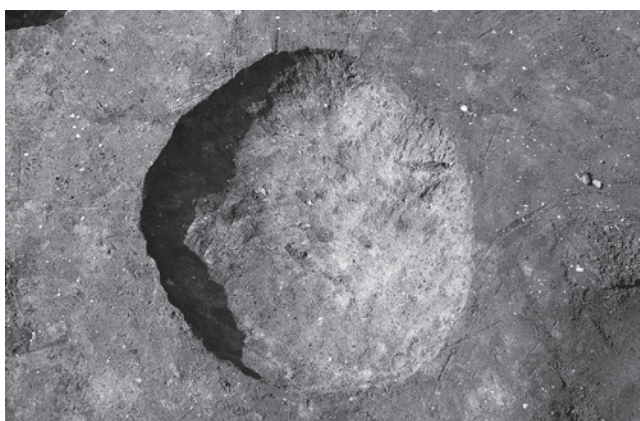
97区 41号土坑セクション（東から）



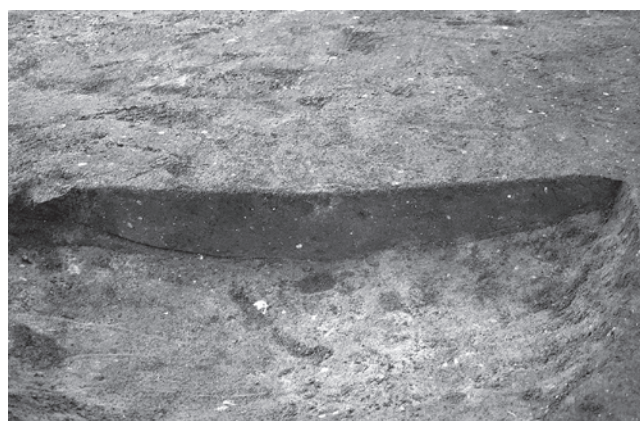
97区 42号土坑全景（南から）



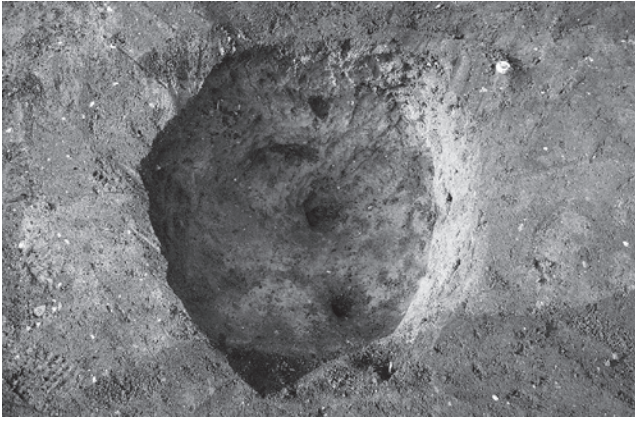
97区 42号土坑セクション（南から）



97区 43号土坑全景（東から）



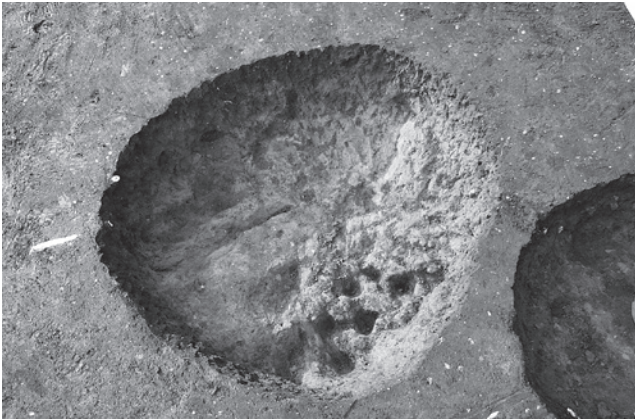
97区 43号土坑セクション（南から）



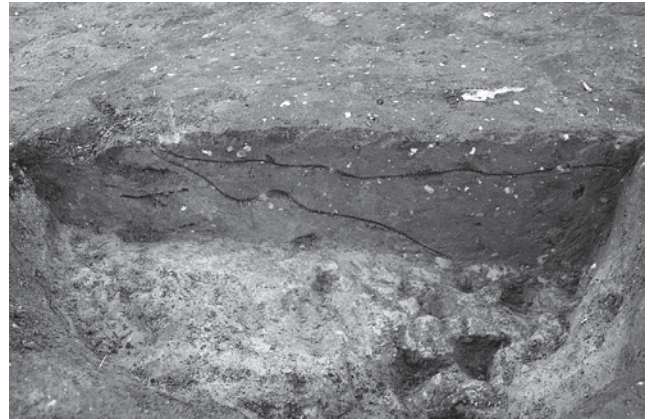
97区 44号土坑全景（東から）



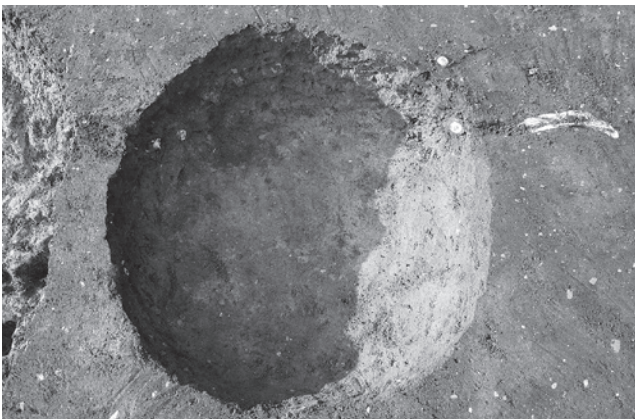
97区 44号土坑セクション（南から）



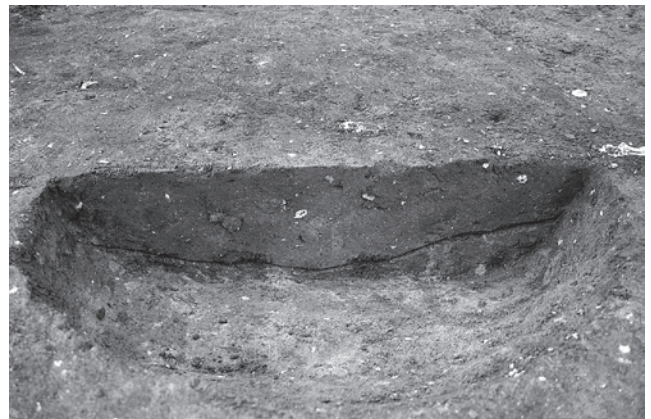
97区 45号土坑全景（東から）



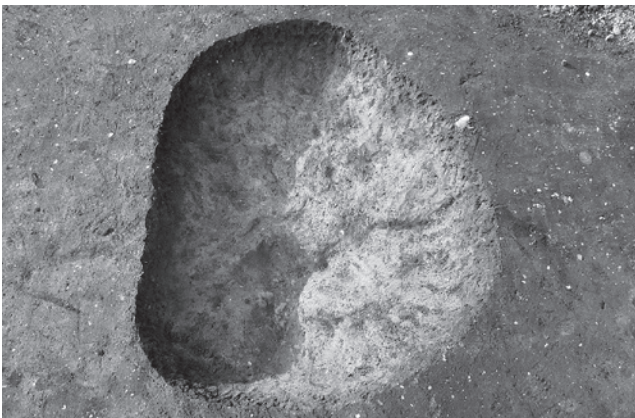
97区 45号土坑セクション（東から）



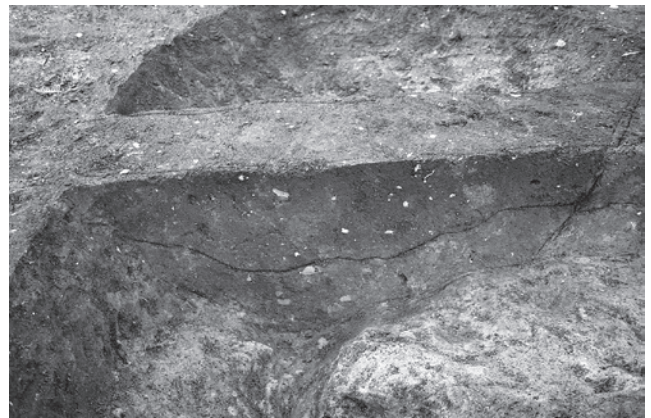
97区 46号土坑全景（東から）



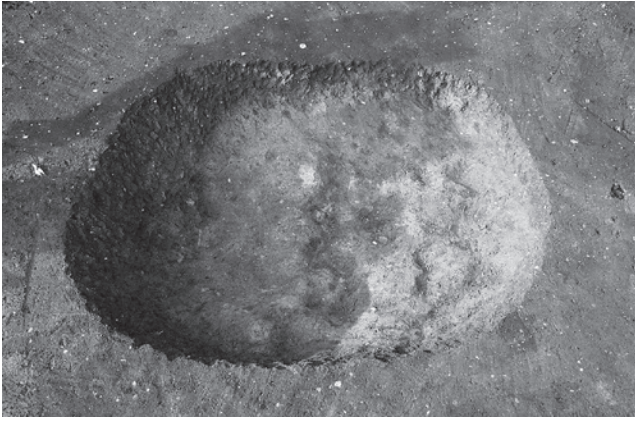
97区 46号セクション（東から）



97区 47号土坑全景（南から）



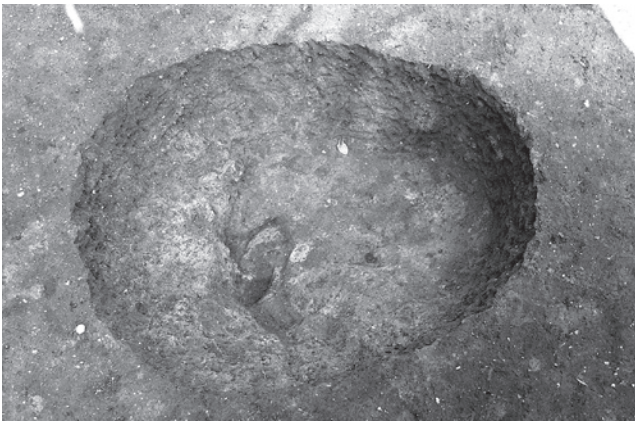
97区 47号セクション（東から）



97区 48号土坑全景(東から)



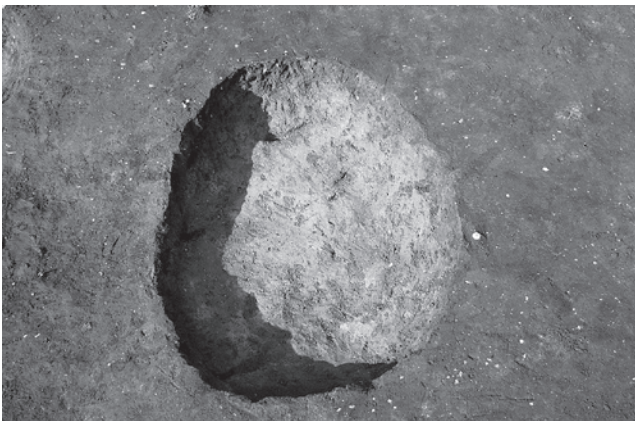
97区 48号土坑セクション(北から)



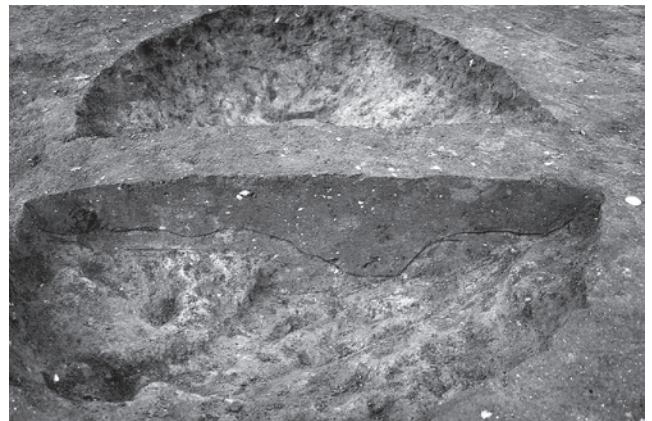
97区 49号土坑全景(南から)



97区 49号土坑セクション(東から)



97区 51号土坑全景(南から)



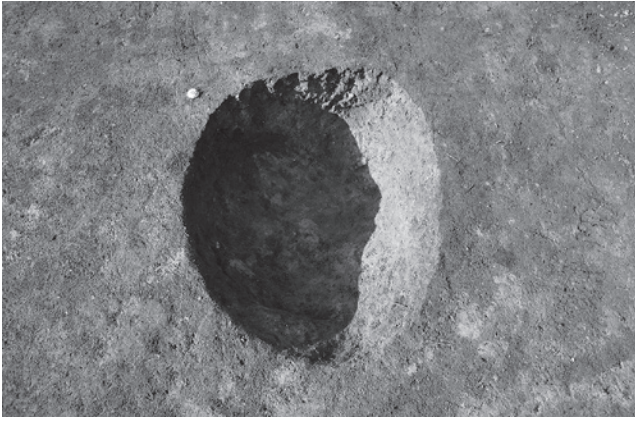
97区 51号土坑セクション(東から)



97区 52号土坑全景(南から)



97区 52号土坑セクション(南から)



97区 53号土坑全景 (東から)



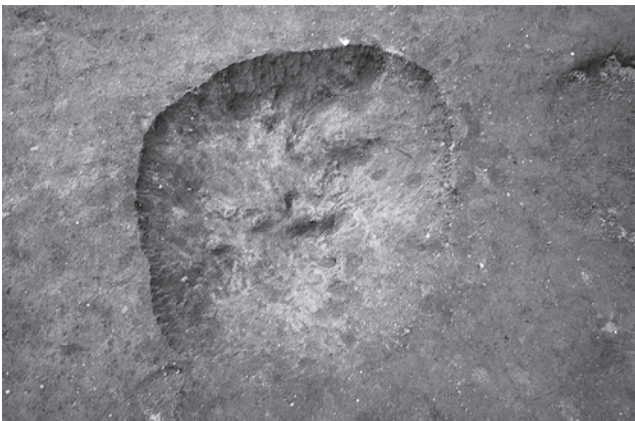
97区 53号土坑セクション (南から)



97区 58号土坑全景 (東から)



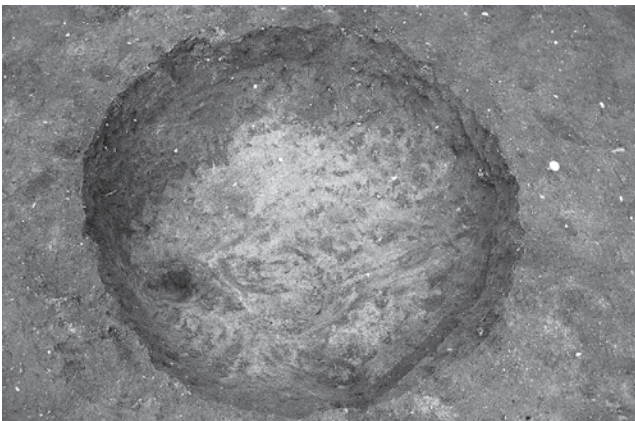
97区 58号土坑セクション (南から)



97区 61号土坑全景 (東から)



97区 61号土坑セクション (南から)



97区 62号土坑全景 (南から)



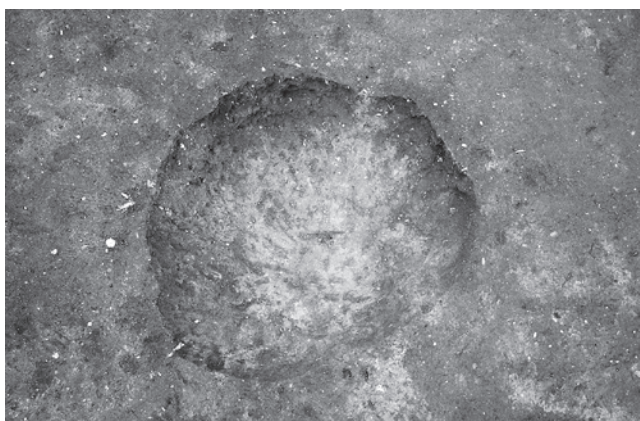
97区 62号土坑セクション (東から)



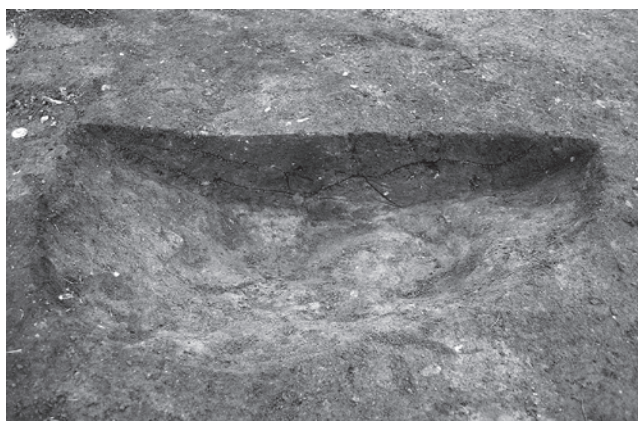
97区 63号土坑全景（西から）



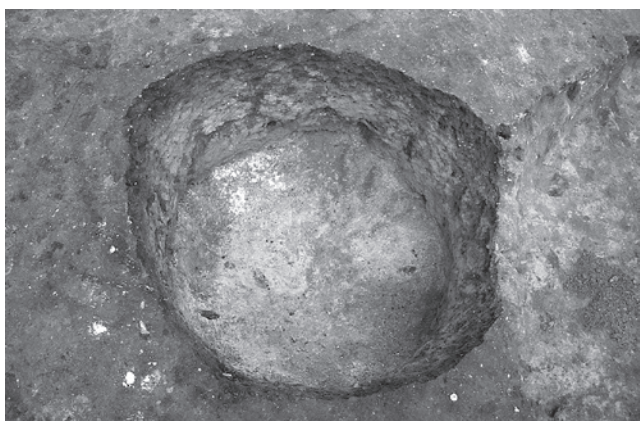
97区 63号土坑セクション（南から）



97区 65号土坑全景（南から）



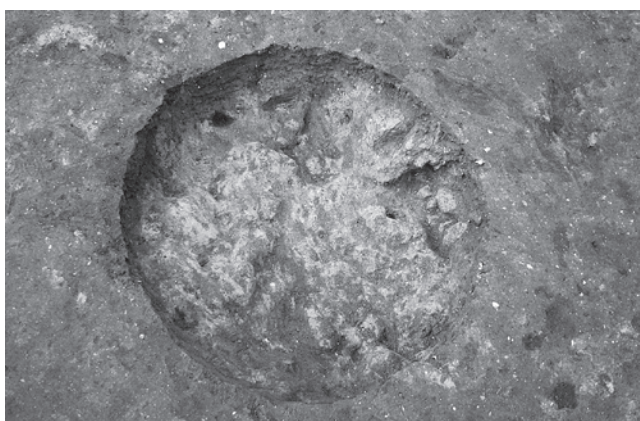
97区 65号土坑セクション（南から）



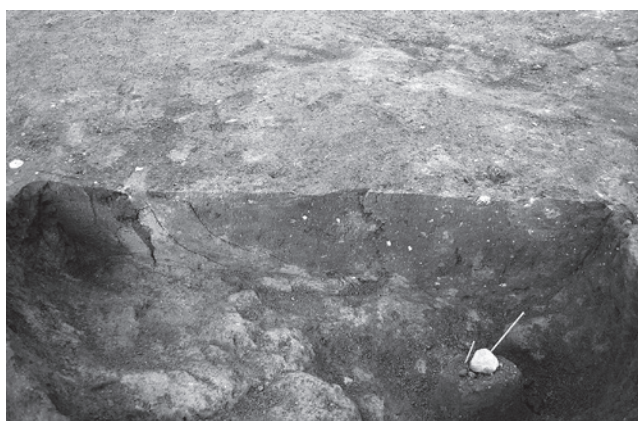
97区 66号土坑全景（南から）



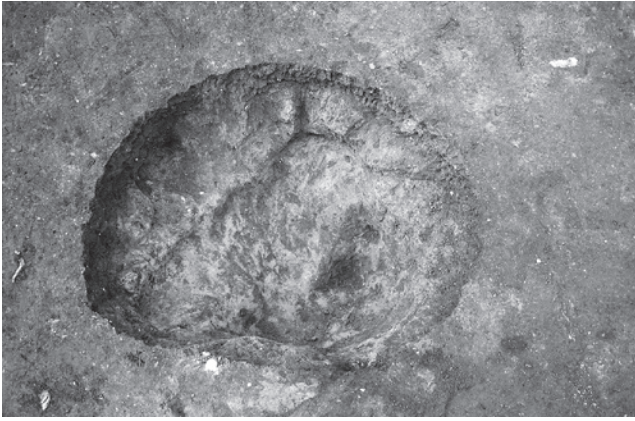
97区 66号土坑セクション（南から）



97区 67号土坑全景（東から）



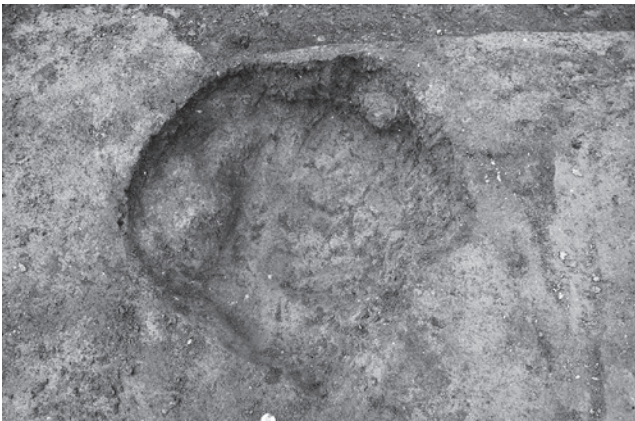
97区 67号土坑セクション（南から）



97区 68号土坑全景(南から)



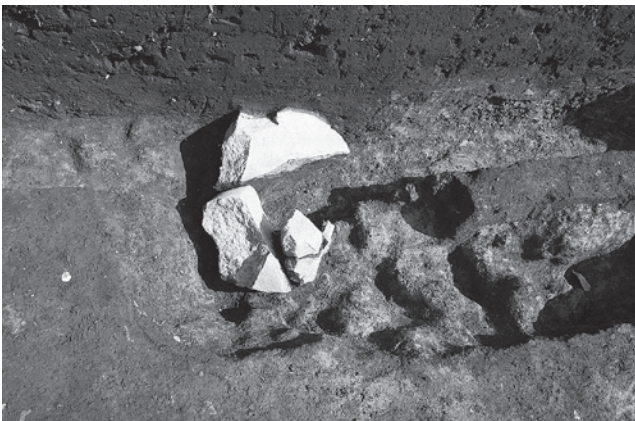
97区 68号土坑セクション(東から)



97区 69号土坑全景(東から)



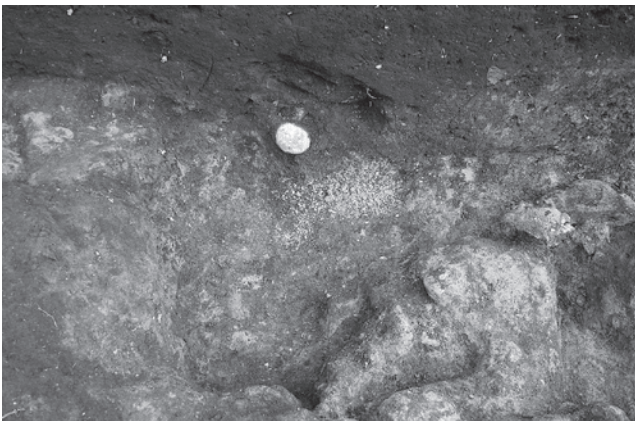
97区 69号土坑セクション(南から)



97区 78号土坑全景(西から)



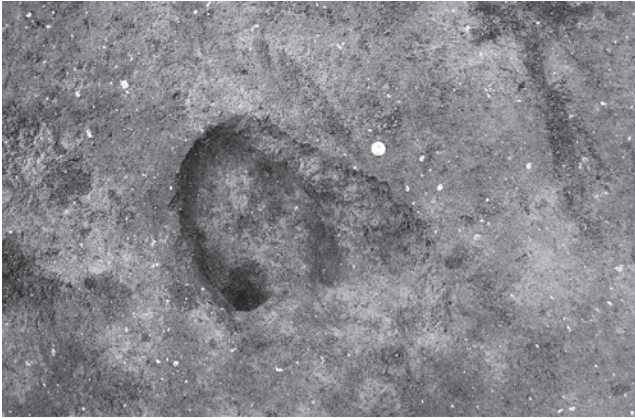
97区 78号土坑セクション(西から)



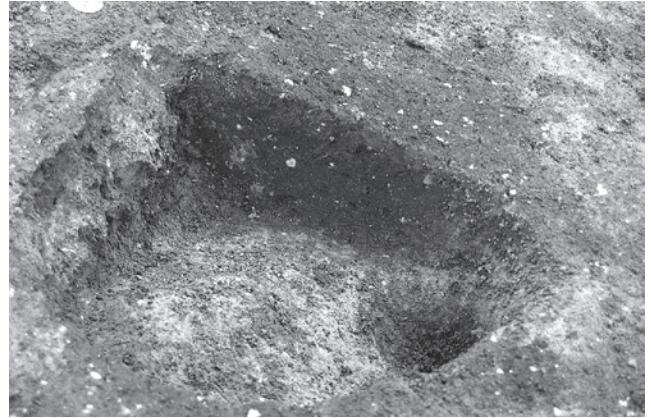
97区 78号土坑全景(西から)



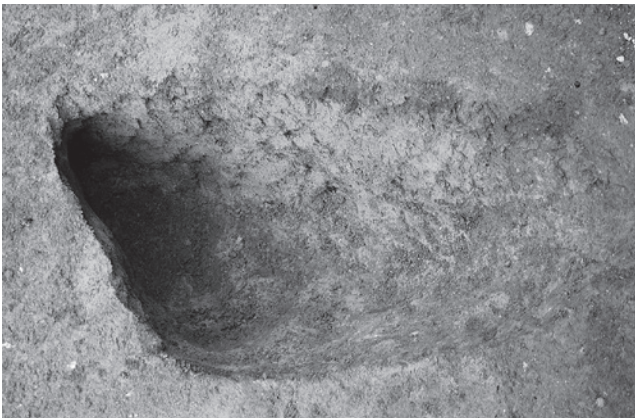
97区 80号土坑セクション(東から)



7区 42号土坑全景（東から）



7区 42号土坑セクション（南から）



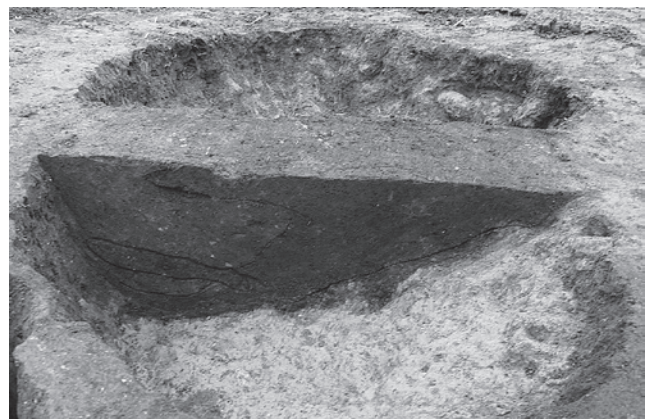
7区 53号土坑全景（東から）



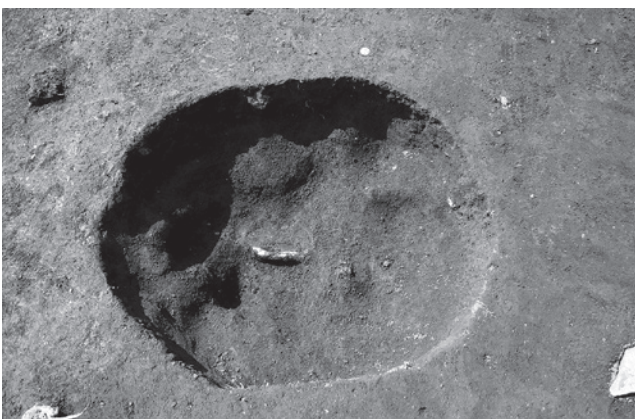
7区 53号土坑セクション（南から）



97区 14号土坑全景（南から）



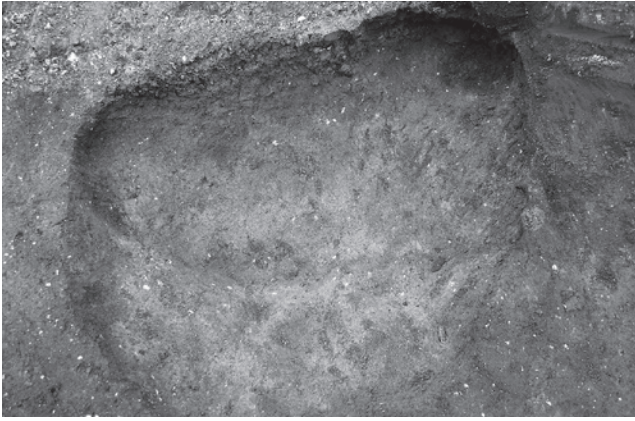
97区 14号土坑セクション（西から）



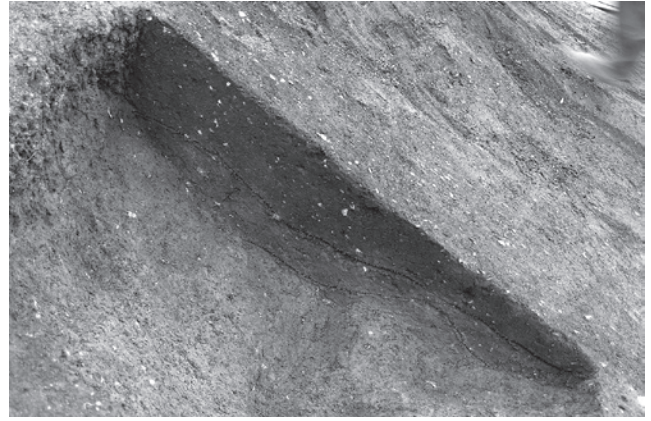
97区 19号土坑全景（東から）



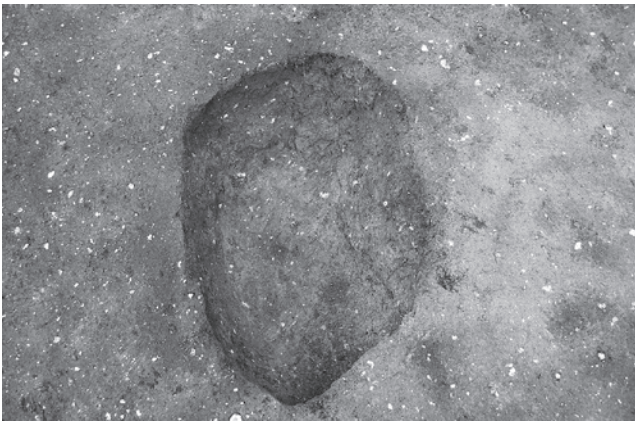
97区 19号土坑セクション（南から）



97区 72号土坑全景(東から)



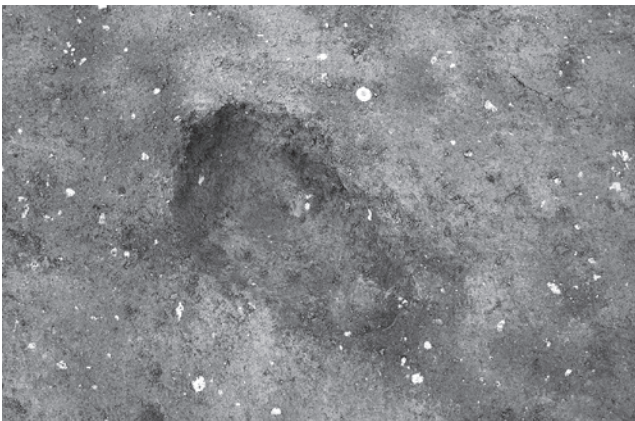
97区 72号土坑セクション(南から)



97区 74号土坑全景(東から)



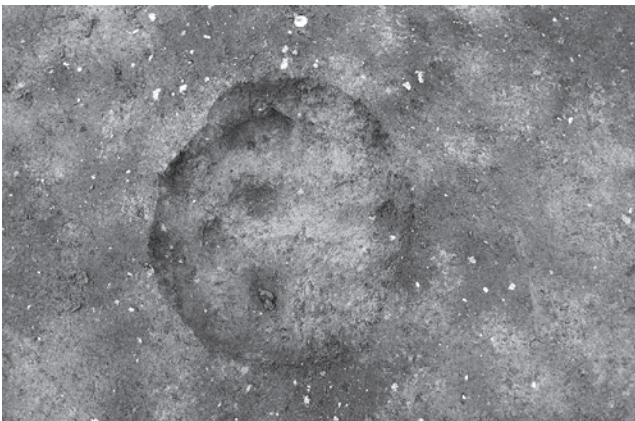
97区 74号土坑セクション(南から)



97区 76号土坑全景(南から)



97区 76号土坑セクション(南から)



97区 77号土坑全景(東から)



97区 77号土坑セクション(南から)



7区 1号全景 (東から)



7区 1号セクション (南から)



7区 3号土坑全景 (南から)



7区 8号土坑全景 (東から)



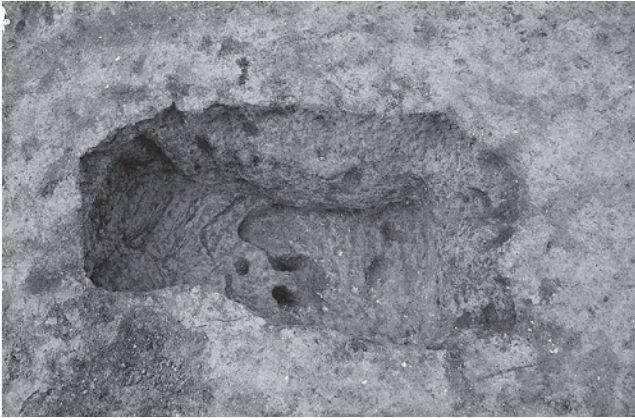
7区 8号土坑セクション (東から)



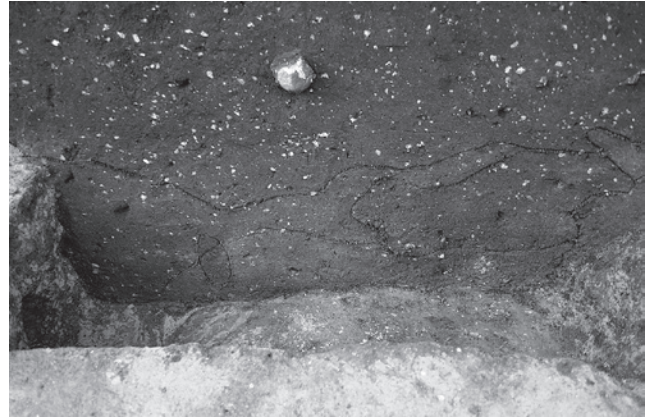
7区 12号土坑 全景 (西から)



7区 13号土坑全景 (南から)



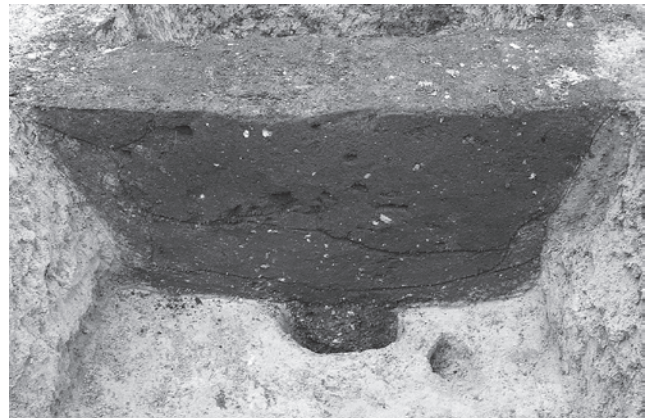
7区 30号土坑全景（南から）



7区 30号土坑セクション（東から）



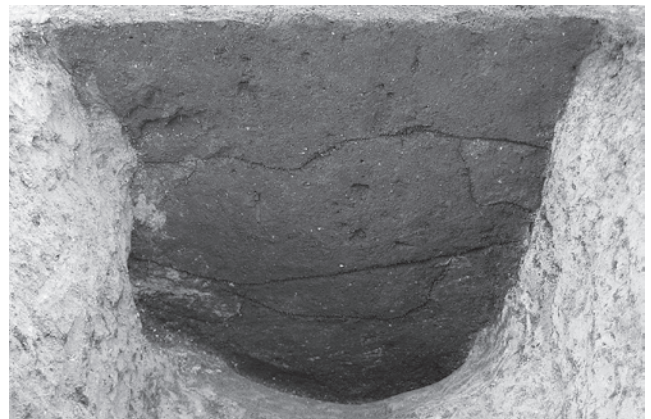
7区 31号土坑全景（東から）



7区 31号土坑セクション（西から）



7区 32号土坑全景（東から）



7区 32号土坑セクション（西から）



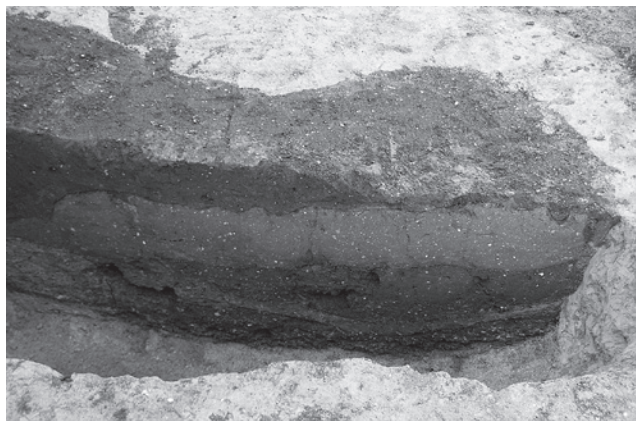
7区 33号土坑全景（東から）



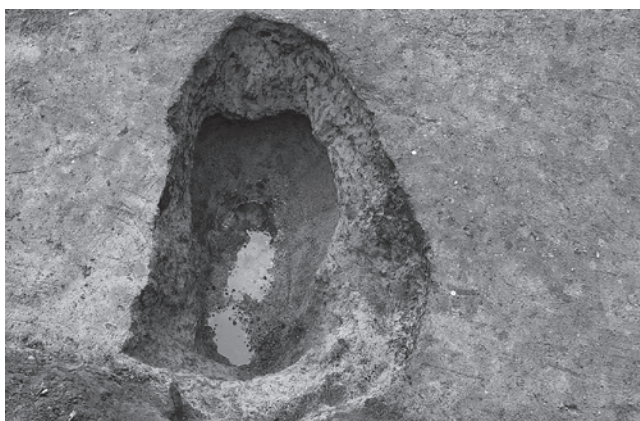
7区 33号土坑セクション（西から）



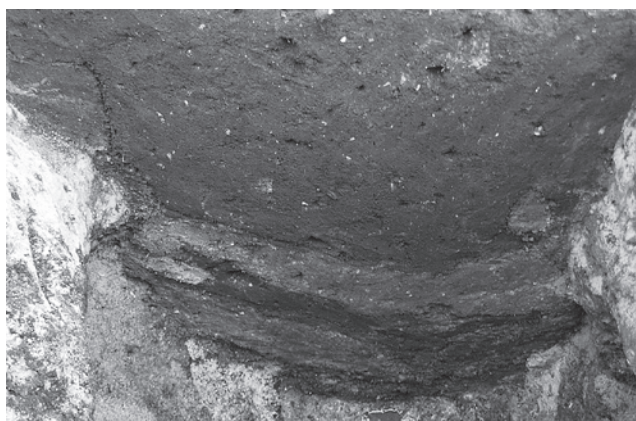
7区 34号土坑全景（東から）



7区 34号土坑セクション（東から）



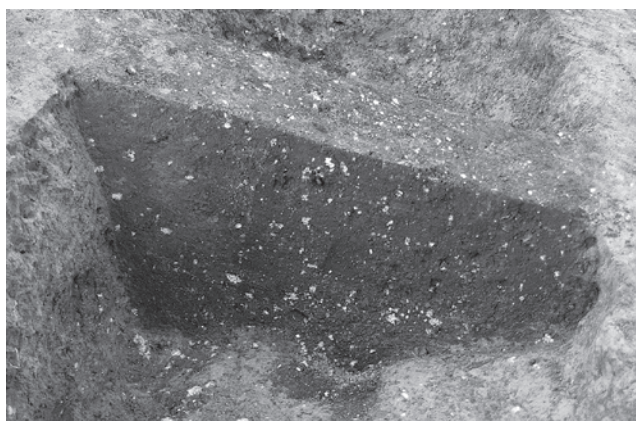
7区 36号土坑全景（東から）



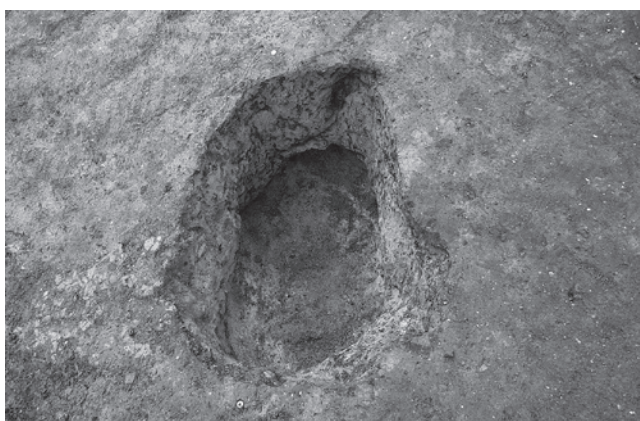
7区 36号土坑セクション（西から）



7区 38号土坑全景（東から）



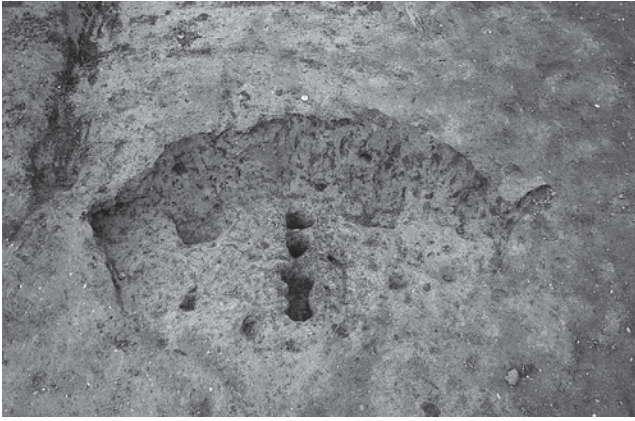
7区 38号土坑セクション（南から）



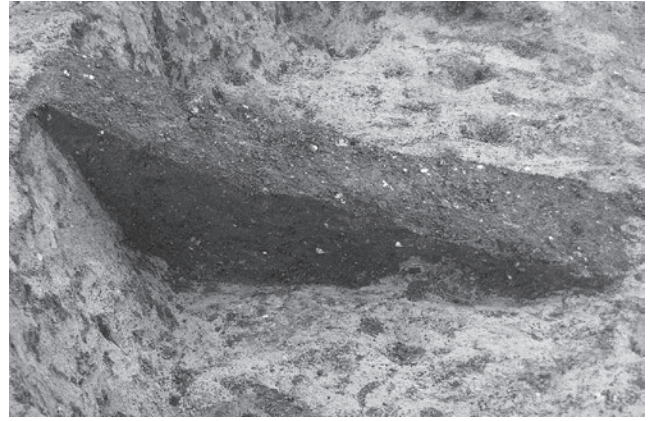
7区 39号土坑全景（南から）



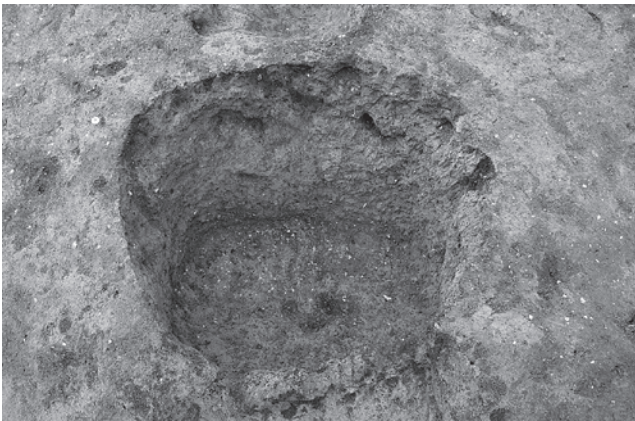
7区 39号土坑セクション（東から）



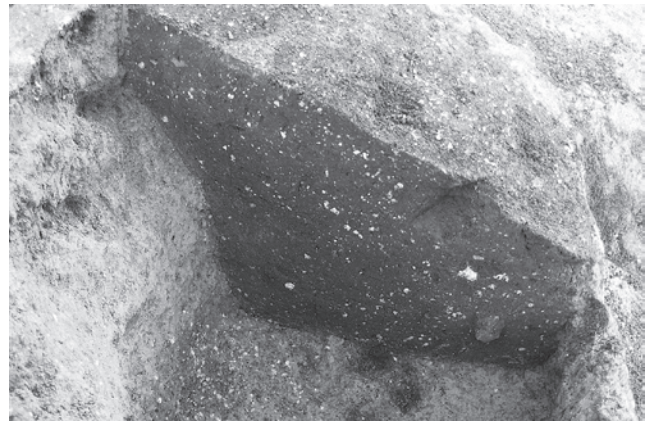
7区 41号土坑全景（東から）



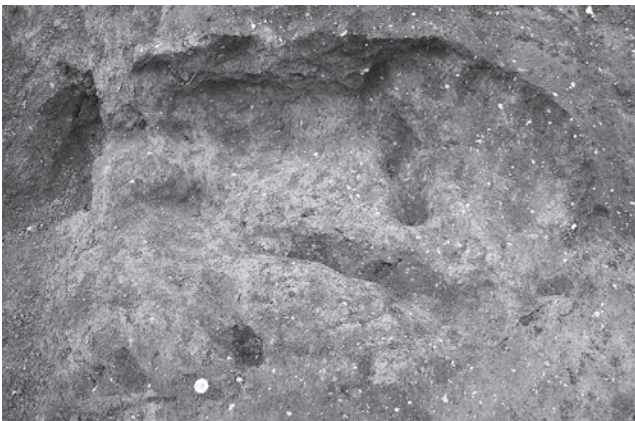
7区 41号土坑セクション（南から）



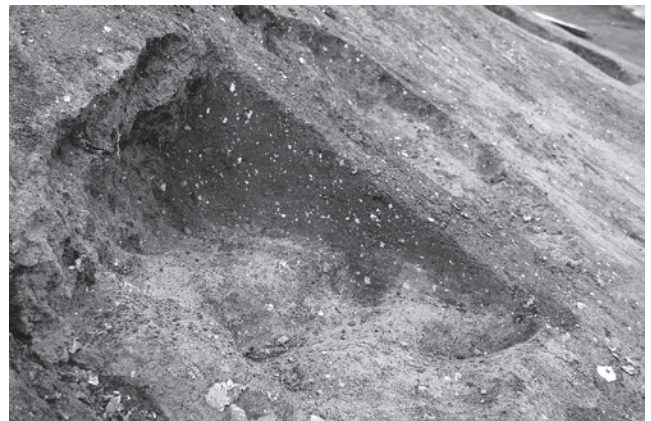
7区 44号土坑全景（東から）



7区 44号土坑セクション（南から）



7区 52号土坑全景（南から）



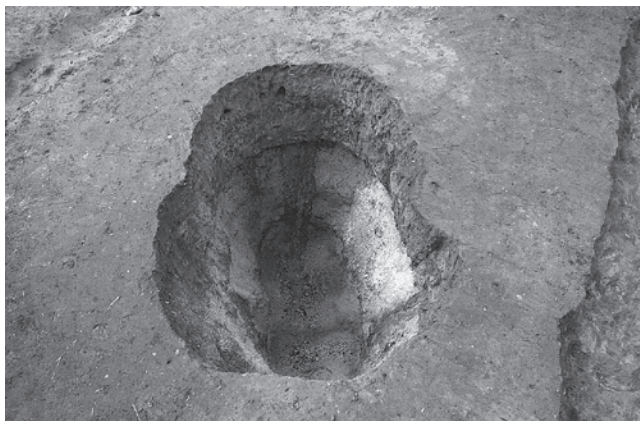
7区 52号土坑セクション（南から）



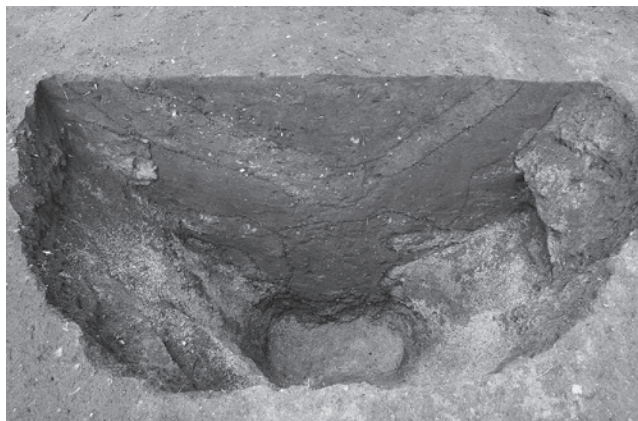
97区 8号土坑全景（南から）



97区 8号セクション（東から）



97区 11号土坑セクション (東から)



97区 11号土坑全景 (東から)



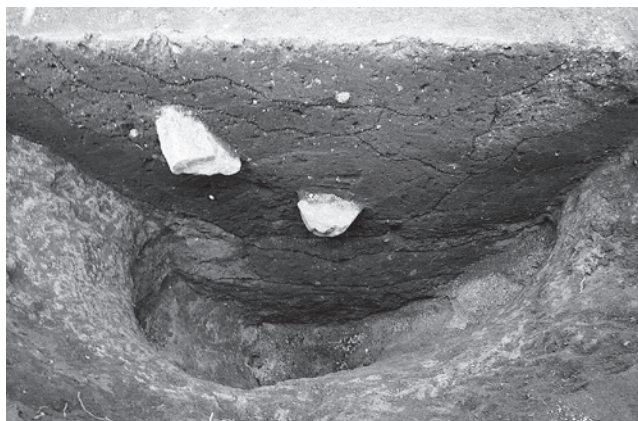
97区 12号土坑全景 (東から)



97区 12号土坑セクション (東から)



97区 15号土坑全景 (東から)



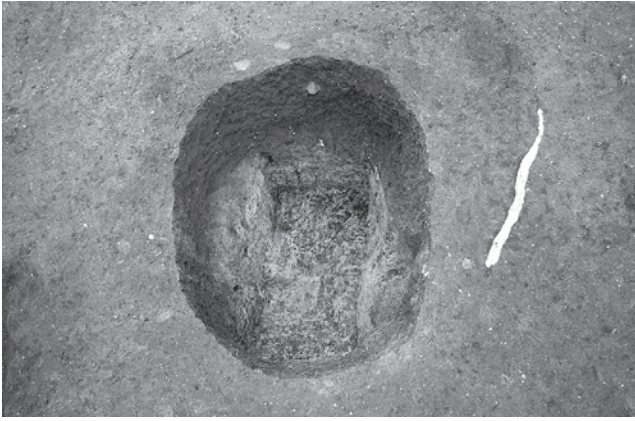
97区 15号土坑セクション (南から)



97区 17号土坑全景 (東から)



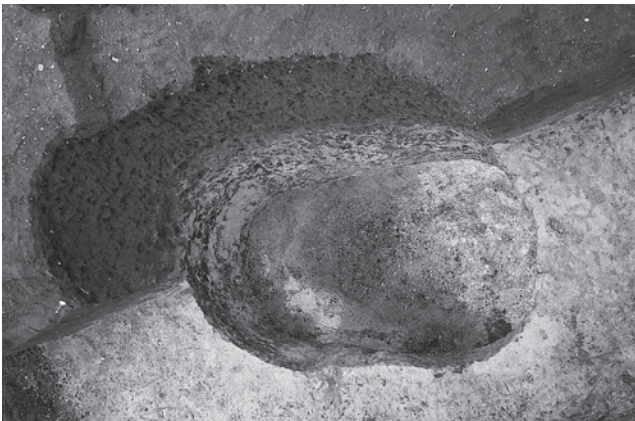
97区 17号土坑セクション (南から)



97区 18号土坑全景(東から)



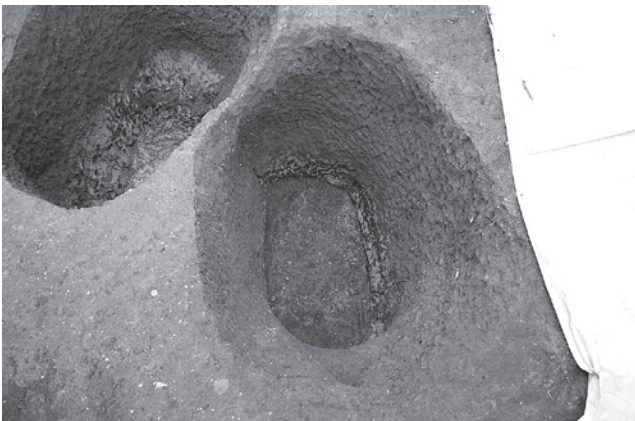
97区 18号土坑セクション(東から)



97区 20号土坑全景(東から)



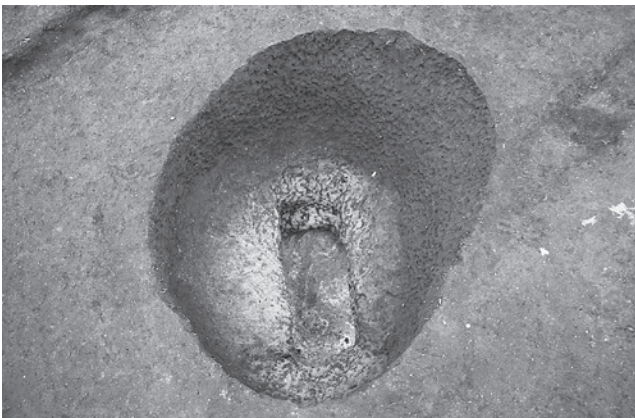
97区 20号土坑セクション(東から)



97区 26号土坑全景(東から)



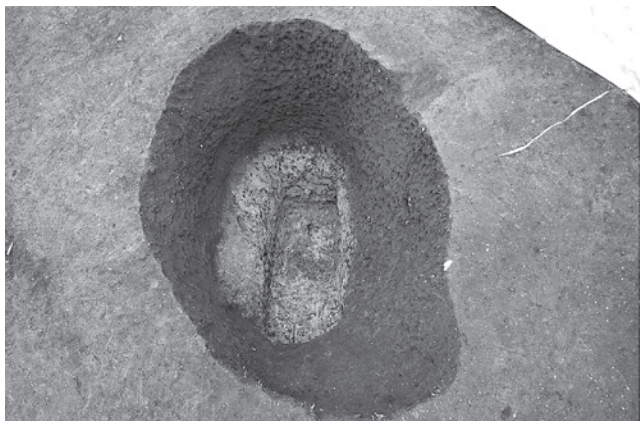
97区 26号土坑セクション(南から)



97区 27号土坑全景(東から)



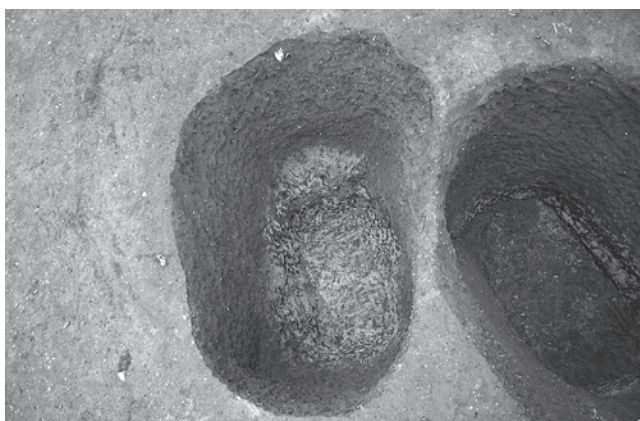
97区 27号土坑セクション(東から)



97区 29号土坑全景（東から）



97区 29号土坑セクション（南から）



97区 30号土坑全景（東から）



97区 30号土坑セクション（東から）



97区 31号土坑全景（東から）



97区 31号土坑セクション（東から）



97区 32号土坑全景（東から）



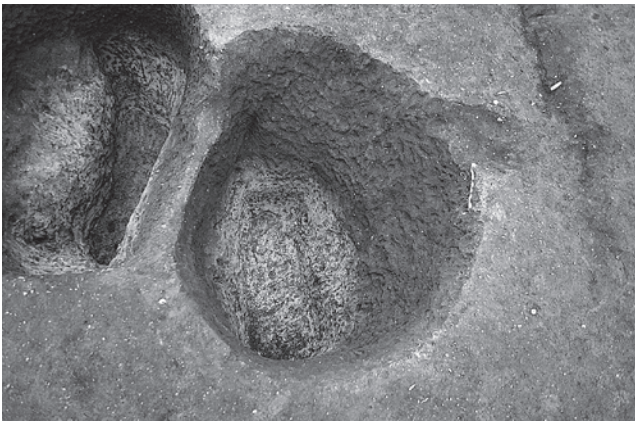
97区 32号土坑セクション（東から）



97区 34号土坑全景（東から）



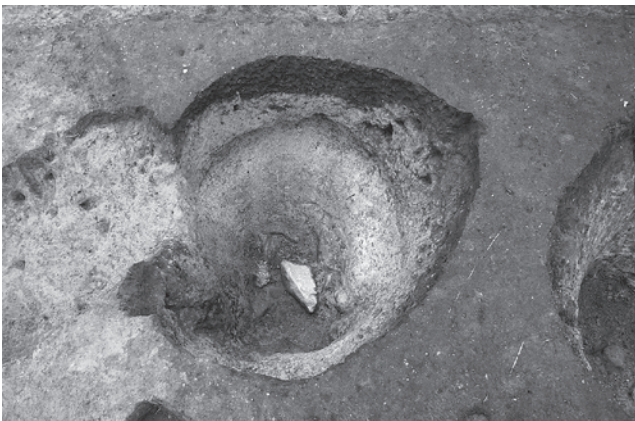
97区 34号土坑セクション（東から）



97区 35号土坑全景（東から）



97区 35号土坑セクション（東から）



97区 36号土坑全景（東から）



97区 36号土坑セクション（南から）



97区 50号土坑全景（南から）



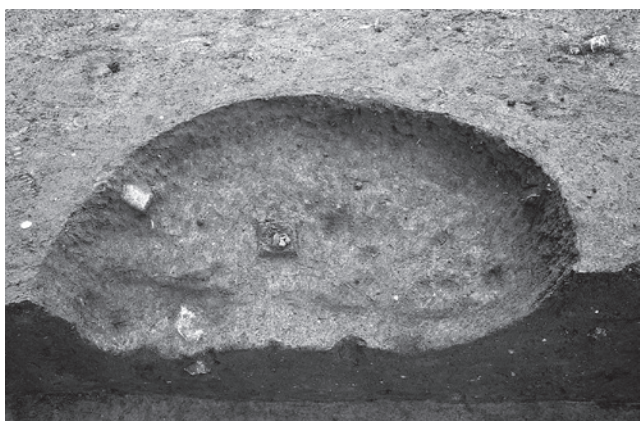
97区 50号土坑セクション（南から）



97区 73号土坑全景（南から）



97区 73号土坑セクション（南から）



7区 2号土坑全景（北から）



7区 2号土坑セクション（北から）



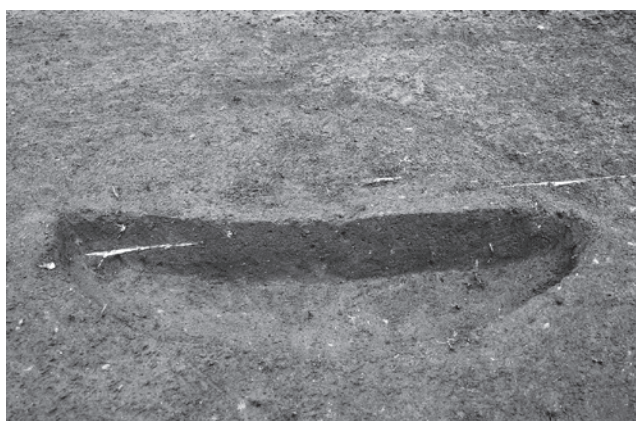
97区 1号土坑全景（東から）



97区 1号土坑セクション（南から）



97区 2号土坑全景（東から）



97区 2号土坑セクション（南から）



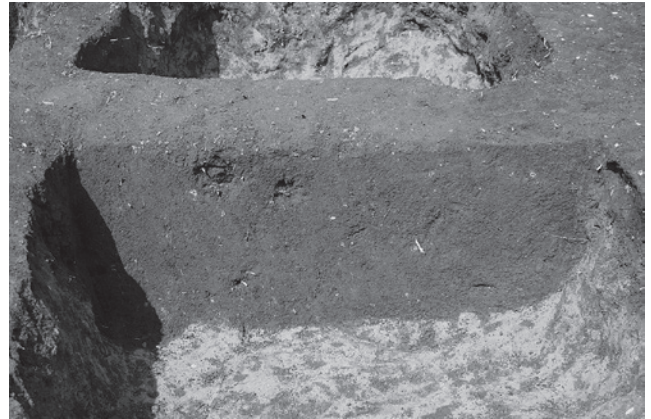
97区 3号土坑全景（東から）



97区 3号土坑セクション（南から）



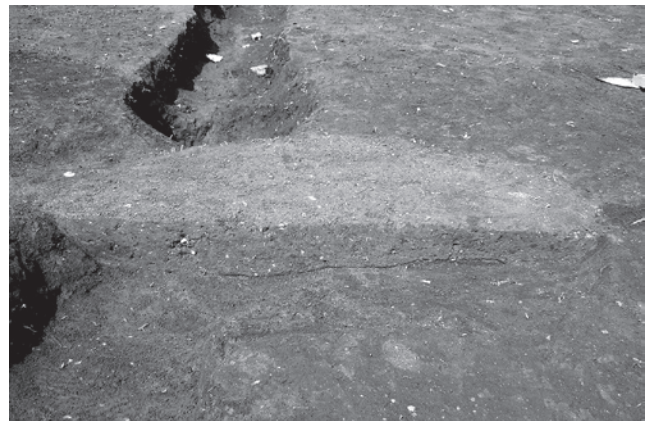
97区 7号土坑全景（東から）



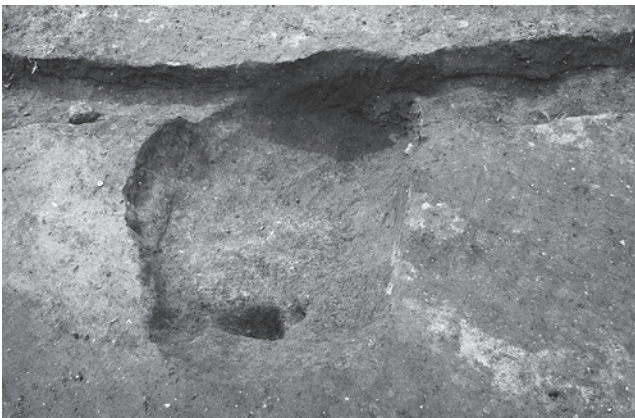
97区 7号土坑セクション（南から）



97区 10号土坑全景（北から）



97区 10号土坑セクション（南から）



97区 13号土坑全景（北から）



97区 13号土坑セクション（北から）



97区 16号土坑全景(南から)



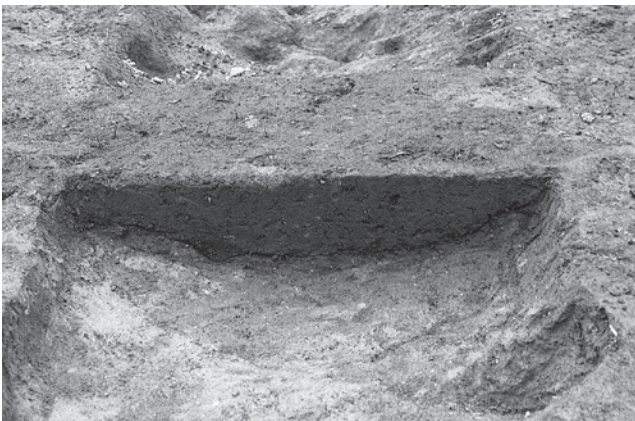
97区 16号土坑セクション(東から)



97区 8号溝(西から)



97区 9号溝(北から)



97区 8号溝セクション(南から)



97区 9号溝セクション(南から)



7・97区 遺物包含層全景（西から）



7・97区 遺物包含層セクション 近接



7・97区 遺物包含層全景（西から）



7・97区 遺物包含層セクション（東から）



縄文下面トレンチ全景（北から）



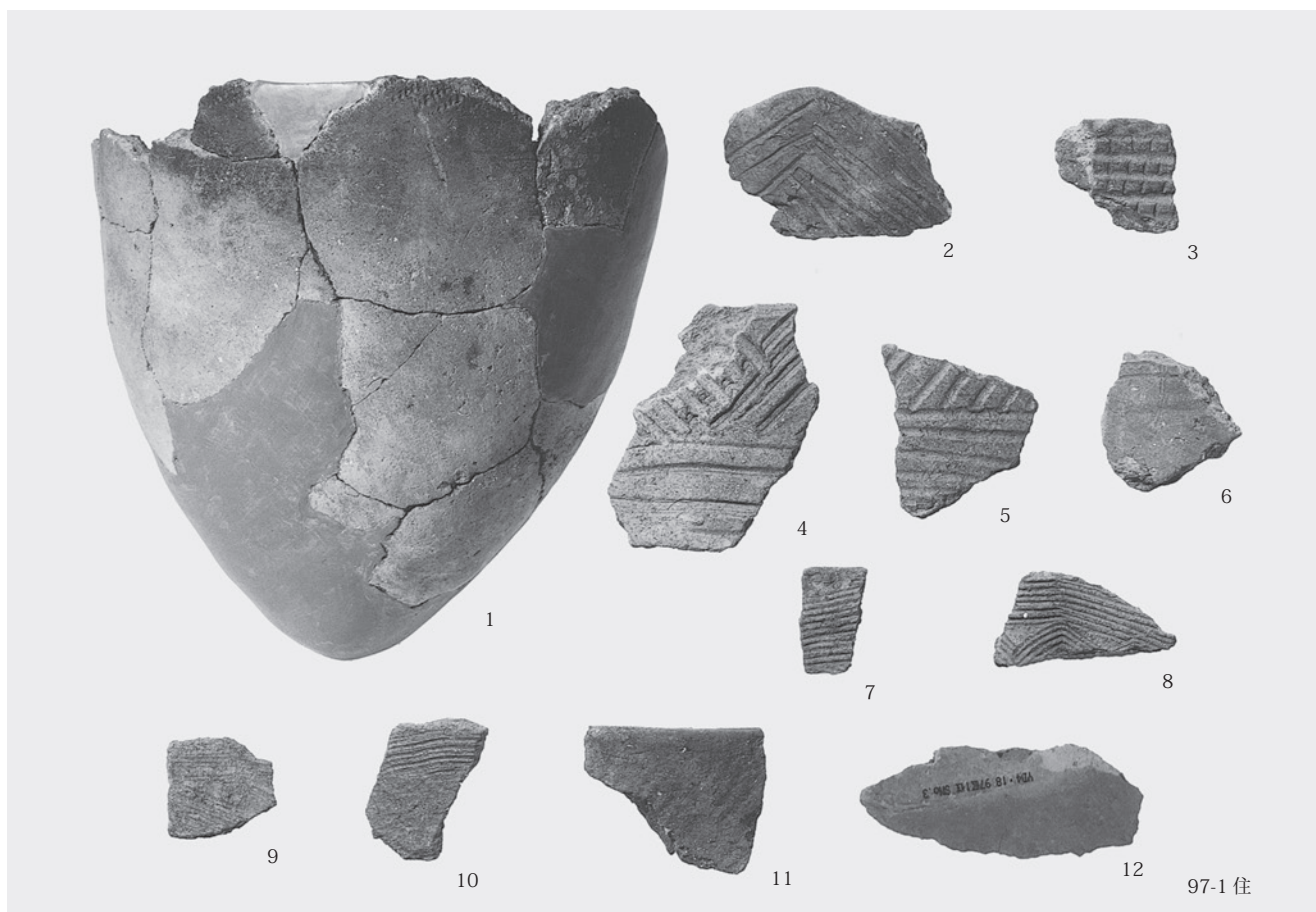
縄文下面トレンチセクション（南から）



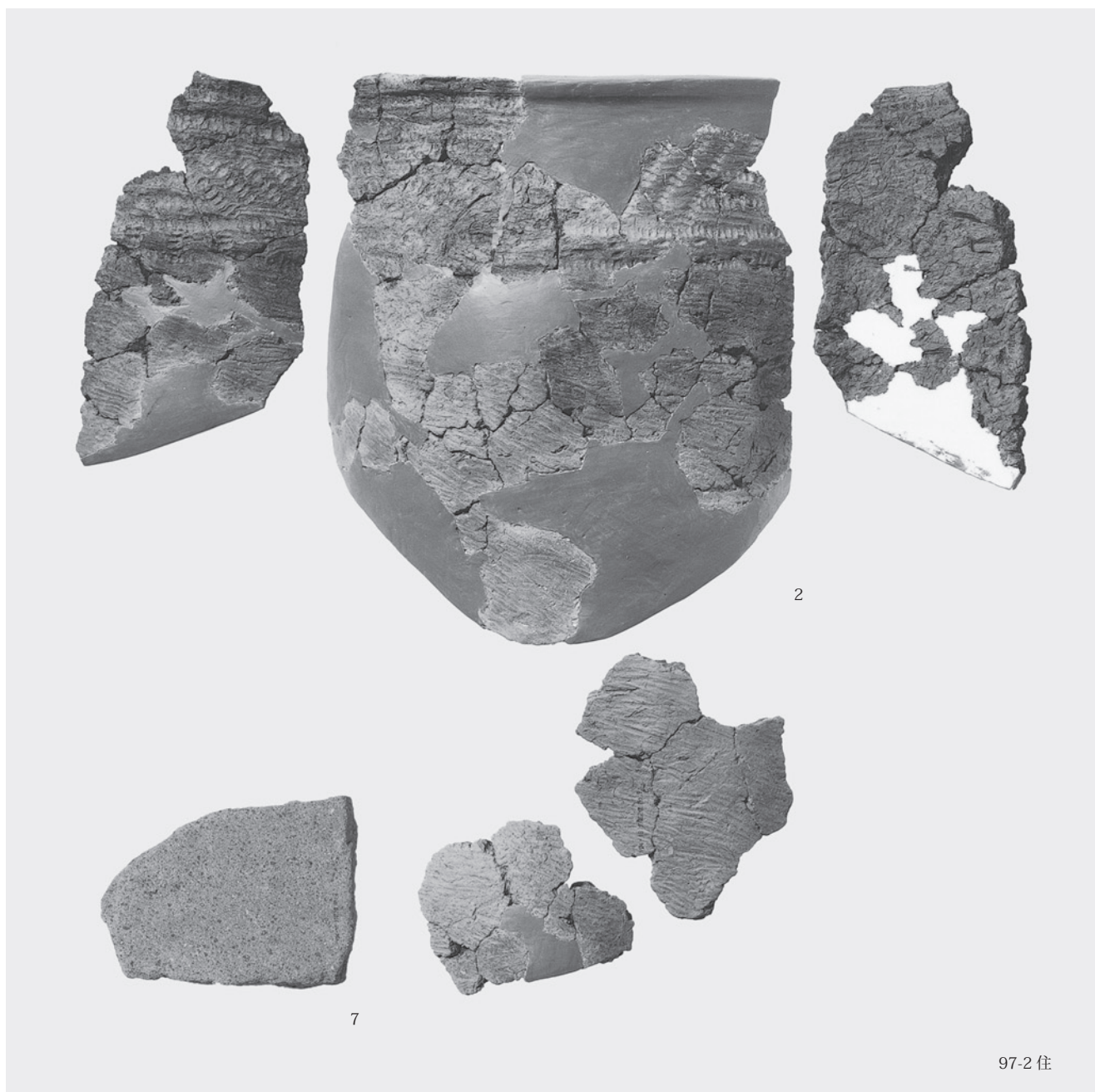
作業風景（北から）



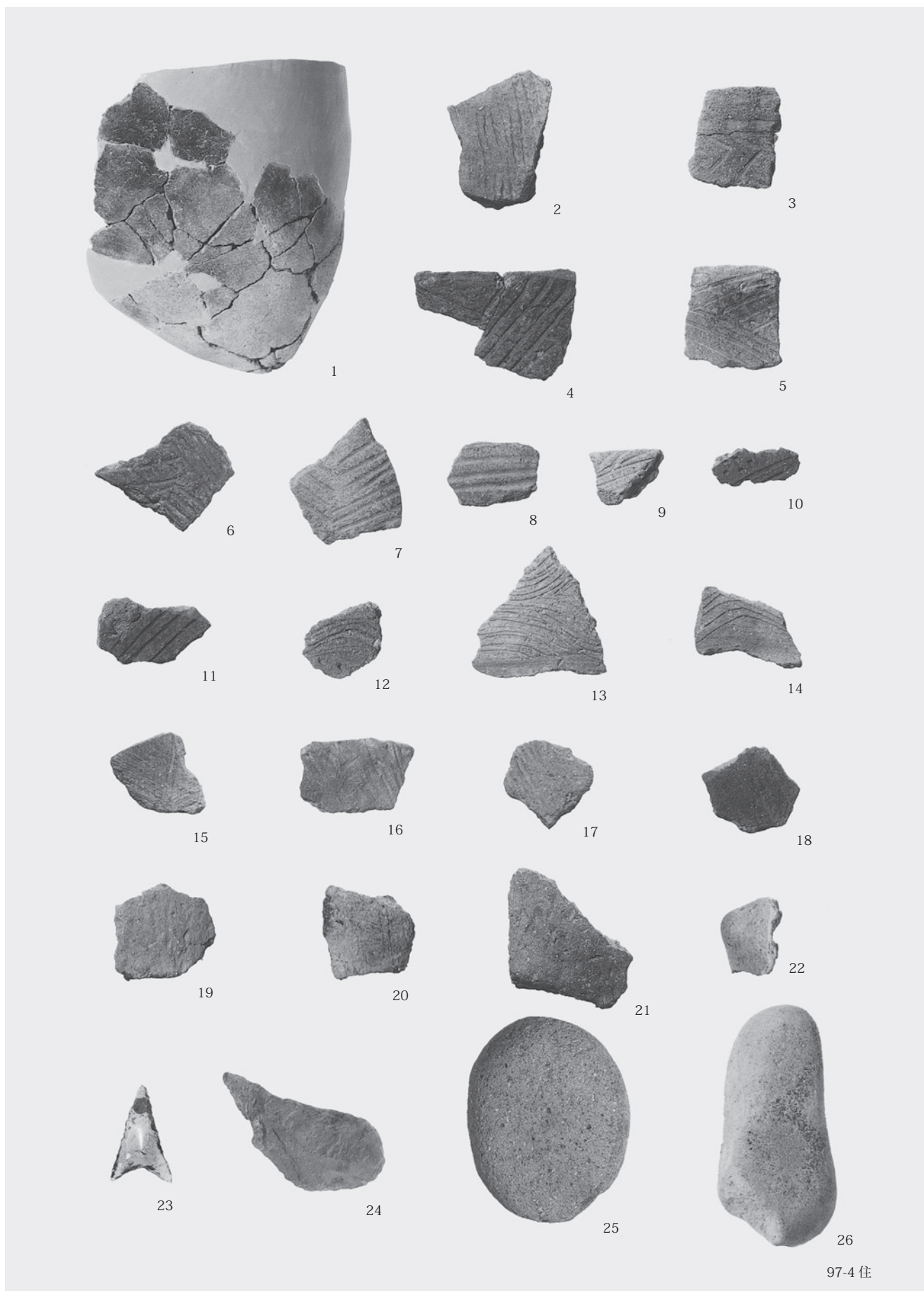
作業風景（北から）



97区 1号住・2号住居跡出土土器・石器

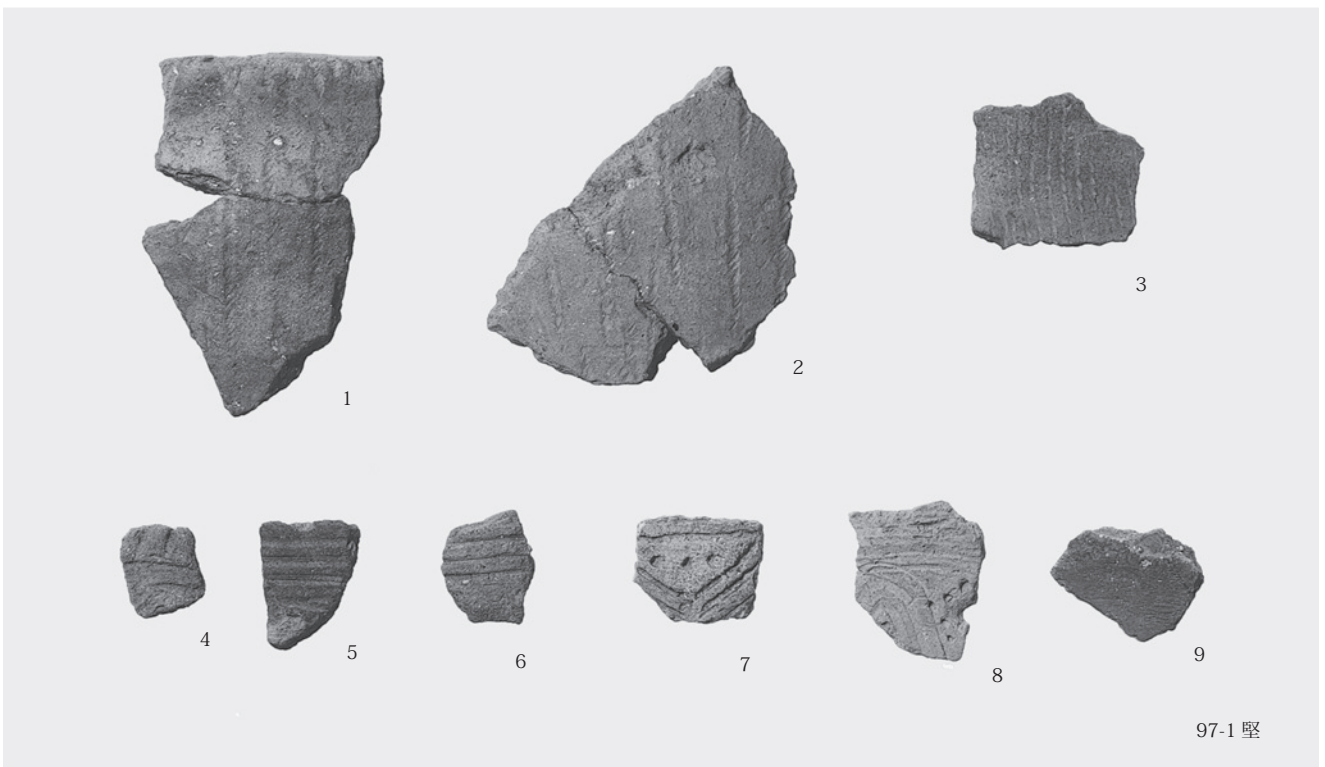
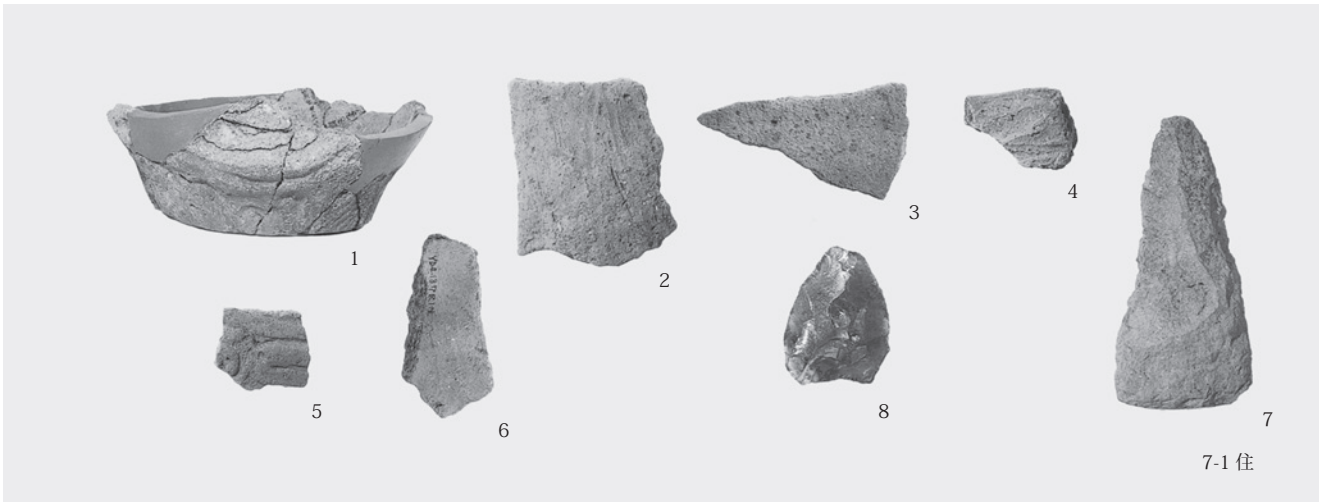


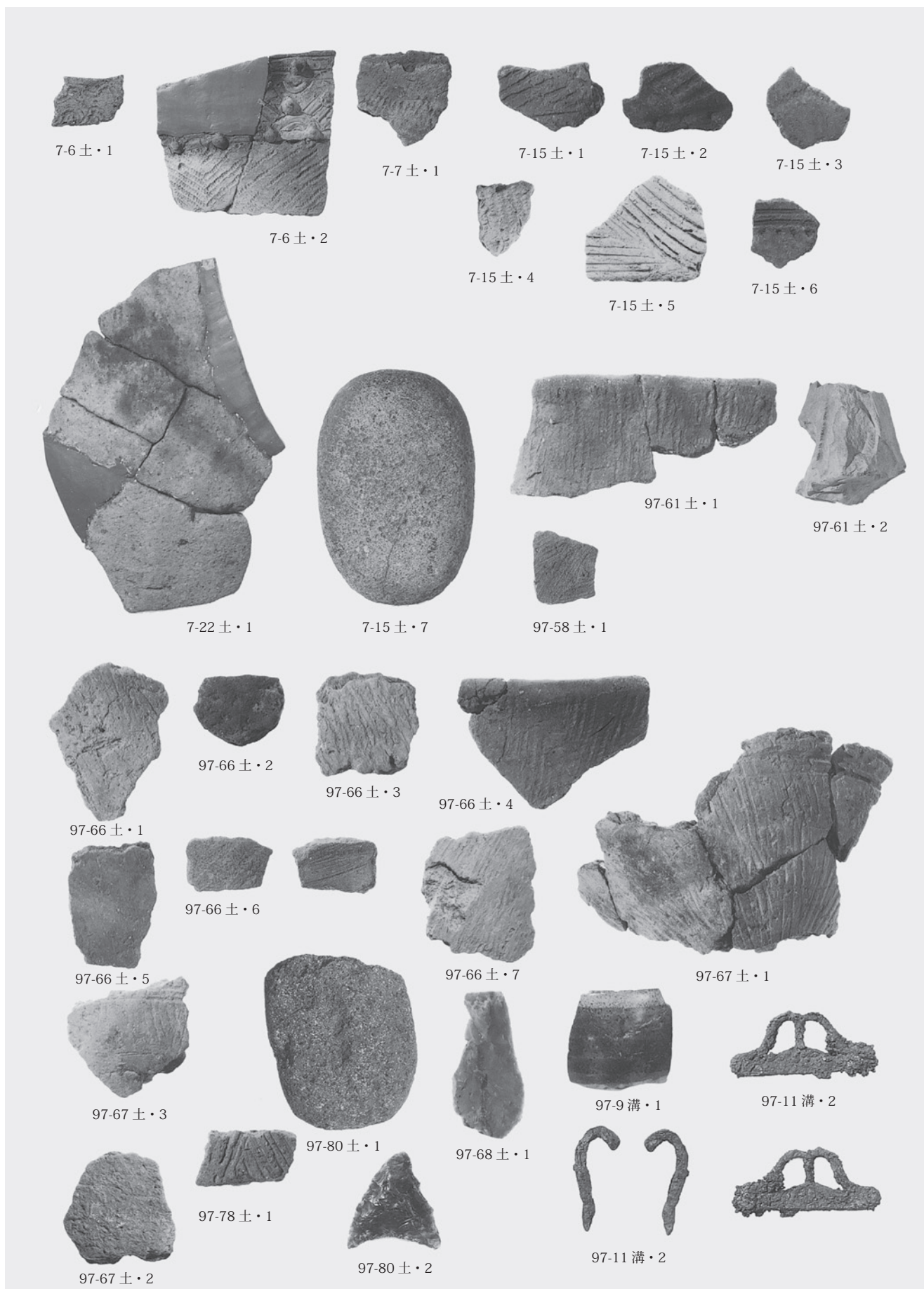
97 区 2号住居・3号住居跡出土土器・石器



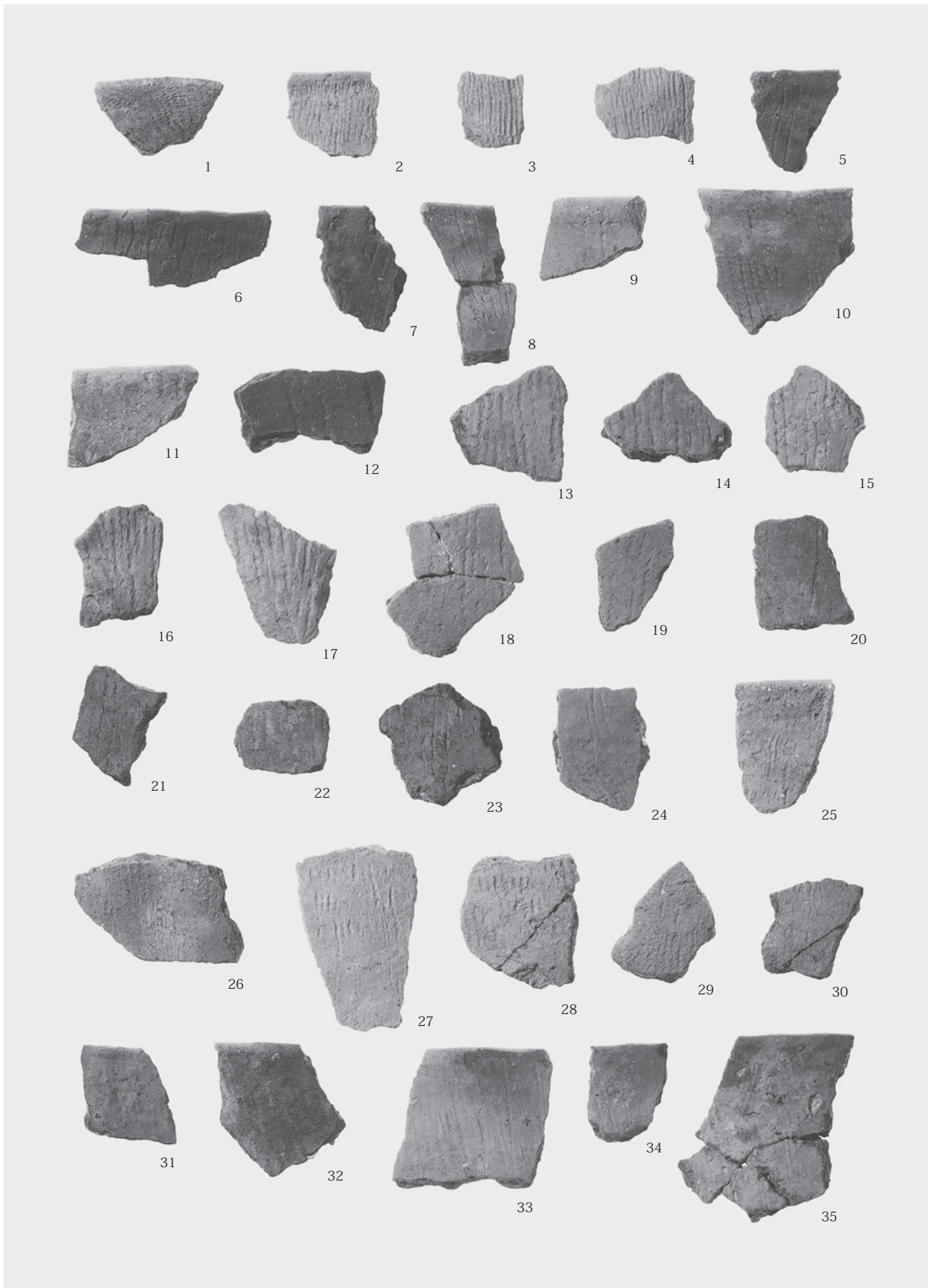
97-4 住

97区 4号住居跡出土土器・石器

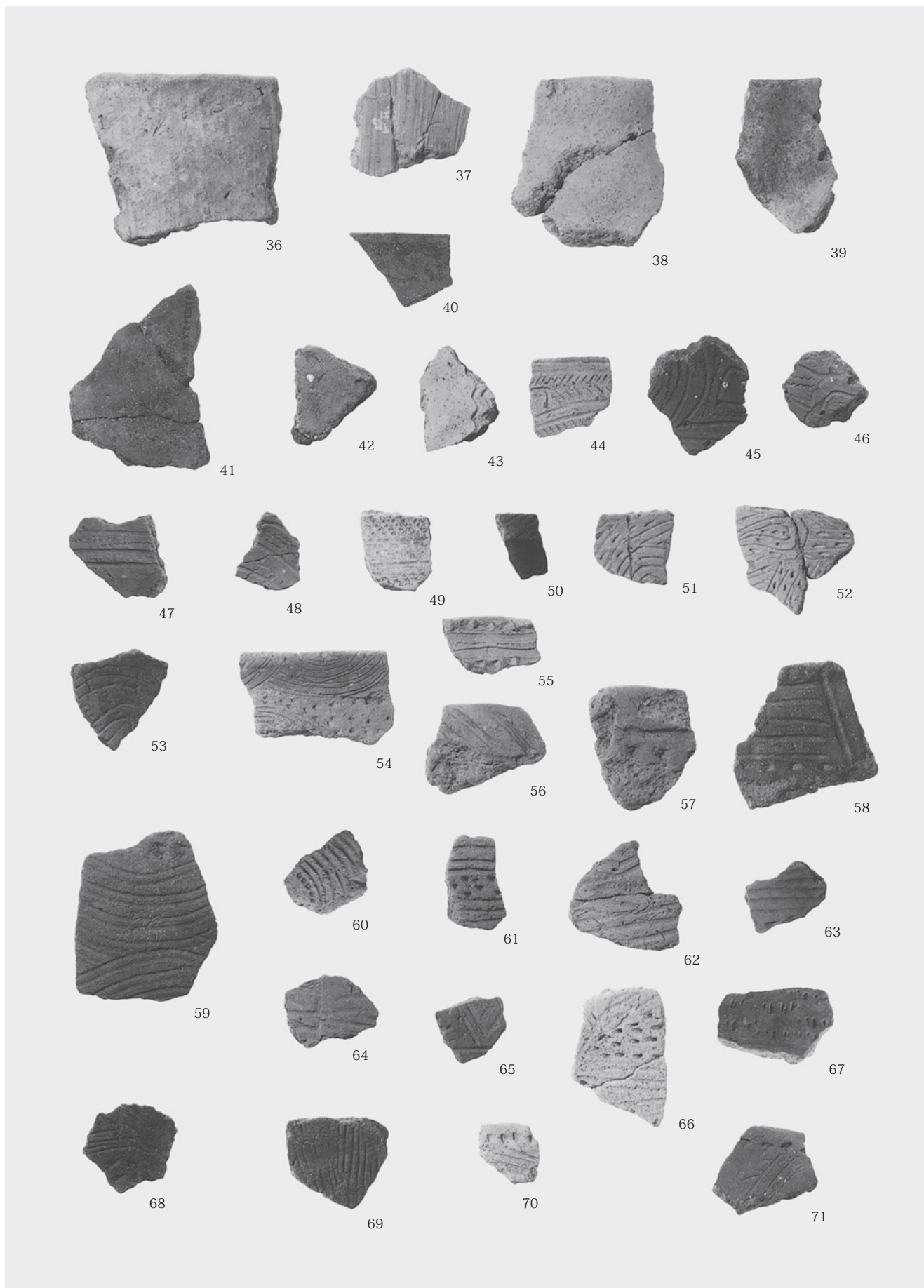




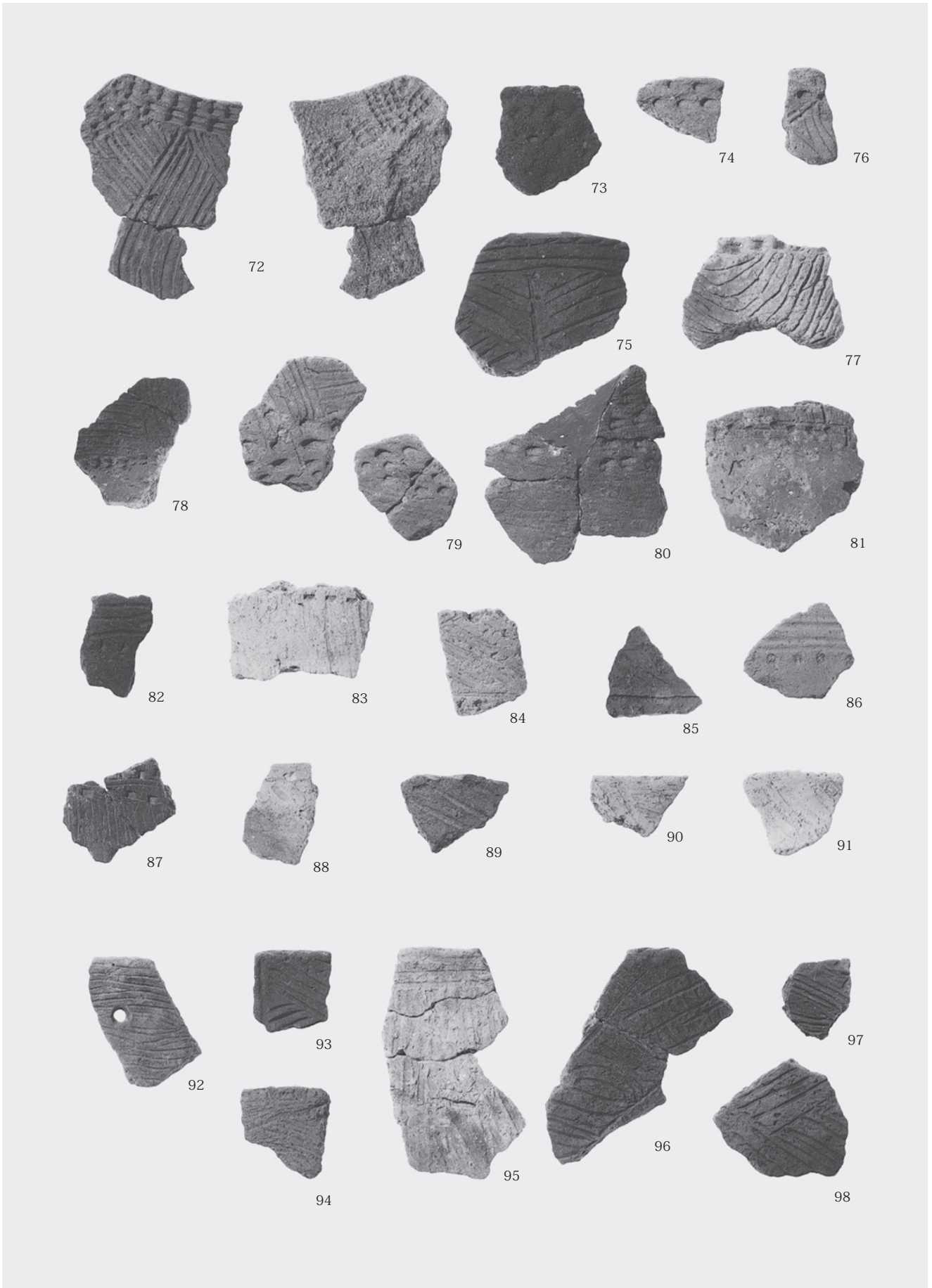
7・97区 遺構出土遺物



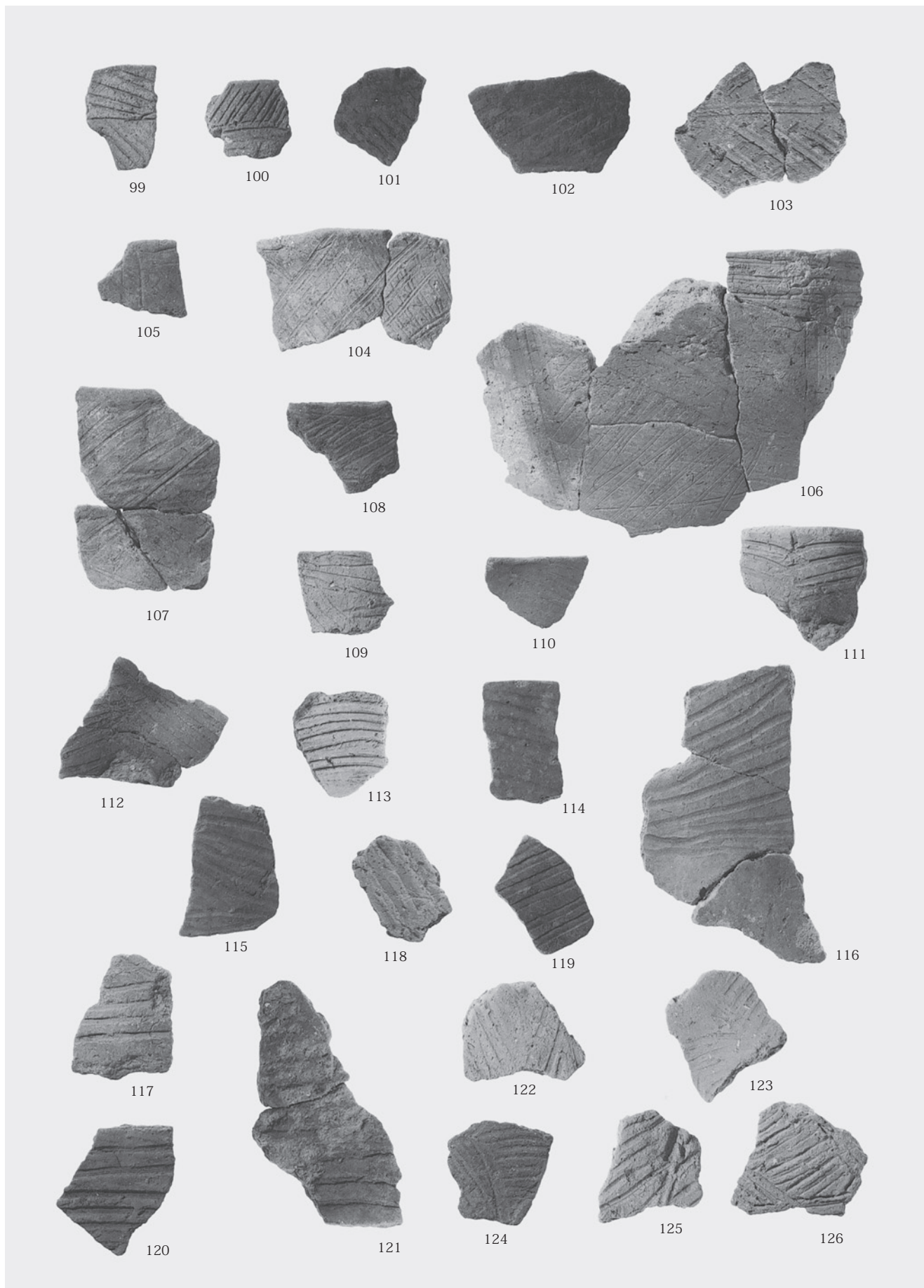
繩文草創期・早期遺構外出土土器



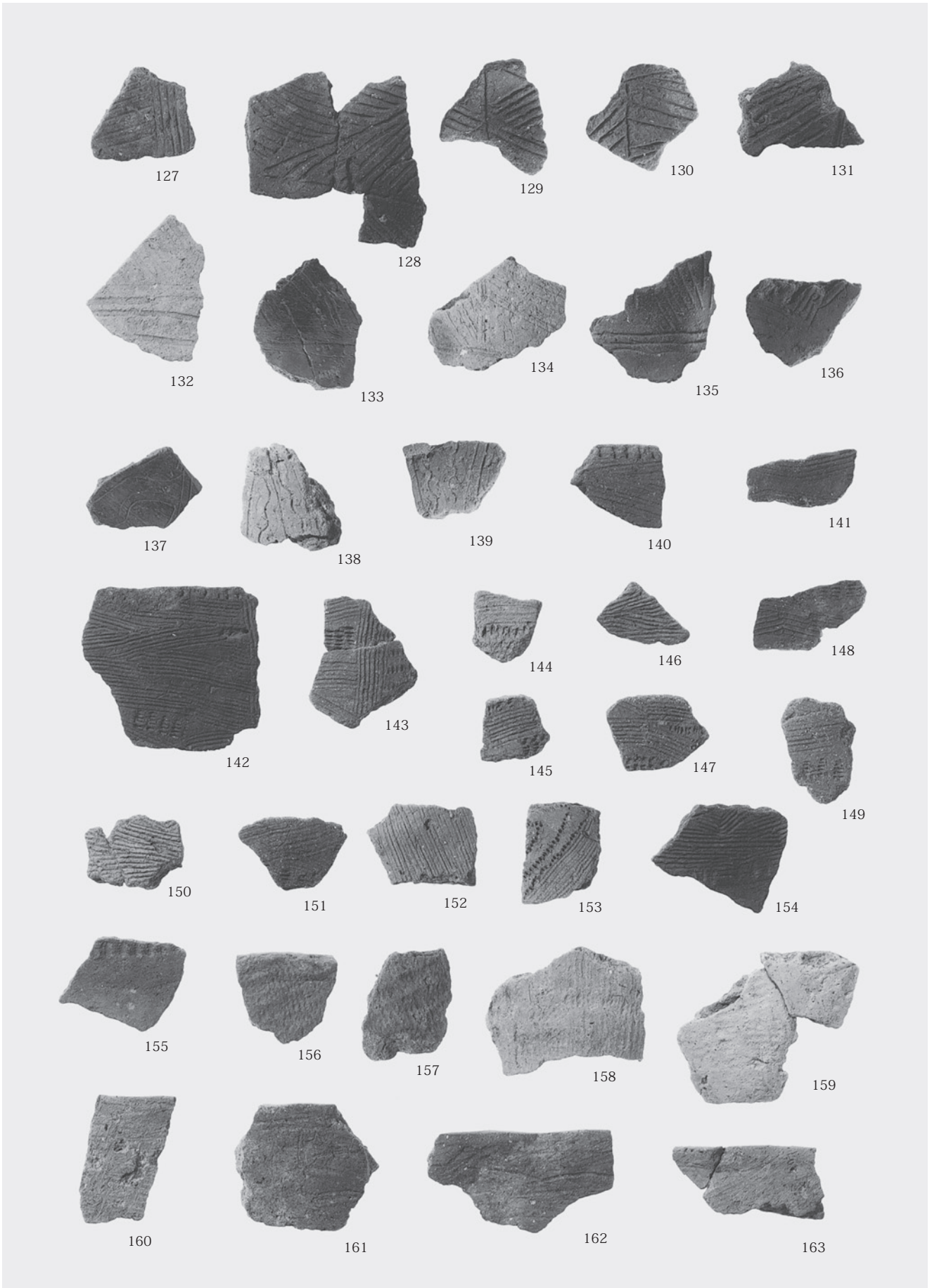
縄文草創期・早期遺構外出土土器



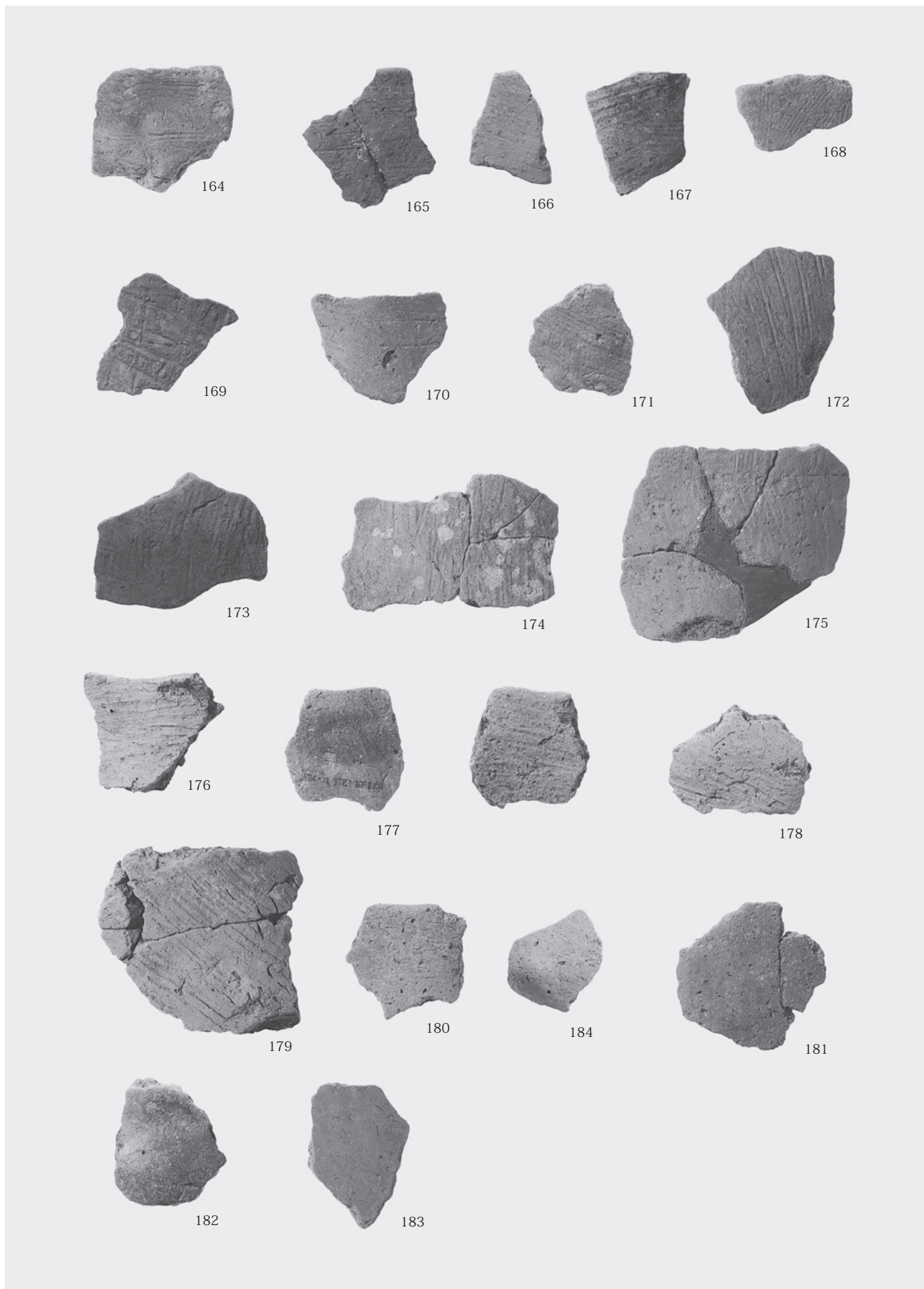
縄文草創期・早期遺構外出土土器



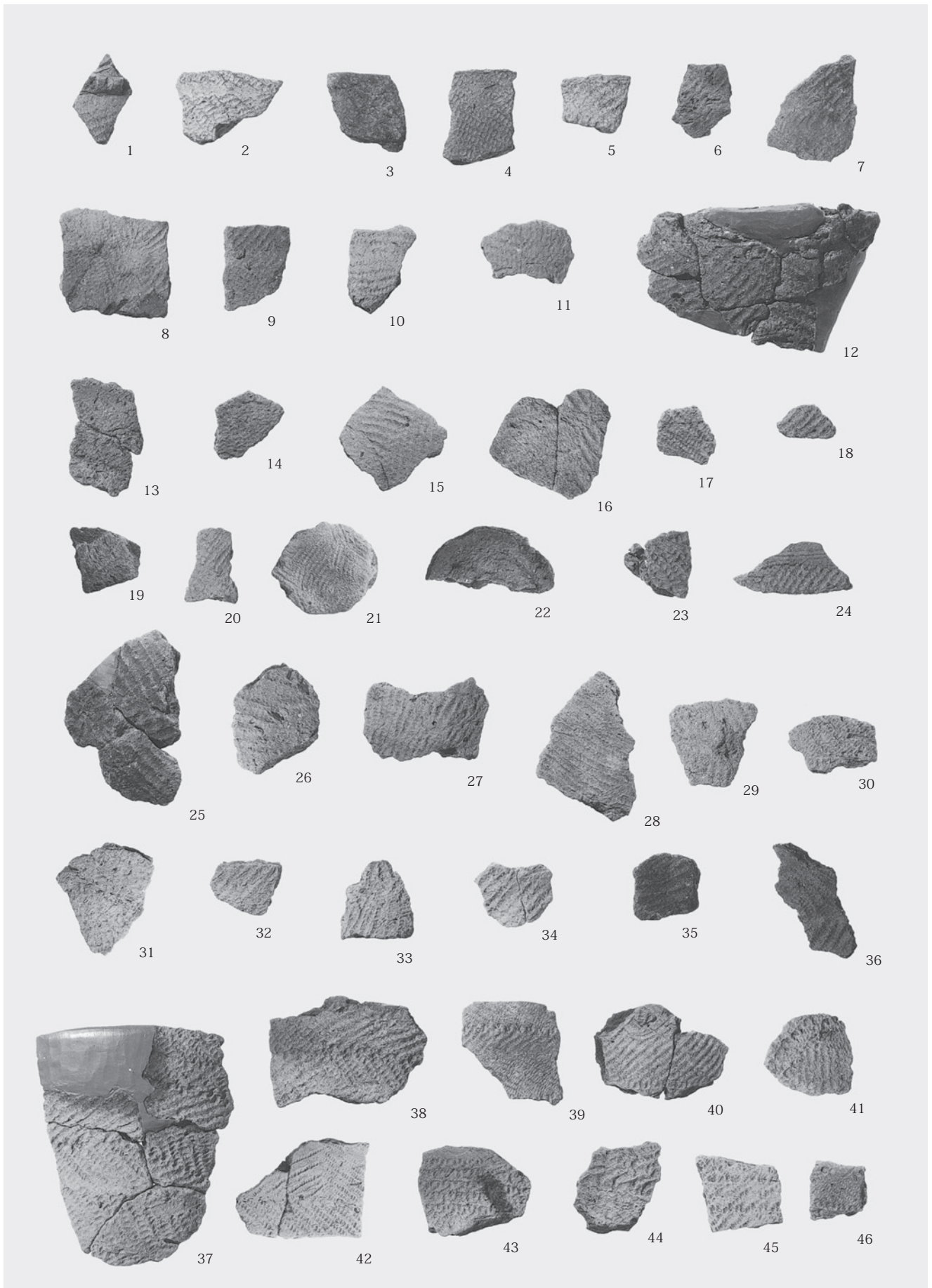
繩文草創期・早期遺構外出土土器



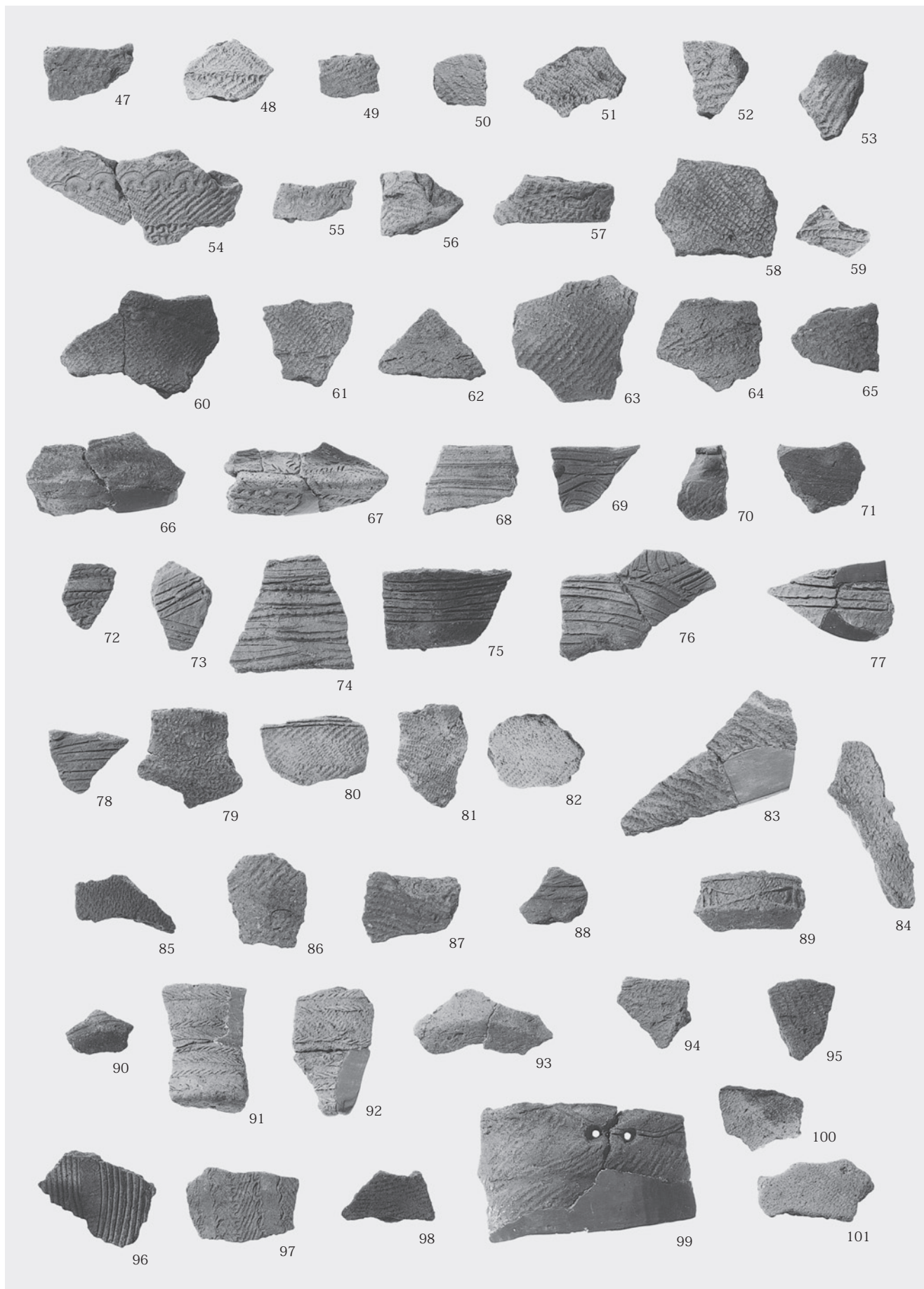
繩文草創期・早期遺構外出土土器



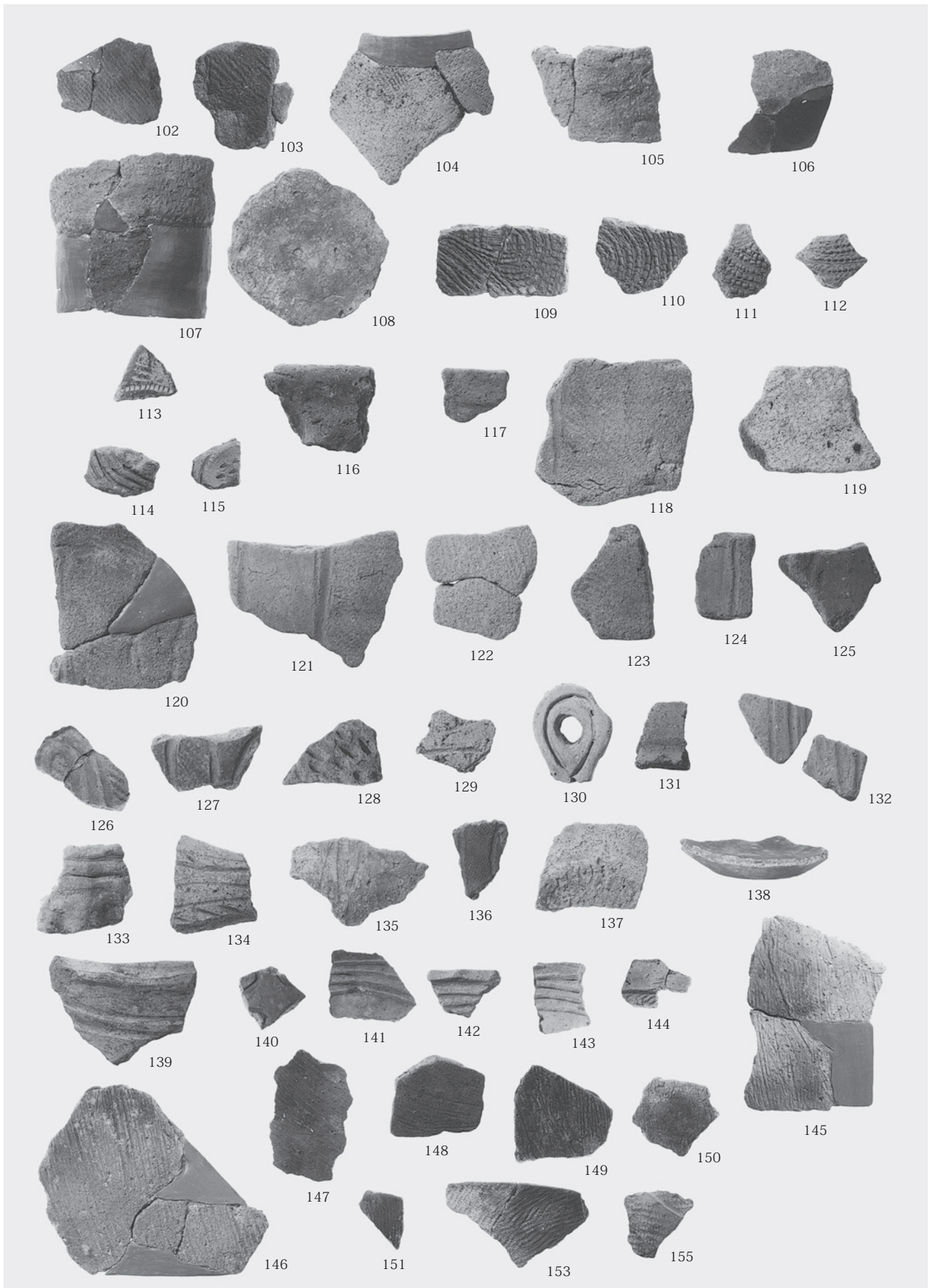
繩文草創期・早期遺構外出土土器



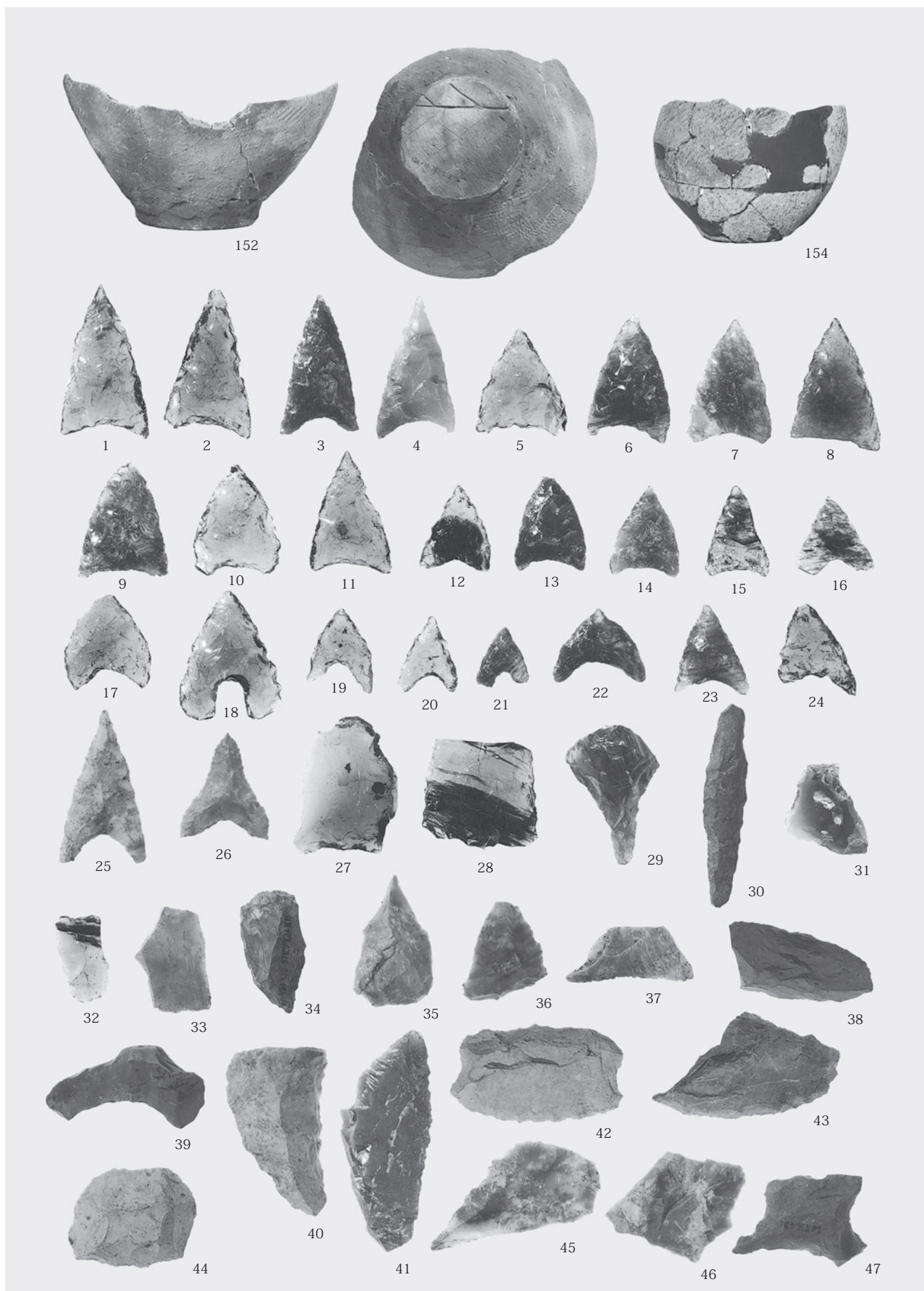
縄文前前期から弥生遺構外出土土器



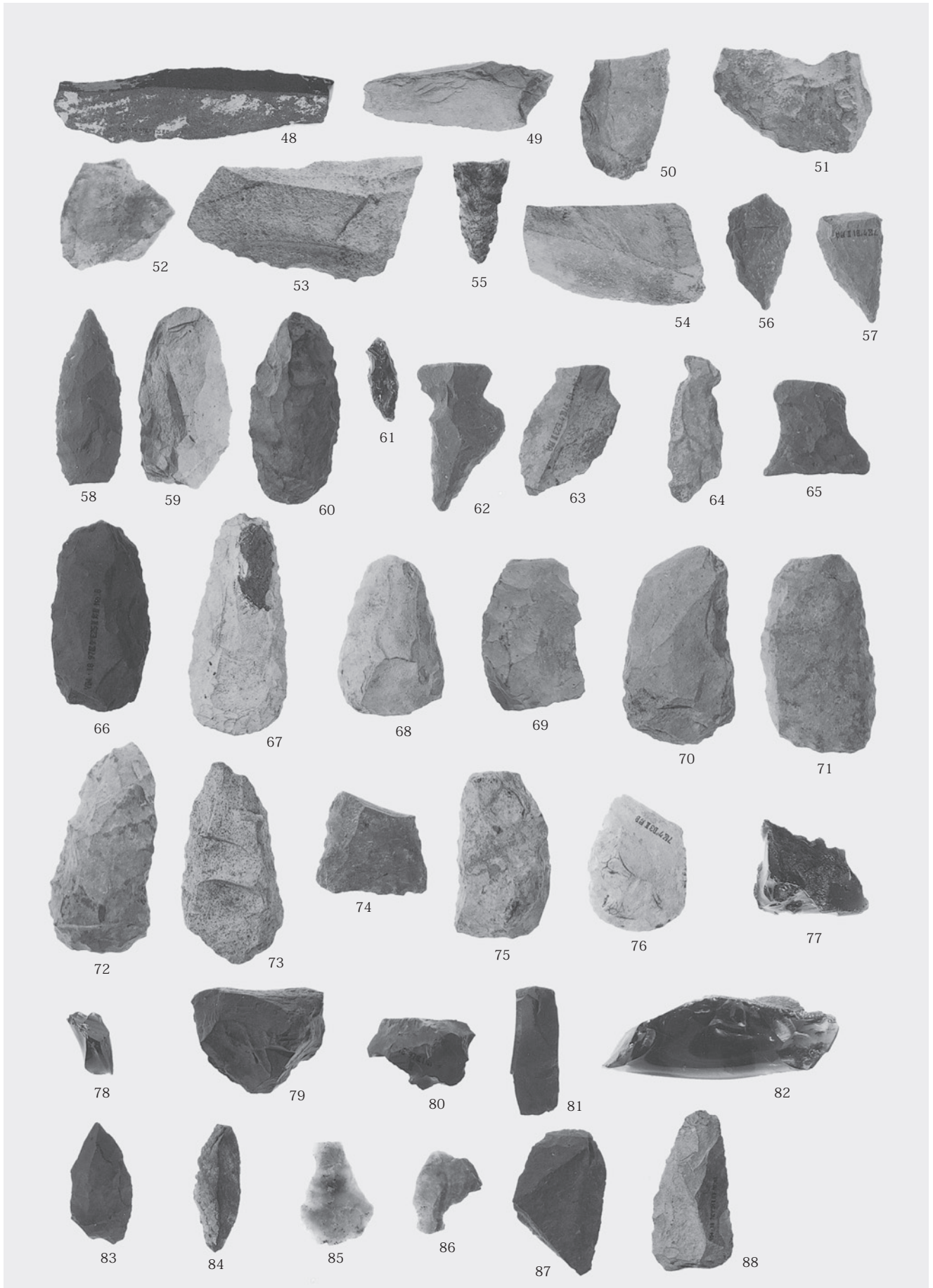
縄文前前期から弥生遺構外出土土器



縄文前前期から弥生遺構外出土土器



遺構外出土石器



縄文前前期から弥生遺構外出土土器



遺構外出土石器・立馬 | 遺跡出土石皿

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第 457 集

立馬Ⅲ遺跡

ハッ場ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第 26 集

平成 21 年 2 月 20 日 印刷

平成 21 年 2 月 27 日 発行

発行／編集 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒 377-8555 群馬県渋川市北橘町下箱田 784-2

電話 0279-52-2511 (代表)

URL <http://www.gunmaibun.org>

印刷 株式会社開文社印刷所

